
白き剣姫の聖杯戦争

早乙女恭也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き剣姫の聖杯戦争

【Nコード】

N48490

【作者名】

早乙女恭也

【あらすじ】

第四次聖杯戦争の終結の地で炎が舞い踊る地獄の中、ある一つの生命が誕生した。本来なら”衛宮士郎”になる筈だった少年は、二人の魔術師の手によって少女として生まれ変わった。

それから十年後、永遠の美少女となった”衛宮志保”は、己の運命を変えた争いに身を投じることに。

不穏な影が蠢く第五次聖杯戦争を、可憐でチートな美少女が駆け抜ける。

根本から捻じ曲がった物語は何所に行き着くのか？

超亀更新でお送りします。 慎一、バゼットファンの方は見ないほうがいいです。

登場人物設定（前書き）

ネタバレを含むので、お嫌な方は見ないことをお勧めします。

とりあえず、オリジナル設定が多いので、一応設定を書いておきます。

また、この設定は原作を知っているということを前提で書いていますので、一部説明は省いています。ご了承ください。

伏せてある部分は、後に”登場人物解説”というものを投稿しますので、そちらで公開してより詳しく説明します。

では、どうぞ。

登場人物設定

数値が原作と異なる部分がありますが、この作品の設定なのであしからず。あまり意味はありません。

衛宮志保（荒耶志保）

- ・身長：154cm
 - ・体重：42kg
 - ・スリーサイズ：86 / 53 / 82
 - ・イメージカラー：白
 - ・特技：家事全般
 - ・好きな物：家事全般（特に料理）
 - ・苦手な物：妖しい笑みで迫ってくるモノ全て
 - ・天敵：アル
 - ・ブリュンスタッド、バーサーカー
- （この世界には存在しないが、最大の天敵はさっちゃんの固有結界である）

本作の主人公にして、チートの塊。永遠の美少女。正体は、10年前の大火災で衛宮切嗣と荒耶宗蓮により、双子の妹の身体を得て新生した” 士郎”。とはいえ、身体が完全に女性である為、今は普通の女の子である。

その身体は、この世全ての悪の残滓、全て遠き理想郷と完全に融合を果たしており、不老不死を実現している。（条件付ですが首とか刎ねれば死にます。ただし、生半可な外傷では死ねないため、とある世界では結構悲惨な目にあったりあわなかつたり）

突然変異という名の奇跡のカタチ。余程相性が良かったらしく、常人の数倍の身体能力を持つ。さらに、魔術回路も正史よりも多く、なんとその数は凜以上。だがカレーには負ける。（大体、凜+原作

の士郎くらい)

魔術の特性は”剣”と”。今回の聖杯戦争のマスター中、最高最強の戦闘能力を誇る。

様々な想いを胸に、聖杯戦争に参加する。

第五次聖杯戦争当初、つまり本作の開始時点ではそれほど強くありません。相性の問題からバゼットには圧勝できますが、カレーはおろか、殺し合いになれば遠野志貴にも負けます。圧倒的なチート性能を発揮するのは大成した後です。(大体三段階で強くなっぺきます。大成するのは十年後くらい)

間桐桜

- ・身長：156cm
- ・体重：46kg
- ・スリーサイズ：87/56/87
- ・イメージカラー：桜
- ・特技：家事全般、マッサージ、気配断ち
- ・好きな物：可愛い人(衛宮志保)、甘いもの、怪談
- ・苦手な物：体育、体重計
- ・天敵：(強いてあげるなら)イリヤ

本作のヒロイン?かもしれない少女。多分、志保以外で一番原作から乖離してしまったキャラ。正史とは違い、両儀式の直死の魔眼によって心臓の刻印中(臓硯)は死に、他の蟲たちも同じように処理されて健全な身体になった。それに関連して志保を慕っており、時折異常な行動を取ることもある。その愛の力は凄まじく、志保にすら感知するのが難しいほどの気配断ちを習得するに至る。しかし、その成果はあまり上がっておらず、いつの日か志保をおいしくいただきたいと思っている。(今の所その予定はない)

実姉である凜には真実を明かしておらず、誰もいない間桐邸で一人暮らしている。（とはいえ、ほとんど衛宮邸で過ごしている）
魔術の師は蒼崎橙子で、現在永遠に志保と共に在る方法を研究中。
余談ではあるが、蟲が排除されたためかは不明だが、原作よりも身体が発育がよい。

遠坂凜

- ・身長：159cm
- ・体重：47kg
- ・スリーサイズ：77 / 57 / 80
- ・イメージカラー：赤
- ・特技：あらゆる事をそつなくこなし、ここ一番で失敗する
- ・好きな物：宝石磨き、志保いじり（物理的な）
- ・苦手な物：電子機器全般、突発的なアクシデント
- ・天敵：言峰綺礼

原作においてのヒロインの一人。力量、立場ともに原作と大差はない。（本作ではヒロインではない）
桜が間桐から開放されたこと、蒼崎橙子による間桐邸襲撃事件は知らない。

穂群原学園では優等生にしてアイドル的存在だが、志保の存在があるため原作よりも注目されていない。

- 補足情報 -

凜と志保が仲良さそうに話していると、一部の生徒たちが悶絶します。その際、一緒にいる筈の綾子は彼等の目には入らないらしい。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

- ・身長：133cm
- ・体重：34kg
- ・スリーサイズ：67 / 47 / 62
- ・イメージカラー：銀
- ・特技：特になし
- ・好きな物：雪、シホ（笑顔、仕草、エプロン姿・・・っていうか全部）
- ・苦手な物：寒いところ、猫
- ・天敵：（強いてあげるなら）間桐桜

姉にして妹というハイスペック少女。志保をヒーローとするなら正ヒロインに位置するのはイリヤである。志保が切嗣の”娘”であるという事があってか原作よりも切嗣と志保に対する憎悪の感情が増している・・・かもしれない（普段の態度では原作と大差なく、憎悪というより嫉妬の対象）。また、バーサーカーが原作以上のチートと化しているが、イリヤの性能は原作と同等である。つまり、マスターとしての性能は歴代最高。

まあ、結局はなんやかんやあって禁断の道まっしぐらな感じになる可能性を秘めた逸材。たぶん、黒ずくめの男性の妹と深い友情を結べるのだが、それはまた別の話。

番外編　く間桐桜の変貌・前編く（前書き）

最初に言っておきますが、一部のキャラ（サブタイトルの人）が壊れておりますのでご注意ください。というか、本編もこのキャラでいくのでファンの方はそれを承知の上、ご覧下さい。嫌な方はお戻りをとりあえず、本編に入る前に番外編をお送りします。

尚、番外編と本編では文体が異なりますのでご了承ください。

時期的には本編前、前中後の三編成です。

では、ごじげ。

番外編 〱 間桐桜の変貌・前編 〱

おはようございます。間桐桜です。

私は今、朝食の下拵えを終えて、土蔵の前にいます。

何故こんな所にいるのかといえば、私にはとある重要な任務があるからなのです！

唐突ですが、ここで一つ例え話をしようと思います。

例えば、目の間にあどけない表情の美少女が横たわっているとしたら、あなたはどうしますか？

例えば、目の前で憧れの先輩が無防備に可愛らしい寝顔を晒していたら、あなたはどうしますか？

例えば、目の前にあられもない姿の超絶に可愛い美少女が寝ていたら、あなたは何をしたいですか？

え？例え話じゃない？ただ問いかけてるだけだつて？

そんなの関係ありません！どうだっていいんですっ！！

「重要なのは、今ここに、私の目の前に、愛しの先輩の寝顔が、あるってことだけなんですから~~~~！！！」

「ん……………むう……………」

おっと、いけない。

あまり騒ぐと先輩が起きてしまいます。それでは本末転倒です。

本当は起こすために来たのですけど、どこそのメイドの如く、これは私の密かな楽しみなのです。それに、こんなに安らかに眠ってい

るのに起こすのは野暮というものです。

「それにしても……………可愛いなあ」

私の目の前には、私の一つ先輩、この家の主人、衛宮志保さんが作業着でぐっすり眠っています。

雪のように白く滑らかな長い髪。ルビーのような輝きを放つ紅い瞳。陶磁器のように白く柔らかなモチ肌。綺麗なのに可愛いという反則的な造詣のお顔。背は私より少し小さいけど、それがまたいい！私ほどではありませんが、ちゃっかり胸が大きいのもポイントです！！なのに先輩ときたら、女の子らしい格好なんて滅多にしないんだから勿体ないにも程があります。

まあ、嫌がる先輩に可愛い服を着せるのも楽しいんですけどね。

「せんぱい。起きてますかー？……………よし、寝てる」

先輩の横に音を立てないようにしゃがみ、囁くように小さな声で言います。

一応、確認です。

「起きないと、悪戯しちゃいますよ〜？」

と言いながら、柔らかかそうな頬をそっと押してみます。

「ふふ、やわらかーい」

すると、程よい弾力と柔らかく温かな感触が。もう、これは病み付きです。

後はそっと、頭を撫でてみます。そのままの流れで髪を梳きます。

先輩の髪は腰まで届くほど長いのですが、今は一つに纏められポニ

ーテールになっています。普段からこの髪型なのですが、真直ぐロングにしてくれていたほうが髪を梳きやすいので、これまたの機会にしましょうか。

「ん？これは……」

先輩の頭を撫でていると、その傍らに一本の日本刀があるのに気がつきました。

どうやら、昨夜はコレを創ってたようですね。隅の方に何本も同じような日本刀があるのを確認しました。

何を隠そう、先輩は本物の魔術師なのです。あ、私もですけど。

先輩の魔術は投影と結界と強化、その他諸々。属性が特化しているせいで、普通の魔術師が使えるような初歩の魔術さえ先輩はあまり出来ません。

投影とは、簡単に言えば、魔力で形あるモノを作る魔術、ということでしょうか。恐らく、先輩の側の日本刀も投影で創ったものでしょう。普通、投影したものは世界の修正を受けてすぐ壊れてしまいます。なので、本来は儀式などの術具の代わりに使うものですが、ところが、先輩の投影したモノは、先輩自身が消そうとしたり物理的に破壊されない限りずっと残っているのです。

そして、この土蔵こそが先輩の工房のようなところです。先輩はそんなに大層なものじゃないって言いますが、こうして眺めてみるだけでも、あちこちに刀剣が立ち並び、中には魔剣と呼べるものまであります。

私から見れば、立派な工房です。

とはいえ、壊れた電化製品などの修理もここでやってるので、確かに普通の工房とは違うかもしれませんね。多分、昨夜も修理はやってたんでしょう。頼まれたものがあるって言っていました。

「先輩。あまり無理をすると、体に毒ですよ？」

顔を近づけ、優しく語りかけます。

先輩は、毎夜この土蔵で魔術の鍛錬をしています。たまに、私もお供することがあります。

問題は、そのままこの土蔵で寝てしまうことです。毎回という訳ではありませんが、割と頻繁に眠ってしまうようです。先輩曰く、居心地はいいそうです。

ただ、そういう場合は疲れているのか、朝が早い先輩も私より遅く起きることが多いのです。

私としては、その度に先輩の寝顔を堪能出来るので、それはそれで嬉しいのですが、心配にもなります。

それはまあ、それとして。

「……………先輩」

体を屈ませ、もっと顔を近づけます。

息がかかるほど近くに先輩の顔があります。私の視線は、ぷっくりと膨らんだ桃色の唇に釘付けです。

ああ、おいしそう。

……………いいですよね？

今なら邪魔者は居ませんし、私にこんなに心配をかけてる先輩が悪いんですから、これくらいの役得。

「せ、先輩の唇……………はあ、はあ」

ふ、ふふふ。私の目には、もう先輩の唇しか目に入りません。起きちゃいますかね？ああ、でもそれならそれで、先に蕩けさせちゃえ

ばごっちのもの……えへ。

「い、いただきまー……」

「……おはよう、桜」

「っすいつ、いだだだだだだだっ。い、痛いですが、先輩……！？」

失敗。先輩が起きてしまいました。

それにしても……痛いです。

「お、おは、おはようございますっでいたたたたたたた、痛い！やめっ、ああっ！！先輩！ア、アイアンクローは反則ですっ！！」

先輩の手が私の頭をがっちり掴んで、万力で締められているかのような痛みが私を襲ってきます。先輩は、私の頭をホルドしたままゆっくりと立ち上がり、私を冷淡な瞳で睨んでいます。

「桜。起こしてくれるのは、ありがたいんだけどさ。ナニしようとしてたのかな？」

「い、いえー、別に何もしようとはって、あの先輩。そろそろ離してっ、てああ！また力が強く！！」

膝立ちのまま、私は苦渋の声を漏らします。正直、この時の表情が無い先輩が一番怖いのです。怒った表情の先輩は可愛いのに。

「桜、正直に話してみようか。大丈夫、これ以上痛くはしないから」

一転、先輩は柔らかな微笑みを浮かべました。けど、怖い！！怖いけど………なんか、いい。

というか、嘘でも怒らないとか許すとか言わないんですね。

「………あの、桜さん。何でそんな恍惚な表情を？」

「え？………あ、ああ。あの、何か、少し気持ちよく、なってきました………ふべっ!？」

私がそう言うと、先輩はぱつと手を離しました。その結果、私は支えを失って固い床と熱いキスをすることに。
うう、先輩のがよかったです。

「う、頭がガンガンします」

「はぁ、自業自得だ」

「危うく、新しい境地に目覚めるところでした………」

「……流石にそれ以上になると、いくら私でも面倒見切れなくなるからやめて」

「それは困ります!!」

私が意気込んで言うと、先輩は呆れたように溜息を吐いて、苦笑いを浮かべて言いました。

「………でも、まあ、起こしてくれてありがと。朝食の用意は？」

「あ、下拵えは終えてあります」

「ん。じゃあ、着替えてくるから、それまで少し待っていてくれない？私も手伝うから」

「い、いえ。私がやりますから、先輩はゆっくり・・・」

「しててください、と言おうとしたら、先輩はそれを遮って満面の微笑みを浮かべて言い放ちました。」

「その時に、今朝のこと。じっくり話をしようか？」

「う、うう・・・はい」

「あははは、桜ちゃん。またやったんだー」

「・・・笑い事じゃないぞ、藤ねえ。というか、桜も赤くならない」

食卓には、私と先輩、それと藤村先生のいつもの面々が座って朝食を食べています。

結局、あの後私は先輩のお説教を聞きながら、一緒に朝食を作りました。

あれはあれで、快感です。

といっても、どこぞのほとんど友達のいない吸血鬼もどきと一緒にしないで下さい。

私にはちゃんと友達は大勢います。私には、幼女を弄ぶような性癖はありません！先輩は美少女です！！
・・・・・・・・・・・・・・・・・・本当に違いますからね？違いますからね？
大事なことなので二回言いました。

「はぐはぐ、桜ちゃん、おかわりー！！」

「はい」

元気よく差し出されたお茶碗を受け取り、山盛りにして藤村先生に渡しました。

「んー、ありがとうー」

そう言つて、藤村先生は凄い勢いで、ごはんとおかずを口に運んでいきます。

藤村先生は、先輩のお姉さんのような人で小さい頃から先輩の面倒を見てきた・・・・・・・・あるいは見られてきた人です。朝食と夕食はこのメンバーでいることが多いですね。

こんなに食欲旺盛で、最低でも二杯はおかわりをする藤村先生ですが、なんと驚いたことに私たちが通う穂群原学園の英語教諭で私と先輩も所属する弓道部の顧問でもあるのです。

初めてソレを知ったときは、表情にこそ出しましたが、心底驚きました。

まあ、その、そんな藤村先生を一言で説明するなら・・・・・・・・・・
・先輩曰く、虎、です。

「む？桜ちゃん、何か言った？」

「いえ、別に何も」

笑いが溢れる食卓。私は、この時間が大好きです。

こんな、騒がしくも温かな日常の日々に身を置けるのも、先輩と、あの人達のお陰なんです。

私が、間桐、いえマキリの呪縛から開放されたからこそ、今の幸せな日々がある。

え？お爺さま？あの妖怪なら死にましたよ？なんかこう、サクッと私の心臓に魂を隠すなんて外道ですよ。一緒に気持ち悪いのも全部殺してもらいましたし、安心です。

気になりますか？ならなくとも、話しちゃいますよ。私と先輩が出会った運命の物語！

あれは、そう。

空を薄暗い雲が覆い、じめっとした空気が重かった、ある夏の午後。私は、黒い外套の魔術師に出会いました……

NGシーン

「……………あの、桜さん。何でそんな恍惚な表情を？」

「え？……………あ、ああ。あの、何か、少し気持ちよく、なってきた」

ブチッ

あれ？今、聞こえてはいけない音が聞こえたような…………

「あ、あの、なんか洒落にならないくらい痛いんですけど…………」

「…………仕方ないでしょう？これは、お・し・お・き、なんだか…………ら……！」

「あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ……………」

そして私は、意識を失った…………でも

あ、なんか……………

目覚めたかも

おわり

番外編　く間桐桜の変貌・前編く（後書き）

番外編では、その話の主役の視点を基本として書いていきます。本編は、序章と同じような書き方でいくと思います。多分。一部、

IN、　OUTという感じでキャラの視点で書くこともあります。

で、今回の番外編ですが、桜の過去の出来事です。前編はまあ、現在の桜というか、本編の少し前の時期です。中編は過去、後編はその終わりから現在に戻ってくるという流れを予定しています。

本編に入る前に説明しておこうかなーと思ったので、先に番外編を書きました。本編中に書くの面倒そうだったので。

本編は番外編が終わった後です。

その本編ですが、幼少期はすつとばして第五次聖杯戦争でのお話です。で、その本編はさくさく進めていこうと思いますので、ちよつと描写が足りなくなる可能性もありますのでご理解ください。というか、主人公がちよつとチートですので早めに聖杯戦争終わるかも。幼少期の空の境界編は別のお話として書いていきます。本編がある程度進んだら書き始めるかもしれません。

NGシーンは・・・気にならない方向でお願いします。なんか、思いついたときに書きます。

桜の壊れ具合については、まあ、こういうのもアリかなあ、と。こつというSSもありますよね・・・どつかで見たような気もする、かも。お嫌いな方は戻るボタンをプッシュしてください。

亀更新なんで中編はちよつと先になります。あと作者はらららぎさんは嫌いじゃないです。

では、また次回。

番外編 〱間桐桜の変貌・中編〱（前書き）

長らくお待たせしました。

と、いつでも内容はかなり薄いです。余裕が出来てきたらそのうち改訂します。

前半は番外編ということで前編と同じく語り手は桜。後半は、あの
人です。

では、ごきげん。

番外編 〱 間桐桜の変貌・中編 〱

その日、空が鉛色に染まり、茹だる様な蒸し暑い夏の日、私は窓から外を眺めていました。

その行為に意味はありません。

ただ、この家から逃れたくて、嫌気が差して、外を、見つめていただけでした。

しかし、今日は何かが違いました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

誰かが、立っていました。

塀の外。道の真ん中に、黒い外套の男がこちらを見つめて立っていました。

確かに、私を見ています。

暗い双眸が私を捉えていました。

けれど、その男は、いつの間にか消えていました。

気がつくのと、最初からそこに何者もいなかったかのように、忽然と消えていました。

何でも無いはずの、日常的一幕。たった、数秒の出来事。

でも私は、あの男の姿が、脳裏から離れませんでした。

何かが起こる。その前触れのような。そんな予感。

出来ることなら、私を解放して欲しい。そんな願いを込めて、男がいた場所を、私は日が暮れるまで見つめ続けていました。

私が黒い外套の男を見てから暫くして、もう男の存在など記憶の片

隅に追いやられていたある日。買い物に出た私は、また、男に出会いました。

男は以前と同じように、私を無言で見つめています。

違うのは男の隣に、小柄な白髪的美少女が佇んでいることでした。

「どうだ？」

「うん。見えるよ。体中・・・それに」

彼等は何か話しているようでしたが、小声で私にはよく聞こえませんでした。

ただ、少女の異様に紅い双眸が私の中のナニカを見透かしているようで、落ち着きませんでした。

私は、気付いたら走っていました。

男、いえ、あの少女の紅い瞳から逃れるように。

男と少女は、追ってきませんでした。

それ以来、男の姿を見ることはありませんでした。

ですが、ひょんなことから少女の正体はわかりました。

どうやら、私の通っている学校の一つ先輩にあたるらしいのです。

とはいえ、私から接触することはしませんでした。

あの瞳を、もう一度真正面から受け止める自信が、なかったから。

男と少女との邂逅から、どれだけの月日が流れたでしょうか。

私は、中学一年になっていました。

代わり映えのない日常。

陵辱と暴力が繰り返される日々。恨みや妬みすらも押し殺し、耐え忍ぶ日々。

何もかもを諦めていた私は、ある晴れた夏の日、再び紅い瞳の少女に出会いました。

その隣には、黒い双眸と黒髪を持ち、着物の上に赤い革ジャンを着た、まるで日本人形のように綺麗な女性が立っていました。

それが、運命の日でした。

「……………志保、コイツだな？」

「はい」

「なるほど。確かにコイツは気持ち悪い。見ていて吐き気がする」

女性は、そう言うのと私に近づいてきました。

逃げなければ。

直感的にそう思いましたが、身体は動いてくれませんでした。

恐怖で、全身が弛緩する。背筋が凍り、呼吸することを忘れさせる。

女性の瞳は、いつしか、蒼く輝いていました。

一歩一歩、女性は近づいてきます。

蒼い瞳に見つめられるだけで足が竦み、後ずさることも、座り込むことすら許されませんでした。

ですが、ここにきて私の中で変化が起きました。

身体の中がざわつく。気持ち悪いものが、私の中で蠢いている。まるで、逃げると言わんばかりに、私を動かそうとのた打ち回る。

怖気が奔るけれど、これなら私の意志とは関係なく身体は動く。そ

う、思いました。

けど……

それでも、私の身体はピクリとも動きませんでした。どうして、と思う私の頭に、女性の声が届きました。

「上出来だ。逃がすなよ、志保」

一瞬、何のことか分かりませんでした。すぐに、あの少女がいな
いことに気がつきました。

どこに行ったのだろうか？

必死に考えて、恐る恐る背後へ視線を向けると、そこに少女がいま
した。

いつの間にも移動したのか、少女は手を前方へ掲げて、悲痛な表情で
私を見つめていました。

どういう方法かは分かりませんが、さっきの女性の言動から考えて、
この少女が何かをしているのでしょう。その表情の意味は分かりま
せんでしたが、この時の少女からは全く恐怖を感じませんでした。

それを確認して私が意識を前へ戻すと、女性は、目の前まで迫って
いました

蒼い瞳が、悠然と私を見下ろしています。

完全に思考が停止した私に、女性は言いました。

「次はもう少し、安全な場所に隠れるんだな」

誰に向けて放たれた言葉かは分かりません。

その言葉を耳にした途端、私は意識が遠退き、視界が暗く染まっ
ていきました。

意識が闇に閉ざされるその刹那、私の胸に、ナイフが刺さっている
のが見えました。

それが、間桐桜^{マキシ}の最期でした。

- ??? ? IN -

「……………ここか」

私はトランクを足元に置き、目の前の洋館、間桐邸を見上げる。なるほど確かに不気味な洋館だ。気色の悪い魔の気配に包まれている。

衰退したといっても、流石は魔道の名門といったところか。

「と、橙子さん。これ重いんですから、そんな先に行かないで下さいよ」

「ああ、すまん」

私が間桐邸を見上げていると、一応助手としてウチの事務所で働いている全身黒尽くめの男、黒桐幹也が大きめのトランクを二つ抱えて歩いてきた。

探し物が異常に得意なだけの一般人だが、今回は荷物持ちだ。

軽い労いの言葉をかけ、トランクをその辺に置いておけ、と指示を出す。

黒桐は暫し逡巡し、間桐邸の門の脇にトランクを置いた。

「ここですか？」

「ああ、そつだ。ここが、蟲の妖怪変化の潜む魔の巣窟だ」

「何ですか、その表現」

「いや、何。えらい蟲退治になりそつだからな。愚痴も零したくなるというものだ。さて、黒桐はそこで待っている。結界を敷く」

「はい」

黒桐はそう言うと、私から離れて適当な塀に背を預けた。

私が、人払いと遮音、防視の結界を張り終わると同時に、嫌味な声が聞こえた。

「そこで何してるんだい？ここがどういふ家なのか、分かってるんだろうねえ」

声の主は、中学生くらいの少年だった。

髪がワカメだ。

黒桐が調べた資料によると、確かこの少年が間桐の長男だった筈だ。

それから間桐少年・・・もといワカメ髪の少年は、何やら長々と一人講演を繰り広げていたが、吐く言葉全てが聞くに堪えない妄言だ。当然の如く聞き流していても、当の少年は気付く気配も無い。

ふむ、このワカメのお陰で当初の予定から多少外れたが、まだ修正範囲内か。

これ幸いと、ターゲットを誘き出す算段を頭の中でまとめ直していると、のっそりと一人の老人が何処からか現れた。

「慎二。客人かね？」

何所に潜んでいた？

流石は、妖怪間桐臓硯。400年もこそと生き永らえただけのことはある。

だが、私は運が良いようだ。まさか、ターゲット自ら出てきてくれるとは。

「これはこれは、はじめまして、臓硯さん。私、蒼崎橙子と申しませう」

そう言うと、臓硯は目を細めた。

「ほう。お主が、あの噂に名高い人形師か。ご存知の通り、わしが間桐臓硯じゃ。して、何ようかな？」

「ええ、実は少々・・・」

私は、臓硯にあることないこと言って、タイミングを計る。この老人を処理するのが今回の目的だ。

既にこの周辺に結界は敷き終えている。間桐の敷地に入るより、この位置からの方が都合がいい。

だが、隣にはワカ・・・いや、間桐の長男がいる。アレでは判別が出来ないので、彼まで巻き込んでしまおう。

さて、どうしたものか。

「ふーん、そうなんだ。それはご苦労なことだね。ああ、そう言えば聞いたことがあるよ。君って、妹に負けて実家に帰れないんだって？封印指定つてのは凄いけど、妹は魔法使い。劣等感を抱くのも仕方ないよ。しかも、魔術協会から赤の称号を受けたけど」

「！やめんかつ、慎二ー！！」

「傷んだ赤色”って中傷されたんじゃないあ、ウチを頼るのも納得いく……”」

「ほっ?」

ワカメと臓硯が私の殺気に反応して、表情を凍らせる。

ああ、いい度胸だ。まったく、弟子の頼みだからと重い腰を上げて来て見れば、命知らずの莫迦に出会うとは。

本当に運が無い。

私は門の脇のトランクを抱え、ワカメと臓硯の正面、足元のトランクの両脇に置いた。計三つのトランクが、間桐邸へ向けて並べられる。

これで準備は整った。後は……

「黒桐！その場でいいから目を瞑って耳を塞げ。どうなっても、私は知らんぞ」

「は？それってどづいう……」

「早くしろ」

「は、はい……」

横目で確認すると、黒桐は言われたとおりに目を瞑り耳を塞いでいた。

さあ、では始めようか。

私をその名で呼んだこと、その報いを受けるがいい。

「時に少年、君は私について良く知っているようだね？」

「そ、それがどうしたんだよ!？」

「なら、これは知らなかったのかな？私は、私を”傷んだ赤色”と呼んだモノを、例外なくぶち殺すことにしているんだよ!！」

言葉と共に、三つのトランクから影が飛び出す。

「むう!？」

臓硯の周りに大量の蟲が湧き、臓硯は避けようとするが、遅い。

影の正体、私の使い魔が一口で臓硯を飲み込んだ。もう一匹の使い魔が他の蟲を一蹴する。奴はこれでは死なない。それは承知している。私の仕事は奴の肉を全て喰らい尽くすことだ。本命の始末は式が殺ってくれる。

「な、なんだよこれ・・・ひい!？た、たすけ!！」

ワカメは身体の半分以上が使い魔に飲み込まれていた。恐怖に顔が歪み、喚き散らしている。

「あと一つ訂正しろ。私は青子に負けてない」

と言っても、もう聞こえていないか。

「が、あああああああああああああああああああああああ
！！！！！！」

ワカメは最後に断末魔の叫びを残し、姿を消した。

「・・・結局、殺してしまった、か。まあ、構わんか」

志保とて、出来るだけ殺さないで欲しいと言っていたのだ。つまり、志保もワカメが殺される可能性を考慮していたということ。言い訳など、どうとでもなる。

少々無責任かもしれないが、ケアは志保に任せよう。自分から依頼して来たんだ。それくらいはして貰わねば困る。

まあ、確かに私の過失の部分もあるから、少なから協力してやらんこともないが。

さて、では蟲退治を再開しよう。

「一匹残らず食い尽くせ」

使い魔たちは、私の命令に従い間桐邸へと侵入していった。

小一時間ほどして、掃除は終わった。取りこぼしは無い。

嗅覚の鋭いやつばかり連れてきた甲斐があつた。もう間桐邸に羽虫一匹存在しない。

使い魔を回収し、居眠りしている黒桐をたたき起こす・・・前に電話をしておくか。

式に携帯を持ってこさせて良かった。

数回のコールの後、無事繋がった。

「式、私だが、首尾はどうだ？」

『概ね順調だよ。例の娘も見つけた』

「そうか。こちらも終わった。後は任せる」

『分かった。じゃあ』

「待て、志保に伝えてくれ。余計なものも食ってしまった。許せ、とな」

『何？どういう……おい、橙子。お前まさか！？』

「ではな。先に帰っているぞ」

そう言って、強制的に通話を中断した。

ふむ。これで十分だろう。

帰ったら志保に何か言われるかもしれないが、その時はその時だ。

第一、臓硯亡き後にあのワカメと二人で暮らすなど、あの娘が不憫だ。

志保も分かってくれるさ……多分。

何はともあれ、これで帰れる。

まずは、この暢気に眠っている男を起こすとするか。

NGシーン

「次はもう少し、安全な場所に隠れるんだな」

誰に向けて放たれた言葉かは分かりません。

その言葉を耳にした途端、私は意識が遠退き、視界が暗く染まっ
いき……ませんでした。

女性は、何故かは分かりませんが、ナイフをブンブンと振り回して
います。

「ああ!!もう、うざりたい!!!!なんなんだ、このワカメは!？」

……ワカメ？

「クソっ、纏わりつくな!……………そうか、薄いけどち
やんと視えるな。なら」

何をしてるんでしょうか？

「……………もう一度殺してやるよ」

女性はナイフを突き出したまま固まってしまいました。いったい誰を殺したんでしょう？

案外、私の知ってる人だったりして。なんて、冗談ですが。

「待たせたな」

「……………待ってないです」

何か、変に疲れて恐怖心がどこかへ行ってしまいました。そして、何か憑き物が落ちた感じがするのは何故なのでしょうか。まあ、楽なんでこのほうがいいですけど。

おわり

番外編 〱間桐桜の変貌・中編〱（後書き）

もの凄く適当に書いた感じがします。桜視点ってことで、こうなり
ました、まあ、そっちは一先ず置いて。

慎二クン、永眠。ご苦労様でした。そしてゴメンナサイ。慎二フア
ンの皆さんすみません。

何も殺すことはなかったんですが、本編においてさして重要なキヤ
ラでもなく、臓硯がないことを考えると、あまり活躍はさせられ
ませんし。正直、弓道部にいられてもアレですし、志保に言い寄っ
ても気付かれずに素っ気無く振られる、とか考えてもいたんですが、
いないほうが楽に話書けるのでこんな形に。まあ、生きていても
桜に邪険にされて可愛そうなことになりますしね。で、死亡フラグ
を踏んでもらいました。慎二のこと忘れてて、使い魔を放ったあと
に悲鳴が聞こえた、とかよりはいいかな、と。ホロウを書く機会が
あれば出してあげようかな。ホロウの場合、かなり突飛な設定にし
ないといけないので。まあ、例によって凜の暴走ですけどね。そこ
に志保がいたことがさらに事態を悪化させることに、みたいな。
それはさておき、臓硯は死にました。ええ。綺麗さっぱり。

その辺りは次回、桜に軽い口調でまとめて説明してもらおうので。

あと橙子さんの語りですが、あれはかなり軽い感じで書きました。

一応桜の回想ですし、後で橙子本人に問いただしてイメージした、
みたいな。橙子の語り自体が実際に喋ったことを元にしてるってこ
とでどうか一つ。でも、あまりにもあんまりなので、前書きの通り
あとで軽く改訂しますが。

後編は、また暫くお待ちください。

では、また次回。

序章 〈魔術師の邂逅〉（前書き）

一応、最初なので注意書きを少々。

まず、性転換などと書いておりますが、そういった表現や描写は全くと言っていいほどありません。設定だけです。

次に、この作品はある程度原作を知っている事を前提として書いているので詳しい説明などはあまりありません。

最後に、作者は若干厨二病だったりします。

それらを踏まえたうえで納得していただければ、どうぞお進み下さい。

………いいですね？後悔しませんね？

では、どうぞ。

序章　～魔術師の邂逅～

そこは、一面の焼け野原だった。

あらゆるモノが炎上し、あらゆる生命を燃焼させる様はまるで地獄のよう。

救いを求める叫びが辺りに木霊し、救われぬモノの怨嗟が染み渡る。

そんな死の世界を、二つの人影が歩いていった。

少年と少女。

あらゆる音を無視して、伸ばされる手を視界の外に追い出し、彼等は歩く。

年端も行かぬ彼等にもまた、死が迫っていた。

少年の身体はもう死んでいるといっても過言ではなかった。

最早感覚などなく、流動する風景が無ければ、歩いているかも分からない。黒いナニカに侵された身体を動かしているのは、生への執着と少女というたった一つの存在だった。

少年と少女は双子の兄妹だった。兄が妹を助けるのは当たり前。それが少年の心情で、共に居た少女を助けるのは当然の行為であり、この世界へ自身の存在を繋ぎとめる鍵でもあった。

独りであれば、当に少年は死んでいただろう。

その少年を生かしている要因である少女は、歩いてはいるものの中身は空っぽに等しかった。

少女は兄が大好きで、少し前に喧嘩していたけれど、本心では早く仲直りしたいと願っていた。炎の中で手を差し伸べられたときは本当に嬉しかった。けれど、今の彼女にそんな感情は存在していない。手を引かれているから、それに合わせて身体を動かしているだけだ

った。

少女の魂は、黒いナニカに粗方喰い尽くされていた。残っているのはその残滓。少女は、抜け殻だった。

それでも繋がれた手を離さないのは、少女の想い故か。

そんな彼等にも、いよいよ終わりの時が訪れようとしていた。

唐突に少女の身体から力が抜け、手を繋いだままその場に崩れ落ちる。少年も少女を支える力など残っておらず、少女の隣に仰向けに倒れた。

見上げた空は、厚い雲に覆われていた。

少年は、隣の少女に顔を向ける。

少女の視線は、まっすぐ虚空に向けられていた。少女は、曇天を見上げるだけで微動だにしなかった。

そこに、生の息吹は、欠片も存在しなかった。

少年は悟った。掛け替えのない、黒いナニカに喰われもう名前も思い出せなくなった少女が、遠い、手の届かない場所に、旅立ったことを。

不思議と、涙は出なかった。ただ、これで独りになったと、そう思うだけだった。

少年は、視線を再び曇天へと向けた。

灰色の空から、冷たい雫が落ちてきた。

次第に、それは一粒二粒と増えていき、やがて雨となった。

少年はそれを、無感動に受け入れていた。

身体を濡らす雨粒も、刻々と近づいてくる死の足音も。

どれくらいそうしていたか。

意識が遠退き、魂が身体から抜けようかというその刹那、一つの影が少年の身体と重なった。

それは、ボロボロのコートを羽織った男だった。

男は跪き、こう言った。

「良かった。まだ、生きていてくれた……………」

その男の顔は、歪んでいた。何を思っているのか、少年には分からなかった。

けれど、その顔は何よりも眩しくて、何よりも尊く感じて、強く強く少年の胸に焼きついた。

そして少年は、男が見守る中で、その生を終えた。

少年が息を引き取ったことは、男、衛宮切嗣もすぐに気付いた。

「そ、んな。どうして……………やっと、やっと見つけたっていうのに。僕には、誰も、救えないのか……………」

切嗣は悔しそうに、拳を地面に叩きつけた。きつく閉じられた双眸からは大粒の涙が零れ、嗚咽が空に溶ける。

自らが招いたともいえるこの地獄の中、切嗣は縋る思いで生存者を探し続けた。

絶望的だということは分かっていた。けれど、それでも探さずにはいられなかった。

滑稽だと思う。しかし、可能性が少しでもあるのなら、諦めたくなかった。

そして、ようやく、やっと、見つけた。少年と少女、少女は既に事切れていたようだが、少年にはまだ息があった。

救われた。

この時、最も救われたのは、他ならぬ切嗣の心であろう。

だが、無常にも少年は切嗣の見ている中で死んでしまった。天から地へ叩き落されたような心地だった。

どうすることも、切嗣には出来なかった。

アーサー王の鞘を使おうにも、遅すぎたのだ。少年の身体は、生きていることが不思議なほど、無残な状態であったのだから。

切嗣の慟哭が世界に響く中、ゆらりともう一つ新たな人影が現れた。それは、切嗣と死闘を演じた神父ではなく、黄金のサーヴァントでも、生存者でもなかった。

人影、黒い外套をの男は、無言で切嗣に歩み寄った。

その男との邂逅は、切嗣に光をもたらした。

それが、とある英雄の始まり。物語の、その序章。

「本当に、救えるのか？」

「可能性はあるだろう。無論、何らかの弊害は覚悟するべきだが」

「……それでも、構わない。力を、貸してくれ」

「……………ふむ、よからう。今更私が人を救うなどおかしな話だが、この地獄から生まれ出でたモノが真に救われるのか、見てみよ

うではないか。手を貸そう、魔術師殺し」

かくして、物語は正史を大きく外れ、運命の歯車に狂いが生じる。

世界にすら修正不可能なその歪みは、一人の少年の運命を大きく捻じ曲げることとなる。

黒い外套の男は、切嗣に名を聞かれ、厳かに告げた。

「魔術師、荒耶宗蓮」

嘘予告

「な、な、な、なんでさー!!」

それほど広くない病室の中、声が響いた。あまり声に張りが無く、大きな声でもなかったが、不思議と病院中の人間がその声を耳にした。

声の主が横たわるベッドの脇には、ボロボロのコートを羽織った男

序章 〈魔術師の邂逅〉（後書き）

勢いで書いたので、続きとかあんまり考えてません。しかもこれだけ。会話とかほとんどなし。

どっちも好きな作品なんで、何となく妄想してたら書いてしまったモノです。

やー、本当なら荒耶が今更一助けなんてするはずないんですけどねー。むしろ死を蒐集するほうですし。妄想設定では、きまぐれ、つてことにしますが。因みにそこにいたのは、単に冬木の聖杯戦争つてのがどんなのか見に来ていたからつつういい加減なものです。時期的には、霧絵とか藤乃の仕込が終わった後って感じですかね。ほとんど存在が概念とかしてるつつうのに在り得ないのはわかってるんですよ。わかってるんですけどねー。書きたくなっただけです。許してください。

つーことで、オリジナルの作品の方も多数執筆中（公開してないの含んで）してるので、こっち書くのはほとんどないかもしれないです。場合によっては一ヶ月ぐらいでこれ消すかもしれませぬ。

まあ、何とか更新できるように頑張りますけど……。どっちにする超亀更新決定ですね。

あるかどうかは分かりませんが
では、また次回。

第一話 裏切りの魔女と朽ちた殺人鬼・前編（前書き）

今回は前編です。

雨が降りしきる冬の夜。

神代の魔女は現代の魔術師と出会う。

果たして、その出会いがもたらす結末とは？

では、どうぞ。

第一話 裏切りの魔女と朽ちた殺人鬼・前編

夜の帳があり、天空を雲が覆い冷たい雨が降りしきる中、ロープを被った女性が一人、薄暗い道を歩いていた。

その光景は、一言で言えば異様だった。

女性の息は荒く、その足取りは重い。ロープは紅く染まり、所々破けている。雨に濡れた布は肌にぴったりとくっついて、意外に豊満な線がくつきりと浮かんでいた。

暫くふらふらと歩いていた女性だが、道に転がる石に躓き体勢を崩した。反射的に体勢を立て直そうとしたが、数歩で力尽き、道の脇の林に倒れこんでしまった。

そのまま、女性は動かなくなった。

「……ハア、ハア……流石に、限界ね。むしろ、今までよく持ったというべきかしら」

弱弱しい女性の独白は、雨に紛れて消えた。

女性は、諦めていた。

元々、勝手に喚ばれただけなのだ。何を、必死になる必要がある。

(……裏切の結果、身を滅ぼす。結局、それが私の因果なのかしらね)

女性は、自嘲的な笑みを浮かべた。

始めから、分かっていたことだ。そうそう自分の都合のいいように事が運ぶわけが無い。因果のせいにしたところで、それを想定した上での行動だ。

全て、覚悟していた。

覚悟していた、筈なのに。

どうして、こつも生き足掻こうとするのか。まさか、死が怖いとでもいうのだろうか。

分からない。分からないが、それはとても滑稽に思えて、女性は天を仰ぎ唇を歪めて呟いた。

「はぁ．．．．．私、醜いわね」

空は、何も答えてはくれない。同意も、否定もない。ただ、無慈悲に冷たい雨が落ちてくるだけだ。

それが、答えの様な気もした。

（ああ、せめて最期くらい、綺麗な月を見たかった．．．．．）
厚い雲を恨めしく思いながら、女性は目を閉じて．．．．．

「貴女は、醜くなんかないわ」

そんな、声でした。

「．．．．．え？」

幻聴かと耳を疑ったが、確かに前方に何者かの気配がある。

こんな自分に声をかける酔狂な人物は、どんなモノかと目を開けるとそこには

「大丈夫？．．．．．な訳はないか」

紅い宝石のような双眸が、心配そうにこちらを覗き込んでいた。

正体は、年端もいかぬ少女だった。恐らく15、6歳と思われる。

女性は、少女を見て声が出なかった。

それには、どうして少女が自分に声をかけたのかという疑問もあったが、何よりも、その少女の容姿と気配が原因だった。

少女の白い髪は闇の中でより一層白く映え、瞳は優しく温か紅い光を湛えている。容貌は人形のような精緻な作られたような美しさがありながら、幼さが見え隠れする顔立ちは可憐さと可愛らしさをより際立てていた。

女性は、少女の雰囲気にもまれていた。凜としながら、慈悲と厳しさが同居しているような、少女の不思議な佇まいに。

つまり、それがどういふことかといえば、言葉にすれば簡単なことだった。

女性は、少女に見惚れていた。

「ん？・・・もしかして喋れない？」

「え？・・・いいえ、その」

女性は、思わず口ごもった。

神代を生きた自分が、不覚にも少女に見惚れてしまったことに戸惑い、少女の自分を気遣う視線を理解できずうまく言葉を発することが出来なかった。

それでも、何とか女性が言葉を紡ごうとしたその時、新たな気配が唐突に現れた。

「そこにいるのは、衛宮か？」

暗がりから足音も静かに現れた、深緑のスーツに身を包んだ男性は、少女を指して衛宮と言った。

衛宮。本名を、衛宮志保。

穂群原学園二年C組、弓道部所属の彼女は、同級生の柳洞一成に所用があり、一成の家である柳洞寺へ赴き、その帰りに女性と出会ったのだ。

女性が倒れていたのは、柳洞寺の麓の草むらだった。

「はい。そういう葛木先生こそ、こんな所にどうしたんですか？この先には、柳洞寺くらいしかないと思いますけど？」

志保は慌てることなく、男性、葛木へと視線を向ける。女性も、葛木へ目を向けた。

葛木は、志保が葛木先生と言った事から分かる通り、学校の教諭である。

穂群原学園二年A組担任、生徒会顧問、というのが現在の葛木の肩書き。

「私は帰宅途中だ。現在、柳洞寺へ厄介になっている」

「・・・そうだったんですか」

志保は意外そうな表情を浮かべた。全くの初耳だった。一成からそんな話は一切聞いていない。

まあ、べらべらと喋る必要がある内容でないのは確かだが、いくら生徒会の用事という正当な理由があつたにせよ、同級生の女生徒を家に招くのだから、学校の教師が居候していることくらい話しておいてほしかった。

(と)いうか、一成ってそういうの気にならないのかな・・・)

正直、志保は一成のことを異性としてみていない。というより、友人、親友と思っていた。

そこに恋愛感情がないなら、異性が異性の家に遊びに行くのに何ら問題はないだろう、と志保は思っている。通常であれば、だ。だが、学校の教師が居候してるとなれば話は別である。

何せ、いつ帰ってくるか分からないのだ。いらない勘違いでもされずには面倒なことになる。

そもそも、教師に見つかった時点で色々アウトだ。

葛木が話を聞いてくれる教師だというのは別にしても、一成とてその辺の機微が判らぬ阿呆ではない。

ならば何故、と志保は不思議に思ったのだ。

実の所、一成も普通はこういう場合に気を使う心は持ち合わせている。

ただし、今回は訪問者が志保ということで、頭がうまく働かなかったのだ。つまりは、一成は志保を異性として見ているという事。要は、それだけ。

関係ない話だが、この一件が一成が志保に対して好意を抱いていると自覚する切欠となったのだ。尤も、その好意に志保が気付く日はこないのだが、それはまた別の話。

ともあれ。

問題は、志保自身があまり葛木に関わりたくないということ。

生理的に受けつかないとか、雰囲気怖いだとか、そういうことではない。むしろ、教師としては好印象をもっている。

それ以外の事柄で、志保は葛木を警戒していた。

葛木は、普通の教師とは違うのだから。

「む・・・それは？」

葛木は草むらに倒れている女性に気付き、視線を送る。

「その女性は、お前の知り合いか？」

「いいえ。違います。ですが、ここに倒れていたなので、手当てをしようと思ひまして」

暫し、三者が見つめあったまま、沈黙が続く。

その中で、女性に限界が来たのか、眠るように気絶した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

女性が気絶したのを確認した志保は、視線で、どうするのかと葛木に問う。

対する葛木は、数秒の熟慮の結果、口を開いた。

「柳洞寺で手当てをする。衛宮は」

「私も行きますよ。その人は、私でなければ治せない・・・・・・・・お分かりでしょうか？その人が普通で無いことくらい。裏を生きた貴方なら」

帰れ、と続けようとした葛木だが、志保に遮られた。

葛木は志保の言葉に若干驚きを見せるも、表情には出さずおもむろ

に傘を閉じ、志保に手渡す。当然雨に打たれることになるが、気にせず女性の体を抱え志保に背中を向けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かった。ついてきなさい」

そう言うと、葛木は柳洞寺の階段を登り始めた。志保もそれに続く。一成が見たら驚くだろうなーと思いつつ、志保は携帯電話を手取る。夕飯は遅くなる、と家に連絡するためだ。

これから、ほんの少し長い夜が始まる。

それは、裏切りの魔女と朽ちた殺人鬼の出会い。

NGシーン

女性は、少女に見惚れていた。

「ん？・・・もしかして喋れない？」

「え？・・・いいえ、その・・・・・・
・・・・・・ああああああん、もう！何でこんなに可愛いの
！！」

「きゃっ、何！？」

「お肌はもちもちでぷにぷにでえ〜、髪はいい匂いするし、結構胸も大きいしかなりの高スペックね。っていうか、もう顔が私の好み・・・」

「つやめんか〜〜！！！！」

「へぶっ！？」

志保はキヤス・・・もとい、女性の拘束から逃れ、女性に当身をくらわせ気絶させた。

「はあ、はあ・・・何だ、十分元気じゃない・・・・・・っていうか、そういうのは桜だけで間に合ってるのよ」

「・・・衛宮」

「えっ、えっ！？葛木先生！？」

暗がりから現れた葛木。彼は、事の一部始終を見ていた。雨の中、謎の女性に絡まれる自分の高校の女生徒。そして女生徒が女性を気絶させる様を。

さて、この状況、どうすることが正解になるのか。
葛木でさえ、解を瞬時に出すのは不可能だった。

「えーと、とりあえずこの人のこと任せます。そのうち消えるかも
しれませんけど、在るうちに目覚めたら事情聞いて、あと好きにし
てください。ああ、場合によっては敵になるかもなんで、その時は
よろしく。じゃ、そういうことで」

そう言つと、志保は早足で去っていった。

残されたのは、気絶した女性と、立ち尽くす葛木だけだった。

「……………むう」

おわり

第一話 裏切りの魔女と朽ちた殺人鬼・前編（後書き）

先に番外編書くとか言っていましたが一話投稿。ぶっちゃけ番外編全然進んでません。体調不良やら何やらで執筆が遅れております。

まあ、言い訳はともかく。

一話後編、番外編中編、同時進行で書きます。先に書きあがった方を更新します。なので、番外編の場合はいつ投稿されたか分からないので、気になる人はこまめにチェックしてください。全く書いてないのも確かなので、確実に一週間以上かかりますけどね。

そんな訳で、今後も多分、一話二部編成でいくと思います。或いは前中後の三部です。一話は二部です。

さて、後編がいつになるかは分かりませんがあまり期待しないで待っていてください。

では、また次回。

第一話 く裏切りの魔女と朽ちた殺人鬼・後編く（前書き）

若干長くなりました。

裏切りの魔女は、一命をとりとめ、柳洞寺で目を覚ます。志保との
出会いは、裏切りの魔女に何を与えるのか？

では、どうぞ。

第一話 く裏切りの魔女と朽ちた殺人鬼・後編く

「よし……ふむ。私に出来るのはこれくらいか」

志保は、柳洞寺の客間で一つ息を吐いた。

志保の前には、柳洞寺の麓で倒れていた女性が、白い浴衣に着替えさせられ布団に横たわっていた。額には水で濡らしたタオルが乗せられている。

女性はまだ目が覚めないが、呼吸は安定しており安らかだ。尤も、元々彼女自身が怪我を負っていた訳ではなく、消耗していただけなのだから当然ではあるが。

「あとは、早く目を覚ましてくれればいいのだけど」

必要な処置は施した。万が一の時の為の布石も打った。志保が出来るのは、見守ることだけ。

部屋の外には葛木が待機しており、志保が扉を開けるのを待っている。

志保は葛木に、女性の処置は自分がする、個人的な事情もあるので、時が来るまでは外で待っていて欲しいと告げた。

葛木は素直にそれに従い、部屋の外で待機していた。

志保は志保で企みもあるし、葛木にも女性にも選択肢を増やそうとしたのだ。

「……………」

時間は刻々と過ぎていく。

外ではまだ雨が降り続けているようで、雨粒が屋根を打つ音が響く。僧たちは既に寝静まっているのか、雨音以外の雑多な音は一切聞こ

えなかった。

志保は、女性の額のタオルを桶に汲んだ水に浸して絞りなおし、再び女性の額にそっと置いた。病気ではないし熱がある訳でもないが、気休めにはなるだろう。

それから、どれだけの時が経ったのか。

「ん……………うう、あ」

女性が、静かに薄っすらと目を開けた。

「じ、こは……………つ貴女は!?!」

「良かった。目が覚めたのね……………サーヴァントのお姉さん」

きよろきよろと部屋の中を見渡していた女性は、志保の姿を見とめた途端、警戒の色を示した。女性は続く志保の言葉を聞いて、さらに視線を尖らせる。

「……………そう。やはり貴女も魔術師ということね」

「まあ、ね。私は三流だけど」

そう言って志保は苦笑する。

魔術師、それは人為的に神秘、奇跡をさせる者たち。

志保は自身を三流というが、魔術師として総合的に見て三流なのであって、得意分野でいえば、一流以上。戦闘であれば、一流の魔術師にも引けを取らない。

「今の自分の状態は、理解してる？」

「……………貴女、私にパスを」

志保の問いに、女性は一瞬放心状態になるが、直後には志保を睨みつけていた。

女性はサーヴァントという一種の使い魔であった。

最高のゴーストライナー、英霊。

英霊とは、過去、現在、未来において偉大な功績をあげ、死してなお信仰の対象となった英雄がなるモノ。

彼等は冬木市の聖杯戦争と呼ばれる大儀式のために聖杯によって召喚される。

聖杯戦争とは、聖杯によって選ばれた七人の魔術師、マスターと七騎の英霊、サーヴァントの七組によって、聖杯を求めて繰り広げられる殺し合い。どんな願いでも叶えるという聖杯をめぐる争奪戦。

女性も、そうして召喚されたサーヴァントの一人だったのだ。

何故女性が倒れていたのかといえば、原因は魔力の枯渇。

サーヴァントも使い魔の一種なのだから、魔力が尽きればこの世から去ることになる。

ならば、あとは簡単。魔力がないのなら、余所から持ってきてくればいい。

そう考えた志保は、自分と女性の間にはパスと呼ばれる目に見えない路をつくり魔力を補給したのである。

ただパスを繋げた際、志保が女性の記憶を視てしまったりしたのだが、その事は流石に志保も話せない。内容が内容であったし、後の女性の選択次第では敵になることもある得るのだから。

正体を知ってしまったなどは、口が裂けても言えない。

それ故、志保は内心冷や汗を流していた。

下手をすれば、その瞬間に八つ裂きにされても可笑しくはないのだ。第一、この対応事態が既に普通の魔術師からすれば間違っている。普通の魔術師ならば渡らない、愚かで危険な橋だ。

最低限の魔力しか与えていない以上、滅多なことは出来ない筈だが、相手は英霊。油断は出来ない。

それでも延命措置を施したのは、志保の我儘、志保の根幹を成す歪み故である。

その歪みが何であるかは、また後の機会に。

「何が目的？私を、どうするつもりなのかしら？」

女性は、油断無く志保を見据える。

「目的、ね。貴女の満足する答えは返せないと思うけど？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

女性は無言で志保に答えを求める。女性の視線は、何でもいいから早く話せと言っていた。

志保は、仕方ないとばかりに溜息を吐いて話し出す。

「はぁ・・・私は、ただ貴女を助けたかったから助けた。それだけ。何か裏があると勘繰るのは勝手だけど、嘘じゃない」

「貴女、それで私が納得すると思ってるの？」

案の定、女性は志保の言葉を信じずに睨む。

女性は、サーヴァント。志保もサーヴァントという言葉を知ってい

たということ、聖杯戦争についても知っている可能性が高い。となれば、助けたのには何かしらの思惑があると思うのは当然だった。

「思っていない・・・そうね、じゃあ少しでも信用してもらおうために、少し昔話をしましょうか」

「・・・昔話？」

女性は訝しむように志保を見つめる。

志保は目を閉じて淡々とした口調で語りだした。

「昔、十年ほど前、この冬木市で大火災が発生しました。あつという間に広がった火の海は、住宅街の一区画を全焼させてしまいました。炎に吞まれ、生き残ったのは、たった一人だけでした。いえ、生かされたのは、たった一人だけでした。二人で一人。火の原を歩いていたのは、一組の兄妹。彼等は力尽き、やがて死を迎えました。けれど、そこに二人の魔術師が現れました。彼等は、兄妹を救おうとしました。けれど、兄の身体は朽果て、妹の魂は既にこの世にありませんでした。ならばと、魔術師は未だ残っていた兄の魂を妹の身体に移し変えました。そうして、妹の身体を得た兄は、甦りました。一人で二人。二人分の生。それから女性となった兄は、生に執着しました。自分の命を粗末に扱ったりはしませんでした。命を軽んじることを許しませんでした。助けられる命があるなら、助けようとなりました。それが、彼女にとっての在り様でした。救える命があるなら、どんなことをしてでも救う。それが彼女の正義でした・・・と、まあ、こんなところかな」

「貴女・・・そんな」

女性は、信じられないとでもいう風に見開いた。

「・・・もし、これでも信じられないっていうなら、理由を付け足しますか。私には、ちよつとした企みがある。そのためには、少しでも戦力が欲しい。だから貴女を助けた。これでどう?」

「・・・ええ、十分よ」

深く目を閉じて、女性は言った。

理由云々は関係ない。志保の語った昔話。その虚実は判らない。けれど、そこに込められた想いは、嘘ではないと思った。信じてもいいと、そう思えた。

物語を紡ぐ志保の姿が、悲しく、尊く思えたから。

「それじゃ、信じてもらえた所で、聞きたいことがあるんだけど」

「・・・何かしら?」

「貴女は、キャスターのサーヴァント、で合っている?」

「ええ。私は、キャスターよ」

女性、キャスターは躊躇うことなく答えた。

七騎の英霊の一つ、魔術師の英霊、キャスター。

それが、女性の正体。

志保が女性をキャスターだと思ったのは、女性の華奢な体つきから考えて剣の騎士、槍の騎士、弓の騎士、騎兵、暗殺者とは考えにくく、理性があることから狂戦士でもない。であれば、消去法で魔術師タということになる。あとはもう一つ、女性の着ていたローブが神話の世界の魔術師のそれに似ていたからだ。

「そう。では、キャスター。貴女のマスターは？」

「殺したわ。令呪を全部使い切らせてね」

キャスターは表情一つ変えず、真直ぐ志保を見つめながら言った。志保もその答えは予想していたので、表情が動くことはなかった。

令呪。

マスターがサーヴァントを従えるために必要不可欠なモノ。三つの絶対命令権。

そもそも、英霊が魔術師風情に従う義理はない。いくら使い魔として召喚したとて制御の出来る相手ではないのだ。

ならばと、無理矢理にでも従わせるために作られたのが令呪。聖杯戦争の重要なシステムの一つ。

令呪で命令されれば、どんなに意思が強い英霊であっても抗うことは出来ない。たとえ自身の意思にそぐわぬものであると、強制的に意思に関係なく身体が従ってしまう。自害させることも容易なのだ。とはいえ、命令によつては空間転移なども可能なので、有効活用すれば聖杯戦争を有利に進めることも出来る。

キャスターは、その令呪のシステムを逆手に取った。

令呪は全部で三つ。

ということは、その三つを使い切らせれば、自身を縛るものは無くなる。自由になる。

マスターとサーヴァントの利害が一致し、信頼関係が築かれているのなら令呪は不要だろうが、キャスターはそうではなかった。

キャスターはあの手この手を使って、全ての令呪を使用させ、隙をついてマスターを殺した。

キャスターのローブについていたのは、そのマスターの血だったのだ。

「……こんな私を助けたこと、後悔してる？」

キャスターは、若干自嘲的な笑みを浮かべつつ、恐る恐る口を開いた。

マスター殺し。それを後悔してはいないが、志保に拒絶されること
が、何故か怖かった。

そんなキャスターの心配を余所に、志保は柔らかな笑みを浮かべて
告げた。

「まさか。令呪を使い切ったマスターが愚かだっただけ。信頼関係
を気付けなかったほうが悪い。自業自得、同情の余地なしだよ。後
悔なんて、する筈がない」

志保のバツサリした答えにキャスターは目を丸くした。

そして、志保の極上の微笑を前にして、キャスターは頬を朱に染め
顔を逸らした。

神代の英霊が形無しである。

「……ところでそんなキャスターは、これからどうするの？」

「えっ？」

きよとん、とした表情で志保を見据えるキャスター。

「このまま聖杯戦争に参加せずにリタイアするか、それとも、誰か
新たにマスターを見つけるか。差し当たっては、私と契約する、と
かね」

「……それは」

「因みに、私は聖杯戦争に参加するつもり。色々因縁があるからね。まだサーヴァントは召喚してないけど。キャスターが私のサーヴァントになりたいというなら拒まない。もちろん、無理強いもしない」
穏やかな口調で、ゆっくりと志保が言う。

「・・・本気なの？貴女は、私がどういう存在か知っているでしょう？」

キャスターは、少し咎めるような視線を向ける。
契約したからといって、令呪が現れるという訳ではない。キャスターには、もう縛る鎖が存在しないのだ。

それがどれほど危険な行為かは、志保も十分に理解している。
それでも構わないと、志保は言う。

「本気のもりだよ。何となく、キャスターは信用できる気がするし、信頼してもらえるように頑張るよ。それに、何の対抗手段も無い訳でもないからね。まあ、キャスターが嫌というなら、私は引き下がるよ。戦力は多いほうがいいけど、無理をするつもりは無いから」

「っ・・・」

柔らかな微笑を浮かべる志保を真正面から見つめて、キャスターはまたも頬を赤くした。先ほどよりも赤みが強い。
次第に激しくなる動悸を抑え、呼吸を整える。
瞳を閉じ、考えること数分。

キャスターは、意を決したように口を開いた。

「ごめんなさい。私自身どうしたいのか、よく分からない。でも、貴女と契約することは出来ないわ」

志保の昔話を聞いたからか、不思議とリタイアすることは最初から頭になかった。

戦力的に考えれば、キャスターは志保と契約するのに何ら問題はなかった。流れ込んでくる魔力に淀みはなく、量的に見ても申し分ない。新たにマスターを探すとしても、志保以上の適格者などそうはいまい。この時点のキャスターは知る由も無いが、今回の聖杯戦争に参加するマスターの中で、最も戦闘力が高いのが志保なのだ。近接戦闘に限って言えば、ほぼ無敵。つまり、相性は抜群にいいといえる。

だが、キャスターには志保の在り方が理解できなかった。いや、信じられなかったといったほうが正しいか。

志保と相対すると、頭では志保の言葉を否定しても、心の何処かでそれを肯定する自分がいた。どうしようもなく、心が揺らいだ。

志保と契約したい、という思いもあったが、理性がそれを拒否した。キャスターには、志保の在り方が眩しく見えた。どうしようもなく歪んでいるが、どこか高潔さを感じる、尊い存在。

薄汚れた自分が触れてはいけない、そんな思考が頭を支配して、共にあることを拒んだ。

「うん。分かった。じゃあ、これ以上話すことはないかな」

そう言って、志保は立ち上がった。

「残念だけど、次に会う時は敵同士、か」

「あっ……」

少し寂しそうな表情の志保を見て、キャスターは胸を締め付けられるような心地になる。

キャスターも、志保を敵にしたくなかった。

「後のことは、葛木先生……次に入ってくる男の人に任せから。どうするかはキャスターの自由にするといいよ。ああ、分かっているとと思うけど、このお寺の人達にはあまり手を出さないようにね。キャスターが寝ている間にちよつとした仕掛けをしておいたから、何かあれば私に伝わるよ。最悪、監督役が動くような事態は、キャスターも望んでないでしょ？まあ、忠告はこれくらいかな。それじゃ、私はもう行くよ……」

志保は最後に脅しとも取れる言葉を残し、立ち去ろうとする。

志保とて、この処置が手緩いことなど百も承知だ。だがそれでも、パスを繋げた瞬間に僅かに垣間見たキャスターの記憶を考えると、非道なれど最良の手を打つことは出来なかった。だから、これが限界。

それが、志保がキャスターにしてやれる精一杯の慈悲だった。

「ま、待って！」

キャスターは背を向ける志保に向かって叫んだ。叫んだといっても、まだ体力が回復していないため大した音量ではないが。

キャスター自身、自分の行動に驚いていた。自然に、躊躇う間もなく、志保を呼び止めていた。

キャスターがその行動を認め、理解し、受け止め、身を委ねるのは、聖杯戦争が始めてからのことになる。

志保はいきなりの大声に驚いて振り向いた。

「わっ!?!?.....えつと、何？」

「あの・・・誓うわ。忠告は、必ず守ります。だから、その・・・
貴女の名前、教えてくれない？」

「・・・まだ名前言ってなかったっけ」

志保は、そういうことか、と苦笑した。

キャスターを見据え、視線を交錯させ、優しげに微笑んで言った。

「志保。衛宮志保、よろしく。本当はもう一つあるのだけど、それは今度会った時にね」

「・・・シホ」

「じゃ、またね。キャスター」

志保はそう言うと、颯爽と部屋を去って行った。

「それでは、葛木先生。キャスター、彼女は目が覚めていますから、存分にお話してください。私は、これで失礼します」

志保は、部屋の外に待機していた葛木に向かって言った。

「待て、衛宮」

「ああ、葛木先生。先生の選択次第によっては、私は先生の敵にな

るでしょう」

「……………どういことだ」

葛木は、無表情で志保に問う。

「その辺は、彼女に聞いてください。ただ、決して油断だけはしないで下さいね。それでは、明日学校で」

そう言い残して、志保は柳洞寺を後にした。

裏切りの魔女、朽ちた殺人鬼、魔法使いの弟子。この出会いが、後の彼等の運命を大きく左右することになる。

NGシーン

「今の自分の状態は、理解してる？」

「……………貴女、私に……………十二をしたの!？」

「はい？」

「キスしたの?抱いたの?血を飲ませたの?口移し?それ以上?もう、私の寝込みを襲うなんて、今もう一度して頂戴!!」

バツと起き上がり、腰をくねくねさせるキャスター。

「……………帰る」

バツと立ち上がり、踵を返す志保。

「え?いや、ちょっと待って。違う、謝るから!冗談だから、だから待ってええええええ!!」

「それ無理。桜予備軍とは付き合わないことにしてるから」

「誰!？」

「あ、葛木先生。この女性が私の貞操を狙っています」

「ちょっと!？」

「何?衛宮、私の後ろに」

葛木が志保を背後に庇い、キャスターを見据える。

「あれ？何、この展開!？」

「私の生徒に手を出すというなら、容赦はしない」

「こ、こんなのFateじゃない〜。宗一郎様〜!？」

「・・・何を今更」

おわり。

第一話 〈裏切りの魔女と朽ちた殺人鬼・後編〉（後書き）

遅くなりました。すみません。

本編に關しまして、さくさく進めるとか以前言いましたが、出来そうにありません。ある程度ポイントを押さえて端折りながら書いていこうとは思いますが、それなりに長くなるかもしれせん。

それはさておき、このシリアス？な感じで今後書いていく自信がありません。話途中からとんでも展開というか、もしかしたらどこかで見たとのある展開になるかと思えます。まあ、みんな似たり寄ったりな部分は多少あるでしょうが、なるべく他の作品と違う展開を目指してみようと思えます。

えー、ちなみに、この作品の主人公は、半オリキャラというか、女性化した土朗なわけで。これってオリキャラになるんですかね？ともあれ、志保はひたすら格好良くう書きます。出来る限り。設定上かなりハイスペックなので、チートです。バゼットにすら圧勝できます。純粹に殴り合えば負けますけどね。

他にオリキャラは出さない予定です。
ではでは、そんなわけで、今月中にもう一話更新出来ればいいのですが……

番外編はもう暫しお待ちを。

では、また次回。

第二話 く魔術師達の日常・前編く（前書き）

若干時間がかかりました。

魔女との邂逅から数日。

とある武家屋敷から小気味よい音が響いていた。

では、どうぞ。

第二話　く魔術師達の日常・前編く

柔らかな日差しが街を明るく照らし、冷涼な空気が身に凍みる早朝。未だ多くの人間が布団の中で丸くなっているこの時間、とある武家屋敷の台所から、ことごと、という小気味良い音が響いていた。

「ん、いい感じ」

味噌汁の味見をして出来が良かったのか、機嫌よさそうに微笑むのはこの家の主、衛宮志保。

制服の上に桜色のエプロンをつけて料理をする姿は実に様になっている。

志保は、一人暮らしをしているということもあり、料理を始め家事全般を得意としている。それも全てにおいて一流以上、その上誰もが認める美少女。

実は、密かに「穂群原学園、お嫁にしたい女子第一位」だったりする。しかも、男子女子含めての集計結果なのだから、その人気振りが伺える。

欠点としては、性格的に若干男っぽさが目立ち、自身に向けられる好意に鈍い等が上げられる。ただし、一部においては、そこがいい、という意見もある。

知らぬは本人ばかりなり。

「よし。こんなものかな」

志保は味噌汁の火を止めて蓋をする。

ご飯も朝食に合わせて炊けるように設定し、他のおかずについても下拵えは完了している。あとは簡単な調理のみで朝食が出来る。

「さて……ん？」

お茶でも飲んで少し休もうかと思った志保だが、ふと気配を感知し、動きを止める。

志保は表情を消し、だらんと力なく腕を下げた。

その直後、志保はそんな無防備な体勢から唐突に、無造作に、流れるように、不自然なほど自然に、振り返った。
すると……

「せんぱー……つじう!？」

「あら、桜。来てたんだ」

音も気配もなく志保の背後に忍び寄っていた少女の鳩尾に、吸い込まれるように、的確に、容赦なく、志保の肘が突き刺さった。

振り返る、つまりは身体を捻るといふ僅かな動作ではあるが、足から腰、肩に至るまでの連動した筋肉の動きは一切の無駄なく力を伝え、さらに遠心力が加わった肘打ちは、見た目以上の威力を持っていた。

その結果。

「か、っは……お、おお」

少女、間桐桜は、苦しげに嗚咽を漏らしながら蹲ることになった訳で。

間桐桜。穂群原学園一年、弓道部所属。

藤色の髪と瞳を持ち、最近胸部も豊かになり女性らしさが増してきた、志保の後輩。

桜は、数年前のある出来事を境に志保を先輩と慕うようになり、志

保と同じ魔術の師の元で魔術を学んだ志保にとっての妹弟子。そういった関係もあって、桜は志保の家に入り浸り、ほぼ毎朝毎晩食事を共にしていた。

ちなみに、いつの間にか衛宮邸には桜の部屋が作られていたりする。

「おはよう、桜。大丈夫？」

そんな桜に対し、にこやかに挨拶を告げる志保。

一応、気遣うようなことは言っているが、やった犯人が爽やかな満面の笑みを浮かべていては台無しである。

「せ、んぱい・・・お、おは・・・よう、ごぞいま、す」

桜は蹲ったまま顔を上げ、途切れ途切れになりながらも挨拶を返した。

桜が受けた肘打ちは、体格の良い成人男性でも気絶するほど危険な代物だった。意識を失わず、尚且つ話せるというのは普通なら在り得ない。が、この程度の遣り取りは今まで数え切れないほど重ねてきたのだ。いい加減、慣れもするのだろう。学習能力は無いのか、とか言ってはいけない。

「ありゃ、結構いいのが入ったと思ったのだけど、案外平気なのか」

よろよろと壁に手をついて支えにしながら立ち上がった桜に、志保は目を丸くした。

これは予想外。まさか、もう立ち上がってくるとは思わなかった。軽く驚いている志保に、桜は確かな口調で文句を言った。

「・・・ひ、酷いですよ、先輩。可愛い後輩になんてことするんですか」

「自分で可愛いとか……というか今のは正当防衛だ。だいたい声もかけずに家にあがって、背後にこっさり忍び寄ってた奴が何を言うか」

正確には正当防衛には当たらないかもしれないが、この場合は似たようなものだ。この件に関して、桜には数え切れないほどの前科がある。

志保は溜息を吐きながら、未だに壁に手をついている桜に近づいていった。

面白くなさそうに口を尖らせる桜だったが、次の瞬間にはその表情は一変していた。

「むう、それはそうかもしれませんが……って、わう！？」

志保は、包み込むように桜を優しく抱きしめた。

「え、あの、先輩？これ、その、どどど、どうして」

当然の如く、桜は唐突な抱擁に頬を赤くし、ただ戸惑うばかりだった。

志保の柔らかく儂げな肉体。鼻腔をくすぐる甘い香り。全身に感じる優しい温もり。

本当はどうしようもなく嬉しくて、普段なら願ってもない状況であ

る筈なのに、あまりに予想外な急展開に思考がついていかず、ただ疑問を投げかけることしか出来なかった。

「ごめん。今のはちょっとやり過ぎた。だから、まあ、その……
……お詫びってわけじゃないけど、さ？」

志保は、桜の頭を撫で髪を梳きながら言った。

志保としては、いつもの仕返しのつもりが、思いのほか強烈な一撃を見舞ってしまい内心動揺していたのだ。要は、堪えきれないほどの罪悪感がふつつつと込み上げてきて、この様な行動を取るに至ったのである。

何だか、どの道桜の思惑通りのような気がしなくてもなかったが、今ばかりは気にしないことにした。

まあ結局、志保は桜には甘いのだ。

「せ、せんばい……先輩は、悪くないです。最初から、そんなこと……」

桜は、志保の肘鉄は自分の自業自得だと理解していた。許すも許さないも、始めから怒ってなどいかなかった。今桜の心に満ちるのは、一滴ほどのほんの少しの罪悪感と、流されそうなほどに大きな幸福感。

桜は、志保の優しさを全身で噛み締めていた。

「本当に大丈夫？無理してないか？」

「そんなの、忘れちゃいました……」

桜は顔を朱に染めて恥ずかしそうに言った。

痛みなど、当の昔に押し流されてしまっていた。

「……う、あの、先輩」

暫く志保のされるがままになっていた桜だが、両手を志保の背中の方にまわして、あたふたと動かしていた。抱きしめてよいものか、迷っているようだ。

志保もそれに気付き、苦笑しながら言った。

「ふふ……いいよ。それくらいはね」

「……はい」

志保の許しを得た桜は、恐る恐る、志保の細い腰を抱きしめた。

そこまでであれば、良かったのだが。

「せんばい……」

「いじ」

「あうっ」

桜は、手をさらに下へと伸ばそうとして、志保に軽く頭を小突かれた。

結局、桜は反省していなかった。

「……………さて、朝食の下拵えは終わってるんだけど、お茶飲む？」

無言のままに抱擁を解いた志保は、何事もなかったかのように気軽に言った。

桜は、温もりが失われて名残惜しそうに表情を曇らせる。胸に去来する喪失感。

もう一度抱きつきたい衝動に駆られるが、また肘鉄を喰らってはたまらない。

桜は、渋々口を開いた。

「……………いただきます」

「ほいじゃ、お先にいつてきまーーす!!!!」

衛宮邸の玄関前。

近所中に響き渡るような大声で、一人の女性が走り去っていった。名を、藤村大河という。

大河は、穂群原学園の英語教諭で二年C組担任、弓道部顧問。

大河は志保の義父である切嗣と知り合いで、志保が幼い頃から姉代わりとして親しくしていた。切嗣の死後もその関係は続き、桜と同じく衛宮邸に入り浸っていた。

今日は弓道部の朝練と仕事があり、志保達と朝食をとった後、一足先に学校へと向かった。

志保と桜も朝練があるが、こちらはまだ余裕がある。大河が早いのは、他にも仕事があるが故である。

「今日も元気ですね。藤村先生」

「元気すぎだよ・・・」

クスツと笑う桜と、呆れたような声の志保。

桜は玄関の鍵を閉め、ポケットに入れる。

「さ、私達も行きましょう」

「そうね。でもまだちょっと早めの時間だから、ゆっくり行こう」

「はい」

桜は微笑み、志保と並んで歩調を合わせる。

早朝ということもあり、二人の他に人の姿はほとんどない。

ひっそりとした通学路を、他愛ない会話を交わしながら歩いていく。

最初の交差点へ差し掛かった頃、ふと思い出したように桜が言った。

「そういえば、先輩。朝、どうして私が後ろにいるって分かったんですか？気配は消してた筈なんですけど」

「・・・そのことか」

気配を消す、という言葉が女子高生の口から出ることなどまずあるまい。桜は魔術師という一面をもってはいるが、気配を消す、殺すというのは武芸者や暗殺者の領分だ。

まして、戦闘者として優秀な志保に気取られない程の気配断ちなど、そうそう出来るものではない。それをやってのけるのだから、桜の志保に対する愛情と執念は底が知れない。

「前々から考えてはいたんだけどね。結界に、ある機能を追加したんだ」

「ある機能？」

桜は首を傾げる。

衛宮邸には敵意のあるモノを感知する結界を始め、様々な魔術の仕掛けが巧妙に施されている。今更追加する機能があるとは、桜には思えなかった。

「うん。ある人物を感知する機能。無論私だけに知らせるようにね」

「それって……もしかして、私だったり？」

桜は冗談半分、怖さ半分で言ってみたが、返ってきた答えは無情なものだった。

「正解。名づけて、桜センサー」

「……マジですか？」

「うん。マジー」

志保はとびきりの笑顔を桜に向ける。
逆に桜は、この世の終わりかのような表情で志保に詰め寄る。

「そ、そんな……それじゃあ、もう先輩のお胸を後ろから揉みしだくことが出来ないってことですか！？先輩にえっちい悪戯することも出来ないってことですか！？お風呂も覗けないんですか！？そんな、あんまりです……！」

「その返しがあんまりだよ……いや、待って。お風呂覗いてたの？」

「いえ、それは予定です」

「反省しなさい」

志保の言葉に頂垂れる桜。

それでも桜は反省しないだろう。それは志保も承知している。とうよりも諦めている。

肩を落としたまま、桜は速度を落とすことなく志保の隣を歩く。志保も苦笑しながら、隣を歩く桜を横目で眺め、次の話題を探す。

これは、魔術師の少女達の日常。その一幕である。

って。どこまで耐えられるか試してみようかなあって思ってた・・・
・・・まあ、有り体に言えばお仕置きかな!!」

「か、かわいく言っても・・・それ、は。ぐはっ!?!」

その言葉を最後に桜は完全に気を失い、ぐったりと志保に寄りかか
った。

口端から涎が垂れ、あられもない姿を晒していた。

「む?桜?・・・・・・・・しまった。やりすぎたか・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ごくり」

その後、気を失った桜に何があったかは、志保しか知らない。

おわり

第二話 〈魔術師達の日常・前編〉（後書き）

魔術師の日常、如何でしたでしょうか？

桜が現れたあたりから可笑しくなり始めたこの話。こんなことになったのは、作者の悪ノリが原因です。

桜、結構タフです。気配断ちも完璧です。全ては志保のため、頑張ったのでしょね。全ては志保への愛情が為せる業ということではない。

どうでもいいことですが、志保と桜のエプロンはお揃いです。

そして、食事の描写はなしという暴挙。多分、そのうち嫌でも書くことにはなります。

それよりも、藤ねえの呼称なのですが、どうすればいいのでしょうか。とりあえず「大河」とはしましたが。藤村も違う気がするのです。

ていうか、藤ねえってああいう口調でいいんですかね？今一違和感が拭えない。

まあ、藤ねえは原作とあまり変わらない様子でいこうと思うので、脱線させないよう頑張ろうと思います。

で、今回は前編。一応、最初は前編と後編で二編成でいこうかと思いましたが、思いのほか前編が長くなったので、三編成にします。多分。

中編は、学校生活です。あのヒロイン（この作品では違いますが）もようやく登場か？

では、また次回。

第二話 〱魔術師達の日常・中編〱（前書き）

すみません。遅くなりました。

今回は、若干長いです。

尚、中編についてのいい訳を後書きのほうに書いてありますので、納得できないという方がいましたら、そちらをご覧下さい。

朝、弓道場に近づくと一人の女子生徒の姿があった。

彼女はそこで、思いもよらないものを目撃する。

では、どうぞ。

第二話 〱魔術師達の日常・中編〱

早朝の穂群原学園の一角に、異様な熱気を持った人だかりが出来ていた。

ちらほらと登校する生徒が増え、朝練をしている部活は終盤を迎える時間。決まって、この時間と放課後に人だかりが出来る。

その一団を見て、またか、と嘆息する者。何だろう、と見に行く者など反応は様々だった。

そして今日も、また一人。

何事かと、人だかりへと向かう、赤いコートを羽織った女子生徒の姿があった。

女子生徒の向かう先にあったのは弓道場。

その入り口に、大勢の生徒が押し寄せていた。心なしか、女子の比率が高い。

彼らは大声で騒ぐようなことはせず、小声でやりとりをしていた。前にいる生徒達は、一定時間が経つと脇にずれ、後ろにいる生徒と交代している。このローテーションがあればこそ、彼らは騒がず公平に目的を達せられる。

彼らがここまでの統制を獲得するには、弓道部顧問や主将との闘いがあったわけだが、それはまた別の話。

そんなこととは露知らず、女子生徒、遠坂凜は困り果てていた。

遠坂凜。穂群原学園二年A組、文武両道の優等生。

漆黒の髪をツーサイドアップにし、整った顔立ちと均整の取れた肉体をもつ、文句なしの美少女。

志保と並び、穂群原学園のアイドルと称される凜だが、実は裏の顔

がある。

そう、凜は魔術師なのだ。

それも魔術の名門遠坂家の当主であり、冬木市セカンドオーナーの管理人という肩書きを持つ言わばエリート魔術師だ。無論、普段は一般生徒として魔術師の顔を隠し普通に過ごしている。

そんな凜だったが、目の前の光景に、どうしたものかと頭を悩ませていた。

この一団が、どうやらローテーションを組んでいることは分かった。だが果たして、興味本位の自分がそこに加わっていいものか。また、この異様な熱気に包まれた一団の中に自分が紛れ込むというのも、常に優雅たれ、を家訓にしている凜にとっては躊躇われるのだった。

しかし、そこに救いの手が差し伸べられる。

それは、凜にも聞き覚えのある声だった。

「おや、遠坂じゃないか。どうしたんだ、こんな時間に？」

凜はその声を聞くと、表情にこそ出しはしなかったが、内心舌打ちをした。

面倒な奴に見つかった。

その人物、弓道部主将、美綴綾子はクツクツと意地の悪い笑みを浮かべていた。

凜と綾子は友人である。友人であるからこそ、綾子は凜の優等生ではない、”素の遠坂凜”を知る数少ない人間だった。

いつもの調子で話して、ボ口を出すわけにはいかない。

凜はなるべく笑顔を装って、綾子へ視線を向けた。

「おはようございます、美綴さん」

綾子は、肩まで伸びた茶髪を揺らしながら、入り口までやってきた。すると、凜と綾子の間を空けるように、集まっていた生徒達が左右へ割れた。まるで、旧約聖書の一場面を彷彿とさせる光景だった。

「ああ、おはよう。で、お前さんがこんな時間に来てるなんて珍しいじゃないか。何かあったのか？」

「いえ。たまたま、いつもより早く起きたので、早めに登校しただけですが」

気軽な口調の綾子に対して、丁寧な口調で返す凜。

これは、半分は本当だった。

今朝は夢見が悪く、通常よりかなり早めの時間に起きてしまった。もう一度寝るにしても微妙な時間であり、目も冴えていた。いつも通りの時間に家を出ても良かったのだが、夢のせいか、あまり家にいたくなかったのだ。

綾子は、そういうことじゃないんだが、と苦笑する。

どうもこの友人は、弱みを他人に見せたがらない。こんなに人が大勢いる所で言う事ではないのだろうが、凜の態度からは、頑なに他者を拒絶する意思が感じられる。

決して、他者そのものを拒絶しているわけではない。ある一線より内側を見せないようにしているのだ。

何故なのかは分からない。だが、それが遠坂凜を遠坂凜たらしめている”何か”であると綾子は感じていた。

出来ることなら教えて欲しいが、それで友人付き合いまで変わるわけではないだろう、と割り切れる辺り、綾子も大物である。

「ま、いいや。そんな所に立ってないで中に入れよ。どうせ、見に来たんだろ？……と、そうだ。遠坂を中に入れてもいいか？」

「え？いや、あのっ」

綾子の言葉に戸惑う凜を余所に、問いかけられた生徒達は、首をブンブンと縦に振って応えた。

それを確認し、満足げに凜を見やる綾子。

自分を見つめる無数の視線の前に、凜も仕方ないとばかりに音を上げた。

凜は、ごめんなさい、失礼しますね、と言い弓道場へと足を踏み入れた。

- 遠坂凜 I N -

私が弓道場に入ると、それまで感じていた無数の視線は次第に減っていき、やがて完全になくなった。恐らく、元々見ていた対象に視線を戻したのだろう。

それを確認してから、横でにやにやと笑みを浮かべている綾子を横目で見やり、他の生徒達には聞こえないように小声で言った。

「……どういつもりですか？」

「何のことだ？」

綾子は、前を向いたまま恍けるような口調で言った。

まったく、この女はそれで誤魔化せると思っているのだろうか。ど

う考えても私に対しての嫌がらせ、楽しんでいるとしか思えない。悪意からの行いではなく、たとえ軽い悪戯心だったとしても、こちらにとっては傍迷惑だ。

そりゃ、あのまま晒し者になるよりはマシだけど、そもその原因を作ったのは綾子だ。綾子が話しかけたりしなければ、他の生徒達に気付かれることもなかっただろう。

とはいえ、それをここで追求しようと綾子は何も言うまい。文句は、後でたっぷり聞かせてやるとしよう。

「まあ、今は、いいです。それより……」

私はもう一度、彼等、弓道場の入り口に屯している生徒達へと目を向ける。

よくもまあ、飽きもせずこうやって集まってくるものだ。先ほどの綾子の言葉や、ローテーション等を見ても分かる通り、これが初めてではないのだろう。下手をすれば、毎日集まっているのかもしれない。

「いつも、こうなのですか？」

「ん？ああ、そうだな。何時からだったかは忘れたけど、決まってアイツが部活に出る日に群がってくる……いや、今はアイツ等、か」

「アイツ等？」

ようは、彼等が集まってくるのは、目当ての、目的の人間がいるから、ということか。

まるでアイドルだ。

まあ、それくらいしか理由が思いつかないのも事実だが。

案外、ファンクラブとかがあるかもしれない。

「そう。あの二人だよ。みんな、あの二人が目当てで来てるんだ」

綾子は、少し呆れた様に、悔しそうに、でもどこか誇らしそうな声で呟いた。

私は、綾子の視線の先を追う。

それほどの人物というなら、私も興味があった。熱狂的なファンを持つ人間とは、いったいどんな人なのだろう、と。

だから私は、何の躊躇もせず件の人物を視界に収め

声を、失った。

「一年のエース、間桐。それと副部長の衛宮……は知ってるか。最初は衛宮目当てだったんだが、間桐の奴が段々と頭角を現し始めて……」

綾子何か言っているが、まったく頭に入っていない。言葉を処理仕切れない。

不意打ちだった。

さくら、サクラ、桜……私の……私の……

「どうした、遠坂？」

「っ！……い、いえ。何でもありません。何でも、ないですから」
綾子は、不審げに私を見つめていたが、それ以上追求してこなかった。

危なかった。どうにか綾子の声に反応できたから良かったが、そうでなければ余計に不審がられていただろう。

変に私と桜の関係を勘繰られるわけにはいかない。

綾子は、いや、誰も私と桜の関係を知らない。知られてはいけない。
あの子が、桜が、私の妹だということ。間桐桜が、十数年前まで遠坂桜だったということは、隠し通さなければならぬ。あの子のためにも。

「……そう、か。ま、せっかくだから、お前もアイツ等の射を見てみるよ。一見の価値はあるぞ」

綾子に言われ、自然と桜に焦点を合わせる私が出た。それまで呆然と視界に収めていた桜を、真直ぐ中央に見据える。

その瞬間、胸が軋んだ。

普段であれば、ここまで動揺することはない。

原因は分かっている。今朝の夢だ。

忘れたことはない。

桜が、間桐の家に引き取られた日のことは。

私と桜が、離れ離れになった、他人になった、あの忌まわしい日の記憶は、脳裏にこびり付いて離れなかった。幼い頃は、何度も夢に見た。

最後に見た遠坂桜の姿は、今でも鮮明に思い出せる。

久々に、何年ぶりかに見たあの夢が、私に桜という存在を異常に意識させてしまっていた。

これは私の失策だ。桜が弓道部に所属していることは知っていたのに。頭の隅には、幼い桜の姿がチラついていたのに、それを失念するなんて。

遠坂の”うっかり”も、何もこんな形で作用しなくてもいいではないか。

お陰で、今すぐにもここから逃げ出したい衝動に駆られる。

でもそれは許されない。

この私が、遠坂凜が間桐桜の前から逃げ出すなんて、あつてはならないのだ。

そんな、雑念と情念が入り混じり濁った私の心を

一本の矢が打ち抜いた。

その矢を放ったのは、他ならぬ、桜だった。

その姿に、私の目は釘付けになった。

余計な雑念が取り払われ、心なし桜の姿が先刻よりも鮮明に見える。最早、動揺はなかった。穏やかな心で、桜を見ることが出来る。

ああ、こんなにも桜は立派になったんだ。

私は、改めてそう感じた。

意外と弓道着姿も様になっているな、と俗的なことを考えている私を余所に、桜は弓に矢を番えた。

私は桜の射どころか、あまりまともに射というものを見たことがない。

前に綾子から、射法八節やら何やらを聞いたような気がするが、当の昔に忘れてしまった。

それ故に、その射が弓道という武道において、どれほどのものなのか分からない。

桜は凜々しい表情で的を見据え、ゆっくりと弦を引き絞る。

すると、途端に弓道場がしんと静まり返り、心地よい緊張が場を満たす。

そして、場の緊張が頂点にまで上り詰めたその刹那、矢が手から離れる。

トンッ

的中。それも的のど真ん中。

私はそれを確認すると、ほっ、と息を吐いた。どうやら、無意識に息を止めていたらしい。

周りを見ると、その反応は私と同じようで、各所から溜息が漏れる。その溜息が、全てを物語っていた。

なるほど、これなら彼らが通い詰めるのも頷ける。

弓道の心得の無い私でさえ、素晴らしいと思うのだから。

「凄いだろ？」

「え、ええ」

いきなり綾子に話しかけられて、少しうろたえてしまった。

それを、あざとくも見ていたのか、綾子はニヤリと口端を上げた。恥ずかしいやら腹立たしいやらで綾子を睨むが、綾子は気にした風でもなく不適に笑った。

「でも、次はもっと凄い。いや、普通じゃない」

「え？」

綾子の言葉の意味は測りかねるが、私は視線を射場へと戻した。

そこにいたのは、桜よりも小柄な私の友人。白髪と紅い瞳が特徴的な美少女。衛宮志保だった。

志保とは綾子経由で知り合ったのだが、それ以前に彼女のことは噂で知っていた。

曰く、人形のように可愛らしい女子がいる、と。

私はあまり興味が沸かず無視していたのだが、実際に会ってみると噂が真実であったのだと思い知らされた。

その時に、あまりの可愛らしさに声を失い、それを志保に心配され、綾子に笑われたのは苦い思い出だ。

そうだったこともあり、志保は綾子と同じく”素の遠坂凜”を知るもう一人の友人だ。

志保の射が凄いというのは、何度も聞いたことがある。最も、私が見てみたい、と言っても志保が恥ずかしいのか何なのか、大したものじゃないからと謙遜して頑なに断り、今まで見る機会が無かった。そういえば、先刻桜と志保がどうか綾子が言っていたが、そういうことか。あの時は混乱していてよく聞き取れなかったが、これはいい機会だ。

「へえ。お手並み拝見といこうじゃない」

「地が出てるぞ、遠坂」

「いいのよ。どうせ、誰も私のことなんか見てやしないわ」

そう。今や、弓道場中の視線が志保に集まっているといっても過言ではなかった。いいや、最初からそうだったのかもしれない。ただ、私が気付かなかっただけで。

何れにせよ、私に注意を払っている者など、綾子の他にはいないだろう。

そんな暢気なことを考えていると、突然

「っ！」

空気が、変わった。

志保は、射場に立ち真直ぐに的を見据えていた。

たった、それだけ。

それだけで、全員が志保に吞まれていた。まるで、異界に迷い込んでしまったかのようだ。それでいて、一切不快感がないのは、気配が清浄に満たされているからか。

怖いくらいの静寂が弓道場を包み込む。

全てが静止した世界で、志保だけが動くことを許されていた。

自然な動作で、弓に矢を番える。

視線が的を捉え、ゆっくりと弦を引き絞る。

弦から手が離れると、矢は微かな風切音と共に飛んでいく。

矢は、吸い込まれるように的の中心に中っていた。

志保は、同じような動作で二本目の矢を番え……

気付くと、いつの間にか二本の矢が的の中心に、当然のように刺さっていた。

志保が構えを解き、目を閉じて息を吐くと、止まっていた世界が動き出した。

「っはあ、はあ………」

私は、慌てたように肺に空気を送り込んだ。長い間、呼吸をしなかったせいで、少し苦しかった。

綾子が、普通じゃない、と評したのも納得だ。アレは、桁が違う。何と言葉で表せばいいのか分からないが、私は圧倒されっぱなしだった。今思うと、まるで最初から矢が中ることが決まっていたかのようにさえ感じた。

志保の射には、魔術師が魔術回路をもって生成する魔力とは違うが、人を惹き付ける”魔”的という意味での魔力があるのかもしれない。先刻の桜にも人を惹き付ける力はあったが、志保のそれには遠く及ばない。

まったく、何てデタラメ。

「何よ、アレ………」

思わず口から出た言葉に、綾子が反応する。

「遠坂もそう思うだろ。アレが衛宮志保だよ。私じゃ、あの境地には辿り着けそうもない」

「あら、綾子にしては弱気な発言ね？」

私は、今までのお返しとばかりに皮肉な笑みを浮かべた。それに対して、綾子は苦虫を噛み潰したような表情で言った。

「・・・何とでも言え。頭では負けないって意地張ってても、心の何処かで負けを認めてしまっているんだ。間桐も、衛宮の域に近づきつつあるが、全日程遠い」

確かにそうだ。

仮に桜の射が完璧だったとして、志保の射はどのようなか。完成系、究極、至高、どれもじっくりこない。極端な話、二人の射は同じ武道なのかどうかさえ疑わしいほどにかけ離れている。それほどの差だ。

「ま、いつか吠え面かせてやるさ。たとえ、万が一でも何でも可能性が無いわけじゃない。一回だけだろうが、勝ち負けは勝ちだ」

そう言っつて、綾子はとても晴れやかな笑みを浮かべた。決して、諦めている者の顔じゃない。

うん。やはり、美綴綾子はそうでなければ。

「・・・って、人がせつかく意気込んでるのにアイツ等は、何いちやいちゃしてんだか」

呆れたような声音の綾子の視線の先には、桜と志保の二人の姿。

いちゃいちゃしているのかは知らないが、志保の隣には満面の笑みの桜がいた。

桜は楽しそうに笑っている。志保に、楽しそうに、嬉しそうに笑いかけている。

それを見ると、ほんの少し、胸がチクリと痛んだ。

あの笑みが私に向けられることはない。

勿論、同じ学校に通っているのだから、いくら気を遣っていても鉢合わせすることはあり、笑みを見せてくれることもある。だが、その笑みは今の桜のそれとは違うのだ。

どこか余所余所しいような、気まずい笑み。

それが当然であることは、重々承知している。仲が良いことも知っていた。それでも、偽り無い笑みに向けられる志保が、羨ましいと感じてしまう。

これが、嫉妬なのだろうか。

志保のことは嫌いではない。むしろ友人として好いている。だから、余計に自分に嫌気が差した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふう」

心を切り替える。

感傷に浸る時間は終わり。女々しく弱い心を胸の奥に押し込める。過去の自分に背を向ける。桜を想う遠坂凜に背を向ける。

常に優雅たれ。

また、優等生の遠坂凜に戻るとしよう。桜にとっての、遠坂先輩にそれが、私なりのけじめだ。

「さて、そろそろいい時間だな・・・」

時計を見て呟くと、綾子は私から離れていった。

恐らく、朝練を終わらせるのだろう。

となると、いつまでも留まっているのはよくない。

色々揺り動かされた後では、余計に顔を合わせ辛い。加えて、綾子

にからかわれる姿が目には浮かぶ。
指示を飛ばす綾子を見ると、こちらを気にしてる様子も無い。
ならば、この機を逃す手は無い。
私は、後ろ髪を引かれつつ、こっそりと弓道場を後にした。

- 遠坂凜 O U T -

凜が弓道場から逃げ出して数分後。
綾子は、思い出したように先刻まで凜がいた場所を見るが、そこに
凜の姿はなかった。

(アイツ、何も言わずに行きやがったな……まあ、何も言
わなかった私のミスか)
待っててくれ、等のように、勝手に帰るなど釘を刺しておけば良か
ったのだが、時既に遅し。
からかってやるつもりだったのに、と無念そうに頭を抱える綾子の
下に、志保と桜が駆け寄ってきた。

「どうした美綴。具合でも悪いのか？」

志保は心配そうな表情を浮かべ、綾子はそれに苦笑で返した。

「いや、獲物を逃がした」

「獲物、ですか？」

綾子の言葉に疑問を浮かべる桜。

「ああ。先刻まで遠坂がいたんだが、逃げられた」

「遠坂先輩が来てたんですか？」

桜は素直に驚き、目を丸くする。

凜に対する想いは複雑なれど、毛嫌いしてるわけではない。

ただ純粹に、自分のいる弓道場へ足を運んだことに驚いていた。

今まで互いに素っ気無い態度を取っていたのに、何かあったのだからか、と。

その隣の志保は、あの遠坂が？と、綾子と同じくこの時間に凜が登校していることに疑問を感じていた。

流石は遠坂凜の友人である。

「お前等のファンの後ろに立っていたから、無理矢理中に入れたんだ。ったく、もっとからかってやるつもりだったのに」

「美綴……………」

私、呆れてます、という表情を一切隠さずに綾子に向けた志保。

綾子は拗ねたように口を尖らせる。が、何かを思いついたのか、次の瞬間には口は弧を描いていた。

「いいじゃないか、アイツをからかういい機会だったんだ……………
……………そういや、遠坂の奴、お前に見惚れていたぞ」

と言い、志保を指差す綾子。

当の志保は、慥然とした表情を浮かべて言った。

「そんなわけないだろう。遠坂は美人なんだから、私なんかに見惚れるわけがない」

そんな、明らかに的外れな志保の発言に、弓道場全体の空気が止まった。

次に聞こえてきたのは、志保以外の全員分の溜息だった。

その反応に、志保もうつろたえるしかない。

「え？な、な、何？」

「先輩は、もう少しご自分という存在を自覚なさった方が良いと思います」

皆の思いを代弁して語った桜に、志保以外の全員が、うんうん、と力強く頷いた。

「な、なんでさ？」

困惑顔で口癖を呟く志保。

その姿に、弓道場に笑いが広がっていった。

何か釈然としない志保だったが、口元には自然と笑みが浮かんでいた。

これは、何気ない日常風景。

しかし、遠坂凜の来訪は、日常が終わりを告げる兆しなのかもしれない。

戦いの足音は、すぐそこまで迫っていた。

NGシーン

「そんなわけないだろう。遠坂は美人なんだから、私なんかに見惚れるわけがない」

そんな、明らかに的外れな志保の発言に、弓道場全体の空気が止まった。

次に聞こえてきたのは、志保以外の全員分の溜息だった。

その反応に、志保もうつろたえるしかない。

「え？な、な、何？」

「先輩は、もう少しご自分という存在を自覚なさった方が良いと思います」

皆の思いを代弁して語った桜に、志保以外の全員が、うんうん、と力強く頷いた。

「そうだぞ。お前は可愛い、美人だし、肌は白いし、何より……」

「・・・」

「な、何を」

綾子は志保の背後へと回りこみ、キラーン、という効果音がつきそうなほどに瞳を光らせる。

「こんなに胸がでかいんだからな。チビで巨乳で美乳って何なんだお前は？」

「ちょ、美綴、やめてっ！、いや、あうん！？・・・助けて、さくらあ」

綾子に胸を揉みしだかれている志保は、息絶え絶えに桜に助けを求め。

だが、助けを請う相手を間違えていた。

「ずるいです美綴先輩！私にもやらせて下さい！！」

「ええっ！？」

「胸はやらん。尻でも揉んどけ」

「むう、仕方ありません。では、失礼して・・・」

「だ、誰か助けてえ〜・・・遠坂ああああ、カムバアアアアアアツク！！！！！！」

その痴態は、見るに見かねて他の女子生徒が止めに入るまで続いた。

その間、男子生徒全員が前屈みになっていたのはいうまでもない。

おわり

第二話 く魔術師達の日常・中編く（後書き）

はい、かなり長くなりました。今回はかなり難産だったのですが、如何でしたでしょうか？

まるまる凜の話ですね。当初は、こんな形になるとは思っても見ませんでした。作者も不思議でなりません。本当は、凜が弓道場に来て、桜の射を見るとかそれくらいしか考えてなかったのに、何故こうなってしまったのか。

当初の予定では、この後、朝HRまで書く予定でしたが、長くなったので切りました。まあ、HRから始まってもいいかなと思ったので。

今回は、今回と違って時の進みは早いです。

さて、いい訳ですが・・・

まず、凜は桜が間桐の呪縛から開放されたことを知りません。つまり、臓硯が死んだことを知らないってことです。遠坂家と間桐家は互いに不可侵を決め込んでいたそうですし、臓硯も滅多に外に出なかつたでしょうから。まあ、凜に気付かれないように処理されたんで、仕方ないかと。桜自身、凜にどんな顔をして会えばいいかわからず、黙っていて欲しいと志保に懇願し、今日に至るって感じです。それでも、納得できない、分からないという方は、感想の方にお願います。出来る限りお答えしますので。それ以外にも不明な点があれば、感想にどうぞ。

え？慎二はどうしたかって？・・・それは、「間桐桜の変貌・中編」をご覧くださいただければ分かります。近日中に公開しますので、暫しお待ちを。

ただし、慎二ファンはこの作品を見ないで下さい。もし見たとしたり、忘れてください。お願いします。

では、また次回。

第二話 〱 魔術師達の日常・後編〱 (前書き)

少し長いです。

時間がいきなり飛びますが、そこは気にせず読んでくださると助かります。

志保は、和やかに挨拶を交わしながら教室を目指す。
だが、教室で栗毛の女生徒から不穏な噂を耳にする。

では、どうぞ。

第二話 く魔術師達の日常・後編く

朝練を終え、制服に着替えた志保は、真直ぐ自分の教室へと向かっていた。

その歩みは、思いのほかゆったりしている。その理由とは

「おはよう、衛宮さん」

「おはよう、衛宮！」

「エミヤン、おっはよう！！」

「衛宮さん、おはようございます」

という擦れ違うほとんどの生徒達からの挨拶だ。

志保は、その一つ一つに、おはよう、と返しながら廊下を進む。

普通に歩いていては、相手に満足に返事をする事が出来ない。そのため、自然とゆったりとした速度で歩くことが習慣となっていた。

声をかけてくる生徒は、ほとんどが女子。それも志保と同じ二年生以上の生徒が主だった。一年生や男子だと、気恥ずかしくて声をかけることが出来ないらしい。

その光景は、どこぞの女学院の”お姉さま”の登校風景を彷彿とさせた。惜しむらくは、志保が若干男性口調なところか。

驚いたことに、これが志保が入学してからの穂群原学園の朝の日常風景なのである。

志保も、最初は戸惑っていたし、当然疑問もあった。何故自分が、と。

暫くして出した結論は、自分の容姿が普通と少し変わっているから

意識しているのだろう、という勘違いも甚だしいものだった。こころまでくると、鈍感では言い表せないものがある。ともあれ。

志保は、これを日常の一部として受け入れていた。

ほどなくして、志保は二年C組の教室に到着した。

「志保さん。おはようー!」

「おはよう………毎朝言うのもなんだけど、さん付けしなくてもいいんだぞ?」

という、毎度お約束の台詞を言う志保。

相手の女子生徒は、志保の苦笑を見て嬉しそうな笑みを浮かべた。

このやり取りは、毎朝恒例このクラスの名物である。

いつから始まったのかは定かではないが、志保が毎度苦笑しながら同じことをいうので、それを面白がったクラスの女子生徒が、入れ替わり立ち代り志保をさん付けで呼んだことが始まりらしい。

クラスの女子生徒曰く、なんかクセになる、志保さん（一部生徒は志保様）の苦笑可愛い、とのこと。

無論、この微笑ましい習慣の裏にも、そこに到る経緯というものがある。つまりは、彼女達がこれほどまでに志保に親しみを覚える切欠になった出来事。

それは、入学してから暫く時が経った頃。志保は、目に見えて気落ちしている時期があった。

クラスの皆が優しくしてくれるのだが、彼等の様子はどこか余所余所しいもので、深く踏み込んでくることもなく、友達らしい友達も出来なかつたのである。

実際は、彼等も何かが普通とは”違う”と感じさせられる志保に対して、どう接したものと攻めあぐねていただけで、それを志保は持ち前の鈍感さで避けられているものと思いついていた、という訳だ。

だがある時、志保がそのことをクラスの女子との会話中につつかり零し、クラスの女子生徒全員に誤解だと必死な形相で詰め寄られたことで、悩んでいた期間の割りに至極あっさりと問題が解決したのである。

この時志保は、良かった、と潤んだ瞳で嬉しそうに微笑んだという。その笑顔はまるで、聖女のような感じと、ある生徒が語っている。何でも、その笑顔で鼻血を噴出して倒れた生徒が数人いたとかいいたか。

このエピソードが、志保の人気に繋がっていることはいうまでもない。ちなみに、志保を名前で呼ぶのは一部の例外を除き、このクラスの女子生徒のみだったりする。

クラスの大半は、志保のことをマスケットのように思い親しげにしているのだが、問題はそれ以上の感情を抱く”女子”がいるらしいということ。今はまだ表立った行動はしていないが、それが桜の耳に入った日はどうなることか。

志保の日常は順風満帆のように見えて、割と地雷がそこかしこに転がっているらしい。

それはさておき。

志保は、他のクラスメイトとも軽く挨拶を交わし、自分の席に着いた。そして自然に、志保の席の周りに数名の女子生徒が集まる。他愛ない女子同士の会話。いつもなら楽しそうに会話に興じる志保だが、今日は違った。

「ねえ、志保さんは知ってる？あの噂！」

「噂って？」

志保は首を傾げる。噂話など、興味も無いから例え聞いていたとしても聞き流して覚えていない。

詳しく聞いてみると、それは可笑しな都市伝説のようなものらしい。例えば、気持ちの悪い得体の知れない怪物、空を翔ける牛車、何所からとも無く聞こえる高笑い、道路を疾走するモンスターバイク、天才的な殺人鬼、長い得物を携えた美青年、等々。

内容は、怪談の様なものから、荒唐無稽な冒険譚じみたものまであり、如何にも作り話という印象を受けた。そういつた都市伝説が、最近流行っているとのことだった。

志保は話を聞きながら、何かその都市伝説に引っかかるものがあると感じていた。妙な違和感といってもいい。

何かとても、嫌な感じだ。大体、怪談や都市伝説ならば季節が違う。今は、夏ではなく冬なのだ。

誰かが意図的に流した噂というならばいい。真意は分からずとも犯人はいる。

けれどももし、犯人がいらないのだとしたら。噂の元になったナニカが、本当にいるのだとしたら。

下手をしたら、聖杯戦争どころではなくなる。噂通りなら、どれも

人智を超えた化け物だ。

「あれ？志保さんどうかしたの？こつこつという駄目だっけ？」

「い、いや。大丈夫何でもない」

「そう？」

栗毛の女子生徒は、心配そうな表情を浮かべるも、志保が笑みを浮かべると安心したように笑みを返した。

いけない。表情に出ていたようだ。まだまだ精進が足りない。そう思いながら、志保は誤魔化すように、他にはどんなものがあるの、と言った。

栗毛の女子生徒は腕を組みながら、うーん、と唸った。

他のはあんまり面白くないからなあ、と呟いている姿は真剣そのもの。

志保はそこまで本気で言ったわけではなかったので、考え込んでいる様子に苦笑した。

「あの、別にない」

ならいいよ、と続けようとしたが、栗毛の女子生徒の言葉に遮られた。

「もし興味があるんなら、もっと話仕入れて来るよ？っていうか自主的に調べる！！良いよね！！！」

何故か爛々と瞳を輝かせる女子生徒に、志保も押されきみだった。

思わず、了承の言葉を口にしていった。

「・・・あ、ああ、うん。じゃあ、お願い」

何にせよ、気になることは事実。少し悪い気もしたが、本人が妙に乗り気なのだし任せようと志保は思っていた。

「よしきた！志保さんの頼みとあらば、たとえ火の中水の中！！」

何が彼女をそこまで駆り立てるのは定かではないが、異様にテンションが高い。普段はここまで振り切れていないので、同じ机を囲んで話を聞いていた他の女生徒も目を丸くしていた。どちらかといえば、大人しめの娘だった筈なのに。

「それじゃ、さっそく行ってきます。楽しみにしててねー！！！」

というと、栗毛の女子生徒は教室を飛び出していった。

「な、何だっただんだ・・・」

（っっていうか、行動早っ！？）

呆然と、栗毛の女子生徒を見送る志保達。

何となく、そのまま話を続けるのは気まずかったため、その場はお開きとなった。

その後、彼女は予鈴が鳴る直前に戻ってきたが、授業間の休みになる度に何処かへ出かけていった。

暫くして、予鈴が鳴る数分前に柳洞一成が教室に入ってきた。この所、生徒会の仕事が詰まっているらしく、朝は生徒会室で仕事をしているのだ。

まあ、本当の理由は志保に対する気持ちを実感してしまったために、志保と顔を会わせ辛いというのが大部分を占めているのだが。そのため、一成は志保が仕事を手伝うと言っても大丈夫だからと断り、志保との会話も以前より減った。

気持ちに気付く前は、生徒会の仕事を手伝ってもらったり、一緒に昼食を取っていたこともあっただけに、一成の異変はその理由も含め、志保以外のクラス全員の知る所となった。

それに対するクラスの対応は、とりあえず見守ること。一成が積極的な行動を起こさない限り、志保が悲しむことが無い限り、手を出さないという事で意見が一致していた。

幸いなのは、志保がその変化に気付いていないことだろう。一成の気持ちが志保に届くことは、決してないのだから。

「あ、おはよう、一成。今朝も生徒会？」

一成に気付いた志保が声をかける。

一成は、高鳴る鼓動を押し殺し、平静を装って答えた。

「ああ、おはよう、衛宮。何、大したことではないさ。もう暫くすれば落ち着くであろう」

「言ってくれば手伝うのに」

「いや、衛宮に手伝ってもらうような内容ではないのでな。必要な時にはこちらから頼る」

「ん、いつでも言ってるね。私と一成の仲なんだから」

「な、ななななな」

そう言っつて、朗らかに微笑む志保の前に、一成は顔を茹蛸のように真っ赤にして仰け反った。

「ん？どうしたんだ、一成？」

「い、いや、何でもない……」

不思議そうに首を傾げる志保。一成は、軽く咳払いをして取り繕うように言った。

それから、一言二言簡単な言葉を交わして、志保は自分の席に戻った。

「………喝！」

志保が自分の席に着いたのを確認した一成は、誰にも聞こえないような小さな声で、自分を戒めるように呟いた。

その一連の様子を、静かに伺い見てた生徒達の思いは一つだった。

不憫な

誰がどう見ても、志保にその気はないのは明らか。そのくせ、志保も思わせぶりな台詞を吐くものだから、始末に終えない。

実らぬ恋というものは、傍から見ても切ないものだ。

一成に憐れみの視線を向けていた生徒達は、心の中で合掌した。

それに、志保に好意をよせる生徒は他にもいる。彼等も同じ穴の貉。明日は我が身、ではないにしても立場は一成と同じようなものだ。その姿を想像して、彼等は人知れず溜息を零すのだった。

それから瞬く間に時は過ぎ、昼休み。

志保の机の周りには数名の生徒が集まっていた。

「やつほー志保さん！都市伝説の新ネタ仕入れてきたから一緒に飯食べよー！！！」

「早いな、おい……………」

という訳で、志保は栗毛の女子生徒を筆頭として、朝に都市伝説の話をしていたメンバーと共に昼食を取ることになった。

「もーもー……………という感じで、あつ、志保さんこれ頂戴！」

「あ、私も！！！」

「いいなー。志保さん、私もいい？」

「……………いいけど、交換だぞ？」

都市伝説もそこそこに、志保の弁当からおかずが消えていく。否、盗られていく。

志保が料理が得意であることは、周知の事実。それ故に、教室で弁

当を食べるといつもこうなる。

志保もそれには慣れたもので、苦笑しながら相手の弁当からおかずを分けてもらう。

相手の女子生徒は、ある者は喜んで、ある者は戦々恐々としながら志保の様子を伺う。

「ん、美味しい。ちょっとかたいかもしれないけど、弁当ならこれくらいで調度いいかな」

「よしー」

志保による品評。

その評価は公平で事実しか言わないため、自分で弁当を作ってくる生徒にとっては良い腕試しとなる。

どうやら、今日の弁当の出来はどれも上々らしい。みんなの顔がほころんでいた。

関係ない話だが、志保の弁当は、クラスの女子生徒がバリケードを作り 困んでいる 男子生徒に奪われないようにしていた。

これは単純に、彼女達の食い意地が原因である。

何せ、男子高校生といたら食欲の権化、とは言わないが食べる量は女子とは違うだろうし、何より志保の料理の腕はクラスに知れ渡っており、病み付きになる程美味しいと評判なのだ。更に志保ならば文句を言いながらも「少しなら」と分けてしまっただろう。となれば、こうして死守しない限り彼女達が分けて貰える可能性が減ってしまう。それ故の措置だった。

あと少数派ではあるが、クラスの中で付き合っている男女がいるらしく、その彼氏に”志保の料理の味を覚えられては大変だ”という理由で必死になっている女子生徒も何名かいるとのこと。

「でさ、次の話なんだけど……」

志保は、栗毛の女子生徒の話を聞きながら思う。

よくあれだけの短時間で、ここまでの話を集めてきたものだ。何所の誰に聞いてきたかは知らないが、話を聞く時間だけを考えても相当時間がかかる。どうやって仕入れてきたのやら。ある意味、彼女の方が都市伝説と言っても過言ではないかもしれない。決して言わないが。

(幹也さん並かも……ジャンルは違うけど)

「志保さん、聞いてる?」

「え?……ああ、うん。聞いてる聞いてる」

身を乗り出し、頬を膨らませて言う栗毛の女子生徒。凄く顔が近い。少し動くだけで唇が触れそうなくらいに。

志保は、若干怯みながらも笑顔で答える。

これは、考えごとをしている暇はなさそうだ。自分が頼んだのだし、誠意をもって聞かねばなるまい。

志保は、近いよ、と言いながら相手の唇に人差指をあて、少し押しした。すると彼女は身を引いて、頬を真っ赤に染めて俯いた。

「ほえっ!? いや、これはその、そんなつもりはなくて! ただ、その、えと、勢いというか、そのつもりが無いわけでは、って違う! だから……あう……」

目を回す彼女に、みんなは生暖かい視線を送り、笑いが広がる。

その中でただ一人、首を傾げる志保は事態を呑み込めないでいたが、何かそれに温かい空気を感じ柔らかい笑みを浮かべた。

その話は、昼休みが終わるまで続けられたという。

それからさらに時は過ぎ、放課後。志保と桜は部活を終え、二人並んで帰宅の戸についていた。

「桜、今日の夕飯、何かリクエストある？」

「……………そうですね、先輩が作るものなら何でも好きですし……………先輩を食べ」

「ていつ」

「あうっ!？」

志保は、桜の後頭部に手刀を見舞った。桜は頭を押さえ涙目だ。今日も今日とて、志保と桜はいつもの如く漫才を繰り広げていた。観客はいないが。

「で、何が食べたい? ……次ふざけたら夕飯ぬきだからね？」

「むう……………じゃあ、シチューなんてどうですか? 材料はあったと思いますけど」

「……………はじめからそう言おうよ」

まともな提案をする桜を横目で見て、志保は呆れたように溜息をついた。

対して桜は、ぐっと拳を握り締めて正面から志保を見つめて言った。ここだけ見ると、告白シーンに見えなくもない。

「嫌です！私、本心から先輩を」

「てりゃ」

「きゃん！」

志保は桜の正面に回り、素早く額に照準を定め、デコピンを放った。手加減されていたにせよ、結構いい音がした。桜は本気で痛そうに額を押さえ、抗議する。

「い、痛いですよ先輩！私、目覚めますよ！？」

「その返しはどつなの！？っていつか、何で私が逆に脅されてるの！？」

桜の意味不明な言動に狼狽する志保。

最近桜が何かに目覚めそうなので、志保は気が気でない。何に目覚めるのかは知らないが、絶対に碌なことにはならないだろう。

桜は、勝ち誇ったように高らかに告げた。

「フッ、勝利！」

「何が！？」

志保の叫びは寒空に消えていく。
だんだん桜が遠くに行ってしまうような気がして、志保は虚しく空を仰いだ。

曇天。

もう、手遅れかもしれない。

志保は乾いた笑みを浮かべ、桜は満面の笑みを浮かべながら家路についた。

「都市伝説、ですか？・・・はい、知ってますけど。それが、どうかしたんですか？」

帰宅し、居間で茶を飲んで一服しながら、志保は桜に最近流行っている都市伝説を知っているかと尋ねた。
桜にも聞いてみたかった。違和感を感じているのが自分だけなのか、知りたかった。

「いや、別に何かあるって訳じゃないんだけど・・・何か、引っかかるんだ。桜は、何か違和感を感じなかった？」

「いえ・・・まあ、怪談や都市伝説の季節じゃないですし、そこは変だとは思いましたけど。それ以外は別に」

「そっか・・・うん。ならいいんだ。ごめんね、桜」

志保は笑みを浮かべ、茶を口に含む。その表情には、まだ憂いが感じられた。

桜は、相談事があったら言ったださいねと言い、志保は、うん、と申し訳なさそうに答えた。

そんな、どこか気まずい空気が流れる居間に、一本の電話の音が鳴り響いた。

「あ、私が」

「いや、私が出るよ」

志保は、桜を制してこれ幸いと席を立った。

妙な空気を一度断ち切るには調度よかった。志保は、タイミングよくかかってきた電話に感謝しつつ、受話器を取った。

電話の相手は、志保の思いも寄らぬ人物だった。

「はい、もしもし……つアル!? ……はい、うん……え? 本当に? ……うん。で、本題は? ……うん。そう。うん、気をつけるよ。ありがとう。そっちも気をつけてね。うん、じゃあ、またね」

志保は受話器を置き、何か思いつめたような表情をしていた。無言で電話を見つめ、微動だにしない。

「先輩?」

桜は、声が聞こえなくなっても中々姿を見せない志保を不審に思い、

こっそり様子を見に来た。志保は、桜が来たことには気付いていないようだった。

思いつめたような表情の志保を見て、桜はたまらず声をかけた。

「先輩！！」

「あ、桜。どうしたの？」

「えと、中々戻ってこないみたいだったので………あの、どなたからですか？」

その桜の問いに、志保は嬉しそうな、でも困ったような、複雑な表情を浮かべた。

「うーん………仲の良い知り合い、かな？大丈夫。私に関して何か言われた訳じゃないから、そんな顔しないで？」

「あ、その、すみません」

優しく笑いかける志保に、桜は少し頬を染めて視線を逸らした。表情に出ていたことが少しだけ恥ずかしかったけど、少し、嬉しかった。

「じゃあ、その、どういった内容だったんですか？」

おずおずと尋ねる桜に、志保は困ったような表情を浮かべた。

「それは………秘密。確定した情報じゃないし、私達に関係するかどうか”まだ”分からないからね。気にする必要はないよ」

笑顔で言う志保に、桜は何か言いたそうにしていたが、諦めたような表情で言った。

「わかりました。でも、何かあったら絶対言ってくださいね？」

「うん、分かってる」

志保も、桜が言いたいことは十分に理解している。だからこそ、桜に感謝し苦笑を零す。

（ありがとう、桜。私は、いい後輩をもったな。時々暴走するのが玉に瑕だけど……）

尤も、志保が本当に知られたくないのは先刻の電話相手の方なのだが、桜がそれを知る由も無い。

志保と桜は顔を見合わせ、ぷつと揃って吹き出した。そして、どちらともなく居間に戻ろうとした時、またもや電話が鳴った。

志保は桜に、視線で私が出ると言って、受話器を取った。

「もしもし……とう……師匠。はい、私も……ええ、はい……はあ!?……お願
い
します」

ガチャ!!!

「ど、どうしたんですか先輩!？」

先に居間に戻っていた桜は、突然響き渡った大きな音に驚き、慌てて駆けつけた。

そこには、静かな怒気を全身に滲ませた志保が立っていた。先刻の音は、志保が受話器を乱暴に叩き付けた音らしい。さしもの桜も、一瞬たじろいだ。これほど怒っている志保は、桜もほとんど見たことは無かった。

志保はゆっくりと桜に向き直り、顔には似合わない底冷えのするような恐ろしい声音で言った。

「……………桜。今夜、サーヴァントを召喚するよ」

かくして、魔術師たちの日常は終わりを告げる。

その夜、衛宮邸に赤い光が灯った。

それは、戦いの狼煙。戦争の始まりは刻々と近づいていた。

NGシーン

「もし興味があるんなら、もっと話仕入れて来るよ?っていうか自主的に調べる!!良いよね!!!」

何故か爛々と瞳を輝かせる女子生徒に、志保も押されぎみだった。思わず、了承の言葉を口にしていった。

「・・・あ、ああ、うん。じゃあ、お願い」

何にせよ、気になることは事実。少し悪い気もしたが、本人が妙に乗り気なのだし任せようと志保は思っていた。

「よしきた!志保さんの頼みとあらば、たとえ火の中水の中草の中森の中、土の中雲の中あの子のスカーの中!!!」

「キヤー!!!」

ノリのいい女子生徒たちが合いの手を入れた。っていうか続きを言った。

「ポケーン!?」

「お、志保さん知ってるんだ」

「そりゃ、耳に残る歌詞だから・・・・・・いや、そうじゃなくて」

「私一作目の映画が一番好きだったな!。何か、一番力が入ってる

って感じで。凄く涙を誘うんだよね」

「ああ、それ私も分かるな。アニメ本編と連動もしてたっけ。力の入れようが違うよな。最初だったからかな？」

「さあ？あ、そつだ。志保さんは、最初に貰う三匹のうちどれが好き？今まで出てるの全部の中で」

「む、そつだな。私は……………」

それから結局話が脱線しまくって、都市伝説の話をおぼれてしまった志保だった。

終わり

第二話 〱魔術師達の日常・後編〱（後書き）

変に大活躍！栗毛の女生徒！！

どこをどう間違ったのか、妙な存在感を持ってしまった名なしのキヤラ。

名前つけたほうがいいですかね？イメージは由紀香の髪をもう少し伸ばした感じ。何となく、「栗原詩乃」という名前が頭に浮かんでます。適当です。

感想の方で名前つけたほうがいい、といわれたら改訂するかもです。さて、本編は動き出しました。

っていつても伏線になってないですよ、これ。丸分かりですし。ちなみに、二回目の電話の相手はお分かりですよ？そのうち、二回目の電話については本編にて詳細を明かします。多分。

さてさて、次回からシリアス？に入り・・・ませんが、聖杯戦争は動き出します。といっても、まだ原作開始時点まで到達して無いですけどね。つまり、凜はまだサーヴァントを召喚してないです。

あと作者は、ポケソンの映画の中では本当に逆襲が一番好きです。では、また次回。

幕間 く娘達の邂逅く（前書き）

幕間なので若干短めです。

寒空の下を、志保は一人歩いていた。

買い物の帰り道、志保は白い少女と出会う。

では、ごうごう。

幕間　く娘達の邂逅く

衛宮邸で、赤い光が観測された翌日。その夕方。

日が沈み、空は雲が覆い辺りが暗闇に包まれる中、点々と続く街灯が道を照らす。

人の気配が全く感じられないその道を、志保は一人坂を歩いていった。

「はあ。まさか、桜があそこまで逆上するとは……………」

そう言う志保の手には、重い物袋が提げられていた。その中には人参や大根などの食材が入っている。

「まあ……………私もあれは流石に予想外だったけど」

十数分前の情景を頭に浮かべ、志保は苦笑した。

事の始まりは十数分前。いつも通りに帰宅した志保と桜。それを出迎えたのは、前日召喚したサーヴァントだった。

その時に何が起こったのか詳しくは語らないが、概要は説明しよう。この日の朝、出かける前に志保は、サーヴァントに留守番を言い渡した。さらに、ただ待っているだけでは暇だろうからと、現代のことを良く知るためにも家の中で自由にしてい、本などを見つければ何でも読んでいいと伝えた。サーヴァントはそれを了承し、志保と桜は学校へ向かった。

その後、サーヴァントは志保の言いつけ通り、家を荒らさない程度に物色し、本を探して読み始めた。ここまでであれば良かったのだろつが、サーヴァントは事もあるつに桜の部屋に入ったのだ。とは

いえ、扉に桜の部屋と分かるプレートはなく鍵もかかっていなかったため、サーヴァントに罪は無いだろう。問題は、サーヴァントが机の上にあった、とあるノートを、「桜の日記」を手に取ったことだった。

サーヴァントはいけないと思いつつも、つつい日記を読み耽り、それを帰宅した桜に見つかった。

その先は、まるで地獄絵図。

桜は錯乱し、サーヴァントは許しを請いながら逃げ惑う。英霊が人間に追い回される様は、どこかシニールで、打ち解けあう切欠になった、と後に志保は語っている。

ここから先は多くは語らない。が、志保が買出しに出かけることになった経緯は説明せねばなるまい。

その際、桜は大暴れし、サーヴァントに美味しい料理を食べさせようと意気込んでいた志保を見事に邪魔して、盛大に食材をぶちまけた。

そこで志保が激昂。武力で桜を制圧し、仲直りを一方的に言いつけ、足りない食材を買出しに行った。

桜にとって幸いだっただのは、志保が桜の日記を見なかったことだろう。見ていれば、処罰はこれだけでは済まなかったに違いない。

「それにしても……少し、寒いかな」

志保は身体を抱きしめて軽く身震いをした。

コートは着ているし、防寒対策を怠っているつもりはない。大体、私はあまり寒いのは好きじゃない、人並み以上に防寒に気をつけている自負がある、と志保は思っていた。

それに、商店街へ行くときも、ここまでの道のりも、これほどの肌寒さを感じることはなかった。

どうしたことだろうか、と志保は思案した。

確かに、急に周囲の気温が下がったように感じる。だが、そんなことはあり得ない。

病気だろうか、とも考えたが熱が出たときの寒気とも違うし、今の自分が風邪をひくなどそれこそあり得ない、と志保は否定した。身体が安定してきたこの数年、志保は病気にかかったことは一度もなく、体調不良になったこともない。

志保が、嫌な感覚に囚われていたその時間はものの数秒程度。

その思考を遮るように、より濃密な冷気が世界を満たした。

『ふふ……』

突如として、響き渡る笑い声。嘲笑でも侮蔑でもなく、ただ無邪気な声。けれど、どこか冷たさを滲ませる、少女の声。

「っ……」

志保は、思わず身を硬直させる。

(あれは……イ、リヤ?)

いつの間にか、坂の上に、誰かが立っていた。

優に二メートルを超えようかという巨軀。精悍な顔つきの浅黒い肌の大男。

見るだけで死を感じさせる、圧倒的なソレは、目を凝らして見ると何所にもいなかった。

かわりにいたのは、小さな白い少女。

紫色のコートを羽織り、ルビーのように赤い輝きを放つ瞳、雪のように白い肌と透き通るような銀髪、幼さいながらも、まるで作られたかのような美しくさと可愛らしさを兼ね備えた容貌をもつ、小柄な少女。

その姿は、どこか志保に似ていた。

二人並べば、きっと姉妹に見えたことだろう。

志保に良く似た白い少女は、無邪気な笑顔で真直ぐ志保を見つめていた。

対して志保は、言葉を紡ぐことが出来ない。

志保は、少女を知っていた。いや、誰なのか一目見て分かったというべきか。

志保と少女は一度も会ったことはない。けど、分かる。

少女の容姿は、以前切嗣が教えてくれたものと同じだった。良く似ていると、切嗣は笑っていた。

言いたいことがあった。会って、伝えたいことがたくさんあった。だけど、少女を前にして、何を言っているのか分からない。いざ前にすると、緊張して頭が真っ白になってしまっていた。

聖杯戦争に参加すれば、必ず少女に会うことは分かっていた。だが、こんなに早く、しかも向こうから来るとは予想だになかった。まだ、心の準備が出来ていないのに。

少女は、薄い笑みを貼り付けたまま、ゆったりと淀みない足取りで、坂を下りてきた。

それを見て、志保は焦る。

何か言わなければ。そんな思いばかりが先行して、言葉が出てこない。

五月蠅いくらいに胸が拍動し、思考を掻き乱す。

(イリヤ、私、私は……)

伝えたい想いがある。遺された言葉がある。

でも、志保は少女に何も言えない。頭のどこかで理解しているから。もし、志保が想いのままに言葉を紡いでも、少女は受け入れてくれない。その後待ち受けているのは、恐らく志保の死だ。先刻幻視したものが、真実どこかにいるのなら、志保では敵わない。少女の一声で、志保はこの世から消えるだろう。

情けなくて、悔しくて、志保は唇を噛み締めた。

そんなことを考えてしまう自分が、逢えて歓喜している自分が、怯んで何も言えない自分が、たまらなく憎い。

そんな志保の狂おしいほどの葛藤を余所に、少女は無慈悲に坂を下りてくる。

志保はそれを為す術なく見つめるしかない。

一歩一歩近づいてくることに、音が消えていく。風の音も少女の足音も、あれほど五月蠅かった鼓動さえも、全てが失われていく。

最早、志保の目には少女しか映っていない。無音の世界に、志保と少女だけが取り残される。

やがて、少女は志保の目前まで迫り、擦れ違いざまに唇を動かした。その少女の言葉だけは、音の無い世界で、はっきりと聞こえた。

「はやく喚ばないと死んじゃうよ。お姉ちゃん」

酷薄な笑みに、親しみと憎しみとが混じり合った不吉な言葉を残し、少女は至極あっさりと志保の横を通り過ぎていった。

「ッ……イ、リヤ……！」

すぐさま志保は振り返り、掠れた声で必死に少女の名前を叫んだときには、既に少女の姿はなかった。

それに、志保は若干の安堵を覚え、同時に酷く後悔した。

やっとめぐり会えた、大切な少女。彼女こそ、志保が聖杯戦争に参加する理由の一つ。

志保は、胸に去来する罪悪感を噛み締め、次こそはと誓う。

今度こそ、想いを伝えよう。真正面から向き合って、思いの丈をぶつけ合おう。

そう己を鼓舞して、志保は少女が消え去った道を見つめる。

「イリヤ……私、貴女のことを」

暫くそうして立ち尽くしていた志保は、唐突に気配を感じ、振り返

る。

「シホ、どうしたのですか？」

「ライダー……ライダーこそどうしたの？こんな所まで」

姿を見せたのは騎兵の英霊。

長く美しい紫色の髪と美の女神に愛されたとしか思えない顔立ち、身長は高く女性らしい豊満な肉体をもち、上下共に黒い服に身を包みちよこんと眼鏡をかけたその女性こそ、昨日衛宮邸で召喚され、桜の日記を盗み見たサーヴァント、ライダーだった。

ライダーは、心配そうな視線を志保に向ける。

「桜が何か嫌な予感がする、というので見に来たのです。乙女の勘とかなんとか。その様子ですと、何かあったようですけど……」

「はは、桜には敵わないな……」

志保はそれを聞いて破顔した。桜がどんな勘を働かせたかはさて置き、それほど愛されているのだと実感できて、嬉しかった。ライダーも本気で心配してくれている。それが分かるから、先刻の自分が情けなくて仕方なかった。

「大丈夫だよ、ライダー。何でもないから、ね？」

志保はなるべく明るい表情を作り、優しく語り掛けるように言った。

「シホがそう言うのでしたら、いいのですが」

ライダーは何処か納得出来ないのか、渋い顔のままだったが、手を引いて先に坂を上っていく志保に苦笑しながらついていった。

「さ、帰ろう、ライダー」

「はい」

そうして、志保とライダーは家路に着いた。

少女達の最初の邂逅は、こうして幕を閉じた。

白い少女の名前は、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

志保とイリヤが再び相見えるのは、これから数日後のことである。

NGシーン

最早、志保の目には少女しか映っていない。無音の世界に、志保と少女だけが取り残される。

やがて、少女は志保の目前まで迫り、擦れ違いざまに唇を動かした。その少女の言葉だけは、音の無い世界で、はっきりと聞こえた。

「はやく喚ばないと死んじゃうよ。おねえ」

「姉さん、会いたかったよ〜」

「え、え、え？何？何なのちょっと？」

志保は突如として、少女、イリヤに抱きつき、大声で泣き始めた。対するイリヤは何がどうしたらいいのか分からず、おろおろしている。

「え？あの、貴女あの、大丈夫？」

「……………うん。っえぐ、姉さん、わたし、わたしい！」

「ああ、泣かないでよ。大丈夫大丈夫だからね」

イリヤは何が大丈夫なのか自分でも分からなかったが、とりあえず自分の胸の中で泣き出した志保を放り出せずに、抱きしめてあやすしかなかった。

暫くして志保が落ち着いてくると、事情を聞きだすためにイリヤが優しく話しかけた。

「ねえ、貴女。名前は？切嗣の娘、なのよね」

「うん。志保。衛宮志保」

「エミヤシホ？変な名前ね」

「違う違う。衛宮が名字・・・あー、ファミリーネームで、志保がファーストネーム」

「そう、シホね。うん、いい名前ね」

「えへへ、ありがとう。姉さん」

「っ！！！！」

イリヤは志保の無邪気な笑顔を見て、胸が鷲掴みされたかのような衝撃を受けた。

（うっわ！何コレ、可愛い！！可愛すぎる！！！！）

「どうしたの？姉さん？」

「ええと、その。うん、大丈夫よ」

「そう？」

「うっ・・・あー、その、姉さんっていうからには、切嗣か

ら聞いているの？私のこと」

「うん。切嗣は・・・」

それからイリヤは様々なことを聞いた。

切嗣がアインツベルンの森に来ていたこと、第四次聖杯戦争の結末、志保の出生、切嗣の最期などなど、その全てがイリヤにとって衝撃的だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「姉さん？」

「ねえ、シホ。私と一緒に来ない？・・・・・・・・最初は、切嗣と貴女を殺すつもりだったけど、もう、そんなこと出来ない。でも、シホが聖杯戦争に参加するっていうなら、殺すしかない。だから！！」

「・・・・・・・・駄目だよ、姉さん。私には・・・・・・・・仲間が、大切な人がいる。だから」

「シホ！！私は、貴女を殺したくないの。分かるでしょう！！！！」

「姉さん。敵だからって、殺す必要はないでしょう？少なくとも、私達が殺しあう必要なんて無い。私だって、姉さんとずっと一緒にいたいから」

「なら・・・」

「うん。姉さんと協力することは出来る。でも、今姉さんのところに行くことは出来ない。色々、説明しないといけないから」

「……………そう。じゃあ、また会いましょう。その時には、私と一緒に来て頂戴ね？約束だよ？」

「うん。約束」

「あ、そうそう。今度からは、姉さん、じゃなくてお姉ちゃんって呼んで欲しいな」

「う、うん。分かったよ……イリヤ。お姉、ちゃん」

「っ！！！！……うん、いい子ねシホ。じゃあ、バイバイ」

（ななななななな、おおおお、お、お姉ちゃんって、シホがお姉ちゃんって！！きゃくく、可愛い。何あれ、お人形なんかより全然すごい可愛い。切嗣もいいもの残してくれたわね。ああ、あの子を殺そうとしてたなんて馬鹿みたい。もう、絶対手放すものですか。アインツベルンの宿願なんてどうでもいいわ。お爺様と敵対したってシホを守ってみせる！！そしてシホを、うふふ、ふふふふふふ……）

そう言つて、イリヤは闇の中へ消えていった。

残された志保は、ライダーが迎えに来るまで頬を赤くして呆つと立ち尽くしていたという。

「あれ？なんだろう……何か寒気が………かし、お姉ちゃんは………恥ずかしいなあ。まあ、姉さん、じゃなかった。お、お姉ちゃんが喜んでくれるならいいんだけど」

つづく！？

幕間 〈娘達の邂逅〉（後書き）

NGシーンはいつも以上に暴走しました。すみません。何故か今回は続きがあるような、ないような。第三話のNGとは別物になるので、あしからず。

さて、今回は幕間ということですが、本当はこれ三話に擦り込む予定だったのです。が、どうも上手くまとまらなかったもので、幕間として独立した話にしようかなー、ってことでこうなりました。

だってコレは欠かせないでしょう、なんとなく。個人的に絶対入れなかったエピソードです。ああ、質問ご感想があればどんどんお寄せください。

尚、今後何度か幕間を入れようかと思えます。一回だけじゃ不自然なんで。

一番近くて、凜の召喚、かな？まあ、他の二次でも散々書かれているので無くてもいいんですけどね。

ともあれ、三話はもうちょっとかかりますが、事態は少し動く、かも。前編の時点ではあまりアクションはないですけど。後編は、まあ、過度な期待をせずにお待ちください。

では、長くなりましたが、これにて。
では、また次回。

第三話 〈現代の赤枝の騎士・前編〉（前書き）

相変わらず内容は薄いです。

冬木に足を踏み入れる封印指定執行者。
彼女は槍の騎士と共に冬木を探索する。

では、ごっご。

第三話 現代の赤枝の騎士・前編

志保とイリヤの邂逅から時は遡る。

彼女達が運命の出会いを果たしたその日、冬木市に足を踏み入れる、ある魔術師の姿があった。

名を、バゼット・フラガ・マクレミッツ。

男物のスーツに身を包み、髪をショートカットにした男装の麗人。

聖杯戦争の為、魔術協会から派遣された、封印指定の執行者である。

バゼットは、深山町と新都を繋ぐ冬木大橋の中ほどを一人歩いていた。

「ふむ、地方都市といっても、存外広いものですね。やはり、一日で全てを把握することは出来ませんか」

溜息を吐き、一人ごちるバゼット。

午前中のうちに冬木市に入り、街の様子を見て回ろうかと思っていたが、少し予定を変えねばならないようだった。

現在の時刻は正午過ぎ。町に入ってから今までずっと町を調査してきたが、中々成果はあがらない。

何故街を調査するのかといえば、街の構造、主要拠点を頭に叩き込むためだ。

理由は言うまでもないと思うが、バゼットは外来の魔術師。冬木の地理に詳しいはずがなく、たとえ地図があるとしても実際に目で見なければ分からないことは多々ある。

無論、地の利だけで勝負が決するわけではないが、例えば逃走時に

おいては街の構造を知っていたほうが有利なのは明らかだ。また相手によつては、地形をうまく活用する者もいる。故に、事前調査は不可欠なのだ。知らなかったから、調べなかったから負けたでは話にならない。

午前に見てきたのは深山町。主に、冬木の管理者である遠坂邸と御三家の一角である間桐家、柳洞寺の三つ。

一先ず重要なポイントを押さえ、その周りから全体を調べようとしたバゼットだが、それは失敗だった。

先刻も言ったが、冬木は意外に広い。いや、どんな地方都市といえど徒歩で走破するのは無謀だろう。出来なくはないだろうが、横断ではなく至る所を確認するため移動距離が尋常ではない。

深山町には住宅街が広がっており、他には学校施設と商店街などがある。

先刻述べた三箇所と、凜が通っている穂群原学園、商店街の他には見るべきものがない。が、だからといって住宅街を全く調べない訳にはいかないとバゼットは思い、ある程度の道筋は確認しようとした。

「それにしても、あそこまで注目を集めるとは………私もまだですな」

バゼットは瞳を閉じ、数十分前の情景を思い浮かべる。

それは、住宅街を調べているときのことだった。

どこからともなく浴びせられる不快な視線。物陰、屋内、至る所から感じるその視線は、不審者に向けられるそれと同じだった。

(まあ、当然といえば当然ですか……)

真昼間の住宅街。そこを堂々とウロウロしていれば、警戒されるの

は当たり前だ。

暗殺者ように、気配を完全に消すなどの技術でもあればよかったのだが、生憎そんな技能は有していない。素人なりに気配を殺すだけなら出来ないではないが、夜間ならばいざ知らず、昼間では限界がある。

通報されては敵わないし、バゼットはそそくさと退散するよりなかった。

こうして、一旦調査を打ち切ることになったのである。

「なに辛気臭い顔してんだ、バゼット？」

突如背後から聞こえてきた声に、バゼットは驚くことなく緩慢な動きで振り返った。

「……無用心過ぎますランサー。誰かに見られたらどうするのですか？」

そう言うバゼットの呆れを含んだ視線の先には、青い装束に身を包んだ長身の男の姿があった。

虚空から滲み出るようにバゼットの背後に現れた彼の正体は、七騎のサーヴァントの一人。槍兵、ランサー。バゼットのサーヴァントである。

ランサーは武器も持たず、ただ野生的な笑みを浮かべて立っているだけだというのに、異様なまでの存在感を放っていた。

それが、ランサーの英霊としての格の高さを物語っていた。並みの英霊であれば、ここまで異質な気を持つに至らないだろう。

惜しむらくは、聖杯戦争の開催の地が日本であったことか。仮に欧州であったなら、ランサーはもっと光り輝いていたであろうに。

「おいおい、心にも無いこと言うなよ。どうせ、誰も見ちゃいねーよ。お前も分かっているだろ?」

「そういうことではないのですが……」

腰に手を当て、問題ないだろう、というランサーにバゼットは嘆息する。

確かにランサーの言う通り、冬木大橋にはバゼットたちの他に人影はなく、何者の気配も感じない。だがだからといって、おいそれとサーヴァントが実体化するべきではない。

キャスターであれば、冬木全体を監視出来たとしても不思議ではない。キャスターでなくとも、バゼット達に気付かれぬように監視することも不可能ではないだろう。

「そういう油断や慢心が敗北を招くのです。無論、どんな敵にも遅れを取るつもりはありませんが、この世界に絶対は無い」

「違いない。が、そう肩肘張ってたって仕方ねえだろ。そんなんじや、疲れるだけだぜ?」

厳しい口調で言うバゼットに、ランサーはあくまで飄々とした態度で返す。

そのランサーの表情には、油断や慢心はなく、確固とした自身が満ち溢れていた。絶対に負けない、必ず生き残ってみせるという強い思いが。問題があるとすれば、その根底にあるのが強者との戦いを欲する剥き出しの闘争本能だということか。

武勇を誇る英傑であれば、多かれ少なかれそういう所があるのかもしれないが。

「まったく、貴方という人は……」

バゼットは、言葉に呆れを滲ませながらもランサーの言を否定することは出来ない。

ランサーの言うことに一理あることは理解している。それが、自分を氣遣って言っているのだということも。

だが、そんなランサーの甘言を素直に受け入れられない自分がいるのだ。

バゼットにとってランサーは、憧れの存在だった。幼い頃から彼の物語を読み耽り、いつしか憧れを抱くようになった。その勇猛さ、その潔さ、何より、その生き様に。

バゼットは、その憧れの存在に、ランサーに認められたかったのだ。一人前の、赤枝の騎士として。

自分が彼のマスターであるという事実にも多少気後れはする。だが、だからこそ毅然とした態度で向かおうと思ったのに、逆に氣遣われでは世話がない。

意地になっていることは自分でも分かっていたが、どうしても感情では納得できなかった。

(足手纏い、とまでは思われてないと思いますが……肩を並べられる相手には程遠いでしょうね)

「よし。そんなに疲れてんなら、何処かで休もうぜ。向こうの街にはそういう店もあるんだろ」

バゼットが黙していると、ランサーは二カツと笑い、バゼットを置いて歩き出した。

「ちょ、ちょっと待ちなさい！私は疲れてなど……大体、

貴方はそんな姿で何所に行くつもりですか!!」

「あ?あー・・・やっぱコレじゃ駄目か。バゼット、まずは服を」

「だから!そういうことじゃありません!!」

荒い息を吐いているバゼットを横目に、ランサーは大袈裟に溜息を吐いて見せた。

「な、なんですか」

「バゼット。いくらお前が疲れてないって言い張ってもな、こっちはそうは見えないんだよ。仮に体力的に大丈夫だとしても、気疲れってものがある。お前はそれだ」

「な、何を根拠にそんな!」

「それ、だ。気い張り詰めすぎなんだよ。何が原因か知らんが、少しは気を抜け」

ランサーに諭され、バゼットはまたも黙り込む。

不満げな瞳をランサーに向けるが、ランサーは意に返さない。

まあ、ある程度原因についても察しはしている。自分を見つめる視線がどういう意味か分からないほどランサーは朴念仁ではない。

「分かったら行くぜ。すまんがバゼット、服の金出してくれ」

どうやら、ランサーの中では服を買いに行くことは決定事項らしい。心なしか楽しそうに見える。

バゼットは、仕方ないとばかりに肩を竦め、渋々了承する。

「ええ、分かりました。休憩を取ることになります。服を買うのは……ま、まあ、吝かではないですが、その必要があるんですか？」

「ん？どういう意味だ？」

意気揚々と歩を進めていたランサーは、振り返り首を傾げる。何か問題があるのか、と視線が語っている。

「ですから、貴方の言い様だと、貴方も私と共に街を見て回るといふ風に聞こえるのですが」

「駄目なのか？」

「駄目なのかって………サーヴァントが現界して堂々と街を歩くなんて前代未聞ですよ」

真顔で言うランサーに、バゼットは呆れ顔。

魔術師であれば、ランサーを見てどんな存在か分かるだろうし、一緒にいるバゼットがマスターであることも露見してしまうだろう。先程も言ったが、何所に監視の目があるか分からないのだ。

まして、敵のマスターに見つかっただらどうするつもりなのか。もしサーヴァントを連れているなら、厄介な事態になりかねない。

そんなバゼットの内心を余所に、ランサーは気にした風でもなく、挑発的な口調で言い放つ。

「いいじゃねえか。下見も大事だろうが、どうせ戦う時は戦うんだ。それとも何か？準備が整ってなけりゃ戦えない性質か？」

「なっ！？そんなことはありません！いついかなる時でも戦えます。何所から敵が襲ってきたとしても返り討ちにして見せましょう！！！」

バゼットは一息のうちに捲くし立てるように言い切った。

元々、街の調査にした所で危険が全くないとは思っていない。敵に見つかる可能性はあるだろうし、そのまま戦闘になることも考えられた。ただ、そういった危険を冒してでも調査する価値はあると思っただけ。見つかる可能性もそこまで高いものではないだろうし、そこから先は運だ。

たとえ見つかったとしても、それはそれでよし。襲ってくるのなら返り討ちにするという心積もりだった。

とはいえ、それでも見つからない方が良いのだが。

「ならいいな。なに、堂々としてりゃいい。お前一人で下見するより、二人の方がデートみたいで余程自然に見えるだろうよ」

「デ、デデデデデデ、デート！！！！？？」

ランサーのからかう様な言葉に、バゼットは頬が上気するのを隠せない。最早、正常な判断を下す思考は、バゼットに残されていないかった。

「なに突っ立ってんだ、バゼット。早く行こうぜ」

放心状態だったバゼットは、ランサーのその言葉で我に返り、先に新都に向かっていているランサーを視界に入れた。

「ま、待ちなさいランサー！！デ、デートって何を考えているんで

すか貴方はあ!？」

バゼットは頬を赤く染めたまま、口元に僅かに笑みを浮かべ駆けていく。

ふと空を見上げれば、雲の切れ間から陽の光が差し込み、細い光の筋が幾条か新都の地表に突き刺さっていた。

これが自然に囲まれた洋館や城であれば映えたかもしれないが、冷たいビル群では幻想的という言葉は程遠い。

それでも、何か特別なモノを感じて、バゼットとランサーは和気藹々と、口論とも思える会話を交わしながら新都へと消えていった。

バゼットが冬木の調査を始めてから二日。少々微笑ましいトラブルはあったが、ようやく大凡の調査は終わった。

現在彼等は、月と星々が瞬く夜空の下、深夜の海浜公園で小休止していた。

暗がりの中で盗人の如く気配を殺し、神経をすり減らして住宅街の調査をしたので、思ったよりも体力を消費していたのだ。

「さて、そろそろ帰りましょうか、ランサー……………」
「……………ランサー？」

バゼットは訝しむようにランサーを見る。

ランサーはバゼットから数メートル離れた場所に膝を着き、地面に手を翳していた。その表情は真剣そのもので、鬼気迫るものさえ感

じた。

「バゼット」

「は、はい！」

突然名を呼ばれ、反射的に返事をするバゼット。

そんなバゼットには目もくれず、ランサーは立ち上がり、前方を厳しい表情で睨んでいた。その口元には、薄く笑みが浮かんでいる。

「今夜は眠れなくなるかもしれないぞ」

「へ！？」

「こりゃ大物だ。逃す手はないよな」

ランサーに言われ、バゼットはその意味を悟る。少し勘違いしそうになったが、文句を言っている場合ではなさそうだ。

「まさか……」

「そのまさかだ。結界が張ってある。恐ろしく高度な奴がな。この向こうに何かがあるとみて間違いない。そいつは」

「マスター、あるいはサーヴァント、ですか。しかし、本当に結界が？私には全く感知できないのですが」

ランサーの言葉を疑う訳ではないが、結界が張ってあるなどとは思えなかった。ランサーに指摘された後でも、そこに結界が、境界があるなどとは認識できない。

「そりゃそうだ。俺だって、たまたま気付いたようなもんだからなで、調べてみれば案の定って訳だ。正確に言えば、結界自体を感知した訳じゃねえ。感じたただけだ」

「何をですか？」

「濃厚な戦の気配、つていやいいのか。とにかく戦場独特の空気がこっちにまで漂ってきてやがった。ま、勘みたいなものだな」

バゼットは顎に手を添え、考えるような素振りを見せる。

「貴方に言葉を信じるなら……結界の中では何者かが戦っている？となれば、サーヴァントが？」

「そいつは分からねえが、誰かが戦ってるのは確かだ。で、どうするマスター」

バゼットは顔を上げ、真直ぐランサーを見つめる。

「……行きますよ。まずは結界の確認、および中にいるモノの確認。マスターとサーヴァントであるなら交戦を許可します。状況次第では即撤退。いいですね？」

「了解だ。マスター」

ランサーは獰猛な笑みを隠さず、その手に紅い魔槍を出現させる。バゼットもグローブを嵌めて戦闘態勢を整え、ランサーの隣に並ぶ。

「行くぜ」

ランサーのからかう様な言葉に、バゼットは頬が上気するのを隠せない。最早、正常な判断を下す思考は、バゼットに残されていないかった。

「なに突っ立ってんだ、バゼット。早く行こうぜ」

放心状態だったバゼットは、ランサーのその言葉で我に返り、先に新都に向かっていているランサーを視界に入れた。

「ま、待ちなさいランサー！！デ、デートって何を考えているんですか貴方はあ！？」

そんな、冬木大橋でラブコメしてる二人を遠い場所から監視する者があった。

柳洞寺のとある一室。

私室として与えられたその部屋で、キャスターは冬木大橋で行われている痴話喧嘩を辟易した様子で見っていた。

「・・・・・・・・何やってるのかしら。この子たち」

傷も癒え、すっかり回復したキャスターは、得意の魔術の用いて冬木市全体を監視していた。奇しくもバゼットの懸念は大当たりだった訳である。もっとも、キャスター自身はこの二人をどうしようとは思っていない。

ただランサーは厄介なので、さっさと他の組と潰しあってくれないかなあ、とは思っているが。

「はあ、もうたくさんだね。私のことも知らずにイチャイチャしちやって」

そう言つて、キャスターはバゼットたちを監視するのをやめた。魔力は拵んだのだ。また見つけるのは容易い。

それよりもキャスターには気になることがあつた。

「やはり昼には見られないようね・・・・・・・・・・・・・・・・・・いったい、何が起きてるの？」

冬木に人知れず、時には人に見せるように現れる謎の影。その正体は、まだ誰も知らない。

終わり

第三話 〱現代の赤枝の騎士・前編〱（後書き）

冬木市と冬木の使い方が滅茶苦茶ですいません。

それはさておき、バゼット登場。正直、バゼットってこんな感じであってるのか全く自信がありません。hollowはやったことあるのですが、大分前なので記憶が不確かです。なんか少女趣味みたいな（確か精神的？）ことがあったようななかったような。それを言えばランサーも自信ないですけどね。

それと、最後の文（NGの前）の意味ですが、そのままです。多くはいいませんが、やっぱりダメツトですしね。

ともあれ、次回はいよいよ戦闘が。戦闘描写は自信がないので出来がアレな感じになりますが、ご了承ください。なるべくマシに見えるように頑張ります。

それと、次回とんでも設定が明らかになる？かどうかは分かりませんが、この作品は設定が滅茶苦茶なのでそこは大目に見てください。お願いします。

さてさて、恐らくこれが年内の最後の投稿になります。

続きは来年。元日に更新出来ればいいですけど、ちょっと無理かも。少し早いですが、よいお年を。

では、また次回。

第三話 〱現代の赤枝の騎士・中編〱（前書き）

すみません。長らくお待たせしました。

前回、戦闘シーンがあると仰いましたが、最後のほうに少しだけです。飽きずに読んでくれると助かります。

ちなみに、今回の話はこれまでの話の中で最長です。

深夜の海浜公園で、青と黒の主従は向かい合う。

青い槍兵と黒き騎兵は互いの獲物を携え激突する。

では、どうぞ。

第三話 〈現代の赤枝の騎士・中編〉

「ん？………ッライダー！！！」

ライダーと切り結んでいた志保は、自らが作り出した結界空間内に侵入者が現れたことを感知し、その動きを止めた。

志保は両手に小太刀を持ち、ライダーは鎖のついた釘状の武器を手にしていた。

「どうしたのですか？シ………なるほど、そういうことですか」

志保に合わせて動きを止めたライダーも、視界の端に侵入者の姿を捉え、志保と共に無粋な侵入者に目を向ける。

「どうしますか？」

「彼等次第、かな？……ま、あの様子じゃ結果は見えてるけどね」

困った様な表情を見せる志保の視線の先には、二つの影があった。紅い槍を携えた青い騎士。男物のスーツを身に纏った女性。

「マスターとサーヴァント………あれはランサーかな？」

「恐らくそうですね。アレの相手は私に」

「うん、お願い。とりあえず様子を見てからだけど、適当に戦ったから引くから無理はしないで」

若干強張った顔で言う志保に、ライダーは柔らかく微笑んで、はい、と言うと志保の斜め前へと庇うように歩み出た。

それを見た志保は苦笑を隠せない。

どうやら、緊張を見抜かれてしまったらしい。

それを少し気恥ずかしくは思うけれど、嫌な気はしない。むしろ嬉しいとさえ思う。

そんな場違いな感想を抱きながら、志保は眼前の敵を見据える。

恐れは無い、と言えば嘘になる。

志保が恐れるのは、何よりも自分の死。

そして、それと同じくらい恐れているのが、大切に思っているヒトの死だ。

敵や自分と関わりのない人間が、どれだけ死のうが構わないという志保だが、その対象が身内となると話は別だ。

ライダーと出会って二日ではあるが、ライダーは線の内側、失いたくない側の存在になっていた。

それこそ聖杯戦争を勝ち残り、役目を終えて消えるのも、許容できないほどに。

無論、それが自分のエゴでしかないことは、志保とて十分に理解している。

それでも、消えて欲しくない、生きて欲しいと思う。

随分身勝手ではあるが、それが志保の願いだっただ。

ただ、それは同時に弱さでもある。

出来ることなら戦わずに済めばいいと、つい都合のいいことを考えってしまう。それがほぼ不可能に近いことを理解しながらも、心の何処かで祈っている。

だがそれは、殺し合いにおいて致命的な隙を、迷いを作る要素になる。それでは本末転倒だ。
ならば、どうするのか。

弱音を吐いた所で、何が出来る訳でもない。何かが、劇的に変わる
ことなどありはしない。

だとすれば、為すべきことは決まっている。

恐れるのではなく、恐れを呑みこんで己の糧とする。
失いたくないから、守る。戦う。

ただ、それだけ。

ひたすらに、信念を貫き通すだけのこと。

酷い矛盾を抱えていても、意思を曲げることなど許されない。

他の何を犠牲にしても、どれだけ歪んでいても、その意思だけは曲
げられない。

必要なのは、結果を掴み取る覚悟。それ以外は、何も要らない。

（何が何でも勝つ……それが、私の抱く歪み^{かくこ}
なんてね）

志保は内心で苦笑しつつ、決意を新たにす。

決して負けない、死なせない。無理だろうが何だろうが、諦めない。
その為なら、どんな手段でも講じよう。

たとえ相手を殺すことになるうが構うものか。守るために殺すのは
間違っている、なんて戯言を吐くつもりはない。容赦なんてしてや
らない。自分達を脅かすのなら、全力をもって排除しよう。

思考を、スイッチを切り替える。

ただの志保から、魔術師へ。

ほんの少し揺らいでしまったが、そんな時間はもう終わり。
答えなど、最初から自分の中にあるのだ。境界の、線の内側の人間
が一人増えただけで、何も変わってなどいない。
己の全てを掛けて守り通すだけだ。

そんな想いを胸に、敵とライダーを前にして、志保は不適な笑みを
浮かべた。

一方のライダーも、志保と同じ様なことを考えていた。
志保は守るべき存在。我が身を犠牲にしても、守って見せると。
違うのは、自身の犠牲を容認していることか。

（まあ、シホは許さないでしょうが・・・）

出逢ってたった二日ではあるが、ライダーは志保の歪みの一部を理
解していた。

それは、志保が自身の過去と思いを教えたからではあるが、話を聞
いただけでも志保の異常性を感じ取るには十分だった。

ライダーが思うに、志保の在り方は常人と同じように見えて、その
実は全く異なる。

死ねない。生きなければならぬ。死なせたくない。生きていて欲
しい。

これらは一見、日常の世界を生きる人間ならば、自殺志願者でもな
い限り持つていて当然の想いだ。

が、良く見てみるとその違いに気付く。

普通は、死ねない、ではなく、死にたくない。生きなければならぬ
い、ではなく、生きたい。

勿論、全ての人間にこれが適用される訳ではないだろうが、大半は当てはまるだろう。

普通の人間は、感じ方はそれぞれ違うにせよ”死”を受け入れている。自分が死ぬということを認めている。

だが、志保は違う。

”生”を義務とし、”死”を拒絶している。

自分は生きねばならず、決して死ぬことは許されない。

それが、志保の根底にある思い。

問題は、そう思い込んでいるのではなく、自身の在り方にまで昇華してしまった事だ。

成ってしまった経緯はどうあれ、こうなってしまうては、もうどうしようもない。

最早、志保の生き方を変えるのは、誰であつても不可能だろう。

そして志保はそういう生き方をしているせいか、人の死、殊更身内の死には敏感になっていた。

自分の身に危険が及んでも省みず、矛盾を抱えてでも、助けようとするほどに。

その原因は、志保の一番身近にいた二人の男の死にあるのだが、それはまた別の話。

ともあれ、そういう訳で志保の生き方は酷く歪だと言えるのである。

ライダーがそれを理解した上で志保を助けたいと思つたのは、過去、ライダーにも死なせてしまった大切な人達がいたからというのが理由の一つ。

それと、もう一つ。

私はライダーにも生きて欲しいんだ、と儂げに笑った志保が、どこか哀しげで独りに見えたから。

それが何故かはライダーにはまだ分からなかったが、その物憂げな表情はライダーの脳裏に深く刻まれた。

何気ない小さな切欠ではあったが、ライダーはその笑顔の中に自分が抱いていたものと同種の、深い哀しみがあるように感じられた。心の奥底で、寂しいと叫んでいるように見えた。

勘違いではないだろう。その姿が、嘗ての自分と重なって見えたのは。

志保を助けたいと思うには、それだけで十分だった。

その時より、ライダーは志保の味方となった。

志保を変えることは出来ないかもしれないが、その哀しみを少しでも和らげることが出来るなら、喜んで力を貸そうと、ライダーは固く心に誓った。

(問題は、私が生き続けなければならぬことですか)

一つ息を吸い、ライダーは眼前の敵を睨む。

容易く勝たせてくれる相手ではないだろう。

彼等だけではない。この先の戦いを考えるなら、肉を切らせて骨を断つ、くらいの覚悟でなければ生き残ることすら難しい。

負けられない、なんて甘い覚悟なんかでは……いや

（その考えこそが”甘い”のですね。シホを助けるといふなら、同じ場所に立つことが大前提。なら……）

ライダーは、心を切り替える。

敗北と死は思考の外へ。勝利と生のみを思考の中心に据える。

自身が犠牲になる可能性を切り捨て、生き残る可能性を模索する。そこに、いかなる矛盾が生じようとも、真直ぐ結果だけを追い求めよう。

どんな状況であっても諦めず、どんな手段を用いても、必ず生き残って見せよう。

志保と共にあると決めたのなら、それくらいは当然だ。

そう思うと、ライダーの心は、ずっと軽くなった。

今の今まで、思考がぐるぐる回っていたのが嘘のように穏やかだ。

ライダーは、薄く口元に笑みを浮かべる。

志保と同じ境地、とは少し違う気もするが、それでも志保に近づけた気がして、心が昂揚してくるのを感じた。

ああ、これなら大丈夫。迷うことなど、もう、何も無い。

己の全てを掛けて、志保を守り通す。ただ、それだけ。

自分よりも後に生まれた小柄な少女に、考え方を変えられるのも悪くない。そんな、もう二度と訪れないであろう不思議な感覚を味わいながら、ライダーは不適に微笑んだ。

偶然か必然か、白と黒の主従は同じ表情で敵を待ち構えていた。

「よう、面白そうなことしてるじゃねえか？」

ランサーは、志保たちから十メートルほど手前で足を止めた。ランサーなら一足で詰められる距離だ。

「第一声がそれ？もう少し違う言葉があるんじゃない？」

志保はランサーを油断なく見据え、挑発的な言葉を口にする。

「そうか？お互い、大体のことは察しがついてると思うがな」

「まあ、ね。でも、確認ぐらいはしておきたいのだけど」

口元に薄く笑みを浮かべる志保を見て、ランサーは獣じみた笑みを濃くする。

「どうやら、この状況で憚然とした態度を崩さない志保を気に入ったらしい。」

「待ちなさい、ランサー。後は私が話します」

「あ？・・・分かったよ」

後ろで成り行きを見ていたバゼットだったが、その表情は厳しく、それを見たランサーは渋々後ろへ下がった。

バゼットは横目でランサーを一瞥すると、つい口から出そうになる溜息を呑み込んで、志保へ視線を向ける。

「すみません。サーヴァントの非礼をお許してください」

「別に構わないのだけど・・・貴女は？」

志保は、堅い態度のバゼットに多少苦笑しながら尋ねる。

「私は、バゼット・フラガ・マクレミッツ。協会から派遣された魔術師です。以前は、封印指定の執行者をしていました」

「・・・・・・え？」

志保は、まさか本当に名乗られるとは思っていなかった為、間拔けな声をあげ目を丸くする。しかも、素性まで明かしてくるとは予想だにできなかった。

事の真偽は後で調べれば分かることではあるが、何の躊躇いもなく言うあたり、自分に余程自信があるのか、あるいは重度の阿呆か。どちらにしても一筋縄ではいかなそうだと思い、志保は内心嘆息を零した。

まあ、志保にはそれ以前の問題として、バゼットの言葉の中の一部に聞き捨てならないものがあつたりしたのだが。

（封印指定執行者？・・・・・・拙いなあ。仕事じゃなければ問題ないだろうけど、協会に報告されるのは避けないと）

「シホ？」

「はっ・・・いや、うん。大丈夫、何でもないよ」

ライダーは、呆然としている志保を不審に思い、心配そうに声を掛ける。

対する志保は、慌てて取り繕う様な態度を取る。

ライダーは、何か言いたげな表情をしていたが、状況が状況だけにそれ以上言葉を重ねることはしなかった。

「……では、貴女の名前をお聞かせ願っても宜しいでしょうか」

バゼットは、志保が再び意識を自分に向けてのを待って、口を開いた。

その視線は、言外に、私が名乗ったのだからお前も名乗れ、と語っていた。

志保としては、それに応じる必要は感じなかったものの、一応答えることにした。

自分の名など調べようと思えば、いくらでも方法はあるだろうし、知られて困ることもほとんどない。

協会には、いずれ別口で名が伝わる。家を襲撃されるにしても、その方がかえって都合がいい。時間は稼げるかも知れないが、それは遅いか早いかの違いでしかない。

最悪、バゼットが危険だと判断すれば、ここで潰せばいいだけのこと。

だとすれば、ここで雰囲気を険悪にするくらいなら、いつそ教えた方が幾分マシだ。

「……衛宮志保。今は、こう名乗っておきましょうか」

悪戯っ子のような笑みと共に紡がれたその言葉に、若干引っかかるものを感じたバゼット。だが、いちいち気にしてもいられない。

まず、訊かねばならないことがある。

「では、ミス・エミヤ。単刀直入に訊きます。この結界を張ったのは貴女ですか？」

「ええ、そうよ」

「何のために？」

「私がサーヴァントとどこまで戦いあえるのか、それを知りたかったからよ。だから、見つからないように結界を張って、彼女に手伝わってもらったの。予行演習って所かな」

「っな!？」

「ほう……」

笑顔で語られた言葉に、二つの声が零れた。

言葉をなくした様な表情のバゼットと、興味深そうな表情のランサーである。

バゼットはランサーを軽く睨むが、当のランサーは何処吹く風。肩を竦めて口を閉ざしている。

仕方なくバゼットは志保へ向き直り、剣呑とした表情で尋ねる。

「正気ですか？一介の魔術師が、英霊に勝負を挑むと？」

「至って正気だよ。これでも私は、多少腕には自信があつてね。どこまでやれるか試してみたかったんだ。無論勝るとまでは思っていないけど、もしある程度通用するなら戦術の幅は広がるし、確認したほうがいいでしょう？」

違うかしら、という表情をバゼットに向ける志保。

バゼット自身、宝具抜きでならサーヴァントとも対等に戦える戦闘能力を有しているからこそ、その言葉には理解できることがある。戦闘者としては、どこまで通用するか興味はあるし、英霊と実際に拳を交えれば、取るべき行動もおのずと見えてくるだろう。

実際、志保が語ったことは9割ほど真実だった。

説明していないのは、何故この場所だったのかということと、もう一つ。どちらにも共通して言えるのは結界が関係していることだが、そこまで教える義理はない。

「それで、成果はあったのですか？」

「さあ、どうだろうね。試してみる？ミス・マクレミッシン」

両者の間に、一触即発の空気が流れる。

バゼットは無表情。志保は口元は弧を描いているが、目は全く笑っていない。

そんな緊迫した空気を破ったのは、後方で紅い槍を肩に預けて佇んでいたランサーだった。

「そろそろ、そんな茶番は止めにしたらどうだ？」

「っ……ランサー？」

戸惑うバゼットを余所に、ランサーはバゼットの前へと歩み出る。

「結界を張ったのがこいつ等、それだけ分かればいい。他にサーヴァントの気配もない。で、マスターとサーヴァント同士が揃ってい

る。となれば、やることは一つだろう?」

獰猛な笑みを浮かべ、槍を構えるランサー。

「シホ、下がってください」

それに即座に反応し、志保を背にして構えるライダー。

「やれやれ、血気盛んとはこのことかな。もし、これが罠だったらどうするつもり?」

呆れた表情を浮かべ、諭すように言う志保。

もしも、志保がアーチャーのサーヴァントなどと協力していた場合、ランサーはかなり不利になる。乱戦に持ち込もうとも、その狙撃能力をもってすれば状況を変えることは容易い。

もっとも、アーチャーのクラスに該当するからといって狙撃が得意とは限らないのだが、可能性があることは変わらない。

しかしランサーは、そんなことは関係ないとばかりに言い放つ。

「罠ごと食い千切るまでだ。第一、こんな場所で、こんな分かりにくい罠を張る意味はないだろ」

自分達の存在に気付いて即興でうち合せをした可能性もあるが、そんな真似をするよりも油断しきつた所を奇襲した方が効果的だ。

ランサーとて英雄。気が逸って冷静な判断が出来なくなることはない。

「そりゃそつだ」

そう言って、志保は情けない表情を浮かべて苦笑する。

やはり、予想通りの展開になりそうだ。戦闘は避けられそうもない。

「ライダー」

「はい。予定通り、ですね」

志保とライダーは、たった一言交わしただけで戦闘準備を終えた。

その一方でバゼットも、もう会話は不可能と感じたのか、諦めたように嘆息してグローブを嵌め直す。

「バゼット!」

「わかっています。ランサーはあのサーヴァントを。ミス・エミヤは私が」

「あの御嬢ちゃんにも興味があつたんだが・・・ま、了解した」

少し不満そうな声音のランサーに、バゼットは淡々とした調子で告げた。

「そんなに戦いたいなら、さっさとあのサーヴァントを倒してしまいなさい」

その方が私も楽だ、と呟き、バゼットの顔は冷酷な戦闘者のそれになる。

「そうならん事を祈る。それじゃつまらんからな。が、戦るからには殺らせてもらおう」

そうして、バゼットとランサーも戦いの準備が整った。

両者睨み合ったまま暫し静寂の時が流れる。

深夜の海浜公園。一切音が無い世界で、最初に動いたのはライダーだった。

「っー!!」

地を蹴り、一直線にランサーに接近する。

続いて、志保とバゼットがサーヴァント達から距離を取った。

英霊同士の戦いを邪魔するつもりはないし、巻き込まれては洒落にならない。

「気をつけて、ライダー」

「頼みましたよ、ランサー」

それぞれの相棒にしか聞こえないように言葉を掛け、魔術師達は共に奔る。

戦闘に巻き込まれる恐れのない位置まで移動した魔術師達は向かい合う。

舞台は整った。ここなら、存分に戦える。互いを睨みつけ、否が応にも緊張が高まっていく。

封印指定級の魔術師と、封印指定執行者の戦いが始まるうとしていた。

今だ動きの見えない魔術師組みと違って、サーヴァント組みの戦いは熾烈を極めていた。

「そらっ！そんなもんかあっ！！」

「クツ！？」

先手を取ったライダーではあったが、既に攻守は逆転していた。

次々に繰り出されるランサーの刺突を、ライダーは紙一重で避け刃で弾く。その手数と速さの前に、防戦を強いられ、とても攻勢に転じることは出来ない。

まして、防いでいるといっても、完全に捌いているわけではない。

「うっ……！！」

また、ライダーの腕を紅い閃光が掠め、絹のように白い肌に紅い筋が刻まれる。

こうして、防ぎきれずに負った傷は数知れない。そのどれもが掠り傷程度とはいえ、無視できるものではない。傷が積もり重なれば、やがて戦闘に支障をきたすことは目に見えており、そうなれば何時致命傷を負ってもおかしくない。

だが、それでもライダーはよく凌いでいるといえるだろう。突きとは、点の攻撃だ。

正確な距離感も掴めず、何時攻撃が届くかさえ判然としない。さらに、ランサーの刺突は正に神速。それを、まるで嵐のような連撃で繰り出してくるといって規格外。

時間差で放たれるその刺突は、点ではなくいつそ面の攻撃ともいえよう。

そんなランサーの猛攻を辛うじてとはいえ、凌いでいるライダーの技量と敏捷性も目を見張るものがある。

あるいは、視覚が封じられているからこそ出来る芸当なのかもしれない。

「ハッ！」

一息に襲い掛かる牙は三つ。

どれも同時に現れたように見え、ライダーは二つの点を躲し一つは頬を掠める。

(・・・っこの、ままでは、ギリ貧ですね。ですが・・・)

ライダーは待っていた。

ランサーが突きではなく、槍を横風に乗るその時を。

ランサーは時折、不意を付くように横風を繰り出すことがある。その速さも莫迦に出来ないものがあり、直撃を貰えば死鎌の如く命を刈り取ることも出来るだろう。

とはいえ、それは人間であればの話。ライダーも含め、大概の英霊ならば致命傷には程遠い。

(まあ、それでも十分に脅威なのですが・・・)

まともに攻撃を受ければ、姿勢を保つことが出来ずに吹き飛ばされるだろう。

だが、それこそが好機。

勿論吹き飛ばされるつもりはない。受ければ吹き飛ばなら躲すしかない。その勢いを利用して、一気にランサーから距離を取る。

ライダーが狙っていたのはそれだった。

横凧というのはモーションが大きく、次の行動に移るまで若干タイムラグがある。英霊を吹き飛ばすほどの威力があるなら尚更だ。

ライダーは最初に横凧を躲した時にそれに気付いたが、実行する前にランサーは突きを放っていた。

そう。若干のタイムラグといっても、ランサーはその時間を限りなく零にしている。

つまり、横凧からの追撃が異常に速いのだ。恐るべき技量、槍兵の名は伊達ではないらしい。

(でも、確かに一瞬の間はある。ならば、やるしかないでしょう)

隙といっても攻撃出来るほどではなく、本当に刹那の間だ。

それでも、その一瞬の間を利用するしかない以上、泣き言は言っていられない。

いったい何合刃を交わしたか、ライダーは分からない。

苛烈な連撃を何とか凌ぎながら、全身の感覚を研ぎ澄まし、その時を待つ。

そしてついに、その時は来た。

「オラアッ!!」

裂帛の気合と共に振るわれる横風。

ライダーは慎重に槍の軌道を読み取り、タイミングを合わせ後ろに大きく跳躍するために力を溜め込む。

だが・・・

(遅、い!?)

横風は、若干勢いが弱く遅い。

おかしいと感じたライダーだが、既に回避行動に移っていたためどうしようもない。

とはいえ、遅いのなら好都合。戸惑いを感じつつも後方へ飛び退る。筈だった。

「なっ!?!」

「せりゃあ!?!」

ランサーは、横風を放った態勢から即座に身体を捻り、片足を持ち上げる。脚が撓り、流れるような動作で鉞のような蹴りが、宙に浮いた状態のライダーを捉えた。

ライダーは咄嗟に腕を交差させ、蹴撃を受け止める。

その一撃で数メートル蹴り飛ばされたものの、後ろに跳躍していたことが功を奏したようだ。

威力が軽減され、ライダーは無事足から着地することに成功した。ライダーは、それからさらに距離を稼ぐため後方へ跳ぶ。

「いい反応するじゃねえか、ライダー」

ライダーがその声の方向に視線を向けると、ランサーが楽しそうに嗤っていた。

ランサーに、追撃を仕掛けようとする素振りは見えない。

どうやら、始めからこうして仕切り直すつもりだったようだ。

(やはり、近接戦では敵うべくもありませんね・・・いえ、それより)

「それほどでもありません。それより、何故私がライダーだと？」

志保は、ランサー達と出くわしてからほとんどライダーとは呼んでいない。二度ほど言ったかもしれないが、どちらもランサーたちには聞こえないような小声だ。読唇術でも使えれば分からないでもないが、槍兵が読唇術を嗜んでいるとは考えにくい。

「なに、簡単なことだ。見てくれはアサシンにも見えるが、アサシンが真っ向から俺の槍を捌けるものか。それに、セイバーやアーチャーの動きとも思えんからな。消去法でいえばライダーしか残っていない」

笑みを崩さぬままで言うランサー。

確かに、通常の聖杯戦争で喚び出されるアサシンであれば、ランサーの猛攻に耐え切るのは難しいだろう。何処かの殺人鬼が言っている通り、暗殺者が真っ正直に戦っては意味がない。彼等は直接的な戦闘能力が三騎士等に及ばないかわりに、気配遮断などの暗殺能力に長けているのだから。

もつとも、どこにでも例外はあるもので、ランサーはこの聖杯戦争中に、そんなイレギュラーと刃を交えることになる。

「なるほど・・・」

そう言いながら、ライダーは考える。
仕切り直すことは出来たが、果たしてこの後どうするか。
真つ向から戦っては勝てないのは既に分かっている。

敏捷性と機動性に自信はあるが、相手はランサー。最速の英霊である。目で確かめた実際のランサーのスピードとから考えると、足で攪乱することは難しい。

せめて、宝具を使えば、まだ正気はあるのだが。

(しかし、あの子は・・・・・・・・・・志保の援護があればあるいは・・・・・・・・)

ライダーの切り札ともいえる宝具は、使用するまである程度の時間を要する。その隙を逃すランサーではない。志保の援護さえあれば、その時間を稼ぐことは可能かもしれないが、志保はランサーのマスターと戦闘中。とても援護を望める状況ではないだろう。

ライダーが必死に思考を巡らせていると、ランサーがそれを遮るように無情な言葉を紡いだ。

「さて、そろそろ考えは纏まったか、ライダー。次は、最初っから全力で行くぞ」

こちらの思考を読まれた、あれでまだ全力ではなかったのか、という思いが脳裏を奔る。

「っ・・・・・・・・」

ライダーは、無言で構える。

その間も、思考を続けているが良い手が浮かばない。
焦りばかりが募り、表情にも焦燥が表れる。

ランサーは身を沈め、突撃するために足に力を込める。笑みはなく、獲物を狩る獣のような冷酷な表情が浮かんでいる。

殺気が充満し、逃げ出したくなるような緊張感が漂う中、二騎の英霊が今正に飛び掛らんと身構える。互いを観察し合い、仕掛ける機を窺う。

そして、緊張が頂点に達したその刹那、同時に地を蹴った。

しかし、両者が再び激突することはなく、その間に飛び込んでくる人影があった。

それは……………

「っ！……………おい、バゼット!？」

「……………これは」

ランサーは驚愕の表情を浮かべ、ライダーもその人影に驚いている。

その人影とは、口端から血を流し、苦痛の表情を浮かべるバゼットだった。

ランサーは、ライダーを警戒しながらバゼットに駆け寄った。

「無事か、バゼット」

「ラ、ンサー……………彼女は……………強い」

苦悶の表情で、切れ切れになりながらもバゼットは言った。

その視線はランサーに向けられておらず、ただ一点を見つめていた。ランサーも、その視線の先へと目を向ける。

ライダーもまた、ある確信を胸に抱きながら、バゼットを吹き飛ばしたであろう人物へ視線を注ぐ。

「……ふう、これなら、何とかなりそう、かな？」

そこには、悠然とした態度で妖しく微笑む、傷一つ無い志保の姿があった。

こうして、英霊達の戦いは中断され、一方の魔術師は地に沈み、一方の魔術師は悠然と佇む。
戦いは、終局へ向けて加速していく。
前哨戦の終わりは、すぐそこまで迫っていた。

NGシーン・・・・・・・・・・ではなく

第一回 偽・タイガー道場

イリヤ：「はい。という訳で、今回から偽・タイガー道場始まるよ。弟子一号こと、イリヤです」

大河：「・・・・・・・・・・師範の藤村大河です、う、うう」

イリヤ：「あら、どうしたのよ大河。そんなに泣いちゃって」

大河：「だって、やっと出番が来たと思って喜んできてみれば、こんな・・・・・・・・・・」

イリヤ：「あゝ、まあ、大河って基本この作品出番ないからねー。これがあるだけ喜んだら？」

大河：「む！そういうイリヤちゃんだって、出番少ないんじゃないの？劇場版みたいに！！」

イリヤ：「やーねー大河。私はちゃんと出番あるわよ」

大河：「え？」

イリヤ：「大体、劇場版は凜ルートの話でしょ？出番少ないのは始めから分かってたしね。他に不満はあるけど、出番に関してはあんなものでしょ」

大河：「イリヤちゃん、出番あるの？」

イリヤ：「ええ。私、割とこの作品では優遇されるみたい。設定上はヒロインよ」

大河：「な、なんですとー！ー！ー！ー！！！！？？？？」

イリヤ：「もう、大河。大きな声出さないでよ」

大河：「志保が主人公でイリヤちゃんがヒロイン……それはつまり、ゆ」

イリヤ：「ああ、GLでも百合でもないわ。あくまで、ヒロインがいるとしたら私ってだけの話よ」

大河：「むぐぐぐ、そうだとっても、何故我々にこれほどの違いが……まさか、作者のヤツ」

イリヤ：「大河、私達の違いは、原作で専用ルートの話があったかどうかの違いでしかないわ」

大河：「……………」

イリヤ：「えーと、大河が予定通り固まっちゃったから、とりあえず何でこの偽・タイガー道場が始まるのかと、名前について説明す

るね」

イリヤ：「何でやるかなんだけど、いい加減NGシーンのネタが被ってきてるし、割と今回みたいに真面目な話だとNGを入れづらいから、諸々の説明もかねてやることにしてみたわい」

イリヤ：「で、名前なんだけど。この作品では、原作みたいにバツトエンドに突入ってまずあり得ないから、主に作品の説明をするこ
とになるので、”偽”をつけたの」

大河：「はっ！・・・私は何をしてたんだっけ？」

イリヤ：「大河。偽・タイガー道場についての説明は終わったから
締めをお願いね」

大河：「え？もう終わり？」

イリヤ：「うん。最初は説明だけよ。大丈夫、これから何度でも出
番はあるんだから・・・多分」

大河：「ん？・・・何か最後気になる言葉があった気がするけど、
何か言った？」

イリヤ：「いいえ、何も言ってないわ」

大河：「そう？・・・まあ、いいでしょう」

大河：「えー、それでは、これから不定期になるとは思いますが、
偽・タイガー道場をよろしくお願いします。どうか！どうか！私
に出番を下さい！！！！」

第三話 〈現代の赤枝の騎士・中編〉（後書き）

えー、まずは、遅ればせながら、あけましておめでとうございます。

いや、今回は難産でした。というか、志保とライダーの心情部分に時間がかかりすぎて……。その辺りの話は次回の偽・タイガー道場にて。言うかなあ？

ともあれ、偽・タイガー道場については何も言いません。イリヤが語った通りです。なので、何かご意見などありましたら遠慮なく仰って下さい。

いや、しかし、戦闘とかいって全然戦闘描写じゃないですね。改めてその難しさを思い知らされました。多分今後も戦闘シーンはこんな感じですよ。あしからず。

次回は、最後の展開から分かる通り、ダメット、フルボッコの巻。どんな感じになるかは次回をお楽しみに。それでは、本年もよろしくお楽しみします。

では、また次回。

第三話 〈現代の赤枝の騎士・後編〉（前書き）

前回の更新から大分期間が空いてしまいました。すみません。今回は今まで以上に滅茶苦茶な設定が明らかになりますので、大らかな目で読んでくださるとありがたいです。

魔術師達の戦闘は、一方的な展開を見せる。前哨戦の行方は如何に？

では、どうぞ。

第三話 現代の赤枝の騎士・後編

槍兵と騎兵による死闘が演じられていたその頃、魔術師達は両者共に相手を睨みつけ、その場に立ち尽くしていた。永遠に沈黙が続くかとも思われたが、不意に志保が動いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何のつもりですか？」

眉根を寄せ訝しげに言うバゼット。
心なしか、視線が先程よりも冷たくなっている。だが、それも無理はない。

志保は、両手に持っていた小太刀を二本とも手放していた。
双刀は音を立てて地を転がり、新たな武器を手にすることもなく、志保は無手のまま微動だにしない。

自分から武器を手放すなど、どんな人間でも目を疑うだろう。誰しもがそこにどんな思惑があるのかと、嫌でも考えさせられてしまう。場面次第では戦闘放棄の意思表示とも取れるが、他にそんな素振りは見えない。

知らず、バゼットの視線の温度は急激に下がっていく。
バゼットの剣呑とした視線を感じた志保は、わざとらしく肩を竦ませ、皮肉めいた笑みを浮かべて告げた。

「別に？貴女程度に武器は必要ないかなって思ったものだから」

その言葉に、バゼットは静かに激昂する。
無表情を装い、奥底から湧き上がってくる怒りを押さえ込む。

初めて会った人間に、あからさまに格下だと言われているのだ。武器なしでも、手を抜いても勝てる。

これで怒らない筈がない。

蛇足になるが、バゼットから見ても志保が思いのほか可愛らしく美人であったことも、それに拍車をかける一因となっていたのはここだけの話。

無論、それが挑発であることぐらいバゼットとて理解していた。だからこそ、怒りを感じながらも思考の一部は氷のように冷えている。

伊達に封印指定執行者を務めていた訳ではないのだ。

とはいえ、言われてばかりというのも癪だ。口で反撃するくらいなら許されるだろうと、バゼットは言葉に感情を表さないよう起伏のない声で告げる。

「……そうですか。ならば、その認識を改めさせてあげましょう。もつとも……」

バゼットは拳を振り上げ、腰を落とし構えを取る。

鋭い視線は志保を射抜き、濃密な殺気が辺りを包む。

「……その時には、貴女は口を利けなくなっているでしょうが」

「それは……楽しみだね」

伶俐なバゼットの眼差しも殺気も何所吹く風。

志保に少しも堪えた様子はなく、相も変わらず口元は弧を描いていた。

「じゃあ、私も・・・」

志保は手を肩の位置まで上げ、握り拳を作りバゼットに向ける。笑みは浮かべつつも、そこに愛らしさは微塵も感じられない。まともな目を合わせようものなら、その得体の知れない紅い瞳の前に震え上がり動けなくなっていただろう。

「先刻の私の言葉が嘘じゃないって、教えてあげるよ」

バゼットと志保の視線がぶつかる。

最早、互いに交わす言葉はない。

また暫く膠着状態になるかと思いきや、睨み合いもそこそこにバゼットが地面を蹴った。

先手必勝。

無闇な突撃は下策だろうが、バゼットに迷いはなかった。

(仕掛けてくる気配は無い・・・受けに回るつもりですか。しかし、どんな策があるかは知りませんが、攻撃は最大の防御。何を考えていようと、打ち砕くのみ!!)

両手両足にルーンによる強化を施し、立ち尽くす志保に向け疾駆する。

志保はまだ動かない。

その様子に若干不気味なものを感じたが、バゼットは関係ないとにかく腕を振りかぶる。

ルーンが付与されたその拳は、バゼットの体術と相まって大砲じみ

た威力を發揮する。

何の防御もせず身体に直撃を喰らえば風穴が開き、顔に直撃すれば相当惨い結果になることは必至。

そんな狂気の砲弾を装填したバゼットと志保の距離は、僅か数メートルまで迫っていた。

一足飛び込むだけで、そこはバゼットの距離。その距離を詰めるだけなら、正しく一瞬で事足りる。

だが・・・

「シッ！」

小さな呼気と共に砲弾を解き放とうとするバゼット。しかし、ついで大砲が放たれることはなかった。

「っ!？」

バゼットの体が、唐突に停止する。

いざ射程距離に入らんとする刹那、バゼットは動力を奪われ地面に足を縫い付けられた。

何が起きたのか、バゼットには分からない。

ただ、停止する間際、ある言葉を耳にした。

不倶

その言葉はまるで世界に浸透するようで、決して大きな声ではなかった筈なのに、バゼットの耳にもはっきりと届いた。

「金剛」

続けて発せられる言葉。

その意味は分からなかったが、バゼットは確信する。その言葉こそが、この現状を作り出しているのだと。これは、彼女の魔術なのだ。

「蛇蝎」

三言目で、バゼットと志保の視線が交錯した。

そして同時に、志保は音も無く動く。

空気のような気軽さで、滑る様に白き闇が獲物へと迫る。立ち尽くすバゼットの正面で、漆黒の外套が翻る。

気配すら感じさせないその姿に、バゼットは咄嗟に反応できなかった。

見えているのに。その姿を確かに視界に捉えているのに、志保が正面にしていることを知覚できない。

例えようの無い寒気が奔る。

ここに来て、バゼットは己の失策を呪った。無闇に突貫するべきではなかった。

衛宮志保は、想像以上の曲者だ。

だが、今更それを理解したところで、時既に遅し。

「あ………つが!？」

志保の拳は、無防備なバゼットの顎を容赦なく打ち抜いていた。

バゼットとて避けようとした。が、体は思うように動かず、背筋を走る雷鳴のような悪寒によって膠着状態から脱した時には、バゼットは宙を舞っていた。

バゼットは碌な受身を取ることが出来ず、派手に背中から地面に落

下する。

(く……今のは、いったい……?)

苦悶の表情を浮かべながら、バゼットはゆっくりと立ち上がった。本来なら、先の一撃によつて気を失つていても不思議ではなつた。志保の身体能力は強化を施した状態であればバゼットにも引けを取らない。

それが立っていられるのは、拳が当たる直前に顔を背け、直撃を防いでいたからだ。

(っ……中々いい拳でしたね。長期戦はもう無理でしょう。しかし、短期決戦にしても、先程のアレを攻略しない限りは……)

バゼットは思考する。

先の一撃が思いのほか効いており、長期戦は不可能。短期戦を仕掛けるにせよ、無策に突っ込めば先の光景の焼き増しになる。

この場を切り抜けるためには、自分から動力を奪つた志保の魔術を看破し打ち破らねばならない。

とはいえ、それは限りなく難しい。バゼットは、先の一連の攻防で何も掴めてはいない。精々、突然体が静止したことくらいしか分かっていなかった。それが何の魔術かなど、想像もつかない。

空間固定の魔術、ではない。間に合わなかったものの、バゼットは静止状態から蘇生している。

動作を阻害する魔術には違いないだろうが、その効果は絶大だ。鈍くなるのではなく、完全に静止したのだから。

第一、バゼットは手加減などしていなかった。全力ではなかったかもしれない。けれど、本気の踏み込み、本気の打ち込みだった筈だ。

並みの魔術師なら反応は出来ても迎撃はままならず、ましてあれだけの魔術となると起動は不可能に近い。それこそ、キャスターのサーヴァントでない限りは。

ならば、考えられるのは自動迎撃の礼装か、あるいは前もってある程度詠唱を完了していたか。後者ならばともかく、前者であれば途端に旗色が悪くなる。

まあ、たとえ後者だとしても、そんな素振りはいま一つ見えなかったので可能性は零に近いが。

自動迎撃となると、その条件が鍵になる。それさえ判明すれば対処のしようもあるが、分からなければ何をしても意味はない。

先刻は、志保に接近すると魔術が発動した。仮に距離によって発動するなら最悪だ。恐らく、礼装の起動範囲はバゼットの射程外。

(起動範囲・・・範囲、境界・・・まさか)

バゼットの脳裏に、ある仮説が浮かぶ。もしその仮説通りなら、いよいよ敗北の色は濃くなってくる。

それに、不可解な点はまだあるのだ。

何故、志保の気配を全く感じないのか。見えているのに、そこに存在するという実感が持てないという異常。

(・・・悔しいですが、一旦退くしかありませんね。
アレを使うにしても、起動するとは思えませんし。ランサーと合流を・・・)

あるいは、敢えて近接戦を棄て中距離戦に徹するという方法もあるが、バゼットの飛び道具といえれば辺りに転がっている石や瓦礫を投擲するくらいしかない。

若しくは切り札を使用するという手もあるが、通常状態で使用すれ

ば、それは銃弾と大差ない。威力こそ段違いだろうが、それ以前に気配が全く感じられない相手に中てる自信などバゼットには無かった。身構えてくれるならともかく、切り札は抜き打ちには向かず使用を気取られる可能性が高い。それに気付きながら黙って突っ立っている馬鹿はいないだろう。その点においては銃の方が優秀だ。まして切り札は銃弾とは違い製造に時間が掛かり、数も少ない。無駄撃ち出来る代物ではないのだ。それでも何もしないよりはマシなのだろうが、そもそもここで無理に打倒する必要もない。敵は倒せる時に倒せばいい。退くことは決して恥ではない。

そこまで考えた所で、バゼットの様子を窺っていた志保が口を開いた。

「驚いた、アレから逃れるなんて。まあ、この程度で終わってもらっちゃ困るけど」

涼しげな瞳をバゼットに向ける志保。

一撃を喰らい大人しくなったバゼットを見て、志保は内心ほくそ笑んでいた。

あの挑発も、多少は効果があったらしい。

と言っても、挑発自体は本来の目的の副産物に過ぎない。より正確に言うと言い訳だ。

志保が小太刀を手放したのには、無論理由がある。

問題は、バゼットが封印指定執行者であるということだった。

つまりは、そこらの魔術師よりも戦闘に特化した能力を有している可能性が高いのだ。戦闘中、下手をして投影品である小太刀が壊されでもしたら厄介だ。

ならばいつそ、小太刀から意識を外させたほうが良い。

その言い訳として、あんな挑発しか思い浮かばなかったのだが、上手い具合に嵌ったようで見事にバゼットは罠に掛かったという訳だ。さらに、志保は既にバゼットの戦闘スタイルをある程度看破していた。

両手足に付与されたルーン、拳闘に似た構え。バゼットが近接戦を得意とする魔術師であることは容易に想像できた。

ルーン魔術は遠距離戦には向かず、解析してみたところバゼットは拳銃等の近代武器を所持していない。

それ以外に隠し種がある可能性は捨てきれないが、近接戦における志保の優位は変わらない。

志保とて、全ての手を曝け出した訳ではない。

(ま、油断は出来ないけど、反撃の暇さえ与えなければ・・・)

そう、バゼットがどんな力を持っていようと、使わせなければいいだけのこと。

ここからは、志保のターンである。

「では改めてまして・・・」

志保は、紅い双眸に光を宿し、厳かな口調で告げた。

「魔術師、荒耶志保

参ります」

言うと同時に、志保は闇に溶けた。

バゼットは志保の言葉の意味を理解する前に、再び地面に叩き伏せられていた。

視界の端に白髪を捉えた時には既に間合いに入られ、拳が顔面を捉えていた。

その間、僅か数秒。一瞬の早業だ。

（　　っ！？）

「おや？」

バゼットが直感的に危険を感じ、体に鞭打って跳ね起きた直後、それまでバゼットがいた地面に志保の拳がめり込んだ。アスファルトが砕け散り、深く抉られている。

（な、なんて馬鹿力！？……あのままだったら終わってましたね）

「まだまだ行くよ？」

「ッチイ！！」

くすくすと笑って、志保は再び闇と一体となる。

バゼットはそれを目で追うが、気配が無いせいか反応が一呼吸遅れる。

完全にバゼットのリズムは崩されていた。

志保が接近すると、再びバゼットの体は動力を失った。静止からの蘇生時間は短くなっているが、それでも致命的な隙だった。

正面から繰り出される拳を防ごうと腕を翳すが、次の瞬間には真横から蹴撃が襲う。

普段だったら引っ掛からないようなフェイントにも翻弄される。加えて言えば、戦っているという実感さえ持てない。まるで独り相撲だ。

バゼットは、志保に良い様に弄ばれている現状に歯噛みした。

(やはり、こちらから飛び込んでもあちらからでも、同じ・・・)

静止の魔術は、バゼットの予想通り距離によって作用するらしい。

これで、バゼットが志保に近接戦で勝てないことが確定的となった。

「ほら、もう一度!!」

「っぐ!!」

よろめいていたバゼットは、志保の声に反射的に横に跳び退る。だがしかし、その直後に体が突然停止する。

(迅い!?)

バゼットの瞳に、拳を振りかぶる志保の姿が映った。

「が、っはあ!?!」

志保の拳はバゼットの鳩尾に吸い込まれ、バゼットは数メートル吹き飛ばされた。

(う、くう・・・手加減されて、これとは)

あまりの苦痛に嗚咽を漏らしながらも、足を震わせながらバゼットは立ち上がった。

最早、意地といってもよかった。

事実、立っているだけで精一杯だったのだから。

「へえ。結構タフだね。まだ立てるんだ」

志保は本気で感心していた。殺さないよう加減はしていたが、倒すつもりで打っていたのだ。

恐らく、小細工無しの殴り合いなら敵わなかっただろう。

そんな志保の内心を知ってか知らずか、バゼットは気丈に振舞う。

苦痛を堪え、表情に出さないよう慥然とした態度で口を開く。

「それほどでも……それより、一つ訊きたいことがあります」

「ん？」

志保は、バゼットの言葉に興味を持ったのか、先を促す。

「その魔術は、結界、ですか……？」

若干の黙考の後、志保は口を開いた。

尋ねてはいるが、バゼットは既に確信を得ていると志保は感じていた。なら、教えても教えなくても同じことだ。

「………うん、正解。貴女の動きを止めたのは、私の静止の結界」

「っ!？」

バゼットは息を呑んだ。

志保が答えると同時に、志保を囲う三つの円形の文様が浮かび上がった。

地面と空間、平面と立体に作用し、獲物を絡め取る蜘蛛の糸。生物であれば、円を象る線に触れた瞬間に動力を止める”三重結界”。

「・・・なるほど。道理で気配を感じないわけだ。まさか、結界を引き連れて移動するとは」

バゼットの声が震える。

結界とは即ち、動かないものを守る、動くことの無い境界である。それを自身を中心にして連れ歩く、という離れ業を志保は行っている。見えているのに気配を感じないのはその為だ。

こと近接戦において、英霊や死徒等の規格外を除けば、荒耶志保は無敵と言える。

「勝てないはずですね。最悪の相性だ」

そう言いながらも、バゼットは諦めていない。

自身の力で打倒することは難しいが、何も倒す必要など無い。ランサーと合流しても不利は変わらないかもしれないが、撤退なら十分可能だろう。

そんなバゼットを嘲笑うかのように、志保は妖しい笑みを浮かべて言った。

「そうね。でも貴女はよく耐えたから、おまけにもう一つ教えましょうか」

「え？」

「さつき、この”結界”を張った理由を言ったけど、アレね、もう一つあるの。それは、この”結界”の試験運用。それを、今から見せてあげる」

バゼットは一瞬何のことか分からなかったが、直ぐに戦闘前に自分が尋ねた内容だと気付く。

試験運用、という不気味な言葉から嫌な予感だけが募り、生き物としての本能が、逃げる逃げると五月蠅く警報を鳴らしている。だが悲しいかな、まだバゼットはダメージが回復しておらず、満足に動くことが出来ない。

「覚悟はいい？」

志保は掌を前に突き出し、喜々とした声を上げる。

バゼットに否やはない。為す術など、残されていなかった。

「
　　肅」

短く呟き、ぐつと掌を握り込む。

すると・・・

「っづ、あ」

バゼットは、突然全身を襲ってきた衝撃に、思わず悲鳴を漏らした。全身を強く打ちのめされて、力なく膝をつく。

目に見えぬ攻撃。

攻撃の正体が何であったのか、バゼットは直感的に悟る。

空間圧縮。

バゼットが立っていた空間を握りつぶすという、非常識な荒業だ。

(馬鹿な。 たった、アレだけの動作で・・・!?)

「もう少し、耐えてね」

今正に、倒れ行こうとするバゼットに、志保は非情な言葉を掛けた。再撃。

「 惨」

眩きと同時に、今度は握っていた手を勢い良く開いた。結果・・・

「つじあ!?!」

バゼットは正面から強い衝撃を受け、後方に大きく吹き飛ばされた。先刻と同系統の攻撃。

違いは、全方位からではなく、一方向から押し出されるような衝撃。現実には在りえないだろうが、壁が突進してきたようなものだった。空間干渉という言葉で説明するなら、空間に押し出された、もしくは弾き出されたという所だろう。

「って、ありゃ?」

意図した訳ではなかったが、バゼットが吹き飛ばされたのは、ランサーとライダーが戦闘している最中、しかもその中間だった。どうやら、バゼットの登場でサーヴァント達の戦闘も中断したらしい。

ランサーがバゼットに駆け寄っている様子を見守っていると、バゼットとランサー、おまけにライダーの視線が志保へ向けられた。

とりあえず、何か言わなければならぬような気がして、志保は妖しい笑みを浮かべて告げた。

「……………ふう、これなら何とかかなりそう、かな？」

志保とランサー達に距離は十メートル程離れていた。

「ライダー」

志保に呼ばれ、ライダーは志保の下へと跳躍した。

「大丈夫……ではないみたいね」

「申し訳ありません。シホは怪我はありませんか？」

「私は大丈夫だよ」

そう言って笑う志保に、ライダーは安堵した。

ライダーの方は傷だらけだったので、志保は心配していたが。

「立てるか、バゼット」

「ええ。何とか……」

バゼットはランサーに支えられ、どうにか立っていられるという有様だった。

そんな状態にも関わらず、二人の志保を睨む視線は鋭く尖っている。戦意は失われていないようだ。

だが、既に戦局は決している。それを認められないほどランサーもバゼットも馬鹿ではない。

バゼットは撤退をランサーに指示し、その機会を窺っていた。

ところが、その機会は思いもよらぬ形で、もたらされることとなる。

「えーと……ミス・マクレミッツ。提案があるのだけれど？」

「………何ですか？」

バゼットは緊張を隠せない面持ちで返す。場合によっては、多少危険を冒してでも強引に離脱する必要がある出てくる。

「この辺で分けにしない？その方がお互いのためだと思っただけど」

「………は？」

予想外の言葉に、バゼットは間の抜けた声を零した。

「どういっつもりだ。お前等の方が有利だろうが」

バゼットの気持ちに代弁し、ランサーは不信感を隠さずに言った。

それも当然。

どちらが有利かと問われれば、それは明らかだ。

バゼットが戦力にならないのだから、ランサー一人で戦わなければ

ならない。ランサーだけであれば生き残ることは可能なだろうが、バゼットを守らねばならない以上、ランサーは思うように動けない。

「いえ、別に。聖杯戦争はまだ始まってもないのだし、ここで貴重な戦力を失うのは勿体ないでしょう?」

ちなみに、何故志保が聖杯戦争が始まっていない、つまり七人が揃っていないことを知っているのかというと、監督役に直接電話をして確かめたからである。志保と監督役、言峰綺礼は知り合い以上友人未満の関係を築いており、その程度の情報の横流しは可能だった。二人の出会いの話はまたの機会に。

「つまり、俺達に他の組を潰させようって腹か。嘗められたもんだな
次はないぞ」

ランサーは凄みを利かせるが、あまり効果は見られない。
志保は、あくまで飄々とした態度で言葉を続ける。

「それは怖いね。まあ、当たらずとも遠からずって所かな。少なくとも、私は嘗めているつもりはないよ」

「何?」

「その槍。危ない気がするんだよね。マスターを倒しても、サーヴアントは直ぐに消える訳じゃない。仇討ちくらいは考えるでしょ?」

「ツチ・・・」

凶星だったようで、ランサーは苦虫を噛み潰したような表情で視線を逸らした。

「で、どうする？ミス・マクレミッツ」

バゼットは一瞬考えるような素振りを見せたが、返せる答えなど決まっている。

そこにどんな思惑があれ、敗者に選択の余地など無い。

「……………その提案、受け入れます」

「そう。良かった。じゃ、先にお暇させてもらおうかな」

その言葉と同時に、周囲を覆っていた結界が消失した。

志保とライダーは踵を返し、あっさりとその場を立ち去った。

次第に背中はずらくなっていき、闇に霞んで見えなくなっていく。が、志保は唐突に振り返り、悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「あ、後ろから刺すとか無しだよ？英霊さん？」

「……………誰がんなことするかよ」

ランサーはさらに機嫌が悪くなり、横目で志保を睨む。

「その言葉、信じるよ」

対する志保は、楽しそうにくすくすと笑い、そう言い残すと今度はそ闇に消えた。

「……………貴方の負けですね」

「……………小娘が」

バゼットが横目で見ると、ランサーは複雑そうな表情を浮かべていた。

「負けて、しまいましたね……」

帰宅途中、ランサーに支えられたバゼットは、ぽつりと呟いた。消えそうな、か細い声だったが、その声はランサーの耳に届いていた。

「なに、次は勝つぞ。必ずな」

「……はい。そうですね」

力強いランサーの言葉に、バゼットに自然に笑みが浮かぶ。温かい気持ちに包まれながら、二人は夜の闇へと溶けていった。

こうして、前哨戦は幕を閉じた。

だが、“現代の赤枝の騎士”は聖杯戦争に参加することなく、冬木から姿を消すことになる。

それを知る者はまだ、誰もいなかった。

第二回 偽・タイガー道場

イリヤ：「は〜い。タイガー道場、はじまるよ〜」

大河：「今回は志保の歪みについてだっけ？」

イリヤ：「そう。衛宮士郎とは違う。衛宮志保の歪み」

イリヤ：「まあ、これについては本編で触れた通りなんだけど、単におさらいすると、シホは”生きる”ことを義務として捉えていて”死ぬ”ことを認めていない。まあ、死ぬことを理解していない訳じゃないんだけどね」

大河：「で、切嗣さんと宗連さん、だっけ？その二人の死の影響で、守りたいと願う大切な人たちのためなら、危険を顧みずに助けようとするようになった、と」

イリヤ：「そう。って言っても、切嗣の影響の方が強いみたいなんだけどね。思想とか。正義の味方を継ごうと考えている訳じゃないけど、救いたいとかね」

大河：「ふーん」

イリヤ：「そもそも根源的な衝動としては、シホの体が士郎の妹さんの体だから、二人分の命を背負っているのだから、粗末にする訳にはいかないっていうのがあるの」

大河：「この体は名も知らぬ（忘れた、失われた）妹のものだから、自分の不注意で死ぬことは出来ない？」

イリヤ：「そういう感じ。まー、だから結局、他人本意と言われればその通りなのかもね。そりゃ、原作のシロウと比べれば、自分の命を中心に据えている分マシなんだろうけど」

イリヤ：「でも、私を含め、シホの周りの人間は気をつけなくちゃ駄目ね。大切に思っている人の自己犠牲は、常人にとっても毒でしょうけど、志保にとっては超猛毒になるんだから」

大河：「あー、三話中編冒頭ら辺のライダーさんみたいなの？」

イリヤ：「そういうことね。ライダーは思い直したからもう大丈夫でしょうけど。これから増えていく子たちには気をつけてもらいたいわね」

大河：「え？もつと増えるの？」

イリヤ：「ええ。ただ、白き剣姫シリーズ（予定）の中で、ね。こ

の本編自体では私を含めて後二、三人くらいかしら」

大河：「シリーズ化するの？ってというか、出来るの？」

イリヤ：「構想自体はあるみたい。でも、安心なさい大河。貴女が主役の物語は今のところ予定は全く無いから」

大河：「その何所を安心しろって言うんじゃーーーーー!?!」

イリヤ：「ともかく!」

大河：「スルー!?!」

イリヤ：「第三回で、白き剣姫シリーズについてのアンケートを募集するかもしれないから、よろしくお願いします」

大河：「まず本編を進めろって感じだけどね。完結するの？」

イリヤ：「さあ？」

大河：「いや、さあって・・・」

イリヤ：「一応、最後まである程度構想は纏まっているみたい。途中の流れは適当に書くとか言ってたけど」

大河：「大丈夫なの？それ」

イリヤ：「こればかりは頑張ってもらっしかないわね」

大河：「むう~~~~~」

イリヤ：「えーと、そろそろ終わりの時間ですが、今回の話では『空の境界、矛盾螺旋』での描写が多様されていますが、その辺はご了承ください」

イリヤ：「あと、ここでぶっちゃけますと、シホが使ってた静止の三重結界は、まんま荒耶宗連の使っていたソレです。ただ、空間圧縮の方は、原理は全くの別物なので、勘違いなならないようお願いします。物語が進んでいけば、そのうち詳しい解説があると思いますので、それまでお待ちください」

大河：「まあ、適当に考えただけらしいけどね」

イリヤ：「思うところがある方は、感想の方で思いのたけをぶつけて下さい」

大河：「あ、私は、出番が」

イリヤ：「殺っちゃえ バーサーカー!!」

大河：「え？ちよ!?マジで!?ギャーーーーー!」

イリヤ：「じゃあ、まったね〜」

つづく

第三話 〈現代の赤枝の騎士・後編〉（後書き）

まず、すみません。

突っ込みどころ満載なのは承知していますが、こういう設定なんです。すみません。

なので、言い訳はしません。思うところがある方は遠慮なく質問、意見など仰って下さい。

あ、結局は言い訳になるのか……。ま、まあ、ともかく、バゼットの活躍はここまでと考えてくださった結構です。ならなんで登場させたって話ですが、まあ、かませ犬ですね。まるつきり。

原作より前から話を始めているので、こういう展開もありかな、とあとは志保の強さを出すために、相性悪いバゼットならちよつど良かったってのもあります。ちなみに、バゼットは宝具自体は持ち歩いてましたけど、今回の戦闘では手にする暇がありませんでした。っていうか、迎撃用の宝具なんで、どの道結界じゃ作動しませんからね。

尚、三重結界での『不倶』、『金剛』、『蛇蝎』ですが、当初はオリジナルの詠唱をと考えていたのですが、思い浮かばずそのまま使いました。今後何か浮かびましたら変更するかもしれません。だいたいいなー。

ああ、ちなみに志保が空間圧縮の次に使った”惨”ですが、アレは本来の用法じゃありません。アレはあくまでも余波です。これだけで本来の効果が分かる人も結構いるでしょうねえ。弱点もあるにはあるんですが。

今回は多分、幕間です。またかよ、というのは無しの方向でお願いします。

では、また次回。

幕間 ～赤の主従～（前書き）

二週間ぶり、ですかね。お待たせしてすみません。

待たせておいてなんですが、今回は彼を出すためだけに書いた話なので内容は今までで一番薄いです。

尚、ネタバレを含みますのでアニメしか見ていない方はご注意を。

さらには意味不明な独自解釈がありますのでご了承ください。

深夜、遠坂邸で執り行われる儀式。

そこで召喚された者とは？

では、どうぞ。

幕間 ～赤の主従～

海浜公園での戦闘から数日後、一月三十一日。
深夜の遠坂邸で、とある儀式が行われようとしていた。

冷たく、静謐な空気が漂う地下室。

薄暗く一切音の無いその空間に、赤い衣服を身に纏った魔術師、遠坂凜が佇んでいた。

凜を中心として特徴的な魔法陣が描かれ、紅い燐光が暗闇を照らす。
詠唱も半ばまで済み、いよいよ佳境。

ここで気を抜く訳にはいかない。決して失敗は許されない儀式なのだ。

凜はさらに精神を研ぎ澄ますため、瞳を閉じる。

「
告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に、

聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら応えよ」

詠唱に呼応するように、地下室内に満ちる魔力の濃度が増していく。
紅い光が荒れ狂い、凜の魔力を根こそぎ奪い取るうとする。

凜の額に汗が滲む。

自身の生命力が、何者かに食い潰されるような感覚。

そんな感覚に苛まれながら、凜は確かな実感を得ていた。

凜が挑むのは英霊召喚の儀式。

いかに聖杯の補助があるとはいえ、人の身で英霊を召喚するという

ならこのくらいの代償は当然だ。
逆に、これ程でなければ不安に思ったことだろう。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者、
汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ」

儀式も大詰め。

閉じていた両目を見開き、慎重に、高らかに、最後の呪文が唱えられる。

「天秤の守り手よ

「！」

詠唱の完了と共に、魔力が膨れ上がり、地下室を照らしていた紅い光が爆ぜた。

……本来なら、この後サーヴァントが現れて儀式は完了、となるのだが、凜の場合は少しばかり違っていた。

数十分後。遠坂邸の居間。

そこには、荒れ散らかった部屋の掃除……いや、修理に勤しむ一人の男の姿があった。

「……やれやれ、何で私がこんなことを」

そう文句を漏らしながらも、淀みない動きで瓦礫を片付けているの

は、弓兵のサーヴァント”アーチャー”である。

褐色の肌に色が抜け落ちたかのような白髪、精悍な顔つきで猛禽類のような鳶色の瞳を持つ彼は、桁外れの魔力を帯びる存在、紛れも無い英霊であった。

このアーチャーを召喚したのが凜であることは明白だが、何故彼がこんなことをしているのかといえば、単に不運であったとしか言いようが無い。色々な意味で、だ。

まずは、どのような経緯を経てアーチャーが片づけをしているのか説明せねばなるまい。

そもそも、アーチャーが召喚されたのは地下室ではなく居間。その荒れ散らかった部屋のソファアに、厚顔不遜な態度で座していた。恐らく、遠坂邸上空に出現し墜落、天井を突き破ったものだと思われる。

そんな経験をしたのは、聖杯戦争史上アーチャーが初めてだろう。

そして、その後駆けつけた凜との口論の末、理不尽にも部屋の片づけを言い渡されることとなった。

アーチャーに非が全くないかと問われれば違つかもしれないが、仮にも英霊に片付けを命じる凜も大概である。

まあ、ある意味、凜に召喚された瞬間から定められた宿命なのかもしれない。

幸運”E”は伊達じゃない。

「しかし……凜、か」

アーチャーはそう呟くと、片付けの手を止め先刻のやり取りを思い出す。

遠坂凜。

その名を聞いた瞬間、様々な出来事、思い出が雷光の速度で脳裏に再生された。

遠坂凜という存在、過去、想い、絶望、後悔、怨嗟、希望、そして

「 私が、衛宮士郎に敗けた、だと？」

脳裏に過ぎるのは、荒れ果てたアインツベルン城での決戦。その結末。

衛宮士郎の剣に貫かれる、自分の姿。

潔くその結果を受け入れられるかは別として、確かに、鮮明な記憶があった。

あの剣の感触を、アーチャーは憶えている。衛宮士郎の理想に敗れた事を、朝焼けの中での凜との誓いを、間違いなく憶えている。

その記憶が、とても偽りだとは、幻想だとは思えなかった。

だが、それは本来なら決して在り得ない事だ。

凜との会話では混乱を表に出さないようにしていたが、改めて考えると然しものアーチャーも頭を抱えなくなった。

何故なら、その記憶はこの第五次聖杯戦争の記憶。この先

未来で起きた事象の記憶だったのだから。

いったい何故、アーチャーが未来の記憶を持っているのか。

仮説ではあるが、アーチャーには心当たりがあった。

（並行世界の私の記憶、なのだろうな。だが、座に戻れば記憶は記録として処理されるだけの筈だ。仮に本体の私が心変わりしていた

なら、こんな疑問を持つ筈が無い。ならば、本体の私はこの記録を閲覧していないということだ。本体のコピー、サーヴァントとして召喚された私がこの記憶を持っているのは不自然………が、まあ、イレギュラーとして考えるなら可能性が無い訳ではないか。犯人の目星もついているしな)

サーヴァントの記憶とは、”英霊の座”に在る”本体”の記憶と聖杯によって与えられる情報で構成される。

ここでいう本体の記憶は、大まかに言えば生前の記憶と記録の閲覧による思考のことだ。極一部の英霊を除き、どんな英霊であってもそれは変わらない。

勿論、守護者であるアーチャーも例外ではない。

抑止の守護者として現世に召喚された場合は、意思など存在せず世界の傀儡となつて害悪を排除する掃除屋として機能し、座に帰還するとその記録だけが残る。

サーヴァントとして意思を許されていても同じことだ。

いくら意思があるといっても、所詮は分身体。仮初の意思、仮初の肉体に過ぎない。

絶対に、記憶が引き継がれることなど無い。本体が、その記録を蓄積し閲覧するだけなのだ。

ちなみに、その未来の記憶だが、恐らくこの世界の未来ではない。記憶の中のアーチャーには未来の第五次聖杯戦争の記憶がなかった為、その時点で並行世界の出来事であると断定できる。

つまりは、本体が記録を閲覧していたなら、アーチャーが未来の記憶を知らないという事は在り得ない。疑問を持つ筈が無い。

要するに、本体はまだ記録を閲覧しておらず、その記憶は無いという事だ。

だが、事実としてアーチャーには記憶がある。
その理由を無理矢理にでも推理しようとすると、かなり強引で乱暴な説が必要になる。

(端的に言えばイレギュラー。失敗、不完全な召喚による何らかの誤動作、といった所か。召喚時、何かの手違いで余分な記録がダウンロードされてしまった、と考えるのが自然だろうな。思い出せる記憶も穴だらけで、全てを憶えている訳ではない。まあ、事故として片付けるのは少し苦しい気もするが………凜だからな。あるいは、”遠坂凜”という名称が引き鉄トシガネになったのも、それに關係しているのかもしれない)

凜が原因と考えるのは早計かもしれないが、遠坂家の”うっかり”の呪いを嘗めてはいけない。アーチャーもそれは重々承知しているため、無茶な仮説でも否定しきれないのだった。

何にせよ、どんな仮説を立てた所で凜に話すことは出来ない。せめて、敵の情報があれば良かったのだが、生憎とそんなものはなかった。あるのは、印象的な場面とその結果に関する僅かな情報のみ。

それ以外は特に問題はないのだから、黙っているほうが得策だろう。不明瞭な情報を与えて余計な混乱を招くよりは余程いい。万が一問題が発生した場合は考慮する必要があるだろうが、今はまだ、自分の胸に閉まっておこうと思うアーチャーだった。

「ふむ。まずはこの部屋の修繕が先か。朝までに終わらせなければ、何を言われるかわかったものではないな」

そう言って、アーチャーは苦笑を零した。

何せ、口論の末とはいえ、貴重な絶対命令権の一つを”絶対服従”

という曖昧な命令で消費してしまったマスターである。

あまり納得はいかなくとも、素直に従っていた方が後のためだろう。

諦めの境地に至ったアーチャーは、それまでの余計な雑念は捨て去り、修繕作業に没頭した。

（どうせなら、荒れる前より清潔感に溢れた空間にしてみせよう）

もしその姿を見た者がいたなら、その瞳はさながら戦場に向かう戦士のような光を宿していた、と語ったことだろう。

ある意味、この荒れ果てた部屋こそが、アーチャーの最初の戦場だった。

翌日。

すっかり元通り、むしろ輝きを増し綺麗になった遠坂邸の居間には、一人紅茶を楽しむアーチャーの姿があった。

勝手に茶器や茶葉を拝借したものの、一仕事を終えたアーチャーならばそれくらいは許されてもいいだろう。

居間を元通りにしたどころか、軽く遠坂邸全体の清掃までこなしてしまっただから。

本人曰く、つい勢いで、だそうである。

「・・・遅いな」

針が一時間進められていた時計を元に戻し、正常な時間を刻む時計を見ながら呟くアーチャー。

既に太陽は中天を過ぎ、現在時刻はおよそ十四時。

幽鬼、凜はアーチャーには目もくれず、差し出されたコップを無造作に受け取り、一気に飲み干した。

「目は覚めたかね？」

「……………んおあ！？あ、ああアアあ、あ、アーチャー！！！！？？？」

「如何にも、私はアーチャーだが。何だ、君はまたセイバーの方が良かったとでもいうのか？」

不満顔で、わざとらしく肩を竦めて見せるアーチャー。

「んなこと言っでんじゃないわよ！！あ、アンタ、どうして！？」

完全に目が覚めた凜は、物言いたげな表情でアーチャーを指差しながら口をパクパクさせている。

急な事態に頭の回転が追いつかないらしい。その顔は、羞恥で真っ赤に染まっていた。

「どうして、か。私は、マスターが寝惚けているようなので眠気覚ましにミルクを薦めただけなのだがね。ああ、勝手に冷蔵庫を漁ったのは謝ろう。家主が起きてこなかったので了解が取れなかったのだ」

「ぐ……」

悔しげに口を歪める凜。

他にいくらでも言いたいことはあるのに言葉に出来ない。

「どうやら、今回の口論の勝者はアーチャーに決まりそうだ。」

「さて、落ち着いた所で朝食……いや昼食は何がいいかね？」

「……………は？」

「材料はそこそこ揃っているが、今から作るとなると軽めのほうがいいか。炒飯でも構わないか？」

「え？いや、アンタ、作れるの？」

「ああ。それなりの腕前だと自負している。まあ、君の舌に合うかどうかは保障できかねるが……………そうだ、君の学校には私から欠席の旨を伝えておいた。何、心配することはない。遠坂家の親戚ということにしておいたからな、安心するとい

「ああ、そう。ありがと……………
・はい!？」

この後、アーチャーVS凜、第三回戦が繰り広げられたことは言うまでもない。

数日後、赤の主従は、青き槍兵と邂逅することになる。
アーチャーとランサー……………それと
残るサーヴァントは、あと、一人。

第三回 偽・タイガー道場

イリヤ：「はい。タイガー道場、はーじーまーるーよー！」

イリヤ：「という訳で、前回告知した通り、アンケートを取りたいと思います」

大河：「あー・・・そんなことも言っただけねー」

イリヤ：「内容は、白き剣姫のシリーズの次回作は何がいいかってことについてです」

？ 幼少期の志保と切嗣、宗蓮との触れ合いを描く、ほのぼのギャグストーリー

？ 宗蓮の死後、ある方に弟子入りした志保の修行時代を描く、若干シリアスストーリー

? はちゃめちゃ設定何でもありの、永遠の四日間

? 魔法少女カレイド ラピス（某起動戦艦は関係ない）アレなステツキ登場の魔女っ娘もの

? ネギま!とのクロス

? その他（具体的な内容を書いてくださると助かります）

イリヤ：「以上の六つの中からお選びください。締め切りは二月いっぱいです」

大河：「まー、多分完結してからの話になるから、だーいぶ先の話になるって話だけどー」

イリヤ：「ここでお知らせです。前書きでも書いてありましたが、今回の話には作者の独自解釈が多分に含まれていますのでご了承下さい」

大河：「記憶云々の話？」

イリヤ：「そう。作者自身よく分からないらしいのよね」

大河：「まー、所詮作者如き小物じゃあねえ……ところ
でイリヤちゃん、いやさ弟子一号。私のこの姿を見て何とも思わん
のかね? んん??」

イリヤ：「何が? 大河が包帯でグルグル巻きなんていつものことじゃない」

幕間 ～赤の主従～（後書き）

はい。もう何もいいません。ただアーチャーを出したかっただけなんです。記憶？何ですかそれは？

実は物語にはあんまり関係してこなかったりする今回の話。

凜がアーチャーを召喚したよーって伝えたかっただけです。アーチャーの記憶に関しては今後の会話などには関係してきますが、物語全体としてみるとあんまり意味はありません。

しかもやたらと内容薄い今回の話ですが、アーチャーと凜の第三回戦やアーチャーの心境などは番外編で書きたいと思います。幕間にそれらを挟じ込んでも、何か違う気がしたので。

そういえば、この話ではアーチャーが上空から墜落しましたが、原作ではどうなんでしょうね？召喚による衝撃で居間があんなに荒れ散らかったのか。私がゲームをクリアしたのは大分前で覚えてなかったもので、私は墜落したことにしました。なので、屋根とか二階の床とかもアーチャーは直している訳ですな。大工さんも真っ青だ。それはさておき、アンケート。

よろしく願います。ちょっとずつでも書き溜めておこうと思いますので。

さてさて、次回は四話。一章は、この第四話をもって終了となります。まあ、二部か三部編成になりますけど。

では、また次回。

第四話 紅き瞳の誤算・前編（前書き）

お待たせしました。またもや、二週間ぶり。

夕方、赤の主従は校舎を駆け回る。

そして、その果てに待つものとは？

では、どうぞ。

第四話　く紅き瞳の誤算・前編く

アーチャーが召喚されてから二日後の二月二日、早朝。

まだ多くの学生が布団に嚙り付いているであろうこの時間、衛宮邸の家主、衛宮志保は朝餉の用意をしている。

それは、毎朝続けてきた日課であり趣味だ。人が減っても、人が増えても、違う場所でも続けてきた、衛宮志保にとっての不変の日常。

そして、今日も今日とて朝餉の用意をするべく台所に立つ志保もまた、そんな変わらぬ日常を迎えられると思っていた。

しかしその日、いつもと変わらない朝を迎えた筈の衛宮邸に、一本の電話が鳴り響いた。

些細な変化、些細な出来事。けれどそれは、確実に衛宮邸の日常を脅かすものだった。

「もしもし・・・あ、お早うございます。はい、はい・・・え？・・・あの、もう一度・・・あー・・・」

桜はまだ来ておらず、志保が料理の手を止め電話に出たのだが、その声は心なしか重い。

別に相手が気に入らないとか、料理の邪魔をされたからという訳ではないが、話が進んでいくにつれて志保の声に力がなくなっていく。その目は若干虚ろで、もし桜が見たならば、邪な思考は吹き飛び心配と不安で軽い錯乱状態に陥ったかもしれない。

「はい・・・あ、いえ。幹也さんのせいじゃないですから。

はい。ああ、ただ・・・師匠、いえ、橙子さんに、くれぐれ

もヨロシクお伝えください。はい、はい、では……」

静かに受話器を置き、志保は思わず溜息を吐いた。

とある知り合いからの電話だったのだが、内容はあまり喜ばしいものではなかった。

「……………はあ。まあ、無理だろうとは思ってたけどね……………不安は残るけどやるしかないか。昨日、遠坂が休んでいたみたいだし……………いよいよ、かな」

それは志保にとって最悪の報せではあったものの、だからといって嘆いてばかりはいられない。

凜が昨日、二月一日に欠席したことは綾子から聞いて知っていた。体調不良ということらしいが、恐らく嘘だろうと志保は思っていた。その可能性が全く無い訳ではないが、考え得る可能性はもう一つあるのだ。

（夜中にサーヴァントを召喚して、その疲れで寝坊……………で、遅刻するくらいなら、いつそ欠席したほうがマシって考えるだろうね、凜なら。っていうか、まだ召喚してなかったってことの方が驚きだけど）

そもそも、凜が聖杯戦争に参加しないという考えは志保の頭には無い。

凜が魔術師であることは知っていたし、何より凜は遠坂家の当主だ。冬木の聖杯戦争を作った御三家の一つ、遠坂家。その人間が聖杯戦争に参加しない筈がなく、聖杯も参加者の選定は御三家を優先する。これに関係ないと考える方が難しいだろう。

勿論、凜がサーヴァントを召喚したという確証はない。いわば、単

なる志保の直感である。

だが、志保は一昨日凜と極普通に会話しており、その時点においては至って健康そのもので、具合が悪そうには見えなかった。むしろ、何かやる気が漲っている様子で、どこか張り詰めた雰囲気さえ感じられた。

それらを考えれば、どちらがより信憑性があるかは一目瞭然である。

まあ、一昨日までサーヴァントを召喚していなかったとすると、本当に聖杯戦争に参加する気があるのかと疑いたくはなるが。

それはともかく、その推測を前提として考えるなら、また一つ席が埋まったということになる。

聖杯戦争の開幕まで、もう幾何も無い。

「残るは一人、か。だっていうのに……先が思いやられるなあ」

志保はもう一度大きな溜息を吐くと、料理を再開するために台所に戻った。

そう、気落ちしたままで。

結果、中々料理に身が入らず、普段より料理の質が落ちた事は必定であったかもしれない。

それから瞬く間に時は過ぎ、舞台は移る。

穂群原学園、昼休み。

「・・・・・・・・・・はあ」

志保は、授業が終わっても動く気配を見せず、自分の席で頬杖をつきながら小さく溜息を吐いた。

今朝から何度目の溜息か。あまり溜息ばかり吐くのも良くないのは分かっているが、それでも自然と出てしまつたのだつた。

尤も、今朝の電話については既に割り切っているので、今の溜息の原因はソレではない。

原因は、今朝作つた弁当と目の前の光景。

いつもの様に、昼食を共にしようと集まつてきた女性徒達。それを志保は若干憂鬱な心地で見やり、次に普段より数段質の落ちた弁当へと視線を落とす。

(あー・・・・・・・・・・どうしようかなあ・・・・・・・・・・ありのままを言えばいいかな。ああ、でもそれだと心配させちゃうかもしれないし・・・・・・・・・・うん・・・・・・・・・・)

悩み自体はさして重大な事柄ではない。ただ、正直に良くない事があつたと二年C組の女子達に告げた時の反応が、何より怖かつた。それで彼女達が事の元凶に辿り着くとは思えないが、用心するに越したことはない。

何せ彼女達は、志保に関する事となると何を仕出かすか分からない。以前、とある男子が志保に無理矢理に交際を迫つた際、彼女達が彼にしたことを思うと背筋が寒くなる。

どんなことをしたかは想像に任せるが　　というか喋るのも躊躇われる　　彼は一切口を噤み半年ほど登校拒否になつたことを記しておく。

一応、彼女達の為にさわりの部分だけ説明しよう。

まず、彼女達は彼に対して肉体的な危害は一切加えていない。あくまでも穏便な手段で済ませた、というのは彼女達の談。

件の彼は女子に人気のある美形だったのだが、裏では色々と後ろめたいこともしていた。ここまで言えば察してくれるとは思うが、そういうった彼の悪事が明るみになったことで彼女達は口実と切り札を得たのだった。そもそも、彼の自業自得という一面があったことを理解して欲しい。ある意味、志保に手を出そうとしたのが彼の運の尽きだった。

最早、時折見せる彼女達の行動は桜の域に達しつつあるのかも知れない。ベクトルは違うけれど。

ともあれ。

志保が眉を顰めて言い訳を考えていると、それに気付いたのか、栗毛の女生徒が志保の顔を心配そうに覗き込んでいた。

志保が慌てて笑顔を作ると、栗毛の女生徒は顔を真っ赤に染めて俯いてしまった。

(え？あれ？何故に赤くなる！？・・・私、何か対応間違った？)

予想外の反応に戸惑い、志保は笑顔を引き攣らせる。幸いだったのは、頬を赤くした栗毛の女生徒がその時の志保の顔を見ていなかったことか。

とはいえ、志保がその理由を　　自分の笑顔を見て頬を赤らめている　　理解していない以上は為す術がない。

どうしようかと引き攣った笑顔のまま逡巡していると、唐突に思い

もよらない所から助け舟が出された。

「志保さん。お客さんが来てるよ！」

「え？」

志保は、その背後から掛けられた言葉に疑問を感じつつも感謝した。これで、一時的にせよこの空間から開放されると。

だが、安堵したのも束の間、志保は更なる疑念に晒されることとなる。

「……………遠坂？」

振り返り、志保の視線の先に居たのは、穂群原学園のアイドルの片割れ、冬木セカンドオーナーの管理人、遠坂凜だった。

「ここで、いいかしら？」

「うん。構わないよ、少し寒いけど」

そう言って、志保は苦笑しながら後ろ手に扉を閉めた。場所は、肌寒い空気が身を震わす屋上。

凜は志保に話があるとのことで、人が少ないと思われる屋上へと来ていた。

志保は辺りを見渡して、他に人が居ないかを確認する。流石にこの季節に屋上で食事をしようという酔狂な人間は居なかったようで、人の気配は全く無い。少なくとも、扉の外は。

「フェンスの方に行こう。何の話か知らないけど、扉の近くじゃ、ね？」

「……………ああ、そうですね。そうしましょうか」

扉の内側では、野次馬根性を剥き出しにした生徒達が耳を敬てている。彼等は息を潜めているつもりなのかもしれないが、所詮は素人胸中に秘めた欲望が駄々漏れで、逆に存在感を増す結果になっていた。

無論、それに志保と凜が気付かない筈はなく、揃って呆れた表情を作るのだった。

扉から離れた志保と凜は、フェンスに背を預け腰を下ろした。

「何ていうか、あの活力をもっと有意義に使えないものかしらね？」

「まあ、そう言わずに。気持ちは分かるけどさ」

尤もな凜の言葉に苦笑を零しながら、志保は弁当を広げた。同じように凜も弁当を広げ、志保と二人、何気ない友人同士の会話を交わす。

「はあ？ ……嘘でしょ。この出来で失敗したっていつのか、アンタは？」

凜は志保の弁当のおかずを口に運び、眉を顰める。

勿論、不味い訳ではない。むしろ美味しい。だというのに、作った本人が失敗したとぬかすのだ。

それでは一口食べた瞬間に、負けた、と思った自分は何なのだと、凜は肩を震わす。

「そう言われてもな……それが原因で藤ねえが咆えたからなあ。その後、桜と一緒に心配されたくらいだし。うん、桜か藤ねえに聞いてくれれば確認取れる筈だ」

そう真面目な表情で言う志保に、凜は思わず溜息を吐いた。

まさか、本気で確認を取りに行くなんて馬鹿馬鹿しいことが出来る筈もなかったが、そこまで言う以上、志保の言葉に嘘偽りは無いのだろう。

（だとしたら、コイツどれだけのポテンシャル秘めてるってのよ……）

「というか、遠坂の弁当の方が美味しいと思うけど」

「それは何？私に喧嘩を売っていると思っただいのかしら？」

「何でそうなるかな。本心から言ってるんだよ。遠坂の味は私のと全然違うし、結構勉強になるんだよ？」

「それはどうも。でも、だったら本当のアンタの料理はどれだけ美味しいってのよ」

凜の弁当のおかずを咀嚼している志保を横目で見ながら、凜は不貞

当然、料理以外の話題に終始したことは言うまでもないだろう。

その後、二人共に弁当を食べ終えた所で、志保は何気ない口調で切り出した。

「しかし、珍しいな」

「ん？何が？」

「恍けるなよ。遠坂から私に話しなんて、滅多にないだろ。で、いい加減何の話なのか教えてくれてもいいんじゃない？」

志保にそう言われ、僅かに目を見開く凜。

凜は、一つ溜息を吐くと意を決したように告げた。

「そう、ね。別に大した話じゃないんだけど・・・」

凜の口から語られた内容は、額面通りに受け取るのなら、確かに然程重要な話ではなかった。

内容を要約すると、”最近は何騒な事件もあるのだから、他人の手伝いなどせずにさっさと帰れ”ということだった。

ちなみに、物騒な事件と言っても、最近ニュースで報道されているのは原因不明の集団昏睡事件くらいである。

それも立派に不可解な事件ではあるが、取り立てて警戒するような事件でもない。

いくら志保が人が好くて、他人の手伝いなどで遅くまで学校に残ることが多いといっても、特に気にかける必要もないだろう。

それらを含めて考えるなら、心配性の友人が仲の良いお人好しの友人を心配して言ったと捉えるのが普通であろう。

だがしかし、遠坂凜は魔術師である。

それも、聖杯戦争に参加するマスターの一人。

だとするならば、言葉の裏に隠された本当の意味を察することは難しくない。

一つ言えることは、どちらにしても気持ちの方向性は同じだということだ。

「……ん、了解。何でかは知らないけど、ご忠告通り、とつと家路に着くことにするよ」

「ええ、そうして頂戴」

志保の答えに満足したのか、凜は安堵の表情を浮かべる。それを見た志保は、柔らかな微笑を浮かべて言った。

「遠坂つてさ、優しいよね」

「んなつ、何よいきなり！」

凜は、志保の言葉を聞いて頬を一瞬で紅潮させた。

これが漫画やアニメであれば、頭から立ち昇る湯気が見えたことだろう。

「別に、ただそう思ったただけだよ」

その混じりっけのない純粹な志保の笑顔の前に、凜は口を噤むしかなかった。

「さて、と……じゃあ、そろそろ行くよ」

志保は徐に立ち上がり、数歩進んだ所で不意に振り返った。

「ああ、そうだ。言い忘れてた」

「ん？」

「遠坂、今度さ、家に夕飯食べに来ないか？」

「はい？」

凜は、訳が分からない、といった表情だ。

今まで料理の話題を持ち出さないようにしていたのに、志保はあっさりとそれを口にした。

努力が無駄に、とは思わないまでも、凜は少し拍子抜けした様子だった。

「いや、何か遠坂がどうにも本当の私の腕を信用してないみたいだったからさ、どうせだったら夕食に招待しようと思って。腕に縫いを掛けて作りますよ？」

悪戯っ子のような表情を浮かべ、冗談めかした口調で言う志保。

凜は、そんな志保に呆れつつも不適に微笑み、真直ぐに志保の紅い瞳を見つめ返した。

「そう？ だったら考えておくわ。ただし、私を納得させられなかったら承知しないわよ」

「ふふ、臨む所だよ」

暫し見詰め合った後、志保は扉へと歩いて行き、凧は弁当箱を片付ける。

だがまたしても、志保はドアノブに手を掛けたまま振り返った。

「ああ、それと凧。早くしないと、次の授業始まるよ?」

「え?」

驚いた凧の声と共に響く予鈴の音。

だが、その予鈴の音さえも掻き消さんばかりの大きな音が、扉の内側、校舎側から聞こえてきた。

それは丁度、数人の人間が駆け回り、階段から転げ落ちるような、そんな騒音だった。

弁当を携えて扉まで歩んできた凧は、志保と顔を見合わせ、揃って溜息を吐いた。

やがて一日が終わり、放課後。

教室には生徒達の姿はほとんどなく、辺りは刻々と暗くなっていく。日が沈み夜になれば、校舎に残る人間は一人もいなくなるだろう。

「始めるわよアーチャー。まずは、結界の下調べ。どんな結界か調べてから、消すか残すか決めましょう」

凜は姿の見えない相棒、アーチャーに声を掛ける。

『承知した』

アーチャーは、パスを通した念話で答える。

凜は頷くと、暗い校舎を進んでいった。

何故凜とアーチャーがこんなことをしているかと言えば、学校全体に巨大な結界が仕掛けられているからである。

凜達がそれに気付いたのは、朝の登校時。まだ展開されていないというのに、この結界は異常な気配を振り撒いていた。

結界の効果は千差万別。

志保の静止の結界のように境界線で作用するものから、内側に作用するものなど様々だ。

その中で、この結界は内側に作用するものに該当する。

攻撃性の高い、結界内における生命活動の圧迫、それがこの結界の効果。未だ完成はしていないが、一度発動すれば、校舎内にいる全ての人間が昏倒するだろう。

だがそんなものは、凜には通用しない。それは、凜個人を狙ったものではなく、土地全体に作用するものだからだ。体内に魔力を通す魔術師は、そのように広範囲に作用する効果を弾いてしまう。

故に、この結果意の狙いは魔術師、マスターではない。

恐らく、その標的は学校内の人間全て。

そんなことをする理由は一つしかない。

それはあまり、凜にとっては喜ばしくないものだ。

校内を隅々まで調べ、最後に屋上に出ると、外はすっかり闇に吞ま

れていた。

学校に残っているのは、凜とアーチャーのみ。

「これで七つ目か。とりあえず、ここが起点みたいね」

昼に来た時には調べる暇がなかったが、屋上には、堂々と八画の刻印が刻まれていた。

魔術師だけに見える赤紫の文字は、見たことも聞いたこともないモノだ。

「……まいったな。これ、私の手には負えない」

凜は、この結界を張った人間は相当な考えなしだとは思っているが、結界自体は桁違いの技術で括られている。

一時的にこの呪刻から魔力を消す事は出来るが、呪刻そのものを撤去する事は出来ない。

術者が再び魔力を通せば、それだけで呪刻は復活するだろう。

さらに厄介なのは、この結界の本当の効果。

ここまで調べて分かったのは、この結界は発動すれば、文字通り人間を”溶解”させるというものだ。

内部の人間から精神力や体力を奪うという結界はあるが、これは別格だ。

これは魂食い。結界内の人間を溶かして、ブラッドフュージョン滲み出る魂を強引に集める血の要塞。

魂とは、在るとされ、魔術において必要な要素と言われているが、その扱いは酷く難しい。

魂はあくまで”内容を調べるモノ”、”器に移し替えるモノ”に留まる。

衛宮志保が良い例だろう。

彼女は、肉体が死滅した兄の魂を、魂が抜けた生きている妹の体に
移し替えて誕生したのだから。

だが、それを抜き出すだけではなく、一箇所に集めるなど理解不能
だ。

何故なら、そんな変換不能なエネルギーを集めた所で、魔術師には
使えない。

だから、それに意味があるとするれば

「アーチャー。貴方達って、そういうモノ？」

知らず、凜の声音が冷たく鋭いものとなる。

『……ご推察通りだ。我々は基本的には霊体だ。故に食事は魂（第二）、ないしは精神（第三）要素となる。君たちが肉を栄養とするように、サーヴァントは魂と精神を栄養とする。まあ、栄養を摂取した所で基本的な能力は変わらないが、取り入れれば取り入れるほどタフになる。即ち、魔力の貯蔵量が増していく、という訳だ』

つまり、サーヴァントを強力にする方法が、無差別に人を襲うという
こと。

「マスターから提供される魔力だけじゃ、足りないってこと？」

不愉快そうな凜に対し、アーチャーは事実だけを淡々と告げる。

『足りなくはないが、多いに越した事はない。実力が劣る場合、弱点を物資で補うのが戦争だろう。周囲の人間からエネルギーを奪うのは、マスターとしては基本的な戦略だ。そういう意味で言えば、

「この結界は効率がいい」

その事実は認めるが、遠坂凜はそれを認めることは出来ない。凜は、自分が為すべきことは、分かっているつもりだった。

「それ、癪に障るわ。二度と口にしないで、アーチャー」

刻まれた呪刻を見つめながら告げる凜。

それにアーチャーは、どこか弾むような声で返した。

『同感だ。私も真似をするつもりはない』

それを聞いた凜は、薄く口元に笑みを浮かべた。

「……さて、それじゃ消すとしますか。無駄でしょうけど、とりあえず邪魔をするぐらいにはなる」

凜は、刻まれた呪刻に近寄り、左腕を差し出す。

そして、遠坂家に代々伝わる魔術刻印を起動する。

「Abzug Bedienung Mittelstand）消去。 摘出手術 第二節）」

左手をつけ、一気に魔力を押し流す。

これで、一先ずこの呪刻からは色を洗い流せた。だが

「なんだよ。消しちゃうのか、もったいねえ」

唐突に、凜たちしか居ない筈の屋上に第三者の音が響き渡った。

今宵、赤と青の英霊が激突する。

それは、因縁の戦い。

勝敗はどちらに上がるのか、それを知るのは、魔力滾らす紅き瞳のみ。

NGシーン

「さて、と……じゃあ、そろそろ行くよ」

志保は徐に立ち上がり、扉の前まで歩いて行って、不意に振り返った。

「ああ、そつだ。言い忘れてた」

「ん？」

「遠坂、好きだよ……」

「ぶっ！？ちよ、あ、え？いや、はえ！？」

志保の衝撃告白に真っ赤になり取り乱す凜。

その隙に志保は凜との距離を詰め、いつの間にか懐に潜り込んでいた。

二人の顔は息が触れるほど近い。

「遠坂、いや、凜……」

「ちよ、志保！？ん、うん~~~~~!!!!!!?」
「?????」

「………なーんて、吃驚した？」

「……………まったく、冗談も大概にしなさいよね。それも、額にキスなんて……………」

「唇の方が良かった？」

「んな訳あるか！！！」

「でも、凜も可愛いところあるよね、少し迫っただけで小さくなっ
てさ。実は本当はちよっと期待してたり……………」

「あんまり巫山戯るとどうなっても知らないわよ……………」

「怖い怖い。ほんの冗談だって。それにこんな冗談を言う相手はち
やんと選んでるんだよ、私は」

「それに選ばれた私はいい迷惑だわ」

「そう?」

「そうよ……………」

くすくすと笑う志保をジト目で睨む凜。

その凜の視線に耐え切れず乾いた笑みを浮かべる志保。

そして、顔に笑みを貼り付けたまま屋上の扉を開けた志保たちの目
に飛び込んできたものとは

「……………何の惨劇後？」

「……………予想つくけど、考えたくないわね。こ
れ、どうせ鼻血でしょ?っていうか、ほとんど失神してるじゃない」

おわり

第四話　く紅き瞳の誤算・前編く（後書き）

何か、最近二週間に一度のペースになっている今日この頃。
となると、次回は三月かな？

てなことは置いていて、突っ込みどころ満載の今回。とりあえず、次回までお待ちください。大した説明とかは出来ませんが、理由は用意してます。

さて、アンケートの締め切りは二月いっぱいです。

まだまだ募集中ですので、気軽に投票してください。待ってます。

久々のNGシーンについては無視してください。暴走しすぎました。尚、お気づきの方もいるかもしれませんが、今回最後のほう原作の文章を引用していますのでご了承ください。若干変えてはあるんですけどね。

さてさて、一応この第四話で第一章は終わりですが、何やら三部編成になるような二部編成になるような……まあ、それは書き終わるまでわかりませんが。

何にせよ、多分次回は来月になるかと。

第二章、つまり第五話は第四話の同日から始まります。なので、どの辺りからなのか、大体分かるかもしれませんがね。

では、また次回。

第四話 く紅き瞳の誤算・中編く（前書き）

今回は若干短いです。

最後にアンケートの結果発表があります。

今宵、仕組まれた舞台の上で青赤の騎士が激突する。

その勝敗はどちらにあがるのか？

では、どうぞ。

第四話 紅き瞳の誤算・中編

結界消去を阻むように、突如として屋上に木霊した第三者の声。

凜は咄嗟に立ち上がり、声の発生源へと視線を向ける。
給水塔の上。

十メートル程の距離を隔てたそこで、青き衣を身に纏った男、ランサーが見下ろしていた。

吊り上った口元は粗暴で、凜たちに向けられる瞳には獰猛な獣じみた光を宿している。

だが不可解なことに、ランサーの視線は涼やかだった。瞳に宿る光とは対照的に、気さくな雰囲気をもって凜たちを見つめている。そう。それはまるで、十年來の友人に向けるような視線だった。

「コレ、貴方の仕業？」

凜は、伶俐な瞳をランサーに向け、平坦な声で聞く。

対するランサーは始めは飄々と、最後は殺気を滲ませて言葉を返す。

「いいや。小細工を弄するのは魔術師の役割だ。オレ達はただ命じられたまま戦うのみ。なあ、その兄さんよ？」

「！」

凜は、思わず息を呑む。

ランサーは、霊体化したアーチャーが見えている。

「やっぱり、サーヴァント………！！！」

「そうとも。で、それが判るお嬢ちゃんは、オレの敵って事でいいのかな？」

なんという事のない、飄々とした声。

それなのに、凜には背筋が凍るほどに冷たく、吐き気がするほど恐ろしく感じられた。

(・・・ダ、メだ。ここで、コイツと戦っちゃいけない!!)

「・・・・・・・・ほう。大したもんだ、何も判らねえようで要点はきつちり押さえてやがる。あーあ、失敗したないこりゃあ。面白がつて声を掛けるんじゃないぞ」

不意に、ランサーの腕が上がる。

事は一瞬。

先刻まで何一つ握られていなかった男の手には、紅い呪いの魔槍があった。

「は、っ

」!

凜は、考えるより先に真横へ跳んだ。

何も考えず、ただ全力で、形振り構わずに真横へ跳躍する。

それとほぼ同時に吹き抜ける紅い旋風。

刹那の差で突進してきた刃は、容赦なく数瞬前まで凜がいた空間を、背後にあったフェンスごと斬り払った。

「は、いい脚してるなお嬢ちゃん・・・・・・・・!!」

ランサーの軽口に反応する暇さえない。

英霊の攻撃など、そう何度も避けられる訳がないのだ。立ち止まれば、次の瞬間には死が訪れる。

だが、この狭い屋上に逃げ場などない。逃げるにせよ戦うにせよ、もつと開けた空間に移動する必要がある。

いっそ、空へ逃げられるのなら良かったのだが、いくら凜でもそんな高等魔術は使えない。

ならば、とるべき行動は一つだ。空中が駄目でも、開けた空間はすぐそこに広がっている。

(逃げ道は・・・行くしかない!!)

「E s i s t g r o s , E s i s t k l e i n (軽量重圧)・・・!!」

凜は左腕の魔術刻印を走らせ、一小節で魔術を組み上げる。

身体の軽量化と重力調整。

この一瞬のみの効果だが、それでも十分。羽根と化した体は軽々と跳び上がり

凜は、迷うことなくフェンスを跳び越え、屋上から落下した。

「っ
」!

凜の体を風圧と重圧が襲う。

地上まで約十五メートル、着地まで一・七秒。

(これじゃ遅い、あいつに追いつかれる・・・なら!)

「v o x G o t t E s A t l a s (戒律引用、重葬は地に還る)
」!

凜が新たに施したのは、重力制御。

それにより落下速度を加速させ、着地までの時間を短縮する。

が、それはつまり着地時の衝撃も比例して増すことを意味していた。普通の魔術師なら自爆で終わるところだが、凜は聖杯戦争に参加するマスターである。マスターには、その相棒たるサーヴァントが存在する。

「アーチャー、着地任せた!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

(ク・・・やれやれ、大胆というか何と云うか)

アーチャーは一瞬だけ実体化し凜を支える。

その顔には微かな笑み浮かんでいるように見えた。

「　、は　　!!」

着地の衝撃をアーチャーに殺させた凜は、地面に足がつくと同時に走り出す。

このまま逃げ切れると考えている訳ではない。

凜とアーチャーの長所を生かせる、遮蔽物のない広い場所に移動することが目的だ。

「はっ、は　　!!」

屋上から校庭まで、七秒かからずに走り抜ける。

距離にして百メートル以上。常人には到達しえず、残像しか見えない速度。

だがしかし、そんなものは

「いや、本気でいい脚だ。ここで仕留めるのは、いささか勿体なさ

過ぎるか」

サーヴァント相手には、何の意味もありはしなかった。

「アーチャー！」

凜が後ろに引くと同時に、前に出たアーチャーが実体化する。

そのアーチャーの手には、白と黒、二振りの短剣が握られていた。

「へえ」

ランサーは目を細め、口元を不気味に歪める。

「……いいねえ、そうこなくっちゃ。話が早いヤツは嫌いじゃあない」

鋭い風切り音と共に、男の腕が振るわれる。

その手に現れたのは、屋上で凜を殺さんとした二メートルにも及ぶ真紅の槍。

「ランサーのサーヴァント……」

「如何にも。そう言うアンタのサーヴァントはセイバー……って感じじゃねえな。何者だ、テメエ」

ランサーは、先程までの気軽さなど微塵も感じさせずアーチャーを睨む。

殺気の固まりとなったランサーに対して、アーチャーはあくまで無言。

両者の間合いは五メートル弱。
二メートルもの槍を持つランサーからすれば、残りの三メートルなど無いも同じだ。

「……………ふん。真つ当な一騎打ちをするタイプじゃねえな、
テメエは。って事はアーチャーか」

嘲る声にもアーチャーは動じない。

何の反応も示さないアーチャーに対して、ランサーは苛立っているかと思えば、意外にも表情に変化は無い。

対峙する青赤のサーヴァントは、既に互いの必殺を計っている。

「……………いいぜ。好みじゃねえが、出会ったからにはやるだけだ。そら、弓をだせよアーチャー。これでも礼は弁^{エモ}えているからな、それぐらいは待ってやる」

「…………………………」

アーチャーは答えない。

倒すべき敵に語ることなど何もないというように、その口は固く閉ざされている。

……………いや、それは少し違うのかもしれない。

今この場で皮肉や挑発以外、何も語る気がないのは確かなのだろうが、アーチャーの真の意図は別にある。

そう、アーチャーはただ待っている。

「……………アーチャー」

マスターからの命令を。

「手助けはしないわ。貴方の力、ここで見せて」

「ク」

それは笑い、だったのか。

凜の言葉に応えるように、凜と同じように口元を吊り上げて、赤い騎士は弾丸となって地を駆けた。

赤い外套がはためく。

双剣を手に、アーチャーは一迅の風となる。

「バカが！」

迎え撃つは真紅の槍。

高速で突進するアーチャーが風ならば、ランサーの神速の槍は風をも穿つ。

「グッ」

迫る紅い閃光を間一髪で受け流し、アーチャーの進撃は止まった。恐らく、二メートルも接近出来ていないだろう。

長柄武器での基本戦術は、常に距離を離し相手の間合いの外から攻撃を加えることだ。

つまり槍という武器の特性上、ランサーは向かってくる敵を迎撃するだけでいい。

自らが距離を詰めるより、踏み込んでくる外敵を貫く方が容易なのだから。

だというのに、ランサーは自ら距離を詰め、アーチャーに前進す

許さなかった。

「たわけ、弓兵風情が接近戦を挑んだな！」

猛るランサーの声と共に繰り出される刺突は全てが必殺。

咽喉、眉間、肩、心臓、間隙無く放たれる刺突は絶えることなく執拗にアーチャーを襲う。

突きの弱点である戻りの隙さえないその攻撃は、神業と言って差し支えないだろう。

だが、アーチャーとて英霊とまで成った者。

「フッ！」

無数の点を双剣で弾き、いなして前進を試みる。

剣士が槍兵に勝つ為には槍の間合いの内側、剣が届く距離にまで接近する必要がある。

それがランサーほどの使い手が相手となると容易なことではないが、アーチャーは着実に距離を詰める。ランサーはアーチャーをただの弓兵と侮っていた為か、僅かながらも接近を許してしまっていた。徐々に徐々に。けれど確実に縮まっていく距離。

このまま懐に飛び込むことが出来れば、アーチャーにも勝機はあると思われた。

が、唐突に赤い外套は停止する。

「ぬっ！」

先刻よりも速度を増した刺突。

一合、二号と打ち合うことに速くなるその刺突は、最早常人には軌跡すら見えまい。

「チィッ！」

何とか凌ぎつつも、アーチャーは後退を余儀なくされる。

神速の槍の豪雨を辛うじて受け流すが、技量はランサーの方が上。とてもではないが、アーチャーが捌ききれぬものではない。

本来なら、ランサーに真っ向から白兵戦で敵う者があるとすれば、それはセイバーかバーサーカーくらいものだ。だが、赤い騎士はアーチャーであり、弓兵であり、魔術師である。

そう、ランサーが言った通りアーチャーとは弓兵を意味している。

槍の間合いの更に加えて、遠距離からの狙撃こそが弓兵の真骨頂。

アーチャーが勝つ為には、弓兵として戦うしか道は無い。より具体的にいうならば、宝具の真名開放をもってしか状況を覆す術は無いだろう。

両者の間には、それ程の絶対的な差があった。少なくとも接近戦においては、アーチャーに勝ち目は無い。

それ故、これは当然の結果といえた。

「ツッ！」

遂に左手の短剣が弾かれ、右手一本での防戦となる。

すると、より劣勢になることは当然だが、それに加えてランサーはここぞとばかりに攻め立てる。

苛烈さを増した槍の暴風の前には、然しものアーチャーも右手一本だけで耐え切ることは出来なかった。

一際高い剣戟の後、右手の短剣も弾き飛ばされる。

「 間抜け」

罵倒するランサーに躊躇はない。

アーチャーを追い詰めんと踏み込んでいた足が止まり、無刀となったアーチャーと視線がぶつかる。

一瞬で勝敗を決するつもりか、がっしりと地面に根を下ろし構えるランサー。

瞬間。

一息のうちに放たれたランサーの槍は、正に閃光だった。

視認さえ許さない超神速。

眉間、首筋、そして心臓。

穿つは三連、全弾急所

！！

だが。

視る事さえ出来ぬ閃光を、一対の光が弾き返す。

「 何!？」

ランサーの攻勢が止む。

アーチャーの両手には、再び双剣が握られていた。

先程の双剣と全く同じ、鉈を思わせる中華風の黒白の剣。

ランサーは一瞬目を見張るも、直後には獰猛な笑みを浮かべていた。

「ハ、面白い。いいぜ、何度でも弾き飛ばしてやるよ」

そうして、青赤の戦いは更に加熱し、より苛烈になっていく。それを、”破綻した舞台”を俯瞰する、二つの視線に気付かずに。

第四回 偽・タイガー道場

イリヤ：「はい、タイガー道場の時間だよ」

大河：「今回は、アンケートの結果発表です。では、弟子一号、ヨロシク！」

イリヤ：「了解です、しっしょうー」

大河：「・・・ん？」

イリヤ：「では発表します。次回作は、？の”はちやめちや設定何でもありの永遠の四日間”に決定しました！。皆さん、投票ありがとうございました」

大河：「ありがとうございました」

イリヤ：「他にも、その他で提案された件については四日間完結後に書く可能性があるそうです。まあ、完結すればの話だけどねー」

大河：「あの作者だからねえ。でさ、イリヤちゃん。その永遠の四日間ってなに？」

イリヤ：「え？・・・あー、大河の出番が本編より多い稀有な作品だね。予定だけど」

大河：「マジですか？」

イリヤ：「マジよ。日常での話がより多くなるから、必然的に大河の出番も増えるわね・・・色々と」

大河：「いよっしゃあああああ！！！！！！！！！！！！」

イリヤ：「でもまー、メインは志保とか新キャラ、サーヴァント達だからどっちみち影は薄いんだけど」

大河：「ん？イリヤちゃん、何か言った？」

イリヤ：「いいえ、何も。ちなみに、永遠の四日間は今現在作者が考えている設定では、本編が完結していなくても問題ないので、もしかしたら本編完結前に投稿できるかもしれないですね。書いていければ、の話だけだね」

大河：「本当に問題ないの？」

イリヤ：「ええ。少なくとも、冒頭から中盤にかけては全く問題ないわ。そこまでは絶対に書けないでしょうけどね」

イリヤ：「さて、ここからはこの先の予定について話していきまーす」

イリヤ：「まず、ここまで読んでもらっている方は分かっていると
思うけど、暫く原作沿いに進むので過度な期待とかはしないのが吉
です。勿論、若干違う点はあるけど、基本的には原作と同じように
進みます。今回の本編でもあった、赤いのが青いのに勝てないとか
いう感じ。本格的に変わってくるのは第二章の中盤以降です。あ、
あとそれについて、作者から謝罪があります」

作者：『すいません。とある場所で、今回の戦闘シーンで原作の
引用をしないと偉そうなことを言いましたが、結局引用してしま
いました。申し訳ありませんでした。今後さらに精進しようと思
いますので、引き続き広い心で読んでくださると助かります』

イリヤ：「ってことらしいです。それはともかく、次回で第一章も
終わりです。私の出番も、もうすぐ！みんな、楽しみにしててね！

「！」

大河：「ちなみに私の出番は？」

イリヤ：「やだなー、失しようの出番も………はい、それではお別れの時間がやってきました」

大河：「いや、ちょっと、言いたいことは山ほどあるけど流石にそんなスルーの仕方は……」

イリヤ：「次回も紅き瞳の誤算・後編をみんなで見よう！」

大河：「パクリ！？しかも雑！古っ！細かいとこ何か違うし！」

イリヤ：「イリヤだぜ！イリヤだよ……」

大河：「ストップ！！長いからそれ！何？クイズでもするつもり？っていうか一人二役かい！！」

イリヤ：「殺つちやえ、バーサーCAR」

大河：「いや、それ前にも……って何か変なのキター……！！！！？？？」

イリヤ：「じゃあ、今度こそ。ばいばい」

おわり

第四話 　く紅き瞳の誤算・中編く（後書き）

すみません。戦闘は次回まで続きます。

尚、今回からあまり長くあとがきを書かないことにしたので、多くは言いませんが、今回は凛の描写から始まります、多分。

あとは偽・タイガー道場で書いた通りなので、それではこの辺で。

では、また次回。

第四話 く紅き瞳の誤算・後編く（前書き）

まず始めに、今回の東日本大震災で亡くなられた方のご冥福をお祈りします。

こんな一部の方向けの作品ではありますが、もし被災地でこの作品をご覧になっている方がいるなら、少しでも気晴らしにでもなればと思います。

今回は第一章完結です。

槍兵と弓兵の戦いは、遂に終結の時を迎える。
その終結をもたらした者とは？

では、ごうぞ。

第四話　く紅き瞳の誤算・後編く

鉄と鉄が打ち合う無骨な音が闇夜に響き渡る。

相対するは青と赤。二人の騎士。ランサーとアーチャー。対照的な二人の英霊は、月明かりの下で交錯する。

それはまるで、伝説の一場面。

ある種、神秘的とさえ言える光景がそこにはあった。

そんな、火花が飛び散る戦場の傍らで、一人の少女が呆然と立ち尽くしていた。

魔術師、アーチャーのマスター、遠坂凜である。

(これが、聖杯戦争……)

凜は、何をすることもなくその戦いに見入っていた。

いや、見惚れていた、と言った方が正しいか。

英霊という最高のゴーストライナー同士の戦い。視認し得ない程の速度で振るわれる剣戟の応襲。

神話、伝説の英雄が織り成す一夜の舞台。

そんなモノを目の当たりにすれば凜でなくとも、たとえ魔術師でなくとも、その圧倒的な光景に我を忘れていたに違いない。

(でも、これじゃ……)

本来なら、凜はマスターとしてアーチャーを援護しなければならぬのだらう。だが、凜の魔術は狙いが曖昧で、ランサーのみならずアーチャーまで巻き込んでしまう恐れがある。

それでは本末転倒だ。

それに令呪を使おうにも、有効な命令が思い浮かばない。

アーチャーをここから離れた高台に転移させることは出来るかもしれない。しかし、それでは凜が無防備になるし、果てしてそれがどれほどの意味をもつか。

第一、凜はアーチャーの正体を知らない。その戦いを見るのもこれが初めてなのだ。

唯一知っているのは、アーチャーの驚異的な視力だが、仮に超長距離からの狙撃が可能だとしても、この状況を覆すだけの宝具があるかどうか。

こんな不確かな情報しかない現状で、一か八かの賭けに出るなど馬鹿げている。

だが、令呪を出し惜しみしても仕方が無いのも確か。使うべき時に使わなければ、宝の持ち腐れというものだ。

まあ、凜は救いようがない程に愚かで浅慮で短絡的な思考で令呪を使用した前科があるが。

それはさて置き。

令呪は絶対命令権であると同時に、命令次第では強力な増強装置ブースターになり得る。

ただその場合、”ランサーを倒せ”と命じても意味は無い。それは強制でしかなく、実力的に劣っていれば勝てる筈が無いからだ。

また”ランサーよりも速く剣を振るえ”というような命令であっても、魔力の補助を受けてランサーの速度を一時的に上回るかもしれないが、結論は同じだ。

確かに剣速が上がればランサーの槍にも対抗出来るだろうが、そこから更に槍の速度が上がる可能性があるし、いつまで効果が持続す

るか分からない以上、倒しきれぬ保障など何処にもない。
どの道、不安定な綱渡りという訳だ。

故に、令呪を戦闘で有効活用したいのであれば、状況を判断してよ
りの確な命令を下す必要がある。

例えば、辛うじて視認できる程遠くに標的がいるのなら、”ヤツを
斬れ”という命令を下せば、サーヴァントはそこまで転移、または
魔力で強化され文字通り跳んで行くことが可能になる。

そういった明確な命令ならば、たとえ絶体絶命の窮地に立たされて
いようとも、起死回生の一手で状況を一変させることも出来るだろ
う。

ただし、まだ問題はある。

その状況と命令次第ではあるのだが、もし凜が有効な命令を思いつ
いても令呪の発動が間に合わない可能性があるのだ。
つまりはタイミングである。

とはいえ、凜とて英雄達の戦いに口を挟めるとは思っていない。既
に英雄達の打ち合いは目で追えぬ速度まで高まっており、とてもで
はないがその最中に令呪を使用するのは不可能に近い。

だとすれば、方法は一つだ。

必ずとは言い難いが、いずれ訪れるであろう決着の時、両者の動き
が止まった一瞬こそが唯一の好機。

尤も、有効な手が頭になければ無意味だが。

何にせよ、現状の凜に出来るのは、来るかどうか分からないその
一瞬を待つ事だけなのだ。

たとえ情けなくても、それが事実。凜は、歯噛みしながらその事実
を甘んじて受け入れるしかなかった。

(・・・押されてる、けど)

幸い、アーチャーは戦えている。傍目から見ても劣勢ではあるが、均衡が崩れない。

先刻よりも速度を上げ、一見アーチャーを追い詰めているランサーだが、その表情には僅かに困惑の色が見て取れる。

それもその筈。

幾度もアーチャーの双剣を弾き飛ばしているにも関わらず、次の瞬間には全く同じ双剣が握られ、確実に槍を捌くのだ。

マスターである凜ですら何処か啞然としているのだから、ランサーは尚更だ。

また、凜は気付いていないが、それ以外にもランサーを困惑させる要因があった。

それはアーチャーの剣技、というより戦い方という方が適切かもしれない。

アーチャーは”態”と隙を作り、そこに”打ち込ませている”のだ。

何故そんな真似をするのかと言えば、理由は二人の技量の差にある。幾度も双剣を弾き飛ばされている事からも分かる通り、アーチャーはランサーの猛攻を捌ききれている訳ではない。ランサーの動きについていけないのだ。

なら、技量と速度で劣るアーチャーが神速の槍を凌ぐ為にはどうす

ればいいのか。

答えは至極単純。追いつけないのなら、待ち構えていればいい。

つまり、予め攻撃される箇所が分かっているれば、対処することは容易になるということ。

と口で言うのは簡単だが、これは非常に危険な行為でもある。

故意に隙を作って攻撃を”誘導する”と言っても、敵に隙を晒している事に変わりはない。仕損じれば傷を負うことは免れず、最悪死に繋がる可能性もある。

それを平然と、当然の様にやってのけるアーチャーの胆力は、流石は英雄とでも言うべきか。

かく言うランサーも、攻撃を誘導されている事には疾うの昔に気付いていた。が、だとしてもやることは変わらない。

相手の術中に嵌っているのは腹立たしいが、隙を攻めない手はない。防御を掻い潜れば手傷を負わせることが出来るのだから、無視出来る訳がない。

ある意味、それはランサーに対する、敵に対する挑戦と言っても過言ではなかった。

私を倒したいのであれば、好きなように攻め抜いて見せる。

出来れば、の話だがね

そう、明け透けに言われているようなものだ。

それでアーチャーの防御を崩せないとあっては、誇り高い騎士達にとっては屈辱でしかない。

だが、だからこそランサーは舌を巻く。

己の槍をもってして突き崩せない鉄壁の壁。それを成し遂げている

のは、純然たるアーチャーの実力だ。

愚かとすら言える行動だが、それでも目の前でその有様を見せ付けられては”見事”としか言い様がない。

故に、事此処に至ってランサーは認識を改めた。

これ以上、ただの弓兵と侮っていては敗ける。アーチャーは、一瞬の油断も許されない強敵なのだ。

それから間もなく、両者の間合いが離れた。

仕切り直しをする為か、ランサーは大きく跳躍して間合いを離れた。その速さも尋常ではない。

咄嗟に間合いを外したランサーの動きは、豹そのものの速さと嫺やかさを持っていた。

「……………二十七。これだけ弾き飛ばして、まだ有るとはな

苛立ち、呟くランサー。

それは、アーチャーの真の宝具を知らない者からしたら、当たり前前の反応だろう。

本来、サーヴァントの武器、”宝具”とはサーヴァントが英雄であった頃に愛用した武器や防具、”英雄の証”であり、文字通り”奥の手”として扱われる。

サーヴァントにとって、宝具は唯一無二の武装。

それは宝具そのものが代えのきかない最終兵器だからでもある。

ランサーの持つ槍とて、ランサーが本気になれば宝具としての能力を發揮するだろう。

宝具とはそれだけでも優れた武器だが、その本領は”真名”を以って力を解放させる事にある。

その効力は千差万別。

かつて、竜を殺し、神を殺し、万物に君臨してきた英雄の武器。魔力と真名を以って発動する宝具は、伝説上の破壊を、奇跡を再現する事が出来る。

それ故の奥の手であり、切り札なのだ。

通常、宝具は決して使い捨てに出来る物ではない。

アーチャーが何十と持ち出した剣は、確かに全てが名剣なのだが、アーチャーの宝具ではない。

簡単に説明するならば、剣は宝具の一部、欠片である。

その正体については、いずれ語られることになるだろう。今はまだ、その時ではない。

「どうしたランサー、様子見とは君らしくないな。先程の勢いは何処にいった」

「………チイ、狸が。減らず口を叩きやがるか」

ランサーの苛立ちはもつともだ。

ランサーは槍兵として戦ったというのに、アーチャーは剣士として戦い、これを凌いだ。

言わば、アーチャーとしての手の内を全く見せていない状態である。その実力を認めていようと、鬼気迫るのは仕方ないことだろう。

「………いいぜ、訊いてやるよ。テメエ、何処の英雄だ。二刀使いの弓兵など聞いた事がない」

「そういう君は判り易いな。槍兵には最速の英雄が選ばれると言うが、君は其中でも選りすぐりだ。これほどの槍手は世界に三人といまい。加えて、獣の如き敏捷さと言えば恐らく一人」

「 ほづ。よく言ったアーチャー」

途端。

あまりの殺気に、世界が凍りついた。

ランサーの腕が動く。

今までとは違う、一部の侮りもない構え。

槍の穂先は地上を穿つかのように下がり、ただ、ランサーの双眸だけがアーチャーを貫いている。

「 ならば喰らうか、我が必殺の一撃を」

「 止めはしない。いずれ越えねばならぬ敵だ」

クツ、とランサーの身体が沈む。

同時に。

茨のような悪寒が、校庭を蹂躪した。

何が起きようとしているのか、そんなこと考えるまでも無い。

ランサーの持つ魔槍が、本当の姿で進む瞬間を待っている

不味い。

と、凜は直感的に悟る。

アレがどんな宝具かは知らない。

けれど一度槍が奔れば、その瞬間アーチャーは敗北する。それは絶対だ。

文字通り、ランサーの槍は必殺の”意味”を持っている。それは最早、勘では無く確信に近かった。

「あ

ランサーに心臓を貫かれればアーチャーは死ぬ。

そこまで予知出来ているのに、凜はアーチャーを助けることさえ出来ない。

凜が指一本でも動かせば、それが開始の合図となってしまうからだ。まして、令呪の起動など以ての外。

……だからこの戦いを、アーチャーの敗北を止める事が出来るとしたら、それは

「刺し穿つ^{ゲイ}

っ何!？」

凜達が見逃していた、必然という第三者の登場に他ならなかった。

ここで少し時間を遡り、凜達が飛び降りた後の校舎屋上へと視点は移る。

「まあ、遠坂は予想通りだったけど……ランサーかあ」

そう呟くのは、黒い外套を身に纏い白い髪が闇夜に映える魔術師、

衛宮志保。

志保の傍らにはライダーが控え、共に校庭を見下ろしている。

彼女達がここに現れたのは、凜が飛び降り、ランサーが後を追っていった直後。

息を潜めて成り行きを見守っていたのだが、どうやら彼女達の思惑通りに事は運んだらしい。そのお陰で、こうして高みの見物をしているという訳だ。

「ですがシホ。あの魔術師の姿が見えないのが気になります。確かに名前は……」

「バゼット……」

志保の脳裏に、数日前に戦った魔術師の顔が浮かぶ。

志保が相手でなければ、その実力を存分に振るえたであろう、魔術協会の封印指定執行者。

バゼット・フラガ・マクレミッツ。

志保の印象では、バゼットは戦闘をサーヴァントに任せきりにせず、自らも前に出てくるタイプだと感じていた。事実、数日前の戦闘でもそうだったのだ。

その姿が見えないというのは、志保に違和感を与えるには十分だった。

勿論、それが策であることも考えられるし、数日前の戦闘の傷が癒えていない可能性もある。

だが何故か、志保にはそうは思えなかった。理由は分からない。ただ直感的に、何かが違うと漠然と感じていた。

「……何か、嫌な予感がするな」

「私達と同じように、何所かで監視しているのでしょつか？」

「……分らない。注意する必要はあるけど、あまり気にしても仕方ないでしょう」

実際、あまり出来ることはない。強化した視力で辺りを見渡すが、この暗がりではそれらしい姿は発見出来なかった。

(思い過ぎならいいのだけどね……)

志保は軽く溜息を吐き、目下の目的を果たすべく戦場と化した校庭へと視線を戻した。

「……赤い方が劣勢か」

クラスは分からないが、双剣を振るっているサーヴァントは防戦一方。

その様を見る限り、多分セイバーではないのだろうなと志保は当たりを付けた。剣の騎士を謳うには、圧倒的に才能が足りない。あれはまるで、才の無い者が振るう凡百の剣だ。

自身に才能が無いことを重々理解している志保だからこそ、余計にその違いが、一流と二流の違いが見分けられるのだ。

(……にしても、よくそこまで。いや、だからこそその英霊、か)

凡百の剣と言っても、極限まで極めれば一流にも通じる。それを体現しているのが、正に赤い英霊、アーチャーだった。

普通は、その域まで鍛え上げることなど出来ない。誰しもが、どんなに努力しても越えられない壁を実感し、絶望して諦める。言うな

れば、一流の壁の前に、もう一つ果てしなく分厚い壁が立ち塞がっているのだ。

その壁の先は、途方もない研鑽を積み重ねた上で、一部の人間が辿り着けるかどうかすら怪しい。

恐らく、一流の剣士を探すよりも、その域に達した二流を探す方が遙かに難しいだろう。

それ故に、志保は自然とアーチャーに見惚れていた。

目標たりえる完成系、その無骨な剣技が目の前にあるのだから、目を奪われるのは当然だった。

そうして、志保は熱い視線をアーチャーに送っていたのだがふと、ある奇妙な現象に気付いた。

(……ん?)

よくよく見ると、アーチャーは幾度も双剣を弾き飛ばされ、その都度、弾き飛ばされたものと全く同じ双剣が新たに出現しているではないか。

志保が気付いてから確認しただけで、七度同様の事が繰り返された。一度や二度であればともかく、それだけ繰り返されれば誰だって異常だと気付く。

「……シホ、アレはもしかやシホと同じ」

「ハハハ。何ヲ言ッてイルのライダー？ そんな訳ないでしょウ？」

ライダーの言葉を遮り、片言交じりで言う志保。

明らかに動揺し、取り乱している。

そう、志保にはその現象に見覚えが、正確に言うと身に覚えがあっ

た。

(いや、まさかね・・・でも、あれは・・・)

「・・・・・・・・シホ、大丈夫ですか？」

気遣わしげな口調で志保に語りかけるライダー。瞳は見えないが、きつと優しい光を宿しているに違いない。

(・・・・・・・・どういうことかは分かりませんが、これ以上指摘しない方が良さそうですね)

そう悟ったライダーは、志保が落ち着くまで事の推移を見守ることにした。

「・・・・・・・・・・うん、うん。取り乱してゴメン。もう、大丈夫」

暫くして心を落ち着けた志保は、何事もなかったかのように眼下の戦いに目を向けた。

どうやら、先刻ライダーが言いかけた言葉を無かったことにしたいらしい。気付いてしまった以上はどうしようもないのだが、今だけは忘れたいようである。

それに倣い、ライダーは何も言わずに視線を校庭へ戻した。

それからほとんど時を置かずに、事態は動いた。

少し目を離れた際に剣戟の音は止み、両者は数メートル離れた場所で何やら話をしているらしい。

すると、突然ランサーが槍を下段に構えたかと思うと、周囲の魔力

が槍に集束しだした。

「……………宝具？」

「はい、恐らくは」

「不味いな…………」

魔力の集束は、宝具の真名開放の予兆。それがどれ程のモノかは分からないが、生半可な威力ではないだろう。下手をすれば、アーチャーの命は無い。

にも関わらず、アーチャーは自然体でランサーを睨むだけで動きを見せない。

何らかの策、あるいは対抗手段があるのか知らないが、このままでは、最悪凜の命までが危ぶまれる。

それは、志保の望むところではない。

「どうするのですか？シホ」

「どうするって、止めるしかないでしょう？」

さも当然という風な口調で言う志保。

その手には、三本の柄の短い細身の剣があつた。

「さて、幕引きといきましょうか」

そして、三条の銀の閃光が闇夜を切り裂いた。

「誰だ……！！！！！！」

ランサーが、凜の背後にある校舎へ向けて咆える。

今や、凜達とランサーの距離は十メートルまで広がっていた。

その理由は、ランサーの宝具の発動を妨げようとするように突如として飛来した、三本の細身の剣。

三本とも叩き落されたが、宝具の発動は中止され、ランサーは更に間合いを離れたのだった。

(………黒鍵?)

凜は、その細身の剣に見覚えがあった。

聖堂教会で使われる、対吸血鬼用の基本武装の一つ。

何故そんなものが、と考える前に、凜にとって予想外の声が校庭に木霊した。

その声は、未だに緊張が解けない凜の心掻き乱すには、十分過ぎる効果があった。

「ひどいなあ。誰だ、はないんじゃない？英霊さん？」

それは、本当に何気なく、最初から其処にいたかの様に、可憐に、涼やかに、天から舞い降りた。

黒い外套を纏った、紅い双眸を持つ少女。
その足元には三重の円環が現れ、白い髪を宙に漂わせながら、彼女はゆっくりと着地した。

突如として舞い降りた少女。

その登場には、然しもの猛者達も声が出ない。先刻とは違う理由で世界が凍り付いている。

ある者は少女が現れた意味を推考し、ある者は気が動転して何も考えられず、ある者は少女の能力に驚嘆し疑念と警戒を強める。

三者三様。

頭にある事は違えど、誰も口を開こうとはしない。

一時、校庭が静寂に包まれ暫く膠着状態が続くかと思われたが、意外にも最初に沈黙を破ったのは凜だった。

それは小さく、擦れた弱弱しい声だったが、一切の音が途絶えた間の中には良く響いた。

「……………うそ」

「ごめんね、遠坂。忠告を守れなくて」

その人物、衛宮志保は、茫然自失としている凜に申し訳なさそうに謝罪の言葉を告げる。

凜も何か言い返そうとするのだが、様々な疑問や思いが浮かんでは消えを繰り返し、狼狽するばかりで言葉が出てこない。

志保は、そんな凜の様子を予め予想していたのか、薄く苦笑を浮かべ小声で『後で、必ず話すから』と囁いた。

それでも納得してなさそうな凜ではあったが、ここで追及するべきではないと事も理解している。こんな混沌とした状況下でお喋りな

ど誰が出来ようか。出来るとしたら、それは底抜けの阿呆か、真正の大物くらいのものだ。

結局、凜は不承不承といった様子で頷いた。

それを、苦笑を貼り付けたまま不安げに見届けた志保は、さあ、次の問題だとばかりに鋭い警戒の視線を向けてくるアーチャーへ視線を巡らせる。

「ライダー、お願いね」

「はい、シホ」

志保の言葉に応える様に現れたのは、黒い装束に身を包んだ長身の女性。サーヴァント、ライダー。

アーチャーと志保の間で実体化したライダーは、手に釘状の武器を構えアーチャーを牽制する。

これでは、アーチャーも下手に動くことは出来ない。

それを確認した志保は安心した様に、十数メートル先で呆然とした表情を晒している青い騎士へと視線を向けた。

「久しぶりだね、ランサー。今日は一人なの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

志保の問いに答えず、黙っているランサー。

当初は志保の登場に驚いていたようだが、現在のランサーの表情からは一切の色が消えていた。

それはまるで、内から湧き上がる何かを、必死に押し殺しているようにも見えた。

「……………成程、そういう事か。お前が黒幕って訳だな」

「うーん、黒幕って言い方は好きじゃないけど、確かに、この舞台を仕掛けたのは私だよ。けどね、本当はもう一人役者がいる筈なんだけど、知らないかなランサー？」

志保は一呼吸置き、ランサーの表情の変化を見逃さないように観察しながら、その言葉を告げた。

「バゼットは、何所？」

「っ」

すると、僅かだがランサーに反応があった。

眉を微かに動かしたただだが、態とらしい程に無表情を装っている事もあって余計に目立つ。

それだけで、何かを隠していると教えているようなものだ。

「どうしたの？答えたくない？それとも、答えられないのかしら？」

「　　ッチ」

志保の更なる追及に、苛立たしげな舌打ちで返したランサーは、どういっつもりなのか志保達に背を向けた。

「……………逃げるの？英雄さん？」

「　　マスター命令だ。　　まったく冗談じゃねえ……………
　　おい、御嬢ちゃん」

「・・・何？」

「一応、前に見逃してもらったからな。一つ忠告しておいてやる。裏切りには気をつける。この街の洋館に住んでいる人間には碌なのがいない。特に、古びた洋館に住んでいるヤツは信用ならん。もし、身近にそんなヤツがいるなら注意しな」

「ランサー・・・」

「じゃあな。次会った時は逃がさん。そのつもりでいる」

その言葉は、いったい誰に向けたものだったのか。

ランサーは、それから一言も発すること無く暗闇の中を駆けて行った。その後姿は直ぐに見えなくなり、数秒も立たずに完全に姿を消したのだった。

そうして、穂群原学園での舞台は幕を閉じた。

聖杯戦争の前奏曲はこれにて終了
となる筈だったのだが、舞台裏の物語はまだ続くらしかった。

「・・・やれやれ。何がどうなってるんだか」

可愛らしく腰に手をあて、溜息を吐く志保。

その表情には若干疲れが見えるものの、事態が一段落ついたことで安堵しているようでもあった。

だが迂闊にも、志保は忘れていた。

「ねえ、衛宮さん？」

「………と、遠坂、さん？」

まだ、”あかいあくま”が残っていたことを。

「説明、してくれるんでしょうね？」

「あ、ああ……いえ、はい、喜んで」

どうやら本番は、ここから始まるらしかった……

第五回 偽・タイガー道場

イリヤ：「はい、という訳で五回目となりました偽・タイガー道場、始まります」

大河：「イエーイ・・・ってあれ？今回何かお知らせあったっけ？」

イリヤ：「もう、何っているのよ大河。今回は、第一章完結と第二章の予告っぽいことをするって、さっき言ったでしょ？」

大河：「うん。それは聞いてたけど・・・は？これで第一章終わりなの？」

イリヤ：「そう。何か中途半端な所だけど、作者が言うにはこれで終わりらしいわ」

大河：「・・・え？いいの？」

イリヤ：「いいんじゃない？叩かれるのは作者だもの。私の知ったことじゃないわ」

大河：「相変わらずバツサリ言うのね、イリヤちゃんは」

イリヤ：「いいのよ。本当のことだから」

イリヤ：「・・・さて、では気を取り直して第二章の予告です。第二章、それはズバリ」

大河：「ああ、第一章の完結についてはあんまり触れないで進行

するのね」

イリヤ：「私が主役!!」

大河：「……………うん、寝言は寝て言え」

イリヤ：「な、何よそのクールな反応!」

大河：「いや、だって主役は志保でしょ。イリヤちゃんが主役になれるのは番外編だけだって作者が言ってたわよ。それも書くかどうかすら怪しいらしいし」

イリヤ：「……………クツ、なんか初めて大河に負けた気分」

大河：「ま、ここの作者は基本イリヤちゃんびーきだけだね。嘘はいかんよ、嘘は」

イリヤ：「……………はあ、じゃ、ちやつちやつとすめまーす」

大河：「うっわー。見るからにやる気ねー!!!!??」

イリヤ：「えー……………とりあえず、聖杯戦争が始まります、以上」

大河：「いやいやいやいや。もっと何か言つことあるでしょう!!!!??」

イリヤ：「は?どんな?」

大河：「だから、例えば・・・イリヤちゃんの本格参戦とか、あのお待さんの登場とか暴君とか、色々あるでしょう!!!???」

イリヤ：「じゃ、それでいいんじゃないっすかー？大河がぜんぶいっただし。うん、これにて終了」。第二章をお楽しみに〜」

大河：「は？ちょ!?!え？本当に終わっちゃっわけ?」

イリヤ：「大河、さいごよろしく〜」

大河：「うえ!?!?・・・えーと、それでは、また第二章でお会いしましょう。私達も、皆さんに会える日を楽しみにしています。では一先ずになります。ばいばい!」

第一章・完

第四話 　く紅き瞳の誤算・後編く（後書き）

作者は内陸にいたので停電くらっただけなのですが、沿岸部を見ると心が痛みます。一日も早い復興を願っています。

・・・さて、そういう訳で、第一章完結です。何か説明くさくて、少しくどいかなーとも思いましたが、そのまま続行。これでも一応書き直しかしたんですが、あんまり変わっていないという。

まあ、皆さんの予想通りの結果になったとは思いますが、色々説明してないことも多々あったりします。一応、一つだけ言っておきますと、志保は色んな意味で舞台を仕掛けていた訳なのですよ。ええ、色々。えー、その他につきましては次回、第二章第五話にて明らかにするのでご了承ください。下手すりゃ4月ですけどね、次。つか可能性大です。

・・・いつ完結するのかな、コレ。

というか、ホント、この作品が完結する頃には復興が進んでいて欲しいですね。

では、また次回。

第五話 　く明かされた事実く（前書き）

お待たせしました。

第二章開幕です。

衛宮邸にて、二人の魔術師が対峙する。

彼女達の目的は果たして？

タイトルは変更しましたが、以前と中身は同じです。

では、どうぞ。

第五話　　明かされた事実

すっかり夜の帳が下り、多くの民家から人工の光が途絶えた深夜。周囲の家々の光が次々と消えていく中で、衛宮邸の居間からは、未だに煌々と光が漏れ出していた。

「・・・さあ、洗い浚い白状してもらいましょうか？」

「お、お手柔らかにお願いします・・・」

人影は四つ。

居間のテーブルを挟んで、凜と志保が座っており、各サーヴァントはその後ろに控えている。

ここで妙なのは、家主である箒の志保が萎縮しており、客人である箒の凜が眉間に深い皺を刻み、怒り心頭といった様子で志保を睨んでいる事だ。

実はこれには、ちょっとした訳がある。

時を遡り、約一時間前の穂群原学園校庭。

そこで起きた殺し合いの詳細は省くが、問題なのはランサーが去った後に残った二組。要するに、凜と志保だ。

この両者が顔見知りなどではなく全くの無関係だったなら、そのまま第二戦へ移るなり撤退なりするのだろうが、残念ながら二人は顔見知り。それどころか友人関係なのだから、尚更性質が悪い。

重苦しい空気が校庭に充満する中、凜は結果的にせよ助けられた立

場であるのにも関わらず、執拗に志保に尋問をしていた。

とはいえ、それも無理からぬ事。

志保が魔術師である事を隠していたり、いきなりランサーとの戦いに乱入してきたり、そもそも志保が戦いを仕組んだ様な節があったりと、問題事項ばかりが乱立しているのだから。

ところが、十数分もの時を掛けて凜が引き出した情報は、意外に少ない。

その理由は、志保が魔術師である事を隠していた件についての釈明に、多くの時間を割いたからだ。

釈明といっても、志保には出生の秘密や魔術の師匠の存在、その他諸々事情があった為、凜に言ったのは素直な謝罪と簡単な事情説明程度ではあったが。

一応、その甲斐あつてと言つべきか、凜は表面上は怒りを治めた様に見えた。

だが、納得はしていないようで、いつそ清々しいほどの意地の悪そうな笑みを浮かべて、こう宣つた。

『じゃ、続きはアンタの家で』

思わず志保は耳を疑つた。

確かに現在の季節は冬であり、更に日が落ちて久しいこともあつて肌を刺すような冷気が辺りを満たしている。こんな寒空の下で長々と話をするなど互いに不利益でしかないのは自明の理だが、凜が志保の家に行くとなると少々事情が違つてくる。

魔術師の家というのは、一種の不可侵領域である。基本的に魔術は秘匿するモノであり、普通の価値観を持つ魔術師であれば、決して己の領域を侵される事を許しはしない。

中でも、工房は一般人も簡単には立ち入らせないほど重要なのだ。

そういつた工房には、攻勢魔術や迎撃用の仕掛けが施されている場合がほとんどだ。更に言えば、工房のみならず家屋全体に仕掛けが張り巡らされている事も少なくない。

それを、凜が知らない筈がない。

あるいは、凜が自宅に招き入れるというのであれば、まだ納得出来る。

先刻も言ったが、工房とは主である魔術師が支配する領域だ。様々な防衛機構が働く一流のソレは、城とさえ呼べる代物となる。

故に、工房攻めは城攻めと同義。決死の覚悟をもって挑めと言われる程だ。

つまり、志保にしてみれば凜の自宅は敵地でしかなく下手な行動も許されないのだから、凜にとっては自宅へ誘い込む方が好都合なのである。

だというのに、凜はその逆、態々敵地である志保の自宅へ自らが赴くと言っている。

そこにどんな思惑があれ、自ら進んで敵の本拠地へ乗り込んでいくなど正気の沙汰ではない。

志保が困惑顔で視線を彷徨わせっていると、凜は芝居がかった仕草で肩を竦め、慇懃無礼な口調で告げた。

「なに固まってるのよ。まあ、どんな事を考えているか察しはつくけれど……いい？私がアンタにやられる可能性は、限りなく低いのよ」

「……は？」

「大体ね、私をどうにかしようっていうならランサーを止める必要はなかった訳だし、それこそ、アンタは何時でも不意打ち出来た。目的や思惑までは分からないけど、少なくとも殺される心配はない、違つかしら？」

「む、むう……」

一気に捲くし立てられ、志保は弱々しく唸る。

何も反論出来ない訳ではないのだが、凜の言葉の正当性　　とい
うよりは打算　　も理解できる為、中々言葉が出てこない。
というか、そもそも志保が反論する必要は無いわけだが。

「それに、アンタからそれ相応の対価を巻き上げ
っあ……」

その瞬間、つい先刻まで殺伐とした雰囲気にも包まれていたとは到底
思えない程に白けた空気が、夜の校庭に流れた。

「……遠坂」

「いや、そのっ、待って違うのよっ!？」

今更何を言おうと後の祭り。どんなに取り繕おうとも、中空を彷徨
う凜の視線が何よりも雄弁に真実を語ってくれる。

「成程、それが本音ですか」

それまで傍観に徹していたライダーの口から辛辣な言葉が漏れた。瞳は見えないが、さぞ冷たい視線を凜に向けていることだろう。

「いいい、いや、何言っているのよ！？私は、ただ・・・」

凜の弁明が、闇の中に虚しく溶けていく。

最早、是非も無し。

明らかに動揺し、取り乱している凜の言葉を誰が信じられようか。

まあ、先の妄言は8割方本気だったりするのだから、自業自得とも言えようが。

「・・・・・・・・・・えーと」

何故か、ライダーに必死に言い訳をする凜を尻目に、志保の視線は自然と赤い英霊へと向けられた。

その視線に込められる意味は、当の志保もよく分かってはいない。同情か憐憫か。いずれにしても、本来敵に抱くべき感情ではないだろう。

「・・・・・・・・・・アーチャーだ」

赤い英霊、アーチャーは目を瞑ったまま苦汁の表情を浮かべて答えた。

出来ることならば、アーチャーとて凜の弁護をしたい所なのだろうが、先の妄言は流石に看過できなかつたらしい。とりあえず、この件については蚊帳の外にすることにしようだ。

「・・・・・・・・・・大変だね。こっちに来る？」

「嬉しい申し出だが、丁重に断らせてもらおう。あれで、彼女も中々優秀だ……あの”うっかり”が玉に瑕だがね」

「ああ、それは分かる。遠坂はそれさえ無ければねえ。でも、それが無いと遠坂じゃないような気もするし……難しい問題だね」

「……そうだな。確かに、”うっかり”がない凜は何か味気ないかもしれない」

「うん。いわば、ミルクの入っていないミルクティーのような」

「……って、なに和やかに会話してんのよアンタ達は!？」

志保とアーチャーが、まるで十年來の友人の様な気安さで談笑していると、凜が軽快に会話に割り込んできた。どうやら、弁解が一区切りついて漸く現在の混沌とした状況に気付いた為、慌てて乱入して来たらしい。少し息切れをしている様子を見ると、ライダー相手に相当ヒートアップしたようだ。

「別に、ただの世間話だが？」

「ねえ？」

惚けるアーチャーと、相槌を打つ志保。

実に中睦まじげだが、当然ながら、それは凜にとってあまり面白い光景ではない。

凜は、志保とアーチャーを指差し、目尻を吊り上げながら叫んだ。

「だから！何でそんなに仲良くなってるのかって言ってるのよ！！」

志保とアーチャーは顔を見合わせ、揃って溜息を吐き、多分に呆れを含んだ瞳で凜を見やった。

「誰のせいだと………」

「息ぴつたりっ!?!」

と、そんな紆余曲折の果て、遂に不毛な言い争いを終わった。

決定的な一言はアーチャーの

『やれやれ、私のマスターがそれ程の守銭奴とは思わなかった』

その一言を聞いた瞬間、凜は烈火の如く怒り狂ったのだが、志保に羽交い絞めにされて動けなかった。

反面、凜にも思うところがあったのか、それが切欠で事態は収束へ向かい、凜が志保の家を訪問することが決定した。

ちなみに、対価の譲渡はアーチャーとライダーの監視の下で行われることになった。

そして、現在に至る訳である。

「あの・・・何から話せばいいものか・・・」

「いいから気にせず、ゆっくり、丁寧に、分かり易く、簡潔に話なさい。大丈夫、決して怒ったりはしないから」

「えー・・・」

凜は、先刻の失態を気にしてか、その言葉とは裏腹に鬼気迫る雰囲気纏っている。

志保も、その気を感じて下手な事は言つまいと考えを巡らせるが、逆に何をどう言えばいいのか考えが纏まらず言葉が出てこない。まして、もう怒っているじゃないか、なんて軽口を叩ける筈もない。そうして、見事な悪循環が出来上がっていた。

志保の額には汗が浮かび、凜の苛立ちが膨れ上がっていく。

そんな時、これでは埒があかないと思ったのか、思わぬところから助け舟が出された。

「凜、あまり照れ隠しで睨んでやるな。それでは、話したくても話せまい」

「誰も照れてないわよ。っていうか、やけに志保の肩持つじゃない?」

背後から掛けられた言葉に、凜は苛立たしげに答える。

照れてないとは言うが、アーチャーを睨む顔は赤く染まっている。

「ま、まあまあ」

凜とアーチャーの間に不穏な空気を感じて、間に入ろうとした志保だったが、凜からは殺気が込められた視線を受け、アーチャーには勞しげな視線を向けられる結果となった。

大人しく引き下がった志保は、盛大な溜息を吐いた。

このままでは、話が進まない。

(これは、私から話さないと始まらないよね、やっぱり……
……はあ、気が重いなあ)

志保は、零れ落ちそうになる溜息を呑み込み、意を決して語りだした。

「遠坂、いいかな

」

志保が大凡の事情を語り終えたのは、それから数十分後だった。これ程に時間が掛かったのは、凜が改めて志保の出生の事情を問いただした為である。

「そう。つまり志保は一世代目の魔術師で、あの”衛宮切嗣”の養女。で、その養父から聞いて、聖杯戦争のことは知っていた、と」

確認の視線を向けてくる凜に対し、志保は首肯で返す。それを見届けた凜は、志保に視線を合わせたまま続ける。

「私より早くマスターになったアンタは、数日前にランサーとそのマスターと交戦し撤退。それが、ランサーとの会話の真相、でいい

のかしら？」

「うん」

凜は、顎に手を添えて何事かを考えている素振りを見せた。数秒後、考えが纏まったのか保留にしたのか定かではないが、不意に凜が口を開いた。

「まあ、今はそれを信用してもいいわ。けれど

今まで以上に鋭い視線が志保を射抜く。志保は、緊張からか居住まいを正した。

「学校に結界を仕掛けたのはアンタで、目的は、他のマスターとサーヴァントを誘き出す事。決して、結界を発動させるつもりはなかった。これ、信用してもいいのよね？」

「うん。勿論………というか、遠坂には信用して欲しいな」

そう、今回の一件は、全て志保が仕組んだ事だったのだ。

穂群原学園に仕掛けた結界はライダーの宝具。

ブラッドフォート・アンドロメダ
『他者封印・鮮血神殿』

これは、凜とアーチャーの推測通り、内部に取り込んだ人間を溶解させ魔力を吸収する広域結界である。

本来の用途は前述の通り魔力吸収なのだが、志保の目的は違った。結界は、あくまでも獲物を誘い込む餌に過ぎない。

つまり、異常な気配を振りまく結界を利用し、それに気付いて調査しに来たマスターとサーヴァントを確認しようとしたのだ。更に、

あわよくば複数のマスターが集い潰し合ってくれば尚良し、とも思っていた。

少なくとも、凜というマスターがいる事は判明しており、それは他のマスターにとっても周知の事実だろう。ならば、凜を狙ってきたマスターと凜が交戦、または結界に気付いて調査する可能性も考えられる。

そう上手く事が運ばなくとも、確実に凜のサーヴァントは確認出来るのだから、十分に意味はある。

まあ実際は、誘き出された者達が自分達とは関係のない外来の魔術師で、組み易しと判断したなら躊躇い無く不意打ちで殺すつもりでいたのだが。

件の凜だが、寂しげな微笑を浮かべる志保を前にすると、とても直視など出来そうもなかった。

その微笑の威力は抜群で、然しもの凜でさえ居た堪れない心地にさせられる。

(ぬっ・・・アレは卑怯でしょ・・・けど、そう、ね)

魔術師として考えるなら、志保の言い分は理解出来る。かといって、それだけで信じるのは早計というものだ。事が事だけに、慎重にならざるを得ない。

聴取によれば、志保は一世代目の割りに魔力は十全で、結界に頼る必要はないらしい。その言は一先ず置いておくとして、仮に結界に別の目的があったとしよう。

もし、魔力吸収が目的だったとしたらどうか。

(・・・それはないでしょうね。私がいるって分かっていたんだから)

志保は、凜がマスターであると知っていた筈である。であれば、凜が妨害する事は容易に予想出来ただろう。なら、学校ではなく別の場所に結界を仕掛けた方がいい。学校には大勢の人間はいるが、リスクを考えれば、学校に固執する必要はない。例えば、新都であれば相応しい場所を見つけるのは容易いだろう。とすると、魔力吸収が目的という事は考え難い。

他に考え得るとすれば、戦闘時に結界を発動し中の人間を人質に取るという用法。

(・・・これもない、か。それなら、標的は私だろうし)

一般人を巻き込みたくないという偽善心を持つ魔術師もいるだろうが、それは少数派だろう。大多数の魔術師は、一般人の被害を顧みない外道ばかりなのだから、そういった魔術師が相手なら人質は意味を成さない。効果があるのは凜ぐらいだが、だとしたらランサーを邪魔する必要はなかった。凜を倒したいなら、志保は既に千載一遇の好機を逃している。

これも、可能性から除外してもいいだろう。

(後は、もう何も思い浮かばないわね。なら・・・)

「・・・分かったわよ、アンタを、志保を信用する・・・変なこと疑ってごめんなさいね」

「遠坂・・・」

頬を朱に染め、恥ずかしそうに謝罪の言葉を述べる凜に、志保は安堵の笑みを浮かべた。

「な、何よ」

「ううん。ただ、嬉しかっただけ」

微笑を浮かべる志保を目にした凜は、ばつの悪そうな表情で顔を逸らした。

今度は、気恥ずかしさで志保の顔を直視出来ない。

(ツク、何でコイツはこんなに………せつかく信用して………あれ?)

ふと、凜はある事に気付いた。いや、気付いてしまった。

「……そういえば、それが本当だったとしたら、私は

」

「まんまと罠に嵌った事になるのだろうか、私達は」

校庭での妄言以上の失態に。

「
ッ！」

凜は勢いよく振り返り、アーチャーを般若もかくやという形相で睨み付けた。

身体は小刻みに震え、頬に嫌な汗が伝う。

今、凜の体を支配しているのは怒りではない。凜にも御しきれない、得体の知れない恐怖だ。

思い出せば、思い出せば、もう後戻りは出来ない。思い浮かべてはいけない。思い出せば、もう後戻りは出来ない。

それを判っているのに、凜の思考は勝手に答えを導き出そうと働いてしまう。

凜とて、自分達が志保の罠に嵌った事は、疾うの昔に理解している。だが、そうではない。違うのだ。

凜が恐れているのは、そんな事ではなく

凜が思考の海に沈んでいると、アーチャーは、口元には皮肉げな笑みを浮かべ、志保達に聞こえないように呟いた。

「君は、昼になんと云ったのだったか」

「あ」

直後、凜は声にならない悲鳴を上げ、頭を抱えて悶絶した。

その顔色は、赤くなったり青くなったりと安定しない。傍から見ている分には面白いのだが、本人にしてみれば、堪ったものではないだろう。

実際、原因は大した事柄ではなく些細な事だったのだが、様々な出来事　　ほぼ自爆　　を体験した凜の精神は消耗しており、それらの要因が重なって耐え難い羞恥が凜の心を苛んでいるのだった。

「と、遠坂!？」

「・・・どうかしたのですか？」

突然の奇行に、志保とライダーも心配そうに様子を窺う。

「ク、いや何。君達は心配する必要は無い。直に立ち直る」

「そ、そう？」

アーチャーは、凜の奇行を実に愉快そうに見つめていた。悪意はないが、してやったり、というように口元が歪んでいる。それでいて邪気を感じないのは、その雰囲気が悪戯をする子供に似ていたからか。

尤も、悪戯というにはやり口が陰湿に過ぎるが。

暫くして満足したのか、アーチャーは己がマスターを視界から外し、志保に視線を合わせた。

「私からも訊きたい事があるのだが、いいかな？」

「え？・・・うん。私に答えられることなら」

その唐突な言葉を不審に思いつつも、志保は頷いた。

正直凜が気になるが、声を掛けるのも躊躇われる。まして、こんな異様な状況で黙りこくっているのも気が進まない。選択肢は、有って無いようなものだった。

「君が私達の前に現れた時の事だ。凜はおるか、私やランサーにも気取られずにあの距離まで接近し、空から舞い降りるといふ芸当。どうすればあの様な事が出来る？」

アーチャーの瞳は真剣で、殺気こそ込められていないものの、圧倒的な威圧感を志保に与える。

志保は一呼吸を置き、暫しの思案の後、静かに口を開いた。

「アレは、私の魔術礼装を使ったんだ」

「魔術礼装、だと？」

「そう。といっても、所詮は完成品を作るために出来た試作品なんだけどね。アレは、空中に簡易的な足場を作る礼装でね。私達が屋上から監視していたのは知ってるでしょ？あそこから凜たちのいた地点まで行くには、地上を走ったんじゃ遅いから、礼装を使って一直線に跳んで行ったんだ。私の跳躍力なら、二つ三つあれば十分だしね。気配を感じなかった方は………大体見当ついてるんじゃない？」

「……結界、か」

「ご名答。よく判ったね」

志保は、目を丸くして感心した様にアーチャーを見つめた。

「着地の折、一瞬だが見えた。それに、これでも生前は様々な魔術を見る機会があったのでね。まあ、君の結界は今まで一度もお目にかかったことは無いが」

「それは……褒め言葉として受け取っていいのかな？」

「さて、どうだろうな」

答えをはぐらかされた志保は不満顔。

アーチャーも、あまり表情に変化は見られないが、どことなく楽しげな雰囲気を漂わせている。

といっても、アーチャーは志保の言を全て鵜呑みした訳ではない。

むしろ、全てを疑ってかかっているくらいだ。何しろ、志保の口から開かされた事実とは、要は彼女の自己申告でしかない。何の証拠も提示されていないのだから、それを信じろというのも無理な話だ。無論、志保もそのつもりで話しているのだろう。

凜に明かした内容についても、ある程度は信用してはいるものの、何かしらの思惑が隠されているのだろうと勘繰っていた。まあ、それはほぼ的を射ているのであるが。

アーチャーの抱く志保の印象とは、強かな面を持つ奥底を見せない少女、というものだ。少なくとも、油断ならない相手と認識していた。

それ故の問答であったのだが、不思議と穏やかな気を感じていることに、密かにアーチャーは驚いていた。本来なら、剣呑とした気と視線が交錯してもおかしくない事柄であるにも関わらず、自分も、恐らくは志保も、そんな乾いた心地はまるでしなかった。

奇妙といえば奇妙ではある。何れは、その不可解な感覚を究明する必要が出てくるかもしれない。が、現時点でいくら思索しても、意味もなければ益も見込めないのは確かだろう。

ならば、とアーチャーは何所か心地よいその感覚に、今は身を任せようと思つたのだ。

その二人の様子を傍から観察していたライダーは、そんな二人を不審げに見つめながらも、心に懐かしく温かい何か広がるのを感じていた。

後にライダーは、まるでその光景は”何だかんだと言いながらも仲の良い兄妹”のようであったと語るのだが、それはまた別のお話。

だが、その穏やかで温かな時間は、唐突に終わりを告げる。

「あ、そうだ。忘れるところだったわ」

「うわ！？と、遠坂！？」

いつの間に復活したのか、凜がテーブルに手を着き身を乗り出して志保に迫った。

驚いた志保は、自然と後退り、凜との距離を離す。その表情が引き攣っているのは、気のせいではあるまい。

「と、とお」

「対価！！まだ対価の話は済んでないわ！！！！」

志保が言葉を紡ぎ終える前に、遮る様に凜が言った。

その言葉を聞いた途端、再び白けた空気が居間に充満した。

「あー・・・対価、対価ね。覚えてたんだ」

悶絶している間に、いったいどういう経緯を経て思い至ったのはかはともかく、現状の凜の頭は対価の事で一杯のようである。もしかすると、現実逃避する為の手段なのかもしれないが、志保にとってはいい迷惑だ。

「当然！んぐ、そうね。何がいいかしら・・・？」

けれども、これはある意味都合な展開ではあった。

いや、正確に言うと、凜が悶絶する直前に条件は揃っていたのだが。一応、凜との話し合いを終えた現在、志保の目的は別にある。

「時に遠坂、言峰教会って知ってる？」

「・・・何よ、藪から棒に」

凜は、胡乱げな瞳で志保を見やる。

「いや、遠坂はサーヴァントを召喚した事を監督役に報告したのになって。した方がいいのかな？」

「はあ？・・・そりゃ、一応するのが決まりなんでしようけど、やめときなさい。あの似非神父に会ったって損するだけよ。私も報告してないし。ま、どうせアイツは気付いているんでしようけど」

「そっか、だよな。」言峰” って何か不気味だし、何を考えているのか理解出来ないし。凜も、言峰の妹弟子なんて気の毒に」

「そうよ、あんな嫌味なヤツなんて

ん？」

そこで凜は、はたと気付く。今、志保は何と言った？

凜は、一縷の望みを込めて、恐る恐る尋ねた。

「志保？・・・アンタ、まさか・・・・・・綺礼と知り合いだったりなんか、しないわよね？」

「いや、知り合いだけど？言峰も、私が魔術師だって知ってるよ？」

志保は、然も当然といった風に気軽に答えた。

凜は、その言葉を聞いた瞬間硬直した。

言峰綺礼は、凜の兄弟子である。その言峰と志保は知り合いで、互いの正体も知っているらしい。だが、凜は志保が魔術師であると知

らなかった。

つまり、その意味するところは

「
　　・ ・ ・ つああああのお、ド腐れ似神父があああ
あああ！……！！！！！！」

その夜、とある教会にて壮絶な罵声が響き渡る。

少女達は神父と対峙し、何を思うのか。

そして、少女達は鉛色の巨人と邂逅することになる。

それは、最強のサーヴァント。

その邂逅がどんな結末に終わるのかは、まだ誰も知らなかった。

第六回 偽・タイガー道場

イリヤ：「はい。では、六回目、第二章初のタイガー道場始まるよ」

イリヤ：「で、いきなりなんだけど、今回は少し短めに終わります。話すこともあんまりないからね」

大河：「ソレは何故に？」

イリヤ：「別に、作者が眠い目を擦りながら書いているからじゃないそうよ。本編自体が思ったより長くなったかららしいわ」

大河：「ふん。で、今回は何の話？」

イリヤ：「えーと・・・ああ、凜の扱いが雑というか、アレな感じだったことについてだって。といっても、大したことじゃないんだけど」

大河：「というところ？私とヒロイン交代とか？」

イリヤ：「違うわ。第一、凜はこの作品ではヒロインじゃないし。一言で言えば、単なる作者のノリだって。凜が道化を演じたことについては、何か自然とそうならしいわ」

大河：「ん？作者つてもしかして・・・」

イリヤ：「ああ、作者は凜のことは嫌いじゃないそうよ。むしろ好きなヒロイン・・・正確に言えば凜ルートが好きなだけみたいだけ」

大河：「え〜・・・」

イリヤ：「何が不満なのよ。まあ、いいわ。ともかく、凜ファンの皆さんごめんなさい。作者は深く反省している・・・かもしれない。少なくとも、これ以上扱いが酷くなることはありません・・・多分」

大河：「本当に反省しているなら、書き直すだろうしねー」

イリヤ：「大河、一言多い。えー、そんな訳で、これにて終了です。また、見てくださいね」

大河：「え？もう終わり？大したオチもなく？・・・つてああ、いつも無いか」

イリヤ：「じゃ、ばいばーい」

終わり

第五話 〽明かされた事実〽（後書き）

後悔は、してません。

凜フアンの皆さん、本当にごめんなさい。イメージ違つかもしれませんが、何故か無性に書きたくなっただんです。

何はともあれ、凜の悶絶の意味は分かりますよね？まあ、あそこまで大袈裟なりアクションは普通じゃないでしょうけど、凜ってプライド高そうですし、大目に見てもらえると助かります。

次は戦闘（バトル）、そしてあの人が漸く登場します。お楽しみに。では、また次回。

第六話 〈最強と最優・前編〉（前書き）

今回は、最後の部分がかかなり急いだ形になってしまいました。納得出来ない所はあるかもしれませんが、そこは第七話で説明する予定です。

尚、戦闘はほとんど、というか戦闘描写はないです。すみません。

内容は以前の第五話の中編です。

教会からの帰り道、彼女達は雪の少女と異形の怪物に出会う。

そして、遂に最後の・・・

では、どうぞ。

第六話 最強と最優・前編

深夜。

新都郊外にある冬木市唯一の教会、言峰教会の門前に二人の少女が佇んでいた。

「じゃあ、行くわよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・了解」

溢れ出しそうになる怒気を必死に押し留め、扉に手を掛けていた少女はアーチャーのマスター、遠坂凛。

若干憂鬱そうな面持ちで凛の後ろに立っているのは、ここに至るまでの原因を作った少女、衛宮志保。

いや、原因というよりは、元凶という言葉が相応しいかもしれないが。

彼女達が言峰教会へと足を運んだ目的とは、サーヴァントを召喚した事の報告と聖杯戦争への参加表明。

というのは建前で、本当の目的は各々別にある。共通しているのは、どちらも酷く個人的な理由であることだろうか。

凛は、小さな呼気と共に腕に力を込める。

扉から重苦しい音が鳴り、徐々に押し開かれる。

その中は広く、荘厳な礼拝堂となっていた。

凛と志保は目的の人物を求めて辺りを見渡すが、どこにも姿は見えない。

とはいえ、明かりが灯されているのだから無人という事はないだろ

う。

恐らく、奥の私室で何かしらの仕事をしているのだと思われた。まあ、こんな夜更けに尋ねてくる人間など、本来はまずいないのだから無理もない。

凜は、面倒なのか奥に行くのが嫌なのかは判らないが、痺れを切らしたように声を大にして叫んだ。

「綺礼！いるんでしょ、さっさと顔を見せなさいっ！！」

「・・・いや、遠坂。いくら誰もいないからって、教会でそれはどうかと思うんだ」

志保から非難の視線を浴びても意に介さず、堂々としている凜。どうも苛々が頂点に達しているせいか、上手く自制が出来ないらしい。

「いいのよ。こちらら魔術師、教会の教えなんて知ったこっちゃないわ。第一、どうせ綺礼しかいないんだから構わないでしょ。それに、何よりもアイツ自体が問題の塊

「まったく、騒々しいな。再三の呼び出しに漸く応えたかと思えばそれか。」常に優雅たれ”はどうした、凜「

それは、唐突に現れた。

まるで始めから其処にいたかのように、魔術師二人に気取られる事

なく祭壇の後ろからゆっくりと歩み出た。

黒い装束に身を包んだ長身の男。得体の知れない重圧と存在感を放つその男こそ、言峰教会の神父”言峰綺礼”であった。

凜は、唐突に現れた言峰に慌てる様子も無く、相手を射殺さんばかりの鋭い視線で睨み付けた。

「・・・今はそんなことどうでもいいのよ。アンタ、何か私に言うことがあるんじゃないの？」

「ふむ。差し当たってお前に用向きはなかった筈だが。唯一の懸念事項もたった今解消されたのだからな。しかし・・・そうか

」

言峰は凜の後方にいる少女へと視線を合わせ、合点がいったという風に頷き口元に歪な笑みを浮かべた。

「お前か、荒耶志保。なるほど、遂に魔術師であると凜に知られたか」

「・・・まあ、ね」

言峰のその言葉に、志保は苦虫を噛み潰した様な表情になる。

気のせいなのだろうが、言峰の視線が自分を嘲笑っているかのよう

に感じられて、酷く不快だった。

「それよっ!!」

凜は言峰に歩み寄り、怒声を響かせる。

「ちよつと綺礼、何で志保が魔術師だつて事を隠してたのよ。事と次第によつては」

「愚問だな。凜、お前なら分かつていよう」

「つな！？ア、アンタねえ・・・まさか本気で私に」

歪な笑みを深める言峰に、然しもの凜も言葉を詰まらせる。

言峰と十年来の付き合いである凜にとって、その言葉の意味を推し測るのは決して難しくはない。

それが正しいのなら予想通りではあるとはいえ、凜にしてみれば最悪の答えだ。

言峰は、そんな凜を尻目にただ淡々と言葉を続ける。

「・・・フ、そうだな、我々の間でとある契約があったとでも思つておけ。内容は契約に反するので教えられんが、どうしても知りたければ荒耶志保に直接尋ねるがいい」

「おい、勝手に匙を投げるな。契約の話はともかく、正直に今の状況を楽しむ為だと言えればいいだろ」

話の矛先が自分に向いた途端、すかさず志保は口を開いた。

契約云々の話は事実ではあるのだが、凜に契約の内容を告げるのは少々不味い。自分や言峰の正体を明かすことになる可能性があり、言峰と出逢つた出来事も関係しているので説明は面倒極まりなかったのだ。

なので、志保は話の矛先を言峰に戻すことにしたのである。

言峰の真意は測りかねるが、志保の言は大凡間違つてはいないだろう。

少なくとも、言峰綺礼の性格が救いようがない程に捻じ曲がっているのは間違いないのだから。

「へえ。やっぱり、どういふことか詳しく聞かせてもらおうかしら、綺礼？」

先刻とは打って変わって、笑みを浮かべる凜。が、それは普段の凜からは考えられないような、凄惨で昏い笑みだった。

流石の言峰もこの状態の凜を簡単にあしらうことは出来ないのか、観念して相手をすることにしたようだ。

自分がそう仕向けたとはいえ、手持ち無沙汰になってしまった志保は、取り留めもない事柄をつらつらと考えることくらいしか暇を潰す手段が無かった。

(誘導は成功したけど・・・というか言峰のヤツ、今の凜との問答すら楽しんでいような気がする・・・やれやれ、何だつてこんなヤツが聖杯戦争の監督役なんだか。ある意味、打って付けの人材だったというのは分からないでもないが、最悪の人選だよなあ。能力はともかく、性格と立場に問題大有りだ)

何が問題なのかといえば、大まかに言えば二つ。

性格や思想は言うに及ばず、魔術協会から派遣された監督役、それが神父というのが問題なのだ。

魔術師が所属する大規模且つ代表的な組織を”魔術協会”といい、一 大宗教の裏側、平和に暮らしていれば一生関わらないですむであろう教会のもう一つの顔を、”聖堂教会”という。

魔術協会と聖堂教会は、形の上では手を結んでいるが隙あらばいつでも殺し合いをしている物騒な関係でもある。

教会は異端を嫌う。

人でないヒトを徹底的に排除する彼等の最大の仮想的といえ、言わずと知れた人外”吸血種”が挙げられるが、広義では魔術を扱う人間も含まれる。

それは教会に属する人間であろうと例外ではない。

何でも、奇跡、神秘を扱うのは聖人のみでなければならず、それ以外のモノは全て異端なのだそうだ。

聖堂教会とは、そういった異端を排斥し人の手に余る神秘を正しく管理する為にある。

彼等は、代行者という悪魔退治を専門とする者達、言ってしまうえば武闘派の異端審問官や各教会が有する騎士団等を用いて、異端を強制的に排除しようとする。

言峰綺礼も、あるうことかその代行者なのである。しかも、代行者として一流の力を誇っているというのだから尚更性質が悪い。

何故そんな存在が成り立っているのかといえば、二大組織に其々の思惑があるからとしか説明しようがない。

公式な二重スパイという表現は少し異なるかもしれないが、何にせよ言峰綺礼という存在自体が傍迷惑であることに変わりはない。

ハッキリしているのは、今ここで志保がどんな不満を抱こうと事態には何ら変化がないという事だ。

(・・・にしたって、他に人がいなかったのかな。そりゃ、私だって言峰とは少なからず因縁はあるけどさ・・・・・・はあ、これも縁ってやつなのかなあ)

「だから!!そうじゃなくって

」

志保の思考は、凜の怒鳴り声によって中断される。

どうやら、まだ決着がついていないらしい。

話を聞く限り、言峰は既に凜の反応を楽しむ為だったと認めたらしく、現在は凜の糾弾のみ行われているようだ。といっても、言峰はのらりくらりと受け流し、全く堪えた様子は無く、むしろ刻々と変わる凜の表情を見て楽しんでるようにさえ見える。

いずれにせよ、これでは遅々として話が進まない。

かと言って、志保が話に割って入っても巻き添えをくうことは目に見えている。

どうしようかと志保が逡巡していると、何を思ったか言峰が強い口調で会話を遮った。

「凜、お前の話は判ったが、用件はそれだけか？」

「それだけか、ですって？アンタねえ、そういう問題じゃな」

「確かに、私の望みが含まれていた事は認めるが、契約の件は決して嘘ではない。荒唐志保も否定しなかつただろう。それとも、まだ何か不服な事があるのか」

「ちよ、アンタ」

「遠坂、契約の話は本当だし、その辺で矛を収めてくれない？どの道、言峰にはこれ以上何を言ったって無意味だよ」

志保の言葉を受け、凜は押し黙る。その言葉通り、言峰を言葉で降すのは不可能だろう。契約について志保に問い質したくはあったが、恐らく口は割るまい。魔術師同士の契約となれば、どんな事情があるうとそう易々と口に来る事柄ではないだろうから。

例外があるとすれば、契約の内容を口にする事で志保に利益がある

場合だろうが、もしそうなら先に話していてもいい筈だ。

「……チツ……仕方ないわね。綺礼め、いつか必ず……」

「……わかったわよ」

凜は渋々という風に、口惜しげに呟いた。

「差し詰め、建前上のお前の用件はマスター登録といったところか。荒耶志保もそうなのだろう？」

「……ええ、そうよ。あと……」

不承不承といった様子で答えた凜は、徐に志保へを視線を巡らせる。

「なんだ、お前まで私に用向きがあるのか、荒耶志保。まあ、そうでなくばお前がここに足を運ぶことはないだろうがな」

「……ああ、そうだな」

「よく言う。始めから判っていただろうに……」

やはり、言峰を相手にすると数年がかりで教育された女口調も、自然と男口調に戻ってしまう。

何故戻るのがなどは志保も理解していないが、言うなればどうしようもない苛立ちの表れ、だろうか。

結局、どれほど立場と関係が変わっても、この二人の反りは合わないのだろう。

志保は、機嫌が悪そうに答えると、ゆつくりと言峰へと歩み寄る。その途中、凜と擦れ違った直後にふと振り返り、言葉を掛ける

「遠坂」

「なに　　ッ!？」

何気なく返答した凜は、思わず息を呑んだ。瞳が、違う。

宝石の如く綺麗だった紅の双眸は、今や妖しい血色の輝きを放っている。

その表情からは感情を読み取れず、燐光を帯びた瞳は人々に恐怖を抱かせるには十分な迫力を持っていた。

今まで、どうして気付かなかったのか。

まあ、言峰に注意が向いていたからというのは大きな要因だろうし、志保に視線を送った時も瞳を見てはいないのだから、気付かなかったとしても仕方ないのかもしれない。

だが、志保の双眸は、勘違いなどではなく、確かに光っているのだ。それは偽りようのない事実だ。

その異様、それはまるで

「……ごめん、遠坂。少し言峰と話があるから、先に行っていてくれない？」

志保は、硬直してしまった凜へ優しく微笑みかける。

その表情は、どこか悲しみを堪えているようにも見えた。

そんな微笑を向けられては、凜も黙って従うことは出来ない。

「……お断りよ。貴女に指図される謂れはないし、ここで

待たせてもらおうわ。それとも、私に聞かれては不味い話でもあるのかしら？」

「え……まあ、私はいいけどさ」

一瞬、きよとんと目を丸くした志保だったが、直ぐに苦笑を零し言峰へ確認の視線を送る。

「構わん。凜に知られて困るようなことなどない」

「そうか？なら、いいけどな？」

意味深な言葉を発し、志保は言峰へと向き直った。

「それで、用件とやらは何だ？出来るなら、手短に頼む。私も暇ではないのでな」

「ああ、そう時間は取らせない。訊きたいことは二つ。まず一つ目、私達の他にマスター登録をしにここに訪れた人間はいるか？例えば、男装の麗人とか」

「いや、お前達が初めてだ」

志保の問いに、迷うことなく即答する言峰。
その様は自然で、嘘か真か判断がつかない。

志保は、一切表情を変えることなく二つ目の問いを告げた。

「じゃあ、二つ目……最近、この教会で怪我をした人間はいないか？それも、ある程度血を流すくらいの」

「いや、そんなことはない……と言っても人外であるお前には判っているのだろうか？その問いに何の意味がある」

「確認だよ。一応、ここに来なければ確認できなかったからな。けど、人外つてのは納得できないな。少なくとも、お前にだけは言われたくない」

志保は、ここにきて初めて声に怒気を滲ませる。今までの冷淡な声と違い、明らかに怒りの感情が声に表れている。

対する言峰は、その志保の怒気に怯むこともなく淡々とした口調で告げた。

「違う。私達は、ある意味においては同じモノだからな。で、話は終わりか？」

「……………ああ。じゃあ、これで失礼させてもらう。行くう、遠坂」

「え、ええ」

志保は用済みとばかりに踵を返し、戸惑う凜を伴って出口へと向かう。

言峰は何をするでもなくその後姿を見守っていたが、志保は扉へ差し掛かった時不意に振り返った。

その時、言峰を見据えていた志保の双眸からは血色の光は消えていたが、代わりに並みの人間なら動けなくなるほどの冷淡な光を宿していた。

「言峰、貴様が何をしようと思つたが、敵になるなら殺す。もう一度、今度は私がね」

「フ……そうだな、衛宮志保。肝に銘じておこつて、私も貴様などに殺されるのはご免だ。せいぜい、先に殺されないよう注意するがいい」

「……フン」

暫し睨み合っていた両者だが、志保が再び唐突に背を向けた事で睨み合いは終わりを告げた。

「……何なのよ」

事態の推移についていけず呆然としていた凜は、先に行つてしまつた志保に追いつくべく教会を出ようとして、背後から声を掛けられた。

「凜、荒耶志保に気をつける。ソレは、お前が思っているような存在ではない」

それがどういふ意味かは判然としないが、凜とて志保を完全には信用していないし理解出来ていると自惚れるつもりもない。

だが、自分でも気付かぬうちに心の何所かで気を許している部分はあるのかもしれない。いくら切り替えようと思つても、そうすんなり意識を変えられるものではない。何故なら、つい数時間前まで、志保は凜に取つて素の自分を曝け出せる数少ない友人だったのだから

ら。
それでも、いざその時がくれば遠坂凜はそんな余分な感情は切り捨てるのだろうか。

「……わかってるわよ、そんなことは」

凜は、そう小声で呟くと、一度も振り返らず足早に教会を後にした。彼女等が再びこの教会を訪れる時、その関係はどうなっているのか。それを知る者は、まだ何処にもいない。

「ちょっと、志保。何で先に行くのよ。待っててくれてもいいじゃない」

「あはは、ごめんね遠坂。あそこにあれ以上長居したくなかったから……?」

罰の悪そうな笑顔を浮かべる志保。
百メートル程離れてから凜がいないことに気付いた為　ライダーに指摘された　また凜が怒っているかと思いきや、むしろ物憂げな表情が浮かんでいるように見えて反応に困ってしまった。

「……えーと、遠坂どうかした?……怒って、ない?」

「え?ああ、うん。別に何でもないわ」

そう言う凜だが表情は優れず、何事かを考えているのか志保に見向

きもしない。今度は逆に、凜が志保を置いて歩いて行ってしまった。妙な居心地の悪さを感じる志保だが、ここで離れるのも躊躇われる。せめて、分かれ道までは歩調を合わせる必要があるだろう。

坂道に差し掛かったところで、不意に凜が口を開いた。

「……………ねえ、志保。アンタ、魔眼持ちだったの？」

魔眼。

見るだけであいてに魔術を掛けるといふ代物。魔術師にとっての一流の証。

尤も、人工的な魔眼は魅惑や暗示程度の力しかなく、強力なものは”生まれつき持っていたもの”に限られる。

恐らく、志保の血色の双眸を見てそう思ったのだろうが、果たしてそれが本当に凜が訊きたいことだったのか。

凜の心の内は分からないが、問いに答えないわけにも行かない。先程の言峰とのやり取りの後で、魔術師としてではなく普段と同じ口調で話しかけてくれた事は志保にとって喜ばしく、これ以上空気を悪くしたくなかった。

結局、志保は肝心な部分は喋らず、当たり障りのない受け答えをするのだった。

「……………違うよ。そんな大層なものじゃない。近いモノかもしれないけどね」

「……………そう」

「……………やけにあっさり引き下がるね」

「・・・私が食い下がったら、答えてくれるのかしら？」

「・・・いいや」

これまで、志保は出来る限り凜の問いには答えてきたが、当然、全てを教えた訳ではない。

志保が情報を開示するのは、志保にとって都合がいいか知られても問題ない事柄に限られる。

それくらいのは、凜も判っていた。

それからは、終始無言で歩き続け、いつの間にか坂を下り切っていた。

「休戦協定・・・」

「え？」

凜が立ち止まったので、志保も立ち止まり凜へと向き直る。

「だから、休戦協定を結びましょう。少なくとも、アンタから対価を頂くまでは、ね」

「・・・そういうこと。でも、それだったら今日か、明日までってことになるんじゃない」

「今日はもう帰るわよ。いいじゃない。明日、いいえ、サービスって事で明日一杯は味方って事でいいわよ」

「・・・上から目線」

「何よ」

「いや、うん。判った、それでいこう」

そう言った志保の顔は、晴れやかな笑顔だった。それを見た凜の顔も自然と綻ぶ。

「じゃあ、帰りましょうか」

そうして、揃って歩き出した時だった。

「ねえ、お話は終わり？」

幼い声が、闇夜に響く。

鈴の音のようなソレは、紛れもなく少女のモノだろう。

自然と、二人の視線は声の発生源、坂の上へと引き寄せられる。

そこには

「こんばんわ、お姉ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

言いながら、少女は微笑む。

ルビーの瞳と雪を思わせる銀髪。

あまりにも可憐なその姿は、背後の異形とどこまでも不釣り合いで、悪い夢を見ているようだった。

「何よアレ。桁違いじゃない・・・」

心なしか、凜の声は震えている。
だが、それも当然。

少女の背後の異形は圧倒的だった。二メートルにも及ぶ巨躯、隆々とした鍛え上げられた肉体、そこに在るだけで畏怖を抱かせるソレは、化物という表現こそが相応しい。

「イ リヤ ？」

志保は呆然と少女を見つめるばかりで、まるで彫像であるかのよう
に微動だにしない。

凜はその様子を不審に思いつつもアーチャーに指示を飛ばす。

絶望は感じつつも、それに負けまいとする確固とした気迫が凜の瞳
に漲っていた。

「アーチャー、アレは力押しでどうにか出来る相手じゃない。ここ
は貴方本来の戦い方に」

「いや、凜。君の言いたい事は判るが、それは得策ではない」

「・・・どういこと？」

「つまり、私だけではアレを止められないということです。アーチ
ヤーと二人がかりでやっと、というところでしょうか」

眉を顰める凜の問いに答えたのは、志保を庇うように実体化したラ
イダーだった。

それを聞き、納得する凜。

ライダーがあの手を押し返さないのであれば、凛たちの身を守るものは存在しない。所詮、魔術師ではサーヴァントには敵わない。

「……そういうことだ。君達は下がっている」

黒白の双剣を手に、凛の前方に実体化するアーチャー。

凛は頷き、無言で数歩下がる。

「相談は済んだ？なら、始めちゃっていい？」

軽やかな笑い声。

少女は行儀良く、優雅にお辞儀をした。

「はじめまして、リン。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるかしら？」

「アインツベルン」

「

凛は、その言葉を聞くと忌々しそうに歯噛みした。

アインツベルン。それは、遠坂と同じ聖杯戦争を仕組んだ御三家の一角。

それが今、自分の行く手を遮るように圧倒的な怪物を従えて現れたとなれば、凛の顔が歪むのも仕方が無いことといえた。

そんな凛の反応に気を良くしたのか、少女は嬉しそうに笑みを零し、声高らかに告げた。

「じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー!!!」

少女の声に応えるように巨体が飛ぶ。
その跳躍は巨体に似合わず軽やかで、坂の上から下まで一息で落下する。

「シホ、下がっててください」

ライダーとアーチャーは、バーサーカーを迎え撃つべく疾駆する。

凜は更に後方へ跳び退ろうとするが、先程から全く動きを見せない志保に視線が向く。

この状況でさえ動き気配を見せない志保。このまま志保を置いて逃げれば、どんな結果になるか考えるまでも無い。

「ああっ！もう！！！」

「うげっ……！？」

凜は、呆つと突っ立っている志保の襟首を掴んで強引に後ろに跳び退った。

「っけほ……と、遠坂？」

「まったく、何やってんのよアンタは！！！」

座り込み咳き込みながら志保が凜を見上げると、凜は鬼気迫る剣幕で怒鳴りつけた。

「アンタとアイツがどんな関係が知らないけどね、目の前で死なれたら寝覚め悪いっての。ほら、シャキッとしなさいシャキッと！」

呆然と目を見開く志保。

気がつけば、凜の顔が間近にあるという事態に一瞬混乱したものの、直ぐに現在の状況を把握することに成功した。

志保は、再びイリヤを目にした途端、目の前が真っ白になってしまったのだ。

数日前にも同じ事があったというのに、全然成長していないなど、志保は心の中で自分を嘲笑う。

別に、本当に我を忘れていたのではない。何をすればいいのかわからず、考えすぎて逆に動けなくなっていただけなのだ。いや、それも言い訳か。いくら負い目があるとはいえ、臆している場合ではないのだ。

（そうだ。私は、何があるかと死ぬわけにはいかない、しっかりしないと。イリヤもいるんだ、何とかしなきゃ……………にしても、やっぱり遠坂は）

あのまま茫然自失としたままなら、最悪、余波で死んでいたかもしれない。何故、凜が助けてくれたのか志保には判らなかつたが、その行動に裏心がないことは凜の顔を見れば一目瞭然だった。

（たぶん、対価がどうこうっていうのも建前、なのかな？……………
・なんだかんだいって、遠坂は甘いんだよね）

「……………うん。ありがとう、遠坂」

「あ、う……………たく、コイツは……………」

柔らかい笑みを浮かべる志保を前に、凜は若干狼狽えるが直様気を取り直して戦場へと目を向ける。

そして、志保はもまた改めて戦場を見る。

(・・・やっぱり、劣勢か)

状況は、火を見るより明らかだった。

バーサーカーの咆哮で世界が軋み、志保の身の丈程もあろうかという石斧が振り下るされ地は割れる。加えて、巨体の割りにその動きは俊敏で、ライダーとアーチャーは碌な反撃も出来ずにただ翻弄されているだけのようだ。

(・・・これじゃ、駄目だ。二人だけじゃ勝てない。なら、私が狙うべきはマスター・・・イリヤなんだろうけど・・・ツ!?)

志保は、イリヤへと意識を向けただけだった。にも関わらず、その瞬間、背筋が凍った。

(・・・嘘、アレ本当にバーサーカー？私はイリヤを見ただけなのに・・・どれだけ主人思いなんだ)

志保を襲った寒気の正体、それはバーサーカーの視線。

二騎のサーヴァントと戦いながら、こちらにまで意識を裂くことが出来る、出来ていることに志保は戦慄する。

ライダーとアーチャーも列記とした英霊だ。だというのに、その二人を相手にして尚余裕があるなど、なんとという規格外か。

そもそも、バーサーカーにそんな器用な真似が出来るのかという疑問はあるが、一つだけ判った事がある。

今、イリヤへ向かえば確実に殺される。凜と二人がかりだろうと、結果は変わらないだろう。

(だったら、私のすべきことは・・・)

これから志保がやろうとしていることは、無茶以外の何者でもない。成功する確率も不確かな博打に他ならない。

この方法は数日前に必要なものが調達出来なかったとの報告が届いた時点で諦めていたのだが、現状を考えるとそんな悠長なことを言っではいけない。

不安要素は多い、多過ぎるくらいだが、それでも

(でも、やらないよりはマシだ！)

「遠坂、ちよつとした賭けにできるから援護お願い！」

「はっ、え？」

「トレース投影、オン開始」

志保が呪文を紡ぐと同時に、虚空に数本の幅広の短剣が現れる。短剣には複雑な文様が描かれており、それは何かの回路にも見えた。

「っそれは!？」

短剣は円を描くように地面に突き立つ。

すると、短剣から赤い線が伸び、円の内側に魔法陣が描かれる。

その魔法陣は、凜もよく知るモノだった。

志保は瞳を閉じて深呼吸をし、己の内側へと埋没する。

そして、瞳を見開き、高々と詠唱を開始する。

「
告げる

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に、

聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら応えよ

誓いを此処に

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者、
汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ

天秤の守り手よ！！」

詠唱の終わりと共に紅い光が場を満たす。

誰しもが荒れ狂う赤い嵐に見入り、戦闘さえも中断される。

光の暴風が治まり、最初に志保の耳に届いたのは、涼やかでそれでいて凜とした少女の声だった。

「　　問おう。貴女が、私のマスターか」

第六話 〈最強と最優・前編〉（後書き）

突っ込みどころ満載で毎度すみません。

血色の双眸については、魔眼（グムサト）みたいなものだと思っ
てください。魔眼というよりは超能力寄りですがね。近いのは浄
眼です。

最後に出てきた幅広の短剣は、アゾット剣をイメージしてください。
それも志保の礼装（自作）です。

次回は戦闘編。いつも通り拙い出来になりますがお許してください。
では、また次回。

第六話 〈最強と最優・中編〉（前書き）

お待たせして、本当にすみませんでした。

しかも、思いのほか戦闘が長くなったので、話数を変更することに。とはいえ、内容はそのままなので、悪しからず。

何やら今回も設定等に疑問を持つ方もいらっしゃるかもしれませんが、それは七話にて現時点で可能な範囲での説明はしますので、暫しお待ちを。

月夜の下に現れる金髪碧眼の少女。

彼女の介入で、戦場は更に激化する。

では、どうぞ。

第六話 〈最強と最優・中編〉

「問おう。貴女が私のマスターか」

淡い月光の下、金砂の髪が揺れ深い翠色の瞳が闇夜に浮かび上がる。小柄な体躯、可愛らしい造詣の顔を持ちながら、同時に凜とした雰囲気を持つ少女。

そう、この一見志保達と年齢が変わらないように見える少女こそ

「ええ、セイバー。私が、貴女のマスターよ」

「サーヴァント”セイバー”」

最優のサーヴァントと謳われる剣の騎士

「さっそくだけど、アレの相手をお願いしたいのだけど、出来る？」

志保の視線の先にあるのは、英霊一人がかりで押し留めるのがやっとという狂戦士^{バーサーカー}。

セイバーはそれを一瞥すると、何の躊躇いもなく頷いた。

「・・・了解しました。ですが、彼等は？」

セイバーの視界にある英霊は三騎。バーサーカーの他に、赤い英霊と黒い英霊。

その二人とも戦えばいいのかと視線で問うセイバーに、志保は首を横に振った。ここで同士討ちなどされてしまつては、何もかもが台無しだ。

「アーチャーとライダーは味方と想ってくれていい。今はまず、バ
ーサーカーを倒すことだけに専念して」

それを聞いたセイバーは、頷くと同時に地を蹴った。

その姿は正に疾風。

膠着した戦場を駆け抜け、一瞬でバーサーカーの懐まで潜り込む。

「はああああああ！！」

裂帛の気合と共に、無防備な肉体へセイバーが腕を振り下ろす

が

「ッ！」

それは本能の為せる業か、それとも身に迫る危機を感じ取ったのか。

セイバーの攻撃は巨大な斧剣によって受け止められた。

不可解なのは、セイバーが一見、何の武器を持っていないように見
えることだ。

だが、志保の紅い瞳にはその刃が視えていた。

(・・・そうか、あれが本当の鞘の代わり、ってことか)

再び起動した血色の双眸。

見えないモノを視通し、その本質を暴き出す魔眼。

紅い瞳に映るのは、彼の英霊が持ちし聖剣とそれを覆い隠す魔術。

恐らくその魔術は、嘗て奪われた鞘の代わりに、何者かに掛けられ
たモノなのだろう。

刀身が見えなければ、間合いを把握しにくく白兵戦では大きな効果

を齎すのだろうが、本能で剣を振るっているような狂戦士を前に、果たしてそれがどれだけ通用するか。

「ッ！」

暫し拮抗していたセイバーだったが、バーサーカーの膂力には敵わず徐々に押し返され始める。

遂には吹き飛ばされるが、流石は最優のサーヴァントというべきか、空中で態勢を整え難なく着地した。

追撃はなく、場に一瞬の静寂が訪れる。

「……ふーん。こういうことかは分からないけど、面白いことをするね、お姉ちゃん」

最初に静寂を破ったのは幼げな少女。

イリヤの視線はセイバーに注がれており、然程動揺した様子もなく冷笑すら浮かべている。

その姿は、可愛らしい外見に反して、酷く不気味だった

更に、次にイリヤの口から放たれる言葉が、志保達をを更なる絶望へと叩き落すことになる。

「でも、いくらセイバーを出してきても無駄。だって私のバーサーカーは、ギリシャ最強の大英雄なんだから」

「ギリシャ最強……まさか……！」

何を想像したのか、凜の表情が驚愕に染まる。

「ええ、私のサーヴァントはヘラクレス」

「ヘラクレス・・・」

「そう、貴女達程度が使役できる英雄とは格が違う、最強の怪物な
んだから」

そう言つて、イリヤは天使のような微笑を浮かべた。

しかしその笑みは、凜や志保には非情な悪魔の嘲笑にしか見えな
った。

本来であれば、サーヴァントの正体を明かす事は自殺行為に等しい。
その英霊が、有名であればあるほど伝説や逸話等から弱点や対処法
が明らかになる危険性が増すためだ。

にも関わらずイリヤが正体を明かしたのは、絶対的な自信の表れに
他ならない。

何があつても決して負けない、必ず勝つ。そう確信しているのだ。
負けることなど、始めから頭がない。

「これでもう分かったわよね。バーサーカー!!!」

イリヤの声に答え、バーサーカーが突進する。

「

! ! ! !」

大気を引き裂き、地を震わせ、全てを薙ぎ払わんとするその進撃は、
もう誰にも止められない。

バーサーカーが一直線に向かうその先には、金髪碧眼の少女の姿が
あった。

その中を黒い影、ライダーが縦横無尽に駆け抜け、隙を突いて杭を巨体へと打ち込む。

杭は弾かれるが、ライダーは動き続ける。己の攻撃が軽いのは承知の上だ。

先刻渡り合っていた時は、ライダーもアーチャーも攻撃を受け止めることは出来ず、受け流しかわすのが精一杯だったのだ。セイバーが戦列に加わったとはいえ、下手に突っ込んで先きの二の舞になることは目に見えている。

ならば、自ずと取るべき行動は限られる。

「私を忘れないで欲しいですねっ!!!」

一旦距離を離れたセイバーとバーサーカーの間に、ライダーが飛び込む。

斧剣が横薙ぎに振るわれるが、ライダーは瞬時に跳躍してかわし、バーサーカーの肩に蹴りを入れる。

そして、その反動を利用し大きく後方へ跳び退ったライダーと入れ替わるようにセイバーが踏み出し剣を振り下ろす。

要は、ライダーの役割はその機動力を活かした攪乱だ。

セイバーとの即興の連携も、中々どうして。思いのほか意気が合っているように思える。

ただ、それでもバーサーカーの防御は崩せないでいた。

あと一步という所までは追い込める。が、その一步が遠い。

「チイツ!!!」

これでいっただい何度目か。

強く剣を弾かれ、後退を余儀なくされるセイバー。

けれど、今回はそれまでとは違った。

その間隙を縫うように、銀光が空を奔る。

銀光の正体は、アーチャーが放った矢だ。

どうやらセイバーがバーサーカーと切り結ぶ様子を見て、早々に援護射撃へと切り替えたらしい。

その銀光は、何にも遮られることなくバーサーカーの肉体に到達する。

そう。反応した様子も、防ごうとする動作も一切無かったのだ。

「　　嘘、効いてないの!？」

「……………みたいだね。もうアレは、頑丈なんてレベルじゃない」

凜と志保は、目の前の光景を前に呆然と目を見開いた。

アーチャーの放つ矢は、いつそ砲撃と言っても過言ではない程の威力を持っている。普通の人間に直撃すれば肉を抉り四散させ、並のサーヴァントであれば致命傷を負わせることも難しくくない。

そのアーチャーの矢の直撃を喰らったのだから、バーサーカーも何かしらの外傷を負っている筈なのだが、結果は全くの無傷。

バーサーカーの肉体は、最早頑丈や堅牢といった領域を遙かに超越している。

これでは、宝具でも使用しない限り傷を負わせることも出来ない。

だが、無理に宝具を使う必要は無いのだ。
別段、アーチャーがバーサーカーに傷を負わせられずとも、バーサーカーを屠る程の攻撃力を秘めた存在、セイバーがいるのだから無理に攻撃することも無い。
たとえ矢は効かずとも、狙い所によっては十分援護になり得る。

再び、何処かから三条の銀光が飛来する。
今度もバーサーカーは避ける素振りすら見せない。

だが

「

ッ

ッ！？」

初めて、巨体が揺らいだ。

銀矢がバーサーカーの眉間と、その双眸へと寸分変わらず吸い込まれた結果だった。

とはいえ、眉間にも眼球にも傷一つ無い。が、それで構わないのだ。然しものバーサーカーといえども、次の行動へ移ろうという刹那に不意に視界を遮られれば、ほんの僅かだが隙が出来る。

その隙を、最優の英霊が、逃す筈がない。

「ハアアアアアッ！！！！！！」

セイバーは一足で間合いを詰め、最大の力を込めて剣を振り切る。

「

ッ

ッ

！！？」

？」

すると、バーサーカーの身体に袈裟に筋が入り、赤い液体が飛び散る。
しかし。

（　　つく、浅い！！）

セイバーの顔に苦汁の色が浮かぶ。
即座に振るわれる横薙ぎの一閃を躲し、距離を取る。

バーサーカーは瞬間的に半歩下がり、辛うじて直撃を免れていた。
傷を負わせることは出来たが、この程度、バーサーカーにとっては
掠り傷に等しい。

だが、バーサーカーに傷を負わせたという事実に変わりはない。
セイバーならば、バーサーカーを殺せる。その可能性が濃厚になっ
てきた事だけでも、暗い絶望の中にいた志保達にとっては、明るい
兆しだった。

何故セイバーがバーサーカーと互角に剣を交える事が出来るのかと
言えば、それはセイバーの全身に溢れる魔力、スキル”魔力放出”
によるものが大きい。

魔力放出とは、文字通り膨大な魔力を武器や肉体に帯びさせること
で強化する能力だ。セイバーのソレのランクはAであり、これはど
こにもある棒切れに絶大な威力を付与することすら可能にする。
この能力があるからこそ、セイバーは圧倒的に体格で劣るバーサー
カーと打ち合うことが出来るのだ。

更に正史とは違い、志保の十全な魔力で本来の能力を發揮出来るこ
とも一つの要因となっている。

そこで、拮抗していた状況に変化が起きた。

「何やってるの”目覚めなさい”バーサーカー、早くそんなやつ殺しちやいなさい！」

思い通りに事が運ばない状況に痺れを切らしたのか、イリヤが焦ったように叫んだ。

「ぐっ!？」

イリヤの命令によるものかは定かではないが、唐突にバーサーカーの動きが変わった。

それまで力押ししかなかったバーサーカーが、セイバーの剣戟を受け流し切り返したのだ。

セイバーは直撃こそ防いだものの、不安定な形で受け止めたため身体が軋み苦しげな呻き声を上げた。そこへ、更なる追撃が加えられる。

力任せの旋風ではなく、洗練された疾風とでもいえるのか。

神速で放たれた鋭い斬撃は、空間をも切り裂くのではないかと思わせる迅さでセイバーに迫る。

「

オ

オ

!!!!」

最早、如何なる援護も間に合わない。

「くっう……っあああああ!！」

無理矢理身体を動かし剣を合わせようとするが、そんなことでバー

サーカーの一撃を受け止めきれぬ筈がない。

堪えられたのは、ほんの一瞬。

次の瞬間には、セイバーは志保達の頭上を越え、遙か遠くへと吹き飛ばされていた。

「追いなさいバーサーカー。まずはセイバーから殺してあげなさい」

そう言うイリヤは、いつの間にかバーサーカー肩に腰掛けていた。

バーサーカーは、イリヤになるべく負担をかけない様に、けれど決して遅くはない速度で走り出す。

それは、絶好の好機だった。

いくら低速で走っているとはいえ、志保達がバーサーカーの速度に追いつくのは無理だ。が、サーヴァントならばどうか。

いくら背を向けているとはいえ、志保達はおるかアーチャーとライダーの攻撃も、バーサーカーには効かない。が、そのマスターならばどうか。

事は一瞬。

一切の迷い無く、矢と杭が、複数の銀閃が怪物の肩に座する少女へ殺到する

月夜の下に鮮血が飛び散る
ことはなく、代わりに火花
が飛散する。

イリヤを狙った銀閃は、斧剣によっていとも簡単に悉く打ち落とされた。

二度三度と同様の攻撃が繰り返されるが、全て同じ結果に終わり、バーサーカーは何事もなかったかのように走り続ける。

「……つたく、狂化して行くせにどれだけ主人に忠実なのよ」

バーサーカーを追い駆けながら、凜は呆れ顔で不平を漏らした。

理性を失くしているというのに、己が主人に向け放たれた凶器を悉く打ち落としたバーサーカー。

その見事なまでの忠誠心を称えるべきなのか、それともヘラクレスをそこまで制御しているイリヤを褒めるべきなのか。

どちらにしても、それを傍から見ると溜息しか出てこない。

その様子を見ていた志保も渋い表情をしていたが、いつまでも嘆いてばかりはいられない。

一応、直ぐに念話を飛ばしてセイバーの無事は確かめたが、少なからず傷を負っているようなのだ。先刻のバーサーカーの動作も不可解であったし、下手をすればセイバーが危うい。

何らかの手を打つ必要があった。

(………確か、あの方向には墓地が………分かればいいんだけど)

策がない訳ではなかった。いや、策とも呼べないような単純な考えではあったが、何もしないよりはマシだろう。問題は、それをセイバーが実行出来るか否か。

つい先程召喚されたばかりのセイバーが冬木の地理に詳しい筈がない。大まかに探索、あるいは言峰教会までの道のりを歩いただけでも条件は違っていたのだが、それを悔やんでも仕方ない。

尤も、このセイバーに限ってはそうとも言い切れないのだが、志保はその事実を失念していたし、どの道そんな淡い可能性に期待するのは愚かだろう。

とはいえ、状況は一刻を争う。躊躇っている時間はなかった。

志保は、セイバーに向け念話を飛ばす。

『セイバー、そっちにバーサーカーが向かったわ。そのすぐ近くに墓地があるから、そこに誘い込んで戦って。遮蔽物があれば、あの巨体じゃ』

『心得ました、マスター』

全てを伝え終える前にセイバーは行動に移った。

志保の指示通り、墓地へと向かったのである。

(・・・え・・・あれ?・・・何で!?)

困惑したセイバーの声を想像していた志保は、その都合が良すぎる展開に逆に焦ってしまった。

まあ、何であれ、事が問題なく進むのに越したことはない。

(うー・・・いや、まあ・・・いいんだけどね?何か、こう・・・)

志保は、どこか釈然としない心地で戦場と化した墓地へと向かうのだった。

こうして、戦闘は激化し佳境を迎える。
その果てに、何が待ち受けているのかも知らずに。

第六話 〈最強と最優・中編〉（後書き）

やー、ホントすみませんでした。色々あった、とか言い訳しても仕方ないので置いておくとして、とりあえず普通に続きますのでご安心を。

ただ戦闘が長引いて仕方ない。このままだと更新が来月になりそうだし長くなりすぎるので、話数を変更することにしました。

まあ、時間をかければいいものを書ける訳でもないのでアレなんです。

ともあれ、戦闘は後編で終わりです。質問等は受け付けますが、ネタバレしない範囲でしか答えられないのでそのおつもりで。次回更新は来月かも・・・

あー、あと最後にあつた”何が待ち受けているのかも知らずに”って大した意味無いのでスルーしてください。
では、また次回。

第六話 〈最強と最優・後編〉（前書き）

一ヶ月以上お待たせして本当に申し訳ありませんでした。さらにもう一つ謝罪せねばならないことがあります。

前回の後書きで戦闘はこの後編で終わりと言いましたがまだ続きます。次回、終編にて第六話は終了となります。もう暫しお付き合いください。

今後もこのような事があるかもしれませんが、呆れずに読んで下さると幸いです。

見る影も無く荒れ果てた墓地。

そこで、志保達は最悪の悪夢を見ることになる。

では、ごじゆ。

第六話 最強と最優・後編

志保と凜が墓地に着いた時、そこは既に戦場と化していた。

地は抉れ、墓石は薙ぎ倒され、元の整然とした墓地の姿は見る影も無い。

普通の生身の人間では、ここまで墓地を荒らすことは難しいだろう。巨大な竜巻が発生したと言われた方がまだ納得出来るような有様だった。

そんな荒れ果てた墓地の中を、三つの影が交錯する。

バーサーカー^{バーサーカー}が咆え、剣兵^{セイバー}が猛り、騎兵^{ライダー}が駆け巡る。

三騎の英霊が入り乱れるその光景は、先程までの攻防とは明らかに違っていた。

墓石という障害物がある場で、機動力に優れるライダーと小柄で小回りの利くセイバー、巨軀を誇るバーサーカーとでは、立ち回り方が大きく異なる。

バーサーカーはその巨体のあまり思う存分動くことが出来ず、セイバーとライダーは墓石が乱舞する中を縦横無尽に駆け巡る事が出来る。

いや、正確にはバーサーカーにとって、この程度の障害など瑣末事に過ぎないのだろう。が、それでも僅かながら影響は出るし、決して無視出来るものではない。事実、バーサーカーの動きは先程と比べればどこか鈍い。

戦場では、その僅かな差が戦局を左右することもある。一瞬の間、油断、迷いが死を呼び込む要因となるのだ。

其処までは、特に問題は無い。

だがしかし、依然として志保と凜の表情は優れず暗く沈んでいる。

バーサーカーを墓地に誘い込んでからの一連の流れは、志保の思い描いた通りに進んでいる。問題は、全く状況が好転せず、期待した程の効果が得られていないという事だ。

何故かといえは、原因はバーサーカーにある。

確かに若干動きは鈍くなっているようだが、巧みな体捌きで攻撃を器用に受け流し立ち回る姿には、隙など全く見当たらず、むしろ計算された動きを思わせた。加えて、現在は守勢に回っているものの、その姿からは余裕すら窺え、隙あらば両断せしめようという気概さえ伝わってくる。

本来であれば戦場の天秤がセイバー等に傾いている筈の状況で、実際は拮抗を保つのが精一杯。

少しでも状況が好転すればという志保のささやかな望みは、どうやら叶う事はなさそうだった。

363

「

ア

アア

ア

「!!!」

墓石が飛ぶ。

豪快な斧剣の一振りで、面白いように墓石が両断され宙を舞う。

そんな冗談のような光景が広がる中を、青い影が勇然と駆け抜ける。

「

ッ

巨人の攻撃は悉く空を切り、青き騎士に触れることは敵わない。青き騎士、セイバーは土塊と破片が乱舞する中、何の障害も無いかの如く巨人の懐に踏み込む。

「ック」

だが、示し合わせたかのように横薙ぎの一閃が振るわれる。

セイバーは強引に剣を振り抜き、紙一重で斧剣を受け流し間髪いれずに放たれる第二撃を、後方へ跳ぶ事で回避する。

先刻から、殆どがこの流れの繰り返しである。

幾度と無く果敢に飛び込むセイバーと、それを丁寧にいなすバーサーカー。

ある意味、そのどちらもが神業で、だからこそ状況に変化が無い。

この状況に変化を齎すには何らかの外的要因が不可欠だったのだが、今のところそれらしい要因は見当たらない。

ライダーも攻撃を仕掛けようと試みるものの、セイバーほどの攻撃力が無い彼女では単身飛び込んでも無意味であるし、墓石が中空を乱舞する中ではとても連携なぞ望めない。

隙を見て踏み込んでも、セイバーしか眼中に無いのか適当にあしらわれるのみで全く成果を上げることが出来ないでいた。それならばと宝具の使用も検討するが得策ではないと却下する。

相手がヘラクレスだと判った時点で、つまりは始めから及び腰だった観はあるが、それ以前に何れの宝具もヘラクレスに通用するか自信が無かったのである。

目隠しを取れば何らかの効果は得られるかもしれないが、それがセイバーや志保達にどんな影響を齎すか判らない以上はおいそれと使う

わけにもいかず、バーサーカーの生前の偉業を考えると自身の切札をも止められてしまうかもしれない。

まあ、その際にセイバーやアーチャーが攻撃するという手もあるのだが、ライダーはそこまで彼等の事を信用してもいなければ捨て身になる気にもなれなかったのである。

結局は、いつ訪れるかも知れない連携の機を窺うくらいしかライダーに出来る事はなかった。

また、いつの間にか矢の雨も止んでいる。

アーチャーの場合も、ライダーとそう事情は変わらない。

遮蔽物が多く、射線を遮るモノが溢れるこの状況では狙撃など出来る筈もない。

結果、セイバーとバーサーカーの一進一退の攻防が暫く続いた。

このままでは埒が明かない。

それは、この戦場にいる誰しもが思ったこと。

恐らく、持久戦になれば不利なのはセイバーだろう。そうなる前に志保達は何らかの手を講じねばならないが、イリヤにしてもセイバーが疲弊するのを気長に待つつもりは毛頭なかった。

(……………仕方ないわね。これ以上時間をかけてもつまらないし、もう終わりにしましょうか)

それまで険しい表情で戦場の推移を見守っていたイリヤが、スッと一転して涼しい表情になる。

それは決して諦めの表情ではない。むしろ勝利を確信したが故の余裕の表れだった。

「バーサーカー」

混沌とした戦場に鈴の音のような幼い声が響く。

声に応え、バーサーカーは幼き主人の元へと跳び退き、セイバーは剣を両手で構え警戒を強める。

一瞬の静寂。

例えようのない緊張感が世界を支配する。

その中、白き少女が、狂戦士の主人が、声に魔力を乗せて敵かに告げる。

「いいわ、バーサーカー。”戒め”を解いてあげる。存分に、貴方の力を振るいなさい!!」

言葉と同時に、イリヤの身体全体に紋様が浮かび上がる。赤く輝くそれは、間違いなく異変の前兆だ。

何が起るのかと対峙する者達は視線を集中させるが、紋様は数秒と経たずに消え、場に再び静寂が齎される。

一見すると、イリヤにもバーサーカーにも何ら変化は無い。

そう。目に見える変化は無い。

まさか彼女たちをして、ハッターという事もないだろう。ならば必然、起こり得る変化とは

「.....良いのか、イリヤ」

声

それは確かに、声だった。
何所か遠くから響いてくるような野太く渋い男性の声。

一瞬にして、空気が、時が、世界が凍った。誰もが言葉を発する事を忘れ、呆然、啞然と口を広げている。彼等の胸中に去来する言葉は、ただ一つ。

喋った!?

「イリヤスフィール。貴女、バーサーカーに何をしたの？言葉を解す狂戦士なんて在り得ていい筈がない。どんな方法ほんやくを使ったのか、納得のいく説明はしてくれるのでしょうか？」

奇妙な静寂に包まれた世界で真つ先に口火を切ったのは凜。静かに紡がれた言葉は悲痛な叫びをもって、暗闇の中で不気味なくらいに良く響き渡る。

それに対するイリヤの返答は、ただ一言。

「さあ？」

可愛らしく小首を傾げ、惚けるような口調で言うイリヤ。
当然、抗議の声が上がるが、イリヤに悪びれた様子など全く無く、正直に事実だけを述べていく。

「仕方ないじゃない、だって本当に分からないんだもの。理性があるのは確かだけど、こんなこと、アインツベルンだって想定外よ。まあ強いて言うなら、イレギュラーってところかしらね」

「それで私が納得できるとっ

」

「別にそっちがどう捉えようと構わないけど、これ以上説明しようがないわ。勘繰るのなら勝手にしなさい」

尚も食い下がろうとする凜だったが、重ねられたイリヤの言葉によって口を噤む。

事の真偽はどうあれ、いくら問い質してもイリヤは口を割らないだろう。

判っているのは、言葉を、理性を奪われた筈の狂戦士が言葉を発しているという奇怪な事象だけ。どの道、確定情報が無いのだから最悪の事態を想定して動くしかない。

ならば、これ以上の問答は不要とばかりに凜はイリヤを睨み付ける。

イリヤは、その突き刺すような鋭い視線をさらりと受け流し、嘆息混じりに口を開く。

「あと一応言っておくけど、バーサーカーは理性はあっても、”狂^{バク}戦士^{サイカー}”としてのクラス能力はそのままなの。つまり

」

「考え得る限り、最強最悪の、組み合わせることかな？」

若干口を引き攣らせ言う志保を見て、イリヤは不適な笑みを深めた。否定の言葉は無い。肯定もしていないが、その表情が全てを物語っていた。

イリヤは暫しの沈黙の後、まるで悪戯が成功した子供のような満面の笑みを浮かべ満足げに言った。

「正解だよ、流石お姉ちゃん。リンはもう少し柔軟な思考を持った方がいいと思うわ」

(っ……こんのお子様が！！)

凜は我を忘れて突撃してしまいかねない程の衝動をどうにか抑え付け、冷静にイリヤの言葉の意味を理解しようと思考する。いや、理解というよりは、その言葉を素直に受け止めるかどうかというべきか。

しかしこの場合、最悪を想定するなら認めざるを得ないのだろう。彼等は志保の言った通り、最強最悪の敵であるのだと。

『……成程な。バーサーカーにしては妙だと思ったが、そういうことか。まさか、本当に理性があるとはな。ハ、とんだイレギュラーもあつたものだ』

何処で聞いていたのか、吐き捨てるような口調のアーチャーの声が凜の頭の中に響く。

それにそうね、と額に冷や汗を浮かべながら念話で返す凜。

悪夢とは、こういうことを言うのだろうか。

違和感は始めから、バーサーカーと戦っている間ずっと付き纏っていた。狂化して剣技など扱えない筈なのに、確かに感じ取れる技の冴え。

その正体がイレギュラーによる理性の維持。しかも狂化で増した能力は健在などという、むしろ悪夢より性質の悪い事態に遭遇すれば、どんな英霊であろうと愚痴の一つも零したくなるだろう。

そして、再び訪れる静寂の時。

一切の音が途絶えた世界で、遠雷の如き声が、世界を揺らす。

「 征くぞ」

激震。

大地を揺らし、大気を引き裂いて、巨軀が突進する。

唸りを上げ迫ってくる脅威の前に、セイバーもまた前に出る。それまで以上に全身に魔力を滾らせ、全力で剣を振り下ろす。

響く剣戟。弾ける火花。轟く怒号。

それは正しく死闘だった。

振るわれる斧剣には、先程までの荒々しさは感じられない。が、その代わりに一撃の重さと鋭さが格段に増している。その全てが、今まで度々見せていた技の片鱗をも上回っている。

豪快にして精緻な剣技。

そんな言葉が相応しい剣戟の嵐の前に、セイバーは翻弄されるばかりだった。

「グ、ウツ

!!」

打ち負けて後退するセイバーに、更に苛烈な連撃が加えられる。薙ぎ払い、切り返し、打ち下ろす。

目にも留まらぬ猛攻は、確実にセイバーを追い詰めていく。

この時点で、既に天秤はバーサーカーへと傾いていた。

このままでは、何時セイバーがやられても可笑しくない。

いまだにセイバーが耐えられているのは、その驚異的な直感の恩恵もあるが、志保の負担を無視した全力戦闘によるものが大きい。恐らく、そうしなければただの一撃で終わっていたのだろうが、それも長くは続かない。

攻めの手を完全に封殺されている今、セイバーに為す術はない。

ただただ必死に、命を削り取る豪剣から逃れるだけだった。

「グッ

ツウ……」

一際高い剣戟の後、両者は大きく弾き飛ばされ、その際にセイバーは大きく後退する。

実は、今の二人の剣戟にそれほど差はない。故に、互いの規格外の剣戟の衝突で身体が弾かれることは少なくない。

その勝敗を分けているのは、圧倒的体格差だけではない。いくら剣戟に差が無いといっても、バーサーカーとは違い、セイバーの剣戟は要は魔力の重増しによって支えられている。

全力を出し切ることで初めてバーサーカーと互角に打ち合っている以上、その戦い方は酷く安定性に欠け、そこを突かれるといとも簡単に体勢を崩され流れを持っていかれる。

そこから立て直すのは至難の業だ。

セイバーの未来予知並みの直感をもってしても、こうして仕切り直すのが精一杯だった。

あと助かっていると言えるのは、バーサーカーの戦いへの姿勢だろうか。

体格差がある為、弾かれる影響はバーサーカーの方が小さい。セイバーの後退を許さず追走する事もバーサーカーは出来たのである。それをしないのは、元来のヘラクレスの戦い方が、それとも

「流石だな、セイバー」

一秒でも長く、この戦いを楽しむためか。

その声からは、隠し切れない喜びの色が滲み出ている。

とはいえ、セイバーに対する称賛は本物だ。

今まで幾度も追い詰めたにも関わらず、セイバーはその度に必ず活路を見出し窮地を脱している。また、決して諦めない姿勢と思わず気圧されそうになる程の気迫。セイバーを強敵と認め、礼儀を尽くそうと思わせるには十分だった。

それに対し、セイバーに余裕は全く見られない。

「……………成る程。これが、彼の大英雄ヘラクレスの真の力か」

(しかし、これほどとは……………)

セイバーの息は荒く、肩が激しく上下している。

最早、満身創痍。

戦闘に支障をきたすような傷こそ負っていないが、余力は殆ど残されていない。

恐らく、全力戦闘はあと数分が限界だろう。

その数分の間にバーサーカーを退げるか逃げるかしなければならな

いが、どちらにも困難を極める。

「ふふ、降参でもする?・・・でもダメ。誰一人、生かしては返さないんだから」

無邪気な微笑みを浮かべるイリヤに言葉を返せる者は誰もいない。

誰もが理解していた。絶望していた、と言ってもいいだろう。

黒き鬼神と白き少女を前に、勝ち目など無いのだと。

もし、無様に頭を垂れ浅ましく許しを請うたとしても、白き少女は絶対に見逃しはしないだろう。

この場を生き残る為には、決定的で奇跡的な起死回生の一手が必要だった。

「・・・イリヤスフィール、言いたいことはそれだけですか・・・
・・・では、今度はこちらから行きますよ・・・
・・・ハアアアアアア
ア!.....!」

そうして、終局の幕が上がる。

第六話 〈最強と最優・後編〉（後書き）

もう一度、本当に申し訳ありませんでした。

途中まで書いて、何か最後の方凄いくぐだになったのもう一編追加することにしました。それに、区切りよかったですよね今回の終わり。三分の一くらいは既に書いてあるので、7月の中旬までには更新出来ると思います。

ちなみに、今回イリヤが言っていたことは全てが真実という訳ではありませんので悪しからず。全くの嘘という訳でもありませんが。あと、バーサーカーはクラスの重複という事ではなく、バーサーカ―のままで理性が復活したとお考え下さい。また一応言っておきますが、イリヤは令呪を使用しておりません。イリヤは真つ当な魔術師という訳ではありませんし、これ以上は言わなくても大丈夫ですよ。

それでは、真に勝手ながら次回終編で決着です。今後もこんな調子の更新になると思いますが、必ず完結させますのでお付き合いくださいと幸いです。

今年中の完結は無理ですけどねえ。

では、また次回。

第六話 〈最強と最優・終編〉（前書き）

お待たせして申し訳ありませんでした。

前書きや後書きで何時ごろまでに更新できそうとか書くものじゃありませんね。まあ、予告通り更新できればいいのですが、これかなかなか……。

ともあれ、漸く六話も今回で終わりです。

遂に訪れる反撃の時。

彼女達の苦肉の策は、猛き鬼神に通用するのか。

では、どうぞ。

第六話 最強と最優・終編

「志保、少し協力して欲しいのだけど、まさか嫌とは言わないわよね？」

「遠坂？」

英霊達が最後の舞台へと臨んでいる最中、凜は深刻そうな表情で戦場を睨みながら告げた。

志保が訝しげに視線を送るが、凜は目を合わせることなく続ける。

「これからアーチャーが大きいのを撃つ。だから」

「隙を作れ、って？」

「ええ、そうよ。でも……」

（あのヘラクレスに隙、ねえ……）

凜が言い淀んだ理由は志保にも理解できた。

ギリシヤの大英雄ヘラクレス。

数々の逸話と武勇を誇る傑物。

狂化によって理性を失っているならいざ知らず、理性を取り戻し多彩な剣技を操る彼に隙を作るなど無謀の極みだ。

かといって、隙を作らねばせっかくの機会が無駄になる。

というのも、アーチャーが放つというのが十中八九宝具だと思われるためだ。

凜達が宝具を使用してくれるなら、志保にとっては正に渡りに船。志保はセイバーの召喚と彼女の全力戦闘の影響で魔力を消耗している。多少の無理は利くだろうが限度はある。正直、満足に宝具の真名開放が使用出来るかさえ怪しかったのだ。可能な限り、これ以上の魔力消費は避けねばならなかった。

よって、志保が凜の申し出を断る理由は無かった。それがどんなに困難な行いであろうと、もう後が無いのだ。

「わかった……じゃ、威力や効果範囲は判らない？もし至近にセイバーやライダーがいたら、どうなる？」

凜は一瞬の思案の後、徐に口を開いた。

「……威力は折り紙つき、というか本人曰く直撃すれば殺す自信はあるそうよ。だから、その時近くにいたら」

「巻き込まれる、か」

志保の呟きに凜は何の反応も示さない。

無言の肯定。

といつても、その答えは予想通りであったため志保に動揺は見られない。

恐らくアーチャーの宝具はその名の通り弓か、あるいは矢であろう。アーチャーに該当するからといって必ずしもそうとは限らないのだが、先程まで放たれていたのが銀矢であるのだからその可能性は高い。

仮に矢であるとして、バーサーカーに通用する程となれば生半可な

威力である筈が無い。勿論、威力と周囲の被害が比例する訳ではないだろう。だとしても、特殊な効果で無い限りは直接的な破壊こそが宝具の本領。

セイバー等に被害が及ばないと考えるのは、愚か以外の何物でもない。

「……………まあ、やるしかないか」

志保は、小さく深呼吸をする。

何にせよ、それしか方法が思い浮かばないなら仕方ない。

諦めてしまえばそこでお終い。死ねないというのなら、死に物狂いで僅かな可能性を掴み取るしかない。

衛宮志保は、常にそうやって生きてきた。

始まりから、きつとそうだった。

だから、今度も同じ。

志保は、決意を宿した瞳で凜を見やる。

たとえ隙を作れたにせよ、全てはアーチャー次第。

その隙を逃すことなく、確実に宝具を着弾させねば意味は無い。

出逢って間もない彼等に信頼など築ける筈も無いのだが、不思議と

志保は不安を感じていなかった。

根拠も何も無いにも拘らず、アーチャーならばやり遂げる。そんな、妙な確信があった。

それが信頼感がどうかは志保にも判らない。

けれど、少なくともそれは、決して嫌な感覚では無かった。

「遠坂、アーチャーに伝えて。信じてるって」

凜は、それを耳にした瞬間目を丸くしていたが、直ぐに微笑みへと変わり僅かに口端を上げて言った。

「ええ、わかったわ」

反撃が、始まる。

「遠坂、準備はいい？」

「ええ、いつでもいいわ」

志保と凜は、倒すべき敵を、バーサーカーを真直ぐな瞳で睨みつける。

既に、準備は終えていた。

念話でセイバーに策を伝え、手持ち無沙汰になっていたライダーを呼び戻し同じく策を伝えた。

策とは言いが、志保と凜が立案したソレは策とはとても呼べないものだ。成功する確率の低い、分の悪い賭け。いっそ博打とさえ言えるだろう。

無論、皆それは承知の上だ。

しかし確立が低いといっても、決してゼロではない。ならば、彼等が躊躇する理由はなかった。

まあ、それは当たり前的事だ。

志保も凜も、英霊達も、こんな所で黙って殺されるつもりなどないのだから。

「トレース 投影、オン 開始」

志保が呟くと、片手に三本ずつ、計六本の黒鍵が握られる。

魔術回路には同じように多数の黒鍵の設計図が待機され、瞬時に投影出来るようにしてある。

それを無言で見つめる凜の右手には、宝石が五つ。

これは、現在の手持ちの宝石の半分だ。少々惜しい気もしたが、出し惜しみしても仕方ない。少しでも威力が増加すれば成功確立も上がるだろう。

数瞬後、凜は戦場へ視線を戻す。

機を見逃す訳にはいかない。

視線の先では、セイバーが懸命に剣を振るっている。

彼女達が待っているのは、絶え間なく響く剣戟が途絶える一瞬の刹那。セイバーとバーサーカー双方が弾き飛ばされる時こそが、最後の賭けの始まりだ。

「オオオオオオオオ!!!」

「アアアアアアア!!!」

激しい剣戟の応酬が続く。

ここに来て、セイバーは勢いを取り戻していた。とはいえ、身体の状態は全く回復していない。相変わらず魔力は不足し、全身至る所

が悲鳴を上げている。

だがそれでも、たった一つの希望を掴むべく足掻く彼女は強かった。打ち合うごとに魔力の切れが増し、動作が洗練されていく。残された力をフルに使い、己が使命を完遂せんとするセイバーの一撃は重く、バーサーカーをすら圧倒する。

ならば、この結果はきつと必然であつただらう。

「ハアアアアア！！！」

「　　っぬう！！」

一際強く踏み込んだセイバーが、バーサーカーの斧剣を弾き返す。その一刀の前にバーサーカーは切り返す事が出来ず、距離を離すことを許してしまった。

一方、直後にセイバーはよろめきはしたが、その耳に力強い声が届く。

「遠坂っ！！」

「カントAnfang　　！！」

暗闇の中、高速で巨軀に迫る六つの閃光。

その正体は、志保が渾身の力で投擲した黒鍵だ。

通常であればともかく、体勢を崩しているバーサーカーにソレを避ける術は無く、細身の剣は巨体に吸い込まれていく。

鈍い音を響かせバーサーカーに中つた　　いや、弾かれた黒鍵は

三本。

残りの三本は、地面に着弾し大きな穴を穿っていた。

鉄甲作用。

聖堂教会に伝わる特殊な投擲技法で、魔術付加ではなくあくまでも体術。

今やその使い手は少ないとされるが、着弾時の衝撃は通常時の数十倍とさえ言われる。その威力は、とあるお姫様が三連弾を喰らって公園の端から端へ転がっていくほどだとか。

その鉄甲作用を以ってしても、屈強な身体の前には無意味だということ事は志保も判っている。全ては想定内。

着弾を確認した瞬間には、志保は既に次の黒鍵を放っていた。

ちなみに、志保は然る女性の代行者から習ったのだが、志保の精神衛生上良くないのでその話は割愛させていただく。

次々と投影し、凜の魔術が発動するまでに投擲された黒鍵の数は優に100を超える。弾かれた黒鍵は辺りに散乱し、バーサーカーの足元には幾つもの穴が穿たれている。

そこへ、凜の魔術によって生じた爆炎が到達する。

しかし、爆炎の弾はバーサーカーに触れることは無かった。五条の爆炎弾は巨体を逸れ、全て地上へ降り注いだ。

その爆炎弾は、一極集中すればあるいはバーサーカーを殺せていたかもしれない代物であった。

とはいえ、凜は戦闘訓練を積んでおらず射撃の狙いは甘い。必殺の条件を満たす為には、至近距離から直接叩き込むという危険極まりない方法しかなく、実行するのは躊躇われたのである。

一つでも命中すればある程度の効果は見込めたのだが、全弾綺麗に外れてしまつては元も子もない。

だが、それは決して無駄弾などではなかった。
元より、狙いが違うのだ。

爆炎、爆撃によって地面は爆ぜ無数の亀裂が奔る。黒鍵と爆炎弾で砕かれた地面は脆く不安定で、あと一つ大きな衝撃が加えられれば全て吹き飛んでしまいかねない。

(……これは)

バーサーカーはそれを瞬時に理解した。

これでは、迂闊に動けない。

彼が跳躍すれば不安定な足場は崩れ、空中で体勢を崩し無防備な身体を晒すことになるだろう。そこをセイバーに攻められればどうなるか、考えるまでも無い。

それなら力を込めずにその場を脱すればいいのだろうが、それを許すセイバーではない。たとえまともに戦えないほどに消耗していても、好機と見れば確実に彼女は踏み込んでくるだろう。

故に、バーサーカーは動けない。動かない。

敵方の次の行動は予想出来ないが、下手に動いて墓穴を掘るよりも待ち構えていた方が、まだ対処のしようがあると判断しての事だった。

何もかも、狙い通り。

最初の黒鍵の着弾からおよそ数秒。

これで、志保達の役割はほぼ終わり。

後は、英霊達に命運を託すのみ。

先陣を切るのは漆黒の影。
動きを止めた巨軀に目掛け、一直線に跳躍する。

「ッ！」

迎撃しようと待ち構えるバーサーカーに対し、ライダーの跳躍は射程距離の一手前で停止し、その手元から銀光が奔る。

バーサーカーは一切微動だにせず、杭は甲高い音を響かせ弾かれる。

一瞬の空白。

ライダーは空中で無防備な姿を晒し、バーサーカーはその場を動かさない。

本来なら、一步踏み込めばライダーの身体を両断するのは容易い。
が、やはりバーサーカーはその一步を躊躇っていた。

バーサーカーは敵の、志保達の狙いが自身の体勢を崩し決定的な一撃を打ち込む事だと読んでいた。

それが判っているからこそ、必要以上の警戒を抱いてしまう。無用に身構えてしまう。

結果、それは致命的な隙となり、絶好の反撃の機会も逃してしまっただった。

（　　）　　っな！？）

次の瞬間、中空のライダーが唐突にバーサーカーの視界から消える。瞬間移動や転移の類いでは無い。カラクリは簡単だ。

木に巻きつけ固定してあった”本物”の杭を実体化させ、それを引っ張ることで移動したに過ぎない。

先程バーサーカーに投げつけた杭は志保が投影したモノ。それが宝具でなければ、英霊の得物であるうと投影するのは容易い。

入念な下準備の上で為された挙動と光景。

それは、バーサーカーにとっても予想外のモノだった。少なくとも、彼らしくもなく目を見開いてしまいうくらいには。

まあ、それも無理はないだろう。

何せ、ライダーが消え視界が開けると

(な、に!?)

そこに、魔力を滾らせ高々と聖剣を振り上げたセイバーがいたのだから。

バーサーカーは、直感的にそれが宝具の一撃なのだと悟る。

並みの宝具では傷一つ付かないバーサーカーといえど、自身を斬り付けたセイバーの宝具となれば話は別だ。真名開放の威力や効果はどうあれ、まともに喰らうのは愚の骨頂。

自らの宝具に絶対の自信を持つバーサーカーではあったが、使用されないに越したことはない。

皮肉にも、理性があつた事が仇になった。言い方は悪いが、ほんの少し驕りもあつたのかもしれない。

この時バーサーカーは、ライダーに攻撃される以前に、そもそも志保達の攻勢時に様子を見ずにセイバーに遮二無二攻撃すれば良かった

ただ。

凜の魔術が己を傷つける威力を秘めていると理解したからこそ、彼は身構えた。その軌道から中らない事を悟ったからこそ、動かなかった。

それが命運を分けたといってもいいだろう。

バーサーカーは体勢を崩してでも、強引にセイバーの攻撃を、宝具の一撃を避けようとするが、遅い。

セイバーはライダーが戦場から離れ、バーサーカーの思考が終わると同時に、その手に持った宝具を振り下ろし、真名を持って開放した。

「ストライク・エア
風王鉄槌！！」

凝集した空気が一挙に解き放たれ、風の槌となってバーサーカーを襲う。

だが、この攻撃を以ってしてもバーサーカーの鎧を貫くことは出来ない。

確かに、これは宝具の一撃ではあるのだが、本来の用途ではなくあくまでも亜流。それなりの威力はあるものの、セイバーの真の宝具とは比べるまでも無い。

それを理解しながらも断行する理由、目的は一つ。

「
つぐ、おお！？」

風の槌はバーサーカーに掠る事すらせず、彼が立つ地面を根こそぎ薙ぎ払った。

同時に、鉄甲作用で撃ち出された黒鍵と無数の黒き弾丸　　ガンド
が地面を穿ち追い討ちをかける。

砕かれた大地は容赦無く、完膚なきまでに吹き飛ばされ、多数の土塊と粉塵が舞い上がる。

バーサーカーは足場を崩され、志保達の目論見通り若干体勢を崩していた。

それでも何とかバランスを保っているのは流石だが、少なくとも注意は体勢を立て直すことに向いているようだった。

そうして、遂に全ての条件が整ったその時だった。

「ッ！！！」

突如、バーサーカーは声にならない叫び声を上げ、不安定な体勢のまま我武者羅に斧剣を振るった。

死の閃光。

ソレは、文字通り空気を切り裂いて、遙か遠方より飛来する。

轟音。

数秒とかならず到達したソレは、鼓膜が破れんばかりの轟音と瞳が焼かれるほどの光を齎した。

一瞬遅れて、まるでミサイルの着弾を思わせる衝撃波が墓地を駆け抜ける。

何が起こったのかは明らかだ。

アーチャーの宝具である。

成る程、これならばバーサーカーをも打倒出来るだろうと、安全圏にまで避難していたセイバーは思う。

威力もそうだが、何よりもタイミングがこれ以上無いくらいに完璧だった。

セイバーが回避出来たのが奇跡というのは言い過ぎだが、そう思わざるを得ない程に容赦ない見事な射だった。予め判っていたとはいえ鳥肌が隠せない。

セイバーが退くと同時、あるいは安全圏に退避したと同時に着弾させるのが理想だったが、アーチャーは完璧にそれを実行して見せた。セイバーの挙動、距離、速度等々、それらを全て把握した上で為されたその所業は、正に神業と呼ぶに相応しいモノだった。

やがて光が治まると、墓地は一面火の海に包まれていた。

何も言わずとも、この光景が宝具の真名開放の凄まじさを物語っていた。必殺というものは恐らく、こういうモノの事を言うのだろう。

だが、炎が揺らめく中、黒き巨躯は未だそこに佇んでいた。

まだ、死んでいない。

が、無傷でもない。

右の肩口が大きく抉れ、もう少しで肩から全て削ぎ落ちてしまうところだ。

彼がまだ生きていられるのは、着弾の刹那に本能的に振るった一閃

のお陰だ。
直接矢に当たる事こそ無かったが、想像を絶する剣圧で僅かに狙いが逸れた結果だった。

凜は表情を膠着させながらその惨状を見据える。

宝具の真名開放を以ってして殺せなかった。その事実だけでも、絶望感を煽るには十分だ。

とはいえ、それも直ぐに杞憂だと気付く。

何故なら

「セイバー!!」

志保の声よりも尚迅く、青き衣が舞う。

神速の踏み込みを阻む者は無く、瞬く間に、対照的な影が重なった。

その瞬間、世界から音が消失した。

燃え盛る炎も、弾ける火の粉の音すらも意識の外へ追い出される。

「……………うそ、イヤ、バーサーカー!!!」

それからどれほどの時間が経過したのか、悲痛な少女の叫び声によって世界に音が戻ってくる。

金切り声を上げる少女の視線の先には、聖剣が深々と胸に突き刺さった彼女の僕の姿があった。

余程堪えたのか、イリヤは膝から崩れ落ちる。瞳は大きく見開かれ、動かなくなつた僕の姿を捉えて離さない。

そんなイリヤを尻目に、セイバーはバーサーカーの死を確認して剣を抜きさりイリヤへと視線を向ける。

勝敗は決した。

サーヴァントを失ったマスターに勝ち目は無い。まして、イリヤに抵抗する意思は見受けられない。むしろ、その姿に憐憫の情すら覚えてしまいそうになるほどだ。

そうして僅かながら緊張から開放された志保達。

しかし、そんな彼女達の小さな安堵は、小悪魔の囁きにより脆くも崩れ去ることになる。

「なーんてね」

それまでの痛々しさがまるで感じられない無邪気な声音。その声と共に、誰かの息を呑む音が闇間に溶ける。

「っな!？」

イリヤに意識を向けていたセイバーだったが、何かを感じ取ったのか反射的に跳び退り、数瞬前までいたその空間を巨大な剣が撫でる。

誰しもがその異様な光景に目を見張る。

黒き巨躯が、死人が動いた。

いや、最早それは死人などではない。

肩口の傷は既に無く、胸の傷も見る見るうちに塞がっていく。それはまるで、出来の悪い映像を巻き戻して見ているようだった。

ほどなくして、初めから傷など無かったかのような無傷の肉体が月明かりのもと顕になる。

「・・・フフ、やるじゃない。リンのアーチャー。それにセイバーも。でも、私のバーサーカーは一回や二回殺した程度じゃ死なないわ」

予想外の事態についていけない志保達を余所に、屈託ない笑みを見せるイリヤ。

その言動に対し心当たりがあったのか、凜は舌打ちで応える。

「っ蘇生魔術の重ね掛け・・・」

「そう、バーサーカーを本当に殺したいなら、あと十一回は殺さないダメ」

重大事項を明かしながらも余裕の態度を崩さないイリヤ。

それもその筈。

たった一回殺すために志保達は命がけの博打を打った。それをまた十一回繰り返し返すなど無謀な話だ。

どう考えても志保達の命の方が先に尽きる。

苛立たしげな凜の剣幕を見て満足でもしたのか、イリヤは明瞭な声音で告げる。

「いいわ、戻りましょうバーサーカー。つまらない事は初めに済ませようと思ったけど、少し予定が変わったわ」

黒い影が揺らぐ。

火の粉が舞い踊る中、バーサーカーはイリヤの命に従い無言で後退しました。

「何よ、どこまでやって逃げる気？」

「ええ、気が変わったの。少し、アナタ達に興味が湧いたわ。だから、もうしばらくは生かしておいてあげる」

イリヤはそう言うと、軽い足取りでバーサーカーの肩に腰掛けた。そして巨人は踵を返し、悠然と闇の中へ消えていく。

志保達は、その無防備な背中を見守ることしか出来ない。判っているのだ。今手を出せばどうなるかを。

せつかく見逃してくれるというのだから、下手に手を出して命を溝に棄てることもない。

誇り高い英霊であつてもそれは同じだ。

この状況で、己の誇りと命とを天秤に掛ければ、どんなに屈辱的であろうと取るべきモノは決まっている。

尤もそれに該当するのは、剣騎士、弓騎士、騎乗兵、三騎の英霊の中で唯一セイバーだけであるが。

他の二騎は、少なくとも英霊の誇りなど持ち合わせていない。

ともあれ、この場の誰も去り行く者達を阻もうとはしなかった。

「バイバイ。また遊ぼうね、お姉ちゃん」

最後にそう言い残し、イリヤは至極あっさりと巨人と共に闇の中へと姿を消した。

齎した破壊と絶望に対し、あまりにも唐突で呆気ない幕切れであった。

「……………終わった、の？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええ」

緊張の糸が解けたのか、揃って大きな溜息を吐く志保と凜。
問題は山積みだが、どうにか危機は乗り切った。
自然と二人の顔は綻び、ぎこちなく笑いあう。

「・・・・・・・・まあ、また色々話し合わなければいけない事は増え
たけど・・・・・・・・とりあえず、今度こそ帰りましょうか」

「ふふ、うん。そうだね、遠さ・・・・か・・・・？」

歩き出した凜に続こうとする志保だが、不自然に白髪が揺らぐ。

(ア・・・・・・・・レ？・・・・・・・・どう、して？魔力はまだ・・・・・・・・
・・・・)

志保の身体は、糸の切れた操り人形のように動力を失いその場に崩
折れた。

瞳は虚ろで光は無く、ピクリとも身体が動かない。

「志保!？」

(とお、さ・・・・か・・・・・・・・み、んな・・・・・・・・)

悲鳴に似た凜の声と複数の足音が耳に届いたのを最後に、志保の意
識は完全に途絶えた。

かくして、短く長い一夜の戦いは終わりを告げる。

聖杯戦争は、まだ始まったばかり・・・。

第六話 〈最強と最優・終編〉（後書き）

中旬に更新できるかもとか言っておいてこの始末。申し訳ありません。

中々思い通りに進まなくて、何故か思ったよりも長くなってしまいました。ホントはもっとあっさり終わる予定だったのですが・・・しかも最後までくだ。

まあ、今後も最低でも月一ペースを保てればと思います。願望ですね。

で、次回なのですが、多分前後編、くらいになるかと。そのあとに幕間を挿もうかなーと思ってます。

七話は若干短めになると思います。当然、戦闘は無し。

あと念のために言っておきますが、最後に志保が倒れたのは原作とは違う理由です。別に無理に倒れる必要は無かったです。無意味な伏線といえますか何といたしますか。ともかく大目に見てくださいると助かります。

では、また次回。

第七話 〱 魔術師達の選択・前編〱 (前書き)

今回は日常？パートです。

独自設定について、一応あとがきで説明しますが、簡単に済ませますのであしからず。

夢から覚めた志保は、突然の闖入者に襲われる？
その人物とは・・・

では、どうぞ。

第七話 〱魔術師達の選択・前編〱

衛宮志保IN

夢

夢を、見た。

「……今日は、大丈夫なのかい？」

「うん。だいたい、心配しすぎなんだよキリツグは。ねえ、アラヤ？」

「……」

「なんだい志保。僕よりそんな無口の男の肩を持つのかい？」

「……だって、キリツグはあんまり魔術を教えてくださいたくないじゃないか」

「うーん、それを言われるとなあ……どうしたらいいと思う？」

「……自分で考える」

「つれないなあ……」

それは、昔の、幼かった頃の日常。
大切な人たちと過ごした、大切に、忘れられない時間。

この頃の夢は、凄く久しぶりだ。いったい何時から、この頃の夢を見なくなったのか。

でも、夢は終わる。まだ、この夢に浸っていたかったけれど、自分の夢でも自由にならないものらしい。けど、この終わりは酷く不自然だった。

懐かしい日々は霞のように消え去り、いつもならすぐ意識が浮上するの。今日は何かが違った。

最後に、何か……そう、得たいの知れない何かを、見た気がした。まるでそれは、自分を塗りつぶそうとしているようで、どうしようもなく気持ち悪かった。

衛宮志保OUT -

「……ん、うう」

「おはようございます。お加減はいかがですか、マスター」

「……あ、セイ、バー？」

日の光が満ちた和室で、志保は目を覚ました。傍らにはセイバーが正座で控え、優しい眼差しを志保へ向けている。

(セイバー………と、ここは私の部屋? ……
あれ? 昨日、どうなったんだっけ)

直前に見ていたであろう夢は、既に忘却の彼方。

未だ意識が覚醒しきっていない志保は、セイバーを見とめ昨日の出来事を臆げな思考で反芻する。

様々な場面が浮かんで消え、一つ一つゆっくりと確認していき、やがて物語の顛末へと到る。

「……っそうだ。私、あの後倒れて

ツ痛! !」

「マスター! ……まだ寝ていてください。急に身体を動かしては……」

「あう……ごめん、ありがとうセイバー」

身体に奔った痛みで顔を顰める志保だったが、セイバーには訊ねた
いことがある。

かといって、流石に寝ながら話を訊く気にはなれない。志保は、何とか姿勢を整えセイバーへと向き直った。

「セイバーは、その……ずっと、ここに?」

そう言つて、志保は内心で溜息を吐く。

何を言うべきか思索して、結局本当に訊きたい事が口から出なかった。やはり、まだ頭が働いていないらしい。

セイバーは、そんな志保の様子に気付いているのかは定かではないが、律儀にも志保の瞳を真正面から見据え、淀みなく答える。

「はい。昨夜、マスターが突然気を失われてからライダーの案内でアーチャー達と共にこの部屋に運び込み、治療を施し着替えさせた後に見張りとして私がずつついていました」

「え……あ、ああ、そうなんだ」

意図せずして訊きたい事を全て聞いてしまった。

まあ、ここで志保が知りたい事となると限られてくるのだから察するのは然程難しくは無かつたのだろう。

「……ん？」

と、そこで先程のセイバーの台詞の中に聞き捨てならない一言が含まれていることに気付く志保。

「……それだと、遠坂までこの家にいるみたいに

」

そこまで言葉を紡いだとき、最後まで言わせまいとするかのように唐突に障子が動いた。

「　　あら、元気そうじゃない」

「……と、遠坂？」

凜の定とでもいうべきか、何の断りも無く障子を開いた人物は遠坂凜。

凜は、ポカンと口を開けて間抜け面を晒している志保を目にして、苦笑しながら告げる。

「なに間の抜けた顔してるのよ。まあ、大方の予想はつくけどね」

「あ、え？……ちよ、何で？」

混乱し、まともな言葉を話せない志保を無視して凜は言葉を続ける。

「はいはい、疑問には後で答えるから大人しく身体を診せなさい。

まず、現状のアンタの身体を見てみないと何も始まらないんだから」

言いながら、凜は志保の横にしゃがみ込み、一切の抵抗を許さない自然な動作で

……志保の寝巻きを肌蹴た。

そして頭になる、病的なまでに白い肌と体格のわりに豊満な胸部。

静寂は一瞬。

一時は何が起きたのかと呆然としていた志保だが、事態が飲み込めてくるにつれて瞳が潤みだし身体が小刻みに震えだした。

この間、凡そ一秒弱。

それからまた一秒と経たずに顔が真っ赤に茹で上がり、やがて限界を迎えた。

「……つにゃああ！？ととととととと、とおしゃかさん、なななにやつ何をつすす」

「……いや、にゃあつてアンタね」

「ついやいや、突っ込みどころはそこじゃないと思うのですが！？つていうか何故脱がすし！！？？」

慌てて胸元を隠し、座ったまま脱兎の如く後退りをする志保。何故立って逃げないのかといえば、単に腰が抜けているためだった。ここで災難だったのは、志保の寝巻きがパジャマ等ではなく浴衣だったことだろう。浴衣でさえなければ、こうまで容易く肌を露出させることもなかっただろうに。

志保は、部屋の端で身体を掻き抱き、涙目で唸りながら凜を睨む。対し、凜は全く悪びれる様子も無く、至って真顔で平然と言っていた。

「気分よ」

「気分で脱がされてたまるかあつ！！！」

があつと吼える志保。
正に魂の叫びである。

「……冗談はともかく、きちんと肉体の具合を診るなら脱がさなきゃ始まらないでしょう。まあ、その様子だとあまり心配はなさそうね。痛みとか麻痺している所はない？」

「痛み？……つぐあ！？」

小首を傾げた志保は、その直後に顔を顰めた。どうやら、気が昂って忘れていた痛みを、凜の言葉で思い出ししまったらしい。

その反動なのかは判らないが、痛みはより強く志保を苛み苦しめる。結果、志保は蹲ったままの姿勢で硬直してしまうのだった。

「ほら、ちよつとじつとしてなさい。また剥くわよ」

「む、ぐう……」

横暴だ、と志保はぼやくが、ここは大人しく従うしかない。いくらこの場には女性しかいないといつても、二度も剥かれるのはご免だった。とある事情から、志保という人間は色々と複雑に出来ているのである。

まして、痛みで満足に身体を動かせないのだから尚更だ。

志保は仕方ないとばかりに上体を起こし、伏せ目がちに凜を見据える。

その様子を見て、凜からくすくすと忍び笑いが漏れる。

志保は更にムツと眉を顰めたが、凜は華麗に無視して志保の背後に腰を下ろした。

「ごめんごめん。ちよつと、脱がすわよ？」

「………うん」

志保は、凜がこれから何をしようとしているのか理解してはいないが、何を言っても無駄だと思いじつとしていた。少なくとも、何かしらの理由があり事前に予告をされているのなら、脱がされたとしても我慢は出来る。

凜は、静かに浴衣を脱がし、真っ白な志保の背中にそつと手を添えた。

「ん………」

両手で胸を隠した志保は、背に当たる冷たい手の感触に僅かに声を

漏らす。

凜は、それから腕や腹部にも手を伸ばして丁寧に撫で摩るといった行為を繰り返していた。

一通り調べ終えたのか、凜は志保に浴衣を着せて正面へと向き直らせる。

「……………どうやら問題はないみたいね。というより、問題ないことが問題、なのかしらね」

「ど、どういふこと?」

志保は、不安げな顔で凜を見やる。

「昨夜見た時は腕とか背中とかに痣……………いえ、何か筋のようなものがあつただのだけど……………完全に消えてるわ。何か、自分で気付いたことはない?」

「……………いや、ないかな。身体も、痛み以外は異常なところはないし。ついでに言うと、私は治癒魔術なんて使えないよ」

証人なんていないけどね、と志保が言うと、凜は顎に手を当てて思案顔になる。

痣が消えた理由は幾つか考えられる。本当は治癒魔術が使えるのか、あるいは、自然治癒能力が備わっているのか。

尤も、前者の場合は意識が無い状況では使える訳もなく、後者の場合は志保が口を割らないだろう。そのつもりがあるなら、既に自己申告しているはずだ。

とはいえ、それは今考えるべき事柄ではない。

とりあえずこの案件は保留、と凜は結論付ける。確かめる術はあるが、事を急いで現在ある微妙な関係を崩すことは、凜の望むところではない。

知られたくないのならば、まだ、訊くべきではない。

「そう……じゃあ、昨夜倒れた原因とか、何か思い当たることはないの？」

「……多分、セイバーの召喚が一因、なのかなあ？」

「……まあ、そうね。見た限りだとアレはかなり強引な召喚だったようだし、昨夜の戦闘で魔力を大量に消費していたわよね？」

「……うん。まあ、今考えると結構無茶したかも」

「つまり、それらが重なった結果と考えられなくもない、という訳ね……」

凜は、胡乱げな瞳で志保を睨む。

自分が発した言葉を真っ向から疑っているような表情であった。

「……何か、含みのある言い方だね？」

「別に、他意はないわよ」

そう言いつつも、志保と視線を合わせない凜。

志保は内心で溜息を吐く。何にせよ、これ以上の問答は不毛だ。ならばと、強引に話題を切り替えることにした。

「……まあ、いいけどさ……それはそうと、話は変わるんだけど」

そこで言葉を切ると、漸く凜も視線を志保へと向ける。それを確認した志保は言葉を続ける。

「随分タイミングよく現れたよね、遠坂」

志保が目を覚まして間も無く、まるで計ったかのようなタイミングで現れた凜。そもそも、何故凜がこの家にいるのかは、今は気にすまい。

それが別にどうというわけではなかったが、ふとそれに気付いてしまうと何か気になって仕方ない。

不自然、といえば不自然なのだ。偶然で片付けることも出来るが、障子を開けた時の凜の第一声は”あら、元気そうじゃない”というものだった。一概には言えないが、普通は驚くアクションがあったり”あら、起きたのね”という言葉が先にあってもいい筈だ。つまりは、志保が起きている事が初めから判っていたのではないかと邪推することが出来る。

先刻とは違い、逆に凜を訝しげな瞳で見やる志保。

だが凜は、事もなげに一言。

「ああ、そんなこと。アーチャーが教えてくれたのよ」

何ということはない、単純明快な回答。

恐らくアーチャーは、霊体化して志保の部屋の様子を窺っていたのだろう。

霊体化していれば気配も感じない。勿論セイバーは気付いていたのだらうが、アーチャーが敵意を示さない限りは不干涉を貫く。流石のセイバーでも、己がマスターがいきなり引ん剥かれるとは露ほどにも思わなかったに違いない。

「・・・ああ、なるほど」

ささやかな疑問が解消され頷く志保。

しかし、そんな志保を余所に、凜は冷ややかな声音で告げる。

「で、話は終わりかしら？」

「っ!？」

「そんな訳ないわよね、私もアナタも」

本題は別なのだろうと、凜の瞳がそう問っているようだった。

対する志保の答えは決まっている。ここで惚ける必要など無い。ペースは既に向こうに握られていても、せめて一矢報いねばなるまい。志保は口角を上げ、負けるものと薄い笑みを顔に貼り付ける。

「そりゃ、ね」

両者の視線が交錯し、周囲の空気が張り詰めたものへと変わる。

沈黙は数秒。

凜は徐に立ち上がり、志保を見下ろしながら言う。

「居間で待ってるわ。まあ、アナタがここでいいって言うなら私は構わないけど」

「……. わかった。着替えていくから、少し待っていて欲しい」

一瞬の間の後、志保はそう答えていた。

どの道、それ以外の選択肢は志保には存在しない。

互いの情報交換は必須であるし、凜が魔術師の顔をしていた以上は、志保も慎重な対応をする必要がある。そのために、少しでも情報を整理し自分の考えを纏める時間が欲しかったのだ。

尤も、単純に自室で話し合いなどというのは何所か気乗りせず、格好がつかないという思いもあったのだが。

「そう。じゃあ、先に行ってるわね」

凜は、志保の了承を得ると足早に志保の部屋を後にした。

そうして、やっと静かな時間が戻ってくる。

残された志保は、凜の足音が聞こえなくなると盛大な溜息を吐いた。

(……. やれやれ、何がなにやら……. ま、とりあえず着替えないと)

志保は緩慢な動作で立ち上がると、衣服が入っている箆笥へとふらふらと歩いていく。

その覚束ない足取りを不安に思ったのか、セイバーが心配そうに声を掛ける。

「マスター、あまり無理は……」

「え? ああ、うん。大丈夫だよ。ありがとう、セイバー」

(セイバー……つゴメン。今までちょっと忘れてたかも……
ん?)

心配している様子のセイバーに軽い罪悪感を覚える志保。が、同時に小さな幸福感も感じていた。

今度からはセイバーをもつと気に掛けようと誓う志保であったが、ふとある事に気付く。

「……………セイバー……サーヴァント……………英霊？」

セイバーに支えられながら腕を組み、思案顔で首を捻る志保。暫くして、次第に青くなる志保の顔色。

その尋常ではない様子に、いい加減セイバーも心配を通り越して呆れてきたのか諭すように告げる。

「マスター、やはりまだ寝ていて下さい。アーチャーのマスターには私が……………」

「……………霊体化……………あ……………セイバー……………
わ、たし……………み、見られた？」

ギギ、という擬音が付きそうな雰囲気では志保はセイバーへと顔を向ける。

青い顔が一転、真っ赤に染まる。

更には身体が小刻みに震え、今にも泣き出しそうな勢いである。無論痛みが原因ではない。

何よりも問題なのは、その言葉の意味。

「え?……………あ……………」

ああ……………その「

その意味を悟ったのか、最初は虚を突かれたような表情だったセイバーも頬を薄く朱に染めて言い淀み、最後には気まずそうに視線を逸らした。

そう。問題は、普段この家にいる筈の無い、数年前から殆ど誰も足を踏み入れることの無かった、男性。

もしかしたら、という仮定の話ではあるが、その彼に

「あ、アーチャーに・・・わ、わわ、わた、私の・・・!？」

「お、落ち着いてくださいマスター!？」

志保の胸を、アーチャーに覗かれた恐れがあるためだったりする。

といっても、あくまでもその可能性があるというだけで、実際はどうか判らないのだが。

一つだけ確かなのは、たったそれだけ、なんて一言で済ませられる問題ではないということだ。

耳まで上気した志保は胸を掻き抱き、その場にしゃがみ込んでしま

う。一方、セイバーは何と声を掛ければいいのか悩み、おろおろと立ち尽くしていた。

これが昨夜、あの最強の怪物と真正面から渡り合った主従の姿かと思つと、酷く滑稽である。

ただ、不幸中の幸いというべきか微妙だが、志保は下着を着用していた。普段なら、下着を着けないで寝る主義の志保である。というか、浴衣の下に下着をつけるのは邪道だと、とあるフェミニニストに吹き込まれていたりしたわけで。

ともあれ、ある意味では最悪の事態は避けられたと言えなくもない。だがまあ、そんなものは所詮気休めにもならないが。

志保は見られたかもしれないという羞恥に震え、セイバーは見す見す己が主への視姦を許してしまったかもしれないという失態を悔やみ、部屋の空気が加速度的に沈んでいく。

暫くの間、二人揃って活動を停止していたが、ずっとそのままという訳にはいかない。

様々な葛藤の末、先に活動を再開したのは志保
のだが…………… だった

「い、いや！！私は、アーチャーを信じ

」

「な、何で遠坂先輩がこの家にいるんですかああ……………
!!!!!!!!!!!!?????????」

「……………なに?」

どうやら、志保達にはまだまだ安息の時は訪れないらしいかった。

没ネタ

凜は、志保の了承を得ると足早に志保の部屋を後にした
のだが、何故か直ぐに引き返ってきて悪戯っぽい笑みを浮かべて
告げた。

「ねえ、身体痛むんだったら、着替えてっ
」

「いいから出てけっ！っ！っていうか、遠坂っところいうキャラだっ
たっけ！？」

「違うわよ。ただ・・・」

「ただ・・・なんなのさ」

声を荒げ、志保は凜をジト目で睨む。

「志保って、からかうと面白いのね！」

そう言っつて、凜は今度こそ逃げるように立ち去っていた。

「・・・・・・・・あぁ、シリアスとコメディの切り替わりについてい
けない・・・・・・・・」

「マスター・・・・・・・・」

「……なに?」

「着替え……お手伝いしましょうか?」

「……」

終われ

第七話 〱魔術師達の選択・前編〱（後書き）

さて、説明ですが、簡潔に行きます。

志保の魔眼は以前説明した通り、浄眼に近い能力を持っています。無くてもよかったです。思いつきと勢いでこんなになりました。イリヤとバーサーカーですが、イリヤはほぼ原作通りの能力で、本編中のあれこれも、多分原作でも出来たんじゃね？ってな認識で書いてます。バーサーカーは、とあるイレギュラーで理性を取り戻してるってことで大目に見てください。そのイレギュラーについては、後々出てきます。クラスはそのままなんで、ナインライブズは使えないです。

で、志保と綺礼ですが、数年前に出会っています。その出会いの話は・・・書かないかもしれませんが。さわりくらいは書くかもですが、と、説明はコレくらいで。もし不明な点がありましたら感想でお願いします。

というわけで、まーたまた最後がぐだぐだになった今日この頃。何ででしょうか？

大体、何故凜が志保を脱がすのか。

本当は・・・

「・・・いいから私の質問に答えなさい。いいわね！」
「・・・はい」

てな感じで済ませる予定だったのに。どうしてこうなった。まあ、それこそ気分でしたが。

没ネタは無視してください。途中までああ書いてたんです。でも流石にないなと思ったので断念。でも何となく残してしまいました。ということ、今の所の予定では七話は次の後編で終わる、と思います。多分。

では、また次回。

第七話　く魔術師達の選択・中編く（前書き）

結局、三編構成になりました。今回は短めです。若干シリアスっぽいですが、そんなのは気のせいです。

志保を待ち受けるは、問題事を抱えた別姓の姉妹。
狭間に立たされた志保に為す術はあるのか？

では、どうぞ。

第七話 魔術師達の選択・中編

日曜の正午。多くの人々が、和気藹々と食卓を囲むであろう時間。本来なら、衛宮邸の住人達もその例に漏れず似たような日常を過ごすのだが、今日は少しばかり様子が違っていた。

「……………あの、桜さん。そろそろ離して貰えるとありがたいなあ、なんて」

「絶対にイヤです!!!!」

異様な緊張感が漂う居間。その中で最も剣呑な気を纏っているのは、志保の腕に力一杯抱きついている間桐桜である。

「…………………………」

その様を、他の四人　凜、アーチャー、セイバー、ライダー

は呆然と眺めていた。

因みに彼らの配置は、志保と桜の対面に凜が座り、セイバーとライダーは己がマスターの後方に正座で控え、アーチャーだけが凜の後ろで腕を組み、立ったまま軽く壁に背を預ける形で諦観というものだ。

何故このような事態に陥ったのかといえば、理由は簡単。

全ては、凜と桜が、この衛宮邸で出逢ってしまった事が原因だった。

凜と桜の関係を考えれば、この状況は色々と非常に拙い。

まして、数分前に玄関で凜と出くわした桜が大声で　「ライダー

「……これはどういうこと!? 何でもつと早く教えてくれなかったのっ!!!??」
などと叫んでしまったのだから、もう誤魔化しは利かない。遅かれ早かれこの事実が凜に知られるのは時間の問題だったのだろうが、こんな形でバレることになるとは誰も思っていないからである。

また、桜自身その一言が大きな自爆であることに気付いていなかったらしく、固まっている凜を見て初めて失敗に気付くという始末だった。それだけ混乱し、余裕を失くして取り乱していたという証なのだが、最後の祭りである。ある意味、桜が”遠坂”の血を引いていることを再認識させる出来事だった。

だからこそ、なのか。それとも、なるべくして、なのか。

間桐桜は、意外にも冷静だった。あるいは、平静を装っていた。最初こそ取り乱したものの、そこからの対応は当初とは打って変わって落ち着いて対処していた。どちらかといえば、開き直ったと言う方が正しいかもしれないが。

まあ、それでここぞとばかりに志保に引っ付いているのはご愛嬌というべきか。

恐らく、桜はそうやって不安を堪えているのだろう。桜とて、無神経の塊という訳ではない。志保に関する事柄でこそ己を見失って暴走するが、それ以外では至って常識人である。いくら開き直って腹を据えたとはいえ、長年に亘り避けてきた事態に直面しているのだから、平静を保ち続けていられる訳がない。

誰かに縋り、僅かでも心に平穏を取り戻そうというのは、人として極自然な欲求だ。

単に桜の場合、その対象である志保に対して並々ならない想いを抱えているために、他人から見れば多少奇異な行動を取っているように見えるだけで。

それを何となく感じていたため、志保も強い言葉を発せない。というよりも、桜に頼られているという実感があって嬉しかったのだ。少なくとも、あまりに腕を強く掴まれて叫びそうになるのを、つつい我慢してしまうくらいには。

(き、気まずい………これ、私にどうしろと)

とはいえ、何ともいえない緊張感が漂う居間で視線を浴びせられ続けるのは、流石の志保といえども耐え難いものがある。

そもそも、志保が着替えて居間に姿を現した時には、既に凜と桜はテーブルを挟んで向かい合って座っており、何が何やら理解出来ぬまま現状に至っているのだ。

ある程度の現状把握くらいは可能だったが、それで直ぐに機転を利かせてこの状況を打開することが出来るかといえは否である。

結局は、桜の安定剤として大人しくしている事くらいしか、志保に出来る事はなかった。

そうして、暫く誰も一言も発せぬまま時間が過ぎた。当然ながら、このままでは一向に話が進まない。

だが、最初に誰が話を切り出すべきなのか、いったい誰と誰が言葉を交わす必要があるのか、皆語らずとも判っている。待っているのだ。彼女が口を開くその時を。

我関せず、他力本願と言えなくもないが、本来の役者ではない脇役が口を挟む問題ではないのは確かだ。

それからどれ程の時が経ったのか、一分かそれとも十分か。一瞬とも永遠とも判断が付かない、という大袈裟ではあるが、ともあれ漸く待ち望んだ時が訪れた。

「はぁ………ちよつと、いいかしら？」

この舞台の役者の一人、遠坂凜はこれ見よがしに溜息を吐きながら、気だるそうに口を開いた。
自然と、皆の意識が凜へと向けられる。

「………まあ、言いたいことは色々あるけど」

凜に注目が集まる中、凜自身の視線は真直ぐに志保へと向けられていた。それはまるで、それ以外の一切を瞳に写さないように、志保の隣に居る少女から必死に意識を逸らそうとしているようだった。

「志保……判っているわね？」

凜は、伶俐な瞳で志保を見やる。

「………」

対し、志保は無言。

無論、凜が何を指して言っているのかも判っている。判っていないながら、それでも志保は無言を貫いていた。

語るべき言葉が見つからないというのも理由の一つではあった。志保は口が得意という訳ではないし、事が事だ。これからどんな言葉を重ねても、望ましい結果が得られないことは明白だ。

そして、もう一つの理由が何より問題だった。

凜は平静を保っているようで、明らかに冷静さを欠いている。本来

の凜であれば、現状の空気に吞まれることなく淡々と話を進めている筈であるし、最初に確認すべき事項を見落としてしまっている。こんな状態では、たとえ上手いこと台詞を並べ立てても事務的な返答すら期待出来まい。半ば感情的になっている人間には、他人の言葉など届かない。

故に、志保はその点については既に諦めている。

それならそれで仕方がない。狂戦士組み等のことを考えると苦しくはあるが、何か手を考えられるほか無いだろう。

しかし、だ。事はそれほど単純ではない。

最悪、志保はそれでいいとしても、一つ看過出来ない事情があった。もしも志保と凜が決別してしまったら、せつかくの機会を逃してしまふ。一度敵対してしまえば、再び手を取り合うことは限りなく難しい。下手をすると、二度とその機会が訪れない可能性もあった。

そう。二人の、遠坂凜と間桐桜の和解。

結局、全ての問題はそこに集約される。

その問題が解決されない限りは、まともな対話は成立しないだろう。

「遠坂先輩、先輩は関係ありません。私が

「桜。あなたは黙っていなさい」

一蹴。

凜は、志保に視線を定めたまま桜の言葉を封殺した。

桜が一瞬息を詰まらせても、凜は見向きもしない。徹底的に無視を決め込む心積もりらしい。

そうして皆が固唾を吞んで見守る中、凜と志保の睨み合いが暫く続いた。

このままでは、何も解決しないまま終わってしまう。沈黙が続けば、いずれ凜は志保達を見限って敵対する道を選ぶだろう。それは誰がどう考えても最良の結末とはほど遠い。

ならいつそ、お節介で大きなお世話なのを承知で、多少不自然になつても桜から説明させるよう誘導を試みようか、と志保が愚考していた。その時だった。

志保の傍らにいた桜が、大きく息を吸い込む音が聞こえた。

「姉さん」

「っ!？」

先刻と立ち位置が反転し、今度は凜が息を呑む。たった一言。

一つの単語だけで、凜の思考は凍りついた。

そして、恐る恐る、薄氷の上を渡るかの如く静かにゆっくりと、二人の視線が交わる。

「・・・・・・・・話したいことがあるんです。二人だけで」

淀みなく紡がれる桜の言葉によって再び訪れる沈黙。

この静寂の内で二人が何を思うのか、それは余人が知るところではない。

「・・・・・・・・わかったわ」

幾許かの沈黙の後、若干掠れがかった声が居間に流れた。

第七話 〱魔術師達の選択・中編〱（後書き）

というわけで中編。二編で収めても良かったんですが、せっかく何となくシリアスっぽい感じになってきてるので、そのまま中編として切ることにしました。

次回はお気楽な感じに戻ります。

はい。初めに言っておきますが、凜と桜の和解とか、そんな面倒極まりない話題を書き切るスキルなんぞ作者にはありません。なので、次回にはそういう展開はあまり期待しないように。コメディに逃げます。

そろそろオリジナルな展開に行きたいなーと思いつつ、まだちょっとかかるかも。大体九話くらいからオリジナル展開に入る・・・予定です。ペースを速めていきたいですが、そうもいかず・・・ともあれ、次回はなるべく早めに更新したいと思います。まあ、そう言うっても今回の更新から一ヶ月くらいかかるでしょうが。では、また次回。

第七話 〱魔術師達の選択・後編〱（前書き）

ほぼ一ヶ月ぶり。

いつもの如く、最後の方はぐだぐだです。

待ち望んだ姉妹の対話。二人の仲はどうなるのか。
その間の志保達は、いったい何を？

では、どござ。

第七話 魔術師達の選択・後編

「……………アーチャー」

「了解した。私は、彼らを見張っていることにしよう。だが凜、判っているとは思うが」

「判っているわよ。私は……私は魔術師。油断なんてしないわ」

「……そうか。君がそれでいいなら構わないが、くれぐれも選択を誤るなよ」

「それ、どういっつ……………アイツ」

壁に背を預けていたアーチャーは、一方的に念話を切り霊体化して姿を消した。

己が僕が消えた虚空を睨みつける凜だったが、いくら念話を試みても繋がらない。完全にアーチャー側からの妨害だ。これではいくら腹を立てようが、凜にはどうしようもない。

一方の桜はというと……………

「あの、先輩……………」

「……………ん」

志保はゆっくりと立ち上がり、桜と視線を混じり合わせる。

桜の想いと覚悟がどれ程のものか、志保には知る術もなければ、知ったところで為す術もない。

何を思おうが、何を憂おうが、分不相応な行いが無様な結果しか生まないのは自明の理。それでも相手のために何かしたい、というのが人情なのかもしれないが、それは極端に言えば独り善がりの自己満足でしかない。

人が人を、人間の心を理解するなんて出来やしないのだから、常に最適解を導き出すなど夢のまた夢。そうやって卑屈になることは決して褒められたものではないが、何の思慮も覚悟もなく感情をぶつけるよりは幾分マシだろう。

善意で人は救えない。

何が正解なのかは結果だけが知っている。

故に、志保は何かを口にするでもなく、素直に立ち去ることを選んだ。

桜がそれを望んでいることは察しがついたし、何よりもそれが最善だと思ったからだ。

とはいえ、本当のところは少し後ろめたさもあつた。ある意味、志保自身もこの案件の当事者であるといえる。桜だけに任せるといえるのは、非常に心苦しかったのだ。

が、志保に出来る事がほぼ無いに等しいのは事実だ。むしろ、二人の間に入ることで要らぬ争いを招きかねない。

(・・・情けないな。肝心な時に、何も出来ないなんて・・・
ごめんね、桜)

因果応報、身から出た錆ではある。

桜の意思を尊重すると嘯いて、結局は何もしていなかったのだから、この結果は甘んじて受けるべきだ。

けれど、せめてこれぐらいは、と志保は去り際にありったけの想いを込めて桜を見やった。

すると

「先輩、ちょっと待っててくださいね。終わったら、すぐ御飯を用意しますから」

そう言つて、桜は自然に、柔らかく、当然のように、志保に笑みを浮かべて見せた。

強いな、と志保は思う。普通、この状況でそんな表情は出来ない。その芯の強さに、志保は憧れを抱く。心の強さでは間違ひなく、桜の方が一歩も二歩も先を行っている。

(遠いなあ……でも、大丈夫そうだね。待つてるから、ね)

それを見た志保は、安心したように一つ頷いて背を向け、静かに居間を後した。

その志保の後姿を見送る桜の表情は、凜とは対照的に優しさに満ちていた。

そして、セイバーとライダーも席を立ち、一組の姉妹が居間に取り残される。

長年に亘り叶うことのなかった姉妹の対談。

お互いが、本心では待ち望んでいたであろうその時が、遂に訪れようとしていた。

所変わり、衛宮邸の縁側。

足早に居間を後にした志保は、自然と縁側へと足を向けていた。ここならば、音が籠ることもなく間違っても会話が聞こえることは無い。

「……はあ、息苦しかった」

「全くだ。頑なになるのは理解出来ないではないが、あのような場に同席させられるのはご免だな」

縁側に人影は四つ。志保、セイバー、ライダーと、もう一人は……

「……アーチャーか。もしかして、さっき遠坂に何か言っただ？」

「いや、そんな覚えは無いな」

いつの間にか隣に現れたアーチャーに対し、志保は然程驚いた様子もなく言葉を返す。

突然現れるのはライダーで慣れているし、セイバー達が傍で目を光らせている以上は、アーチャーも大それた事は出来ないだろうという打算がある為、ある程度の余裕があったのだ。

ただ、そもそも志保は、そんな思考を働かせる前に、アーチャーに對してあまり警戒心を抱いていない。何故かと問われると”何となく安全な気がする”という、正気を疑いたくなるような言葉しか出

てこないのだが、本気でそう思っているのだから仕様がな

だが、志保とて魔術師の端くれである。いくら本心では警戒が必要
ないと思っていようと、その慢心とも言える想いが、容易く裏切
られ得ることは重々承知だ。伊達に”赤”の称号を持つ人形師に師
事しているわけではない。

要は、衛宮志保としては心を開いている一方で、魔術師としてはア
ーチャーを警戒しているということだ。

志保がその真の理由　アーチャーに対する感覚の正体　を
知るのは、もう少し未来の話になる。

「へー、そーなんだー」

「何だ、その棒読みは」

「いや、だつてさ、あの遠坂の様子を見れば、何か言われたつてこ
とぐらいは察しが付くよ」

そう言つて、苦笑を見せる志保。

アーチャーもまた口元を歪め、軽く肩を竦める。

一瞬の静寂。

穏やかなような、乾いているような、何ともいえない雰囲気縁側
に漂う。

それから幾許もなく、先に口を開いたのは志保。友人に話すような
気安さで、アーチャーの顔を見上げる。

「……そういえば、アーチャーは知ってたの？あの二人の
関係」

「いいや。だが君が先程言った通り察しはつく。彼女に逢う度に、パスから凜の動揺が伝わってきたからな。少なくとも、ただの知り合いということはあるまい」

「そっか。アーチャーはマスター思いなんだね」

微笑む志保に、アーチャーは苦笑で返す。

「なに、マスターが腑抜けたままでは、厳しい聖杯戦争は勝ち残れんからな。面倒事は早めに解決しておくに限る。結果がどうあれ、な」

「心にも無いことを言うんだね。そういうの、何て言ったっけ……
……ツンデレ？」

「……君は、度胸がいいというか何というか。よく面と向かってそんな戯言を吐けるものだな」

「いやあ、それほどでも……」

「褒めてないぞ」

アーチャーは呆れた様子で溜息を吐き、同時に少し驚いてもいた。普段の自分であればここで皮肉の一つや二つ自然に飛び出るものだが、口から出てくるのは何の変哲も無い言葉ばかりで、果てはどことなく和やかな雰囲気の流れる始末。

まさか、こんな少女にここまで調子を狂わされるとは思いもしなかった。

（以前も似たようなことはあったが……さて、何なのだろ

うな、この不可思議な感覚は)

好き放題言われてもまるで怒りが湧いてこないのが、不思議といえ
ば不思議だった。

志保に邪念が感じられない事が一つの要因ではあるが、そんな理
由だけでアーチャーがここまで気を許す訳も無い。

「?・・・何、アーチャー。私の顔に何かついてる?」

ふと、志保はアーチャーへ視線を合わせ、小首を傾げながら言う。

何事かと思うアーチャーだったが、その台詞を聞いて己の不始末に
辟易する。

どうやら、自分でも気付かぬ内に志保を注視していたようで、要ら
ぬ不信感を与えてしまったらしい。

片思いに身を焦がす青少年じゃあるまいし、間抜けとしか言い様
がない。これでは蒙昧で未熟な、恋に恋する少年少女と何も変わら
ない。

「ああ、君のその愛らしい容貌に見惚れていた・・・・・・・・と言え
ば満足か?」

「あつはは。何それ、一応喜んでおけばいいのかな?」

転んでもただでは起きないのが弓兵クオリティ。まあ、ただの軟派
野郎にしか聞こえないのが玉に瑕だが。

ともあれ、二人は今のところ、比較的和やかな雰囲気では話を愉し
んでいたのだった。

そんな、和気藹々とする者達が居る一方で、所在なさに立ち尽くしている者達がいた。

美しい金砂の髪と碧眼をもつ騎士王と、妖しい輝きを放つ藤色の長髪を靡かせる絶世の元女神である。

彼女達の顔に浮かぶのは、呆れか、それとも戸惑いか。

何れにしても、その原因を作っているのが彼女達の視線の先に居る二人なのは確かだ。

特にセイバーは、困惑の色を隠せない。

己がマスターの事といえど、召喚されたばかりのセイバーに、目の前にある奇行を許容せよという方が無理がある。

「……………ライダー、少しよろしいですか？」

「……………何ですか？」

躊躇いがちに訊ねるセイバーに、ライダーは投げ遣りな態度で返す。普段であれば、その態度に物申すところだろうが、セイバーは気にする様子もなく言葉を続ける。

「何故、あの二人はあれほど親しげなのでしょう。あれではまるで……………」

セイバーの瞳に映るのは、中睦まじげに談笑する己がマスターと得体の知れない英霊の姿。

その光景に嫉妬することこそないが、あまり面白くない事態であるのは間違いない。

だがそれ以上に、何故という疑問が湧き立つ。

一応休戦状態ではあるものの、彼らは本来敵同士。この様に、和やかに会話するなど通常はあり得ない。

その一連の行動が腹芸、演技であるというなら見事だが、セイバーが見る限り両者が謀っているようには思えない。

そう、あまりにも自然なのだ。

自然すぎて、逆に不自然。不自然なのに、違和感がない。

その矛盾が、セイバーを混乱させる。形の無い疑問を抱かせる。言い知れない”不安”を抱かせる。

無論、それが志保とアーチャーの人柄であり、個性なのだと言われればそれまでなのだ。

「私に訊かれても答えかねます。まあ、強いて言うなら波長が合うのではないですか？」

ぞんざいな物言いだが、実能的を射ている言葉だった。

それ以外に、彼等の微妙な距離感を表すに相応しい言葉もそうないだろう。

決して交じり合わず、されど接点だけがあり、両者共に点に触れることなく交差するような、不確かな絆に、縁に縛られる彼等の関係を簡潔に表現するならば。

「波長、ですか……」

呟き、セイバーは並ぶ二人を見やる。

色々、思うところはある。とはいえ、それを直接志保に伝えるな

ど出来よう筈もない。自分に出来るのは、己の危惧が杞憂であるようにと祈ることのみ。

(歯がゆいですね・・・何か、いैसेめて、私の不安が何なのか具体的に分ければよいのですが・・・)

セイバーは、そんな複雑な思いを抱えながら、志保とアーチャーの会話に耳を傾けていた。

「・・・いや、しかし、流石に寒いね」

他愛のない会話の最中、ふと志保が呟いた。

見れば、空は厚い雲に覆われ、今にも雪が降り出そうかというほどの冷気が辺りに満ちている。

身体的事情から寒さにも暑さにも耐性がある志保ではあるが、長時間冬の外気に晒されていれば流石に多少は冷えてくる。

少しくらいは大丈夫だろうと高を括っていたが、見通しが甘かったらしい。

とはいえ、志保は風邪を引くことはないし、多少の寒さなら我慢すればいいだけの話なので問題は無い。

(・・・って言ったって寒いものは寒いんだよね。何か上に羽織ろうかな)

「む、これはすまなかった。私の配慮が足りなかったようだ」

「あー、気にしなくていいよ。アーチャーは何も悪くないし。」

でも、ありが　と、う？」

志保は、そういえばサーヴァントは寒さを感じないのだろうか、などどうでもいいことを考えながらアーチャーの顔を仰ぎ見たところ
唐突に数刻前の自室での出来事が雷鳴の如く脳裏を駆け巡った。

特に要因や切欠があった訳ではない。いずれ思い出したであろう事柄を、今ここで、偶然、たまたま思い出してしまったというだけ。だがしかし、事はそれだけでは済まない。

（　あ、ちょ、まずい。割り切った筈なのに、やっぱり変に意識して………っていうか何で今まで忘れていたわたいいー！！？）

突然固まってしまった志保を訝しげに見やり、アーチャーは何事かと声をかける。

「なんだ、どうかしたか？」

「な、ななっ、何でもないヨー！！」

動揺を隠せず、どもる志保。全く何でもなくない。

アーチャーを信じると決め一度は割り切った志保だが、思いだしたタイミングが悪かった。覗き疑惑から幾許も無く、まして張本人を前にしたら覚悟も何もあつたものではない。

「………そうか、ならいいのだが」

釈然としない様子 of アーチャーではあつたが、それ以上深く追求は

しなかった。

彼の経験上、どういいうわけか藪を突けば必ず蛇が出る。こついう場合、下手に深入りしない方がいいと本能に刷り込まれている。

まあ、対象が女性だった場合、厄介事を避けられた試しはあまりないのだが。

(く、空気が重い。こ、こついう時、何を言えはいんだろう・・・)

時が停まったかのように、縁側が静寂に包まれる。

そうして、志保とアーチャーは向かい合ったまま視線を合わせず時間だけが過ぎようとして、同時にあることに気付いた。

「え、なに？」

「この音は・・・」

錯覚かもしれないが、地響きのような音が響いてくる。

空気を振動させるほどに重い重圧、暗い怒気や殺気の類い。

それが、猛烈な速度で近づいて来る・・・というより、すぐそこに居る。

「マスター、こちらにつ！！」

突然の事態に臨戦態勢を取るセイバーとライダー。

が、志保は間の抜けた声音で拒否の意を示す。

「あゝ、いや、うん。大丈夫。正体分かってるから」

一足で距離を詰め、志保に力一杯抱きついたのだ。

「ハッ、先輩ご無事ですか怪我してませんかまだ乙女ですかかわい
いですねヤローなんか気にしたらダメです私がついてます守ります
むしろ奪いますアイツぶつとばしまししょうかっていうか今私に先輩
の柔肌見せて」

「うん、ちょっと落ち着きなさい」

「あだっ!？」

桜を振り払い、脳天に手刀一閃。

訳の分からぬ事を一息で捲くし立てられたが、望まずともその文面
から何故桜が激昂していたのか察しがついてしまった。

恐らく、何故凜が衛宮邸にいるのか、昨夜何があったのかの説明か
ら発展して、止せばいいのに覗き疑惑の件まで口を滑らせてしまっ
たのだと思われる。

「ぬうつ、アーチャーは何処ですか!？」

赤い弓兵の姿を探しキョロキョロと辺りを見渡す桜。
が、いくら探してもアーチャーの姿はない。
どうやら、危険を察して逸早く身を潜めたらしい。

「あの、桜それは」

「姉さんは黙っていてください!」

何か桜に諭そうとした凜を、桜は一睨みして封殺する。

この凜と桜のやり取りを見る限り、先の居間での剣呑とした雰囲気は無い。一応は、仲直りしたと判断してもよいだろう。

（まあ、今はアレだけど、仲直り出来たんなら良かったよね）

などと志保が軽く現実逃避している間に、桜は更に過激な行動に移ろうとしていた。

「っああ、もう！！ライダー、令呪をもって命じます！！アーチャ―を―」

「「やめなさい！！」」

「おっ、ふうっ!?!?」

志保と凜の拳が腹部にめり込み、桜は息を詰まらせる。これで暫くは大人しくなるだろう。

少々乱暴だったかもしれないが、緊急なので止むを得ない。

これにて、暴徒鎮圧完了。

そして、涙目で睨んでくる桜を見て、互いに向き合い揃って溜息を吐く志保と凜。

何はともあれ、やっとこれで振り出した。

志保の話を、これからの聖杯戦争について話し合うための準備が、漸く整ったのだった。

「……………行こっか」

「……………ええ」

志保の一日は、まだ始まったばかりである。

第七話 〱魔術師達の選択・後編〱（後書き）

という訳で、特に中身の無い話でした。

まあ、何やかんやで仲直りして、最後に桜が暴走して終わり。まとめるとこんな感じですね。

で、アーチャーはまんまと逃げ果せるという。どうせこの後凜にとつちめられるんでしょうけど。今後桜と会うとき大変だ（笑）

えーと、話は変わりますがFate/Zero面白いですね。とはいえ、第四次のメンバーが出ることはありませんのでご安心を。出来れば、このままのクオリティを維持して欲しいものです。

さて、次回は幕間。凜サイドの話になります。

短めにまとめようと思いますが、更新ペースは変わりませぬのであしからず。

では、また次回。

幕間 〈魔術師の考察〉（前書き）

いつも以上にタイトル適当です。

あと、最後締め方がわからなくて変な感じになってますが、大目に見てくださると助かります。

遠坂邸のある一室で、言い争うような声が響いていた。

赤の主従の決着はつくのか？

では、どうぞ。

幕間 ～魔術師の考察～

衛宮邸での交渉から数時間後。

目一杯荷物が詰められた大きなトランクの前に、とある少女の姿があった。

「よし、っと。こんなものかしら」

赤い衣服に身を包んだ少女、遠坂凜は、額に薄く滲んだ汗を拭い溜息を吐いた。

所は遠坂邸、凜の私室。

ここで凜が何をしていたのかは、彼女の目の前にある物体を見れば明らかだ。

端的に言えば、宿泊、旅行の準備。更に荷物の量を考えれば、それが長期に亘るものだとは推測出来るだろう。

「さて、あとは・・・」

「・・・・・・凜」

低い男性の声が響くと共に、凜の背後の空間が揺らめく。

渋い顔をしながら現れたのは、赤い弓兵。

「本気なのか。衛宮志保の家に拠点を構えるなど、君はいったい何を」

「今更なに言っているのよ、アーチャー。あ、それより丁度よかつたわ」

アーチャーは腕を組み瞑目したまま苦言を呈するが、凜はまるで聞く耳を持たない。

それどころか、不適な笑みを浮かべアーチャーを見やる様子からは、何かを企んでいることがありありと窺える。元から隠す気もないよ
うだ。

当然、アーチャーは嫌な予感しかしない。

そんなアーチャーの心中を知ってか知らずか、凜は実に清しい笑顔で告げる。

「これ、志保の家までよろしくね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

たつぷりと間を空け、アーチャーは間の抜けた表情で小さく呟いた。それから数秒。

アーチャーは、信じられぬものを見るような視線を凜に向け、続けるような思いで口を開いた。

「・・・・・・・・・・すまないが凜。もう一度言ってくれないか」

「だから、これを志保の家まで運べって言っているの」

少しも悪びれもせず、むしろ気だるげな様子で、今度は完璧に命令形で言う凜。

これには、流星のアーチャーも言葉を失くす。

要求は簡単だ。

荷物が一杯に詰まったトランクを衛宮邸まで運搬する。

成る程、それだけを聞けば大した事ではないし、人の良い人間であれば快く引き受けてくれるかもしれない。が、それは相手が人間であつた場合の話だ。

如何に己がサーヴァントであろうと、アーチャーは紛うことなき英霊である。

そのアーチャーを扱き使うということは、神話や伝説の英雄達を顎で使うのと同義である。

然りとて、召喚されて早々部屋の掃除を言い渡されたアーチャーであるから、この扱いは不本意ではあれど半ば諦めてしまっているのだが。

(………とはいえ、何も言い返さぬのは英霊としての矜持に反する)

「………凛。今一度言つが、君はサーヴァントを召使いか何かと勘違いしていないか？」

「何よ、出来ないってどういうの？」

凛は僅かに口角を上げ、挑発的な態度を取る。

どうせ凛のことだ。要求を呑まねば令呪を使用すると脅すつもりなのだろう、とアーチャーは嘆息する。

無論、本気で令呪を使用するつもりなど無いだろう。切り札たる令呪を、二度もそんな馬鹿げたことに使用する凛ではない。

が、凛に前科があるのも事実。アーチャーを揺さぶるのであればそれで十分。

加えて、アーチャーが手伝わなかった場合の凜の行動は限られている。何もしなければいいが、腹を立てているであろう凜が、何の行動も起こさないと考えにくい。

（彼女達に事実を誇張、あるいは捏造して吹き込むかもしれんな。別に彼女等にどう思われても構わんし、それで戦闘に支障が生じることはないだろうが……）

アーチャーは、目の前の凜とトランクを睥睨する。

仮に凜が彼女達に事実を歪めて伝えたとすると、一概には言えないがアーチャーの印象が悪くなる可能性は高い。真実はどうあれ、後でアーチャーが釈明しても誤解を解くのは難しいだろう。

確かに彼女等に悪印象を持たれたとしても、戦闘に支障をきたすほどセイバー等は愚かではないであろうが、日常に弊害が出る。

これから拠点を衛宮邸に移すとなれば、彼女達を信用し切れない以上は必然的にアーチャーも衛宮邸周辺に待機しなければならない。

そうになると、彼女達に接する機会も増え、針のような視線に晒される頻度も増すだろう。いくら気にしないと強がっても、決して気持ちのいい環境ではない。それを避けるためには、彼女達の視線から隠れ単独行動をするしかないが、アーチャーはそんな惨めで情けない真似をする気は更々なかった。

というより、そんな扱いを甘んじて受け入れるのは、生粋のマゾヒストか不幸である事に酔っている阿呆ぐらいである。

また、もし志保達がアーチャーを支持してくれたとしても、凜が事あるごとに愚痴を零す様子が容易に想像できて、それも甚だ鬱陶しかったのだ。

「……ああ、判った。確かにそのトランクは、私が責任をもって衛宮志保の家へ届けよう」

「あら、やけに素直じゃない」

不承不承といった風に了承したアーチャーを見て、凜は意外そうに目を丸くした。

どのような形であれ、アーチャーがこつも容易く言うことを聞くとは思っていなかったのだ。

アーチャーはそんな凜の様子を見て口元を歪め、努めて淡々とした口調で告げる。

「そうだな。私のマスターが、傍若無人を形にしたような魔術師である事は先刻承知なのでね」

「・・・っこの、言わせておけば」

拳を震わせ、静かなる怒りが沸々と湧き上がってきた様子の凜。更に煽れば飛び掛らんばかりの勢いだ。

だがアーチャーはその凜の反応に満足したのか、憤る凜を無視して悠々と切り出す。

「それよりもだ、凜。君は彼女の事を、衛宮志保の事をどう思う」

「は？・・・・・・何よ、藪から棒に。話を逸らすつもりなのかしら？」

凜は怒りを押し込め、怪訝な表情でアーチャーを見上げる。

「判っているだろう？彼女がどれ程異質な存在なのかを」

「異質って・・・それは・・・」

「そうか。君の認識はそんなものか……」

そう言つて、アーチャーは目を閉じる。

志保という個に対して何を思うのか、アーチャー本人ですら計りかねているというのに、他人に同意を求めるのは無理があるかもしれない。アーチャーが抱いている感覚を、他人が共有している訳がないのだから当然だ。

けれど、”志保という存在”についてなら、話は別だろう。

「……いいえ。アナタの言いたい事、判らないでもないわ」

凜は感情の読めない瞳をアーチャーに向け、冷淡な口調で告げる。

「あの子の扱う魔術、素性も何もかもが不透明。まして、真の意図なんてまるで読めない。不気味を通り越して、若干の恐怖すら感じると言つても過言じゃない……」

得体の知れない何かに対する恐怖心。凜が志保に感じているものは正にソレだった。

無理もないだろう。今までの志保に対しての認識が悉く崩れ去つたのだ。加えて本当の情報が何も掴めないとすれば、疑心暗鬼になつても可笑しくはない。

それでも信用し続けられるとしたら、それは余程の大物か稀代のお人好しくらいだろう。

「……アーチャー。アナタも、志保に何か思うところがあるのでしょう？異質って言つくらいなんだから」

「ふむ。つまり君は、先に私の彼女に対しての見解を述べると？」

「先ってどうか……まあそうですね。まず、魔術でも何でもい
いから気付いたことは言っておこうだ。私とは違う視点から見
判ることもあるだろうし、アナタが志保をどう思っているのかも知
りたいのよ」

「ふむ、魔術に関して言うのであれば、皆目検討もつかん。特殊な
結界を用いるのは確かだが、その詳しい効果までは判らなかつた。
それから、何らかの魔術礼装の製作をしているらしい。とはいえ、
私は実物を見た訳ではないから確定も出来ないがな」

「結界に礼装、ね」

「魔術についてはこの程度だ。情報を開示しているようで、確証に
なるモノが何もない。意図的に隠しているのは間違いないが、それ
は魔術師として当然の行為でもある」

「そりゃ、そうでしょうね。ずっと魔術師だつてことを隠していた
んだもの。どんな思惑があったのかは知らないけど、今更バレたか
らって自分の情報を明け透けに明かす筈が無い。そんなのはナンセ
ンスよ」

「だろうな。残念ながら、私からは以上だ。気になるのは、彼女に
対して感じる妙な感覚の方だが、こちらは理由が見つからん。恐ら
く、心証的なモノだとは思うがな」

正確には、もう一つ気付いている事があつた。

凜ですら見逃した、アーチャーだからこそ判る異常。衛宮志保が操

投影自体は珍しくも無い極ありふれたものだが、志保のソレは特別だ。志保の投影とは、ある魔術から零れ落ちた欠片である。

現状、アーチャーはまだその事実には気付いてはいない。いや、気付いてはいても認められないというべきか。認めるには障害が多すぎるのだ。

何れにしても、その仮説が真実であれ何であれ、真実であるのなら尚のこと凜に明かす訳にはいかない。別段知られても構わないのだが、説明するには事情が複雑で面倒であり、知る必要がない事でもある。更に言えば、これはどちらかといえば志保とアーチャーの問題であって、他人が関わるのはあまり好ましくなかったのである。よって永遠に、必要に迫られない限り、アーチャーの口は閉ざされたままだろう。

「そう。もしかして、アンタの記憶、生前と何か関係あるのかしら。知り合いに似てるとか」

「さてな。何であれ、もう少し探ってはみるが、あまり期待はしてくれるなよ」

「ま、仕方ないわ・・・・・・・・・・あと判っているのは、黒鍵を使っているってことぐらいね」

「黒鍵？」

凜の言葉に、アーチャーは疑問符を浮かべる。

そのアーチャーの様子に怪訝顔だった凜は、直後合点がいったという風に一つ頷いて口を開いた。

「ピアノじゃないわよ。バーサーカーと戦ったとき、あの子が投げた細身の剣のことよ。主に聖堂教会の連中が使っている対死徒、つまり吸血鬼用の代表的な概念武装の一つ。何であの子がアレを持っていたのか。上手くすれば、それがあの子の秘密を探る糸口になるかもしれないわね。綺礼とも知り合いだったみたいだし、何か関係している可能性はあるわ・・・」

そこで凜は、でも、と言い淀む。

凜はそれから一呼吸置き、流し目でアーチャーを見上げながら、無表情で言った。

「あの子。いったいどうやって黒鍵を取り出したのかしらね？」

「・・・何処から持ってきたのか、か？」

「ええ。多分投影だとは思っただけど、そもそも何故投影なんて非効率な方法に頼るのか意味が判らない。あるいは、投影に特化した魔術師であるなら、まだ話は分かるけど」

投影とは、魔力を用いてオリジナルの鏡像を物質化する魔術。本来、投影で形作られたモノは外見のみが優先され中身は無く、また数分間しか保たないため触媒の代替物としての役割しか持たない。どれ程優秀な魔術師であっても、武器として使用可能な投影品を作り出すことは不可能に近いだろう。仮に作れたとしても、物を切るという結果を得るために消費する魔力は、元から在る物を補強する強化に対して一から魔力で作る投影は圧倒的に効率が悪い。その不可能を可能にするのなら、単純に考えれば投影にのみ特化した特異な魔術師以外は在り得ない。

と、普通の魔術師なら考えるだろう。
志保はその特異な魔術師すら凌駕する、異端であるにも関わらず、
だ。

たとえ凜ほどの優秀な魔術師であっても、たった数度、しかも黒鍵
程度の品の投影を見ただけでは、その程度の推測が限界だ。決して、
深奥に潜む禁術にまでは届かない、気付けない。

そう。現在^{いま}は、まだ。

「まあ、所詮は仮定の話だから何の根拠もないのだけどね。大体、
投影に特化した魔術師なんて在り得なくは無いつて言っただって、そ
んなデタラメなの私だって聞いたことないもの。黒鍵だけなら他の
方法でも説明がつくから一概には言えないのよね」

「ほう。その別の方法とやらに、何か心当たりがありそうな口ぶり
だな」

「ええ。以前綺礼に聞いたことがあるのよ。法衣の下に大量に黒鍵
を仕込んである化物みたいな代行者がいるって。何でも実際に隠し
ているのは柄だけで、刀身は聖書のページに魔力を通して物質化し
ているらしいわ。あの子も似たような方法で作っているのかもね。
投影とするよりは、ずっと現実味があるもの、ね？」

「そうだな。君がそう思うのなら、そうなのだろう」

探りを入れるような意味ありげな視線を送る凜に対して、アーチャ
ーは涼しげな表情で厭味たらしく口端を吊り上げる。

視線の交錯は一瞬。

次の瞬間、凜はこれ以上の睨み合いは不毛だとばかりに視線を落とし、アーチャーは何事もなかったかの如く語りだす。

アーチャーの秘密に凜の真意、双方知らぬ事は未だ多い。

「さてマスター。今の話を鑑みて、考えを改めるつもりはないか。得体の知れぬモノの家に拠点を構えるなど、正気の沙汰とは思えないのだがね」

「しつこいわね、アンタも。いくら言っても、今回の決定が覆ることとはないわ。最善とは言えないかもしれないけど、今彼等と敵対するのは得策じゃない。それに、結論を急ぎすぎるのは愚かだと思わない？」

凜は、心底辟易したような声音で告げた。

一方のアーチャーは肩を竦め、何かを悟ったかのような表情で凜を見つめる。

「成る程、君も随分と頑固だな。マスターがそこまで言うなら、私からはもう何も言つまい」

そもそも、何故凜が志保の家に拠点を構えることになったのかといえば、数時間前の衛宮邸での協議の結果、改めて協力関係を結ぶことになったからだ。

手を組む最大の理由は、やはりバーサーカー。アーチャー単身で倒す事は叶わず、イリヤに目を付けられている以上は、再び矛を交える可能性は高い。どれほど甘く見積っても、断じて良い状況とは言えない。

そこで、戦力増強の為に他者と手を組むというのは最も簡単で確実な方法の一つだろう。協力者が弱ければ意味はないが、その不透明

さを差し引いても志保とセイバー等なら申し分ない。

本当のところ、そんな気を回さずともアサシンがイリヤスフィールを暗殺してくれば御の字なのだが、あの小娘がそんなに簡単に殺されるとは凜には到底思えなかった。そう都合よく事が運ぶとも考え難く、最悪既にアサシンが脱落している可能性すらある。

そんな不確定な希望に縋るよりは、策を弄してより確実な手段を選択するのが賢い生き方だ。

故に、最初から凜に迷いは無いに等しかった。

高を括るのは誉められた行為ではないが、今更志保が凜の身を害すとも考えられない。最終的には戦うことになるだろうが、少なくとも凜に利用価値がある間 即ち何らかの役割を果たし終えるまでは、安全であろうと思われた。

凜には、それだけ判れば十分だった。

態々敵陣に乗り込むのは、共に行動した方がいざという時安心でき、他の敵マスター達に自分達が手を組んだことを知らしめるという意図もあるが、何よりも調査、監視の意味合いが強い。一時的に味方であるとはいえ、本来は敵であるのだから、その行動を把握出来た方が良いのは自明の理だ。

まあ、本当の理由は、妹と再び一緒に暮らすための口実なのかもしれないが。

「でも、アナタらしくないわね。私の意志が変わらない事は、もう十分判っていると思うていたけど。買いかぶりだったかしらね。というか、あの子の所に住むのがそんなに嫌なわけ？」

凜はジト目でアーチャーを見つめる。

本気で嫌がっているとまでは思っていないが、こう何度もしつこく言われると、それも疑わしく感じてしまう。

その視線を受けて、アーチャーは苦笑を零す。

「いや、単純に君が彼女についてどの様な認識をもっているか気になっただけだ。あの監督役も注意しろと言っていたらどう?・・・まあ、私の取り越し苦労だったようだがね」

元より、アーチャーが危惧していたのはそれだけだ。

凜に何かしらの思惑があるのは理解していたし、その決定自体に不満はあれど文句を言うつもりは初めからなかった。

アーチャーの目的は、あくまでも確認だ。

線引きを間違えて絶望することの無いように、後悔することのないように、注意を促したかったのだ。

尤も、その必要も最初からなかったようだが。

凜はその答えを聞いて、やれやれと言わんばかりに溜息を吐いた。

「存外心配性なのね。ま、心配は無用と言っておくわ。アナタは、しっかりと私を守ってくれればいいのよ」

「フ、言われるまでもない。マスターの身は私が守り抜こう。たとえバーサーカーが相手であろうと、君に傷一つ付けさせないと約束しよう」

「あらあら、随分と大きく出たわね。そう言ったからには、やってもらおうよ?」

「無論だ。ああ、だがマスター・・・」

「ん、何よ?」

「妹に感けて、腑抜けになってくれるなよ。勝手に自滅されては、守るどころではないからな」

「っい、言われてもわかってるわよ!？」

そうして、ゆっくりと赤い主従の時間は過ぎていく。

その結果、衛宮邸への引越しが遅れて、心配した志保から電話を貰う羽目になることを、彼等はまだ知らない。

「っ何で、もっと早く教えてくれなかったのよ!？」

「催促はした。だが、その後もゆっくりと紅茶を愉しんでいたのは君だろうか?」

「あー、もう。いいから早く行くわよ。ほら急いで!」

(.....やれやれ)

衛宮邸到着後、部屋割りの問題でまた一悶着あるのだが、それはまた別の話である。

幕間 〈魔術師の考察〉（後書き）

最近、思ったよりも長く書いてしまうのは何故だろう。まあ、まとめ方が下手なせいですが……上手くなりたいものですね。それはさておき。

一応言っておきますが、アーチャーは凜に真実だけ話しているわけではないのであしからず。黒鍵とかは当然知ってますよ。

凜に関しても、「凜なら投影の正体見破ってんじゃね？」と思う方もいるかもしれませんが、まだ凜は志保の投影が半永久的に持続することを知らないのです。ここまでは気付かないってことにしています。もしかしたら、という候補ぐらいにはあがっているかもしれませんが。

あと、今回終わり方が判らずいつもより酷い事に。出来ればスルーしてください。締め方はいつも悩みます。

さて、今回は本編ですが……今度は志保サイドのお話になります。次の流れは大体わかりますよね？ええ、つまりはそういうことです。では、また次回。

第八話 月下の剣士・前編（前書き）

今回は、一応前後編となる予定です。

月明かりの下、志保とセイバーは流麗な剣士と出会う。
彼の正体、そして目的とは？

では、ごっご。

第八話 月下の剣士・前編

深夜零時。

薄雲によつて月が翳り、灰暗い夜道を歩く希薄な人影が二つ。

「マスター、本当に私達だけで良かったのですか？」

「まあ、ちよつと様子見に行くだけだからね。それに、あの二人は一緒にいた方がいいでしょ。いらぬお節介かもしれないけどさ」

黒いコートを羽織つた銀髪紅眼の少女と、同じく黒いコートに身を包んだ金髪碧眼の少女。

衛宮志保と、そのサーヴァントたるセイバーである。

彼女達が、この街灯すらない暗い道を歩いているのには勿論訳がある。

改めて同盟関係を結んだ志保と凜は、一先ずの行動方針として情報収集と探索を行うことにした。今回は凜と桜が新都へ向かい、志保は別行動を取っている。

というのも、元より志保と桜が手を組んでいただけでも聖杯戦争において大きなアドバンテージを持っていたのに加え、そこへ更に凜が合流しある程度余裕が出来たため、表立った行動を取ることにしたのである。

その裏には、様々な思惑と志保のとある事情が関わっているのだが、それはまた別の話。

（まあ、本当のこと言うと、キャスターを見逃したって遠坂に知られたらヤバイからなんだけどね………主に私の命が）

遡ること約二週間前。

雨降る夜に、この道の先で、志保はとある絶世の美女と出会った。その出会いこそが、志保にとっての第五次聖杯戦争の始まりとなったのだ。

そう。志保達が目指す先は

柳洞寺

キャス

ターを運び入れ、袂を別った場所である。

「ですが、もし柳洞寺にキャスターが巢食っているなら厄介です。あそこは、我々サーヴァントにとっては鬼門です」

「だろうね。おまけに霊脈まで備えてて、彼女なら柳洞寺に居ながら魔力を掻き集めるのも容易いときてる。だから遠坂に言いたくないんだよ……」

「そこまで判っていないながら、何故キャスターを救ったのですか。その御心は尊ぶべきものと思いますが、いずれ敵となるのなら、非情に徹する事も必要だった筈です」

問い詰めるセイバーの表情は、その問いとは裏腹に落ち着いたものだった。

鮮やかな碧の瞳に感情の色は無く、志保を見定めようとするように、冷淡で怜悯な光だけを宿している。

対して、志保もまた冷静に　　というよりは、予想通りの問いに対する余裕、と言った方がこの場合は正しいだろうか。

何にせよ、セイバーが表面上怒りを表さず冷静な対応をしているのは、志保にとっては都合が良い。論破するのは難しいかもしれないが、話を聞いてくれるだけありがたいというものだ。

志保は、僅かに肩を竦めて呟くように言った。

「……ま、そう思うのが当然だよ。判っているよ、そんなことは」

「ならば、何故」

「……………私はさ、目の前で誰かに死なれるのは嫌なんだ……………自分で手を下すのは別として、ね。酷い矛盾で身勝手だつてことも判つてる。でも、助けられるのなら、助きたい」

たとえそれが、敵であつたとしても。

訥々と語る志保の表情からは、そんな思いが滲み出ているように感じられた。

「虫のいい話だよ。私は別に、他人の不条理な死や不幸が許容出来ないって訳じゃない。極端に言えば、見ず知らずの人間が何処で死んだつて構わないし、無闇に干渉する気もない。私の大切なもの以外は、どうなるうが知つたことじゃないよ。けどまあ、例外もあつてね……………」

そこで言葉を切り、志保はセイバーへ儂げな微笑を向ける。

その笑みは、どこか泣いている様だつた。

「私は単に、見て見ぬ振りが出来ないだけなんだ。代償行為、なのかもね。目の前に死にかけの命を、見捨てられない。キャスターの場合がそれかな。衝動的つていうか、生理的つていうか、とにかく我が儘なんだよ、私は。その行動が誰かの不幸に繋がると判つていたとしても、相手の意思には関係なく助けてしまつたらうね、きつと」

「……つまり貴女は、自身に刃が向けられてもなお、相手を救おうというのですか」

「それが死にかけて、私が傷を負わせたのでないならね。勿論、明確な敵が現れたなら、私の大切なものを害するというのなら、私は誰が相手でも躊躇いなく殺すよ。どんな非道な手段を使っても、必ず。これでも、優先順位はあるからね。だから、いつか、助けた相手を自分の手で殺す、なんて事もあるかもしれない」

「それが、貴女の理念と覚悟……」

「うん……だからこそ、もう二度と敗けられない。勝ち続けなければならぬ……こんな、歪でどうしようもないマスターだけだ」

そこで言葉を止め、志保は立ち止まる。

同じように歩を止めたセイバーが自身に向き直るのを確認すると、志保は薄く微笑みを浮かべながら懇願するように言った。

「……協力してくれるかな、セイバー」

その言葉を、セイバーは真摯な表情で受け止める。

勿論、答えなど初めから決まっているが。

「望むところです。魔術師らしからぬ事ではありますが、私には貴女のような人物のほうが好ましい。必ずや、貴女に常勝を捧げると誓いましょう。苦勞はしそですが、遣り甲斐はありそくだ」

自信に満ちた凜々しい表情で、セイバーは言い切った。そこには、

何の迷いも無い。

だがしかし、セイバーもその言葉の裏で思うところはある。

（衛宮志保は危う過ぎる。その言葉とは裏腹に、どこか死に急いでいるようにさえ思える）

志保の在り方の危うさは、セイバーには、否、セイバーだからこそ、痛いほど理解できた。

何故なら、セイバーは志保と同等、あるいはそれ以上に危うい理想を掲げたモノ達を識っている。その理想の純粹さと歪みは、志保のそれを凌駕する。彼らがどんな末路を辿ったのかはセイバーにも知る由はないが、真つ当な最期は望むべくも無い。彼らの理想の先に許されるのは、破綻と破滅のみだ。

そして、志保の抱く理想もまた、彼らと同質のもの。故に、この未来^き待っている道が、平淡である筈がない。

だが、セイバーが真に危惧しているのは、そこではなかった。

（彼女の危うさは、切嗣のものとも違う。矛盾した理想故なのか、想いが先行して芯がぶれているくらいがある。心が未だに定まりきっていないのか、それとも……）

直感か、はたまた経験則か。ともあれ、セイバーは志保の内なる揺らぎを感じた。

その揺らぎ　　根底にある罪過　　こそ、志保を志保たらしめている最大の要因であり弱点だ。

残念ながら、その正体までは掴めなかったものの、それでも判った事がある。

志保は、良くも悪くも、未だ未成熟だということ。理想も力も、何もかも。

尤も、あれほど複雑に歪んだ志保の理想解くのは簡単ではないだろう。

だが、心が定まっていけないのなら、変わっていける可能性があるということだ。違う形の理想を掴み取る可能性を、秘めているということだ。もしかすると、いずれセイバーにも及びもつかない方法で、理想を遂げてしまうかもしれない。または逆に、最悪の結末を迎えることになるかもしれない。

良く言えば、未知数。悪く言えば、中途半端、半端者。それが現在の志保だ。

(これから滅びの道を辿るのか、それとも幸福な刻を過ごすのか。その行く末を見ることは叶わないでしょうが、出来ることならば……)

その最後を見てみたい、見届けたいというのが、セイバーの正直な思いだった。

無論、叶うべくもない願望だ。が、そんな願望も志保が聖杯戦争で命を落としてしまえば、意味の無い空想に成り下がる。

ならば、取るべき道は一つしかない。

危うい想いに取り憑かれた成長途上の少女のため、少女の脆い剣を折らせぬために己が剣を振るう事に、何の迷いがあるうか。

まあ、本当はそんな細々とした理由は必要ないのかもしれない。単純に、セイバーもまた志保を放っておけないというだけなのだ。そういう意味では、二人は似たもの同士と言える。

きつと、セイバー アルトリア 騎士王 という少女は、たとえ本人が認めなくとも稀代のお人好しなのだろう。

「ふふつ。改めて、よろしくね」

「はい」

気恥ずかしそうに差し出された手を、セイバーは躊躇無く握り締めた。自らの固い意思を伝えんとするかのように、しっかりと。

「よし！じゃあ、行こうか」

「はい！」

それから十数分後、柳洞寺石段前。

「これは……………」

セイバーは、目の前の光景に息を呑む。

「空気が、淀んでいる？」

柳洞寺に続く長い石段。そこから流れる空気が、通常では在り得ないほどに淀んでいる。

恐らく、存命したキャスターが霊脈を使って魔力、生命力を掻き集めた結果だろう。

「だね。これで、キャスターが居ることは確実になっただけど・・・行く?」

そんな、生理的に踏み込むことを躊躇う程の空気が流れる中で、志保はまるで買物にでも誘うかのような気軽さで、そう言った。

対するセイバーもまた、一切の躊躇無く答える。

「はい、行きましょう。ですが、マスターは私の後ろに。十分注意してください」

「了解」

志保が頷いたのを確認すると、セイバーは慎重に、しかし決して遅くない速度で石段を登り始めた。

既にここは敵の本拠地の目の前なのだ。奇襲されないように、奇襲されるよりも早く山門を潜り抜けなければならない。

だが、石段を登り始めて直ぐ、不意に志保が足を止める。

「待って」

志保は石段の頂上　山門を目を凝らして注視する。
次第に双眸は紅く染まり、紅く淡い燐光が闇を照らす。

「マスター?」

訝しむセイバーを余所に、志保は一人微笑み呟きを漏らす。

東洋、日本における剣士。武士道を重んじる、侍。

その侍としか形容のしようがない男が、まるで初めから其処に居たかのように、自然体のまま其処にいた。

颯爽と現れたその姿からはあまりにも敵意が感じられず、信じ難いほど隙がない。

「いかにも・・・と言いたいところだが、実際は侍とは名ばかりの武者よ。そういうお前は西洋の剣士、セイバーといったところか。目に見えぬ剣とは、また面妖な」

男は、セイバーの殺気を柳のように受け流し涼やかに言つてのけた。

（構えだけで見抜かれた、か。しかしこの男、マスターはアサシンと言つたが・・・）

間違いなく、男はサーヴァントだ。

それは、相對しているセイバーが一番よく判つている。だがしかし、解せない。

男はサーヴァントには違いないが、英霊特有の宝具も魔力も持ち得ない。そんなサーヴァントは、二回の聖杯戦争を経験しているセイバーですら見た事がない。

故に、それが異常だった。

なれど、それだけならば倒すのは容易な筈だ。

多少奇怪だろうと、目前のサーヴァントには、恐れるべき箇所も驚異を感じる程の武装も無いのだから。

加えて、志保はサーヴァントをアサシン、暗殺者だと言つた。本来、暗殺者が真つ向勝負を挑むなど愚の骨頂。彼らは殺すことに長けていても、正面切つての戦いは不得手としている。

だとすれば、既に勝負は詰んでいるといっても過言ではない。にも関わらず、彼女の直感はこう告げていた。

悔るな

このサーヴァントには、自分を必殺する手段がある、と。

故に、セイバーは訊ねずにはいらなかった。

アサシンである筈のサーヴァントが、何故自分から姿を晒すような暴挙に打って出たのか、その真意を測る為に。少しでも、情報を得るために。

いや、あるいは本当は、得体の知れないモノに対する、無意識下の行動だったのかもしれないが。

「敢えて訊こう。貴殿は如何なる英霊か」

答えなど期待してはいなかった。

されど男は、ニヤリと口端を上げると、さも当然というようにこう告げた。

「アサシンのサーヴァント。佐々木小次郎

」

第八話 月下の剣士・前編（後書き）

てなわけで、今年最後の更新となります。

今回は、原作でもお馴染みのお話です。そのままの展開という訳ではありませんが、ね。ってかぶつちゃけこの後の戦闘とかやつついで適当に短く終わる予定です。今作のキャスターは、本来のキャスターではなくキャス子さんの方でイメージしてるので、展開もそんな感じに。

でまあ、何で志保がアサシンに気付けたのかとか、柳洞寺についての解説は次回に。ちなみに、本編では真アサシンの出番はないです。で、今更と言いますか何と言いますか、とっくの昔に一周年を迎えていたわけなのですが・・・何というか、このまま二周年と行きそうです。完結させられるよう、頑張ります本当に。更新ペーは変わりませんがね。

それでは、よいお年を。来年もよろしくお願いします。
では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4849o/>

白き剣姫の聖杯戦争

2011年12月29日07時15分発行